

---

# 七宝伝～今起こったこと～

n y a o

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

七宝伝〜今起こったこと〜

### 【Nコード】

N7128D

### 【作者名】

nyao

### 【あらすじ】

からつぽの少年はたったひとつ胸に残ったものを抱いて、言った  
「貴様を殺す」心優しき少女は少年を見て、願う 「貴方を助きたい」いるはずのない女は微笑みを浮かべ、刀を振るう 「ね、また私を殺せる？」空虚な少女は全てに対して、宣言した  
「お兄ちゃんは何にも渡さない」そして、全てを見て男は晒う  
さあ、祭りをはじめようか

## 物語を読む前に（前書き）

本作品は原作者の『harem!』とは作風が異なっております。  
あちらの気軽に読める事に対して、こちらはちゃんとした一つの物語としてじっくり読んでいただきたいものです。『harem!』から来た方はご注意ください。

七宝伝～今起こったこと～

## 物語を読む前に

「レムと」

「…私の名前はどのようだったのでしょうか？」

「て、いきなり話の興を折るなよ。そうだな…とりあえずクウリでいいんじゃないか」

「ではそのように」

「じゃ、改めて行くぞ」

「はい」

「レムと」

「クウリの」

「「物語紹介」」

どんどん

ぱふぱふ

「…これってどこから鳴ってるんだ？」

「ソレをを考えてはいけません、旦那様」

「そ、そうか。それじゃ改めてこの物語、『七宝伝』の話を内容を

説明するぞ。あ、それとおれたたちの事は同作者の『harem!』で説明してるはずだからそっちの方を見てくれ」

「…宣伝ですか、せこいですね」

「いや、そのつもりはないのだが…まあ、説明に行くぞ」

「はい」

「この物語は主人公である千里恭一…まあ、キョウイチの復讐の話だな」

「厳密に言えば復讐とは異なっているのですが…そうですね、キョウイチ様の若かりし…もとい、生涯の一部を切り取ったお話でございますね」

「で、主な登場人物はヒロインである水月佐久弥、キョウイチの妹の千里萌、転校生の如姿舞、幼馴染の上柳和佐…あ、ちなみにこいつは男だな。あと最後に萌の親友らしい如姿舞の計六人だな。詳しい事は端折るが、要はこの六人が悪い奴を倒すって話だな。…最も妹辺りは非戦闘員らしいが」

「端折りましたね」

「だから最初に端折るって言っただろ？…ちなみに復讐って言うても別に暗い話にはならないからその辺は安心していいぞ」

「話が進むにつれてキョウイチ様のハーレム率も上がっていきますしね」

「何故だっ！？何であんな朴念仁がモテるんだよっ！？俺の方が断然優れてるはずなのはどうして今だに俺の夢は叶<sup>ハレム</sup>ってないんだ！！」

「ひとえに人徳でございましょう」

「ぐはっ！？」

「では、旦那様もめでたくノックダウンなされたようですので、私どもはこれにて失礼させていただきます」

**物語を読む前に（後書き）**

申し訳ない。間違えて消してしまいました。

なのでこの本文の内容が恐らく微妙に違ってます。

七宝伝～今起こったこと～

## 序章（前書き）

申し訳ない。間違えて一度、消してしまいました。  
内容は依然と同じです。

七宝伝～今起こったこと～

## 序章

酷い土砂降りだった。

その少女は、雨に打たれながらもただ呆然と立っていた。歳の頃は5・6歳ほど。

雨の勢いにも負けずに煽る炎。少女はただ目の前の燃え上がった家を見上げていた。いや、見ているのかどうかは分からない。その瞳に感情の色は微塵もない。濁ってもいなければ澄んでもいなかったのだから。

もしかすると少女は何も見えていないのかもしれない。

少女が立つ場所はさほど広くない路であり、周囲は既に多数の野次馬たちと数台の消防車、救急車だけで埋め尽くされていた。だが、相当うるさいはずの雑音も少女には微塵も意味はない。

否、何一つとして届いていない。

彼女の代わりに泣くように振り続ける雨の音が響き渡るのみ。

突然、周囲がざわついた。

どうやら燃えていた家の中から生存者を確保したらしい。だが生存者を確保したというのに消防士の表情に喜々はなく、心なしか青ざめてさえいた。

彼の腕の中には一人の少年がいた。全身赤く染まり、何かに怯え

る様に震えながらも細かに口を動かして言を吐いているようだった。

それは、少女がとてもよく知った顔。

彼を見た瞬間、微かだが少女の瞳に色が灯った。悲しむような、懐かしむような、そして憎むような。

景色が少女の瞳に映る。

だが焼けていく家を見上げているなか少女の耳に届いたのは後方から響く、ただ一つの足音だけだった。

周りの騒音を全て無視して、一つの足音だけが何故かはつきりと耳に届く。それに不思議はない。むしろそれが当然であるかのように、少女は受け入れた。

ただ、その音が届いたとき少女の瞳に幽かすかばかりの変化が現れた。

憎しみ。

その瞳は深い、とても深い憎しみ一色。

ほんの一瞬、だが次の瞬間にはまた総ての感情の色は少女から消え失せていた。一点、先ほどまでと違うのは少女は確かに既に外界を向いているという事。

足音が少女の真後ろで止まる。足元には街灯を背に彼女を追い越した影が一つ、重なって見えていた。

少女は返らない。燃える家を見上げながら気付いていない、何も解らないという様な無垢で、だからこの上なく残酷な無表情で。

「燃えているな」

後ろから突然ともいえる、届いたのは低い、男の声。

感情を殺したような平坦な声は主が何を思っているのか判断が難しい。

「哀しいか」

「」

「悔しいか」

二言目、少女はやはり何も言わず、漸く後ろを振り返った。立っていたのは一人の男。見た限りでは恐らく老人といってもいい歳の、だが全身に存在感と力強さを感じさせる男だった。

その男は真上からしっかりとその少女の瞳を見据え、口を開いた。

「いい目だ」

少女は答えない。

「判っている筈だ」

なにを？

「お前には力が必要だ」

なぜ？

「仇をとる為の力だ」

だれの？

「来い」

どこに？

少女の答えはない。ただ無表情、無感情のまま、男の方角に視線を向けていただけ。それでも男は何も言わずに振り返り、未だ燃えている家に背を向ける。もう用事は済んだとばかりに。

少女はもう一度、燃えた家をその瞳に映した。そうして続いて、彼を連れ去った白い色の車を目で追う。

視界から救急車が消える。

そして、少女は男の後へと付いて行った。

男はただの一度も振り返らない。まるで少女の動作がさも当然のようじ。

だから少女は見ていない、背を向けた男の口元に僅かだが満足げな笑みが浮かんでいた事を。

「  
」

男の背を眺めながら。

少女の口元にほんの微かにあるものが浮かぶ。嘲る様な、気にも入らない様、ほんの幽かな冷笑。

七宝伝～今起こったこと～

それに少女に背を向けていた男は気付いていたのかいなかったのか。

男は何も語らず、少女も何も語らない。ただ雨の音、そして周りの雑音だけが辺りには響いていた。

## 序章（後書き）

七宝殿（居間で興っている事？）

どーしよう？

あとがきの雑談コーナーです。ここは作者である私と主人公の妹である萌さんとで送っていきましょうと思います。よろしく願いします

萌　　いえいえ、こちらこそ

では早速この話の内容を…

萌　　……

序章の割に長いな

萌　　そうですね？

意味もわからんしな

萌　　そつ、それは序章のお約束って事で…

まとまってないしな

萌 そつ、そんなことは…

無いと？

萌 えつとて、あの…

素直な反応ありがとう、萌君。うつつ、どうせわたしやへぼですよ（いじいじ）

萌 （この人の相手するのって結構疲れるかも…）

ああ、もう止めちゃおうかな…（いじいじ）

萌 まあまあ、そういわずに、まだ序章しか書いてないんですよ

むっ、そうだった…けどなあ（いじいじ）

萌 これからうまくなっていけば良いじゃないですか！

ふむ、それもそうか。うん、そうだな

萌 （立ち直るの早いなあ、この人）

なんか言ったか？

萌 いえっ、何も

そうか、なら良いんだが…

萌 あっ、もう時間ですよ。終わらなくっちゃ

お、もうそんな時間か。結局何も話してないが…いいか。では終わっていただくね、さらば

萌 って…えー、早いよ！

……

萌 ……って、もういなくなってるよう、うう、こんな作者、嫌かも

萌 ……はっ！

萌 とっ、とりあえず気をとりなおして…

……

萌 では、一話で会いましょう！

萌 ……はふう（会えるというけど…）

七宝伝～今起こったこと～

「話」あの日に出会った（前書き）

一度間違えて消してしまいました。申し訳ない。

「話」あの日に会った」

「はあはあ、はっ……」

息を切らして少女が一人、強く前を見据える。

少女がいるのは人気のない夜の公園。そこは明らかに異常な空間だった。人気がない事が異常なのではない。それ自体はさして重要でなく人が寄つてこない事はあくまでおまけに過ぎない。

ほんの僅かな命さえも息を潜めて自らを隠し通そうとする事で出来上がる静寂<sup>むおもん</sup>。それが場の異常の真実。

此処は狩場だった。

強者が弱者を躡り殺す為だけに存在する空間<sup>なぶ</sup>。

聞こえるのは押し殺した複数の湿った嘲笑と少女の荒れた息遣い、後は時折鳴る鈍い打撃音くらいのもの。

強者は数に者を言わせた数十人の男達。弱者はたった一人の少女。

恐らく学校帰りであろう少女は学生服に身を包み、胸ほどまである長い髪を今はただ乱していた。全身から上がる汗と乱れた呼吸。

少女の手にあるのは自身の身長と同じ長さがあるうかというほどの一本の棒。それを振るう事が少女にとっての許される命をかけた抵抗だった。

「はあはあ……ふっ」

整わない呼吸の合間に割り込んでくる男の手。一度でも捕まれば結果は明らか<sup>おしまい</sup>。だが伸びてきた手は少女に触れる事無く空を掴んだ。

半歩下がって、無防備に寄ってきてくれた的の眉間に向かつて手にした棒を一点。

恐らく自分は少女を捕まえて当然と思っていたのだろう。手を伸ばしてきた男は驚く事もなく、浮かべていた下衆な笑みのままその場に崩れ落ちた。

だがそれでは終わらない。後ろから、否、残り三方から少女を捕まえようと手が伸びる。

少女はたった今作った突破網を駆ける。

追ってきた男一名には手にした棒を顎に叩きつけて昏倒させる。駆けて、男達から少しばかり距離をとって一息。ほんの僅かな休息に荒れ狂う心臓を宥める。

男達はまた二名の脱落者を出したからか無理に追っては来なかった。だがそれも当然の事。この狩場ではいかにして少女一人が逃げおせると言つのか。

獲物に逃げ道はない、時間はいくらでもある、此処はそういう狩場なのだから。なら苦しみ絶望する様をより引き出す方が大いに悦楽。事実、少女の表情は既にその八割方に絶望の色を見せていた。

単純な力関係で言えば間違はなく少女が上。それは今のやり取りでも見て取れる。だがそれでも、数の暴力の前にたった一人の少女は無力だった。

既に二十分以上、休みなしの動きっぱなしである。いくら呼吸を整えたところでそうすぐに体力が戻るわけでもない。精々で数動作元のように動けるだけだろう。

このままで行けば少女に待っているのは確実な、狩られるものとしての末路。だというのに少女の瞳はまだ芯まで絶望の色に染まっ

てはいなかった。

「・・・ふう」

最後に大きく息を吐き完全に息を整える。それを待っていたかのよう  
に男達が再び少女へと群がっていく。此処までは先ほどからず  
つと続けられてきた同じ光景だった、少女が顔を上げて男達を見る  
までは。

口を一文字に結んだ少女は手にした棒を少しだけ強く握り締め、  
初めて自分から打って出ていた。

捕らえに掛かったはずの男達が踏鞴たたらを踏む。

一拍の踏み込み。

怯えさえ覗のぞかせていた男達の、その先陣へ衝つきを一発。抵抗もせ  
ず崩れ落ちる。

先ずは一人目。

手にした棒に更に力を込める。この間、一秒弱。

我に返るが群がつていた所為で身動きの取れない男まとあいてたちに、少女  
は一直線に突き進んだ。目指すは男達の中心。自らの技が一番効力  
を発するであろう場所。

動く前に、気付かれる前にそこへたどり着く事が少女にとっての  
唯一の必須条件かちめ。

立ちほだかる邪魔者は急所的確に一突き。横から伸びてくる手

は難<sup>な</sup>いで振り払う。いつの間にか淡い光を纏<sup>まと</sup>った棒はそれだけで相手を数回吹き飛ばし抵抗を無くす。

ここに来てようやく少女の目的に気が付いた男達が、今度こそ眼の色を変えて少女へと群がっていった。

ここまででほんの五秒にも満たない。

周囲を見るまでもなくこれ以上の突進は無理と悟った少女は向かってくる誰よりも速く淡い光を纏った棒を振り上げた。

後は振り下ろすだけ。それだけで終了。うまくいけば全て終わるがそうでなくとも大半の危機を無力化できるはずだった。地面に叩きつける事さえ出来れば。

「そこまでだ、嬢ちゃん」

少女の振り下ろしかけた手が止まる。否、止めざるを得ない。

真後ろからかかってきた声の主には確かにそれだけの事が出来た。少女の首筋に当てられた手は今や、いつでもその少女の命を摘み取れると言っても過言ではない。

ひやりと流れる汗。だが遅かった。それは少女が一人で勝つためには決定的な綻び。

「先ずはその物騒<sup>ぶっそー</sup>なものをやめてくれねえか。じゃねえといつ俺の手が滑<sup>な</sup>つちまうか分かんねえよ」

まるで本気で言っていない事は誰が聞いても明白だっただろう。恐慌になりかけている少女の精神ですらも自らの後ろにいる男の言葉が冗談なのが分かった。

少女は固まったまま動かない、動けない。

手にしていた棒から漏れ出していた淡い光が次第に夜の闇に溶け込んでいく。

「あ……」

声が出た。だがそれは決して少女の望んだものではない。近づいてきた他の男が手にしていた唯一の抵抗を奪ったが為の、今度こそ絶望の証だった。

少女の手から離れた棒は纏っていた残りの淡い光を一瞬で失い、ただの棒切れに成り下がる。

「くくつ、これで……」

「きゃ……!」

力づくに冷たい地面に押し倒された少女にこれから起こるであろう事を思っただけか最高の絶望が覆う。血の気が引けるのが自身でも分かる程に。

周りにはいつの間にか殆ど景色が見えないほどに男達が集まっている。

仰向けにされた少女の四肢は今やそれぞれが別の男に押さえ込まれ少女の力では微々たりとも動かない。そして目の前には、恐らく立场上頂点である一人の男。

出来得る最後の抵抗、とばかりに少女の瞳は強い意思の光を持って正面の男を睨みつける。

「くくつ、獲物は生きがよくないと……なっ」

それも男を愉たのしませただけ。

男の手が少女の制服にかかる。

「っ！」

息を呑む暇も与えられず、音を立ててまるで紙切れのように少女の制服は下につけていた下着諸共無残に胸元から裂けた。

闇夜に晒される白いほどの双胸。

「や・・・！！！！」

さすがにこれ以上は耐え切れなかったのか少女の顔が大きく逸らされる。そこで、彼女は初めてその存在に気が付いて大きく目を見開いた。

「へへっ、そんな驚いて。まさか助けでもいたって」

それ以上は言葉が続かない。上に乗っていた男は少女と同じ方向を見て、殆ど同じ表情で固まった。

誰が初めに見つけたか、と言う問いはこの場合関係ないだろう。

間違はなく他の男達は一齐にそれに気が付いた。

狩場で弱者が強者に気が付くのは当然の事。それも間に合わないときほど滑稽なものはない。まさに今がその時。

男達全員、少女も含めての共通意識がそこにはあった。

どうして今までこの場の異常以上の怪異に気付けなかったのか、と。

視線の先にいたのはまだ少年と呼んでもいいだろう男がたった一

人。ただそれだけなら少女の時と同様に、圧倒的多である男達が今怯えているのはおかしい。だが何か、決定的に掛け違っていた。

それは異状。

少年の全身から立ち上がる殺気。少年から出ているのはただそれだけだ。が、本当にそれだけだった。殺気以外は何一つ感じない、純粋な殺気。間違いなく相手を殺すためだけに存在する、まさに殺人機械のそれ。

ただの一目でその場の全員が理解する。

勝てる相手 否、正気の生物に出来る相手ではない。如何足掻いても生きるもの、それもただの人間の雄如き、之の前では単なる獲物に成り下がる。誰一人として例外は認めない。

「……誰だ、てめえ？」

さすが肝が据わっていると一応、褒めておこう。

最初に声を出せたのは少女に押し掛かっていた男。答えなど初めからないと判っていたながら男は声に出さずにはいらなかった。

目の前のそれが言葉を発するなど在ってはならないこと。それはこの場にいる全員の共通の意識だった、ただ一人を除いては。

「ミズキ……」

一瞬誰もが耳を疑った。目の前の少年が声を出すなどと言う余りにも非現実的な事実。だから、男の呆けた声は仕方が無かったはずである。

「はあ？」

瞬間、少年からは殺気すらも消えてしまった。

最初の生贄になったのは憐れにも少年の一番近くにいた丸刈りの男。地面に膝をつく事無く仰向けに倒れた。彼は恐らく何が起きたのかさえも分からなかっただろう。

二人、三人と同じように倒れて、漸く男たちはそれが少年の仕業だと気付けた。

「なっ、てめえ・・・!!」

一瞬にして吞まれていた場の雰囲気が変わって緊張に包まれる。

だが剣呑な雰囲気も全く無視して、少年はたった今倒れこんだ男の傍にしゃがみこむとそれこそ無造作に面を上げさせた。

「ミズキと言う男を知っているか」

既に気を失っている男に対してそれがどれほどの意味がある事か。

答えがないと分かると少年は掴んでいた頭を離す。その時には既に男の事は眼に入っていない。

辺り一面を見渡して、殺気だった連中に自分が囲まれていると言う事実を目の辺りにしても少年は眉一つ動かす事はなかった。

ただ淡々と、

「次だ」

果たしてそれが挑発と呼べるものだったのかどうか。

少年の出した第三声と同時に囲っていた男達は一斉に渦の中の獲物へと向かっていった。

「……うそ」

最早組み伏せられてもいないのに動けないでいた少女の口から漏れた言葉はその現実を見せ付けられたもの共通の意志だったろう。乱闘に参加していなかった頭と思われる主導格の男一人と自らの身を起こそうとする事も気づかない少女。今ばかりはどちらも立場を忘れて気持ちは同じだといわんばかりに微々も動かない。

二人の目の前で繰り広げられる光景、乱闘とは名ばかりのそれは実に整然としたものだった。

鬼気此処に見たり、と言えよいだろうか。たった一人の少年が数十人の男達相手に立ち回り、否、ただの的にしている風景など実に在り得ない。

向かってくる相手は例外なく、反撃一発で撃沈。男達がどれだけ躊躇ためらおうと一斉に襲おうと、ただその繰り返し。少年はその場を一步動いてすらいらない。まさしく的相手。

男たちは恐怖しない。否、恐怖する暇いとますら与えてもらえないと言った方が正しいだろう。

結局、少年が男達の駆除よじくに要した時間は男達が少年に向かって行った時間と同じだった。

倒れたまま動かない男達、啞然以外言えない光景を背に少年が男達を踏み台に初めて前に出る。異様としか表しようのないその姿にはある種の感動すら催しかねない。

「ありえ、ねえ……こんな糞くそ」

無感動なまでの恐ろしさに少女は見惚れながらも自らの上でギリ

ツと齒が鳴る音を聞いた。

だが誰が何を言おうがこれが現実。

男達の山を乗り越えて少年が二人の前に姿を現す。無論、傷一つどころか息切れすらない。

「え・・・？」

「ま、待てクソガキ！！」

少年が街灯の元に姿を現した瞬間、少女の身体が上から引つ張られるようにして浮いた。そのまま首に回される手。誰のものは言うに及ばず。

当然、少年が呼びかけに応えて止まることなど有り得ない。それは初めから判り切っていた事。だがそんな簡単な事も分からないほどに男は混乱していたようで。少年は地面を蹴って一直線に二人へと向かって、

「くそつ・・・」

その時に男が取った行動は少女にしてみれば実に幸運なものだった。

「あ・・・」

後ろから押された、と思う間もなく少女の眼前に広がったのは少年の姿。

互いに瞳が捉え合う、がそれも一瞬。

「邪魔だ」

耳に入ってきた音の羅列られつが何を意味したのか、という事は少女には分からなかった。ただ許されたのは少年が発したにしては内容が受け入れがたい現実であつたらしいという事実だけ。

「っ……」

咄嗟とつせに手を付いて少女が地面に倒れこむのと後ろで何か倒れた音がしたのとはほぼ同時。一体何が倒れたのかは後ろを向いている少女にも見るまでもない事だった。

後ろからは足音が聞こえてくる。そして残つたのは自分一人。身を起こしながらそこまで思考して、勝手に肩が震えていた。

「え？」

だがそれは思い違い。

少女が慌てて後ろを振り向くと遠ざかっていく少年の後姿。足を立てようとして、腰が抜けているらしくまるで足に力が入らなかつた。

遠ざかっていく少年に少女は成す事もなく、

「あ、あの……！」

振り返る少年。その瞳は未だ以って感情の読めないそれに変わりない。それこそ目の前にいるはずの少女の事を道端の石ころとすら思っているかどうか怪しい。

「っ……」

「何だ・・・」

そんな瞳に射竦められて何か話せという方がどうかしている。それだけならまだしも少女は大よそ話すのが得意とは言い難かった。むしろ初対面相手ではろくに話せない、といつてもいいほどの人見知りだったりする。

「あ、あの・・・たす・・・助けてもら・・・ってありがとう」

だというのに必死になって紡いだ言葉。

返ってくる反応もなく少女は恐る恐る少年の顔を見上げようとして、表情を強張らせた。

少年に映っていたのは相変わらず何も考えていないだろうか判らない表情。見詰められただけで全身の血が引くほどに温度のない、冷たいとすら感じさせない視線だった。

「それだけか」

「え？」

「言いたい事はそれだけか、と言った」

言われた事が頭に入るのに数秒。それを理解するのにまた数秒。その間少年が待っているはずもなく、少女から遠ざかっていこうとする。

「ま、待ってくださいっ！！」

物言わず振り返る少年。その姿は言われた通りに立ち止まっただけ、と整った容姿も相まって人形にさえ見えた。

「あ、その・・・せめてお名前・・・を・・・その・・・」

何かを踏む音が周囲に響く。少女がその音が少年の近づいてくる足音だと気が付いたのはもう目の前に少年が迫っていた時。未だ立ち上がれない少女は見上げるのが必然となる。

「あ・・・えつと・・・その・・・?」

変わらず少年の瞳の中に見られるものはない。その瞳に見竦められたためか少女の身体が強張る。

「恭一」

「・・・え?」

「恭一だ」

唐突に繰り返されたその言葉に少女の目が驚きに開かれる。

二・三度の瞬きの後、少女はようやく少年の言葉の意味を悟った。自分から言った事ながらまさかこの目の前の相手に自分が出した問いの答えが返ってくるなど微塵にも思っていなかったのだ。

「あ・・・恭、一・・・さん・・・?」

「そつだと言った」

肯定する少年の瞳の中にはやはり何の色もない。

まるで互いに見詰め合っているように思えること数瞬。否、それは明らかに少女だけの勘違いに過ぎない。少年の瞳は少女を向いているだけで決して見てなどいない。

「ミズキ・・・」

沈黙を破り再び少年の口から漏れたのはやはり何の脈絡もない言葉。

「ミズキを知っているか・・・」

一体何を言われたのか一瞬分らない。数秒、呆けたように少年を見上げた後、少女はわけも判らずに首を横に振っていた。

「いいえ」

遅れて少年の言葉に本当に心当たりがなかった事を思い出して安堵する少女。

少女が答えた事に対して少年はそれで一切の興味をなくしたらしくもはや気に入れる事無くそのまま少女に背中を向けた。

「あ、あの・・・！」

自分がまだ何も言っていない事に気付いた少女が慌てて呼び止めたが、しかし三度目はなかった。

だが唐突に何かを思い出したかのように少年が引き返してくる。

「え？」

少女がその行動の意味を理解するなど不可能な事。いや、気まぐれといわれる好意に理解を求める方がどうかしている。

少年はやはり何も言わずに羽織っていた上着を脱いで少女へと放り投げる。

「雨の日に傘を差さない奴は馬鹿だ」

それだけ言うと少年は再び少女に背を向けて歩き出した。

少女は思わず空を見上げたが当然雨など降っていない。戸惑う少女に、闇夜に紛れすぐに少年の姿は見えなくなった。

一人その場に残される形となった少女はただ呆然と少年の消えていった先を見ていることしか出来なかった。何より、まだ恐怖に腰が抜けていてしばらくは立てそうにもなかった。

狩場の跡となった場所にまだ人影はない。多量の男たちがそう簡単に気が付くがない事も判っている。後しばらく、誰も訪れることはないだろう。

少女にとってはそれが幸い。少女を助けに来たらしい、あの少年とは別の少年が慌てて現れたのは結局それから十数分後。そしてそのとき少女は少年から放られた上着を手に抱いていたとはいえ自らの服が破れた事を指摘されるまで失念していたのだから。

狩りはいつの間にか終わっていた。

「話」あの日に会った」（後書き）

七宝殿「居間で興っている事？」

一羽「あの妃に出遭った」

また何か長い話になっちゃったなあ（しみじみ）

萌　　そうだけど。その割にわたし、名前も出てこない…

めげない、めげない

舞　　主人公の私が名前すら出てこないなんて頭悪いのよ、このへぼ作者は

オイ、そこまで言うこと無いだろう。第一お前呼んでないし、何で此処に居るんだよ？

舞　　私に不可能なんて無いの、人ってね、頑張れば何だって出来るのよ

言葉が爽やかなくせに実際の行動と言ったら…はんっ

舞　　実に含みのありそうな態度ね、どういうつもりよ？

別にいい、それに貴様は樂園こいに呼んでもない…そもそも主人公でも

ないし……

萌 あの一、舞ちゃん、作者さん？

舞 何、萌ちゃん？ あっ、後このへばに”さん”は不要よ、私を主人公にしないなんて

いい加減な事いうな。泣かすぞ、テメエ

萌 あ、あのね、話ずれてきてるよ、これ

舞 あら、そういえばそうね。このへばの所為で、気付かなかつたわ。流石、萌ちゃん

舞、てめえ創造者をおいて話をすんじゃねえー！

萌 でも確かに、本当の主人公のお兄ちゃんも全然出てないよね、舞ちゃん？（笑顔）

舞 （汗）…そっ、そうね、萌ちゃん。それに少女の名前も出てきてないわね。へば作者？

萌 誰か、も気になるけど…一体どうしてなの、作者さん？

うっ、舞の奴へばへばって……もういいや。これは今回だけだ、きつと、多分、おそらく。次回からはバリバリに恭一が主人公でやってもらいますよ、うん

萌 答になってないよ。それに勝手に自己完結に入ってるし……この人怖い、舞ちゃん

舞 よしよし、萌ちゃん。私がついてるから大丈夫よ

憑いてる、の間違いだろ。それに何か萌、本編入る前に此処で性格壊れそ

バキッ、グキッ、ボキッ、メリッ、ブシュー

舞 萌ちゃんを愚弄すると私が許さないわよ

ぐっ、作者に対して容赦のない奴め。(…ここはさっさと用件話して逃げるか)

では一話の話です。恭一が偶然居合わせて女の子を助ける、それだけだな、以上終わり、後は締めとけお前ら、では、さいなら

舞 早っ、ちょっと待ちなさい、まだ話は…

……

舞 ……ちっ、逃がしたか…でも今度あった時は、ふふふ

萌 はあ…舞ちゃん、舞ちゃん、早く締めなくっちゃ、もう時間無いよう

舞 ……あら、それもそうね、危つくあのへぼのお陰で忘れる所でした。では…萌ちゃん

萌 うん せーの……

七宝伝～今起こったこと～

萌 & a m p . 舞  
また二話で会いましょう

七宝伝～今起こったこと～

「一話」ある朝の風景」（前書き）

一話と同文。

…もう疲れたよ、マイドゥッグ

「二話」ある朝の風景

日の光が窓を透って部屋の中へと浸透する。微かに聞こえてくるのは機嫌のよさそうな足音が一つ。

まるでその音が聞こえたようにベッドの中のそれは微かに身じろぎをした。

窓淵に止まっていた二羽の小鳥がその気配に気付いたのか同時に飛び立つ。遅れて、ベッドの中の物体がむくり、と起き上がった。

ほぼ同時に聞こえていた足音が止む。恐らくは目的地にでも着いたのだろう。

「お兄ちゃん、起きてる、朝ご飯だよ？」

ドア越しに聞こえてくる心地好い声。

そういえば此処には彼女と自分以外は住んでいないのだから目的があるとすれば自分か彼女自身の部屋以外ではありえない。

急速に覚醒していく頭でその物体、千里恭一ちりはそんな事をぼんやりと思っていた。

「お兄ちゃん？　もしかしてまだ寝てる？」

返事がなかったのを眠っているとつたのか、もう一度呼びかける声がドア越しに聞こえてくる。

と、ほとんど間を置かずにドアが開いた。

「あ  
」

ベッドの上で身を起こしている姿を見て入ってきたその少女、千里萌は驚いたように声を上げた。そしてすぐに本当に嬉しそうに笑う。

「もう、起きてるならちゃんと返事してよね、お兄ちゃん」

「今起きた」

淡々とそれだけを語り、ベッドの中から立ち上がる。

意識は既に澄み切って完全に覚醒している。恭一は寝巻きを脱ぎ捨てて綺麗にかけてあった制服を手に取りうつとして、視線を感じて顔を巡らせた。

丁度じつと見詰めていたらしい萌と目が合う。

「どひっ」

した、と続けるより早く萌の姿は一瞬のうちに音をたてて閉まっていたドアの向こう側へと消えていた。

「じゃ、じゃあわたしは下で待つてるから、なるべく早く来てね、お兄ちゃん」

「ああ」

答えを聞いていたかどうかも怪しいが、声の主は少しだけ慌しい足音を鳴らして再び遠ざかっていった。去る間際の萌の顔が朱に染まっていたのは一種の風邪か、それとも病気か。どちらにしる知る

余地の無い答えに恭一は僅かばかり頭を悩ませながら制服へと今度こそ着替えた。

部屋から出る間際にある一つの違和感へと視線を向ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

視線の先に在るのは何かを隠すように布を被せた、部屋の風景から浮いているそれ。

紅い・・

軽い吐気を覚え、視線を逸らすと恭一は急ぎ部屋のドアを閉めた。階段を下りて一階に着く。続いて洗面器の前で顔を洗い簡単な身支度を整えた。

居間に着くと萌が何処かぼつとしながら椅子に座っていた。目の前にある朝食には手をつけた様子は見られない。

「あ、お兄ちゃん・・」

恭一の姿を認めるなり萌の表情に花が咲いたように笑みが生じる。

「おはよう、お兄ちゃん」

「ああ」

「今すぐご飯よそうから、座ってちょっと待っててね」

返事をするのも後に萌は立ち上がると隣の台所へと姿を消してい

た。

言われたとおりに椅子に腰を下ろして萌を待つ。

「へへっ、おまたせ」

両手に茶碗を二つ持って萌が戻る。手にした茶碗を恭一、そして自分へと置いてそれから椅子へと腰を下ろした。

「頂きます」

いつもの習慣どおり二人合わせて両手で箸を合わせる。

萌はじつと恭一を見つめたまま少しも動こうとしない。それも常だった。萌は何故か常に恭一と一緒に食事を取ろうとし、しかし決して先に手をつけようとはしないのだ。

萌曰く「お兄ちゃんに最初に食べてほしいんだよ」「らしいのだが未だにそれ以上の理由は分かっていない。

目前の期待と不安の視線を受けつつ恭一は少しだけご飯を口の中に入れた。数度噛み、それぞれのおかずも同様に少量ずつ口に含んでよく噛み締める。

改めておかずを手をつけようとして、訴えるような視線に一度箸を下ろす。

「今日も美味しいぞ」

「……うん」

満足したのか染まった頬にやや俯きつつ萌もようやく茶碗に手を伸ばす。と、ご飯を掬いかけて何か思い出したように手を止めた。

「そういえば、さ。お兄ちゃん……?」

顔を上げてみると萌の姿は幾分か緊張しているようだった。

「きよ、今日ってね……何日だった、かな……?」

語尾は聞こえないほど小さく、萌は様子を見るように恭一を見たり見なかったりと実に落ち着きのないものだった。だがその理由に心当たりはない。

今日が何日かは言われてすぐに思い浮かんだ。だがそれを言うのは理由も分らず躊躇われた。それでも口を開きかけて、制服にエプロン姿の萌が目に入った。

小さくため息を一つついて恭一はここ最近言われ続けていた事を思い出す。

昨日もそうだった。「似合うかな?似合うかな?」と何度その姿で部屋を訪れた事か。

「入学式……だったな、今日は」

とたんに顔を上げた萌の表情が溢れてもなお笑顔に輝く。

「うんっ！覚えていてくれたんだね、お兄ちゃん。わたし、嬉しいよ!」

「……昨日まで毎日三度は聞いた」

「それでも、だよ。わたしが嬉しいんだからいいの……. . . . .  
だって、お兄ちゃんそういうのあんまり覚えてくれないから」

最後の言葉は小さくて恭一には届かなかった。

一瞬だけ哀しそうに笑う萌の表情だが次の瞬間には元通りの笑顔に戻っていた。恐らく本人はそんな表情を浮かべていた事さえ気づいていないだろうに。

実際、恭一が周囲の出来事を覚える事はない。“出来ない”ではなく、あくまで“しない”。出来事は組み込まれた事であり必然で、だからこそそれらは日常でのみ必要な事なのだ。

正常の中に異常があるのであるのではない。異常にこそ正常は内包している。

「それで・・・」

「あ、うん。それで、なんだけど、ね・・・」

今更ながら萌が口ごもる。

言いたい事は大体予測できた。これも連日、同じ事を繰り返している。だからこそ恭一は先に言葉をいう事にした。萌の様子を待つなら遅刻になりかねない。遅刻自体は恭一にとって価値は無い。だがそれに対してみせる萌の悲しい顔をもう見たくはなかった。

「入学式に出席してお前を見ている。心配しなくて・・・いい」

「・・・うん」

消え去りそうなほど儂い声。顔を真っ赤にして俯いた萌の表情は確かに嬉しそうだった。

本来なら恭一はそのような混雑した場には行かない。事実昨年の自分の入学式にすら出てはいなかった。勿論萌はその事を知ってい

る。だからこそ自分の入学式に来てくれるよう何度も念を押ししていたのである。

萌が顔を上げる。顔は依然真赤なままだ。

「それでね、お兄ちゃん。今日がっこ・・・」

呼鈴が来訪を告げる。

続いていたはずの言葉はなりを潜め、萌は気まずそうに俯くと黙ってしまった。

しばらくして二度目の呼鈴が鳴る。萌は俯いたまま。

「萌」

かけた声にしかられた子供のように萌が顔を上げる。

「出てくる」

「・・・うん」

恭一は立ち上がると居間を出て玄関へと向かった。

「・・・学校・・・二人一緒に・・・行きたい、な」

一人残った萌は少しだけ寂しそうに俯いて、兄の帰りを待つように持っていた箸を置いた。

湯気を立てた二人のご飯はまだ残っている。

そこには龍虎がいた。まさにそんな情景だった。

恭一が玄関を開いた時いたのは男と女が一人ずつ。ドアの目前で互いに見詰め合っ・・・いや、睨み合っていた。一発触発の雰囲気  
が漂っている。その所為か出てきた恭一に気づいている様子はない。  
見る間でもなくどちらも良く知った顔だった。第一早朝に訪ねて  
くる者などたかが知れている。しかもここ数年飽きずに続いている  
光景でもあったりする。

男の名は上柳和佐<sup>かみやなぎかずな</sup>。千里兄妹が通っていた武道場の一人息子であ  
り、昔から遊んでいた、いわゆる幼馴染という関係。言動ならびに  
容姿は二枚目の軟派屋さんのようであり、その通りだと認識されて  
いる。

女の名は如姿舞<sup>しきしな</sup>。こちらは萌の親友らしい少女である。昔から人  
見知りする萌にしては意外な事に中学に入るなりに出来た一番仲の  
いい友達であり、よくこの家にも遊びに来ていた。普段は明るい感  
じの良い娘である、はず。

「何の用だ・・・」

取巻く一発触発の雰囲気など恭一には関係ない。通常よりも少し  
低い声で威嚇<sup>いかく</sup>するように、恭一は二人を見下した。

ようやく気付いたように二人同時に恭一へと視線を向けると、

「よう、今日はお前か」

「あら、おはようございます、お兄さん」

同時に口を開いた。実は仲が良いんじゃないかと思う事が度々あるほど息が揃った動作である。無論誰かが尋ねようものなら二人とも即全力で否定する。

口ぶりからして二人は恭一が出てきた事が不満だったらしい。言葉の端から溢れんばかりに不満が覗いていた。

「何の用だ、と言った」

恭一の声にかすかに苛立ちが混じる。ちなみに恭一も恭一で考えていた事は冷め始めただろう朝食の事だったりする。

そのご機嫌の変化に機敏に反応した二人は互いが互いに同じような作り笑顔を浮かべた。

「そりゃあ、お前らと一緒に学校に行こうと思っただけ」

少し言葉が遅れたのを悔しそうにしながら舞も続けて、

「ええ、私は萌ちゃんと、ですけど」

思いつきり牽制し合っていた。特に舞などは『萌ちゃんと』の部分を強調しつつ余裕の笑みを浮かべながら和佐の事を流し目で見るといふ事などしている。和佐は和佐で先に言ってしまった手前言い返す事も出来ないのか悔しそうな顔をしていた。

要するに、二人とも恭一の事は無視同然である。

ちなみに舞は中学の頃ほぼ毎朝来ていたので違和感はないが和佐



「お兄ちゃん今の何!？」

「気にするな、よくある事だ」

悲鳴を聞き届けたのだろう。慌てて駆けつけてきた萌に本当に何事もなかったように答えて恭一は萌共々居間へと戻っていく。

「恭一、てめえ!!!」

音をたてて勢いよく後手のドアが開いた。その音に驚いたらしい萌が後ろを振り返る。

「え、あ、和ちゃん? ……と舞ちゃんも?」

「おはよう、萌ちゃん」

「あ、うん、おはよう」

「今日も一段と可愛いわ」

「あ、ありがとう・・・舞ちゃんも可愛いよ」

「そう?」

などと少女二人がほのぼのとした挨拶を続けている真横で、玄関でしっかりと靴を揃えて脱ぎつつも駆け寄った和佐が恭一の胸倉を攫み上げる。

「あと少しで指が捻じ切」

次の瞬間、和佐は片手を取られた状態で床の上にへばりつかされていた。その上で腕を取っている恭一は淡々としたもので和佐を見下ろす。

「和ちゃんもおは・・・」

にこやかに隣を向いた萌の動きが組み伏している恭一たちを見て止まった。続いて舞も二人を見て取り、ややわざとらしく仰け反りつつ僅かに頬が紅に染まる。

「二人とも、朝からそんな激しくなんてっ・・・!？」

「てめっ、何見ぶえ!？」

「なげなげ煩い」

顔を上げかけた和佐だったが恭一に踏み付けられて沈黙。

しつかり五秒後、先ほどまで頬を染めていたのが嘘のように身をよじるのを止めると舞は爽やかに微笑んだ。

「仲良しよね。と、言うわけで私達二人も仲良くしましょう、萌ちゃん」

萌を求めて差し出した舞の手はそのまま空を切る。舞が半分泣きそうな顔で萌を見返す隣で萌の表情はぶすつとした不満げなものへと変わっていた。

「お兄ちゃん」

「何だ・・・」

「和ちゃんと遊んでないで、早くご飯食べないと冷めちゃうよ」

「そうか」

「そっだよ、行こう」

それだけ。

いともあっさりとは佐を解放して立ち上がった恭一は萌に手を引かれてさっさと居間へと戻っていく。

「待って、萌ちゃん」

「ぶえ！？」

玄関のドアを閉めた後、舞も二人の後を追っていく。途中でぶにゅつとしたものを踏み付けた感触があったが気に止めない事にしたらしい。

「ぐ・・・ぞ、つたれが・・・」

一人残った和佐も、それでも這いずりながら居間へと向かっていった。

居間には恭一、萌、舞、和佐の四人がいた。恭一と萌は途中だった朝食を再開させていて、舞は何が愉しいのか満面の笑みを浮かべながら萌をじっと見つめている。そして和佐は自らの手の手当てを一人でしていた。

時折萌が申し訳なさそうに和佐の方を見る。

「ご、ごめんね、和ちゃん・・・わたしでつきり組み稽古でも始めたのかと思ったの。だって、二人とも凄く楽しそうだった」

「いや、気にしなくていい・・・よ」

萌に笑顔で答える和佐は割合機嫌がよさそうだったが時折恨めしそうな視線を恭一へと送っていた。恭一はそれに気づいていつつ全く関与はせずに黙々と箸を進め続けている。

「ご馳走様でした」

「うん、お粗末様でした」

手を合わせて、食べ終わった食器を台所の流しへと運ぶ。居間へ戻ってきた時には遅れて萌も食べ終わっていたらしくすれ違いで台所へと向かっていった。

再び椅子に腰を下ろして、恭一は静かに瞳を閉じた。

「全く・・・少しは手加減ってものを考えるよな」

和佐の恨みがましい声が聞こえてくるがそれは無視。が、別の視線を感じて恭一は瞳を開けて視線を向けた。  
じっと見つめていたらしい舞と視線が合う。

「何だ」

「ごめんなさい、お兄さん」

「そうか」

もう一度瞳を閉じる。謝ってきた理由は定かではなかったが恭一にとってはどうでもいいことだった。

「そう言えば二人とも、こんな朝から何しに来たの？」

声が聞こえて恭一が目を開けると洗い物を終えたららしい萌がエプロンで手を拭いながら戻ってきたのが目に入った。そのエプロンを脱いで椅子の背に掛けて萌も椅子の上に座る。

「今日さ、一緒に学校に行かないかなと思って」

「え」

「どうかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・舞ちゃんも？」

「ええ、そうだけど・・・迷惑だった？」

「ううん、そんな事ないけど・・・」

二人の答えに萌は助けを求めるように恭一の顔を見て、しばらくしてから微笑みながら二人へと顔を戻した。

「そうだね、皆で一緒に行こう?」

萌が先ほど言いかけていた言葉の続き、その意味合いも含めて恭一は萌を見つめた。その視線に気づいた萌は少し照れたようでも泣き出しそうな表情を浮かべた後、僅かに微笑んだ。それが少しだけ残念そうに見えたのは恭一の見間違いかどうか。

「お兄ちゃんもいいよ、ね?」

「ああ」

立ち上がって鞆を取りに二階に向かう。萌も続いて立ち上がる。

「萌ちゃん」

呼び止めの声に萌一人が振り返る。

「うっん、やっぱりいいわ」

「そう?」

不思議そうに首を傾げる萌の姿を見つつ恭一は階段を上った。後ろを向いて恭一が先に行っている事に気づいた萌が慌てて追ってくる中、偶々それが恭一の目に入った。

ごめんね

声には出さずに唇の動きだけ。

恭一の視線に見られたと気づいたらしく少しだけ恥ずかしそうに苦笑いが浮かぶ。萌は一切気づいた様子はない。

何事もなかったように恭一は視線を戻し、

「どうかしたの、お兄ちゃん？」

「何でもない」

向けられた萌の笑顔を見てふと、萌と一緒に学校に行くのは久しぶりだと言う事を思い出した。

「二話」ある朝の風景」（後書き）

七宝殿「居間で興っている事？」

庭「或る麻の不誓約」

というわけで二話です

萌 わたし、初登場だね、うれしいよ

うむ、物語本編とは全然関係ない朝の風景だな

萌 そんな、わたしにとってはとっても大事な日なのに

まあ、大事と言えば大事だな。なんせこの後…ククク

萌 えっ、この後って何？

ふふふっ、やがて解るさ、大人になればな

萌 うっ、なんか良さげな言葉言ってる

はっ！？ そっいえば、今日は舞こないのか？（キョロキョロ）

萌 うん、前来た時、あんまり進まなかったから今日は休んでて  
って、わたしが言ったの

そうか！ よくやった萌。お前がそう言えばあいつは来れないだろっからな、ククク

萌 怖いよう…

さて今回の話だが、普通の日だ。

萌 うわっ、いきなり話題変えたよ、この人

この日は高梨学園の入学式、そして次回のことだが、転校生が来ます、二年の三組です

萌 えっ、それってお兄ちゃんのクラスじゃないの？

その通り…と、言うか主人公のクラスじゃないと話できないから  
(笑)

萌 そっ、それで、……………その人って女の人、それとも男の人？

お兄ちゃんが獲られないか心配か？

萌 そっ、それは、その……それにお兄ちゃんは物じゃないし、捕るとか盗らないとかは…

萌 微妙に言葉違うぞ、萌。まあ心配する必要はない、お前と恭一が結ばれる予定はないから

萌 え、そんな、それじゃあこれから先わたしが居る意味無くなるよっ

心配するな、お前は重要キャラだ。むしろ居なくては困るって奴だ。物語に支障が出る。

萌 死障……それって、その、死んで星になるとかって人？

萌 ……どこで覚えたんだ、そんなこと？ まあ良いか。そのことについては……ノーコメントだ

萌 えっ？ えっ？

ついでに言つと転校生は女だ

萌 えっ！

わはは、驚け、泣け、叫べ！

萌 うっ、ひどいよう

ヒュー

萌 うう……、？ あれ、この音なんだろう？

わははは……

ヒュー……ドスン……ぐしゃ、ぐによ（モノがはみ出る音）パリンッ

萌 ……でっ、ではまた三話で……でも何で岩がお空から降ってきて

七宝伝～今起こったこと～

たんだろ？

七宝伝～今起こったこと～

三話「不運な転校生？」（前書き）

以下同文。

三話「不運な転校生？」

恭一は改めて周囲を見渡してみた。

誰もいない教室。

何の変化もない、授業中であるはずの教室内である。移動教室であるとか体育の授業であると言う事はありえない。第一本日入学式があつたばかりで授業は始まつてもいない、本来ならホームルームの時間であつた。

授業があるにせよないにせよ、興味のない恭一は呆と窓の外に見える雲を見続けていた、かれこれ一時間ほど。

それにしても、と思う。

入学式とはあれほど邪魔なものだつたのかと僅かに眉を顰めた。

一体何の儀式なのかは知らないが新入生が怒涛の勢いで恭一に向かって走り寄ってくるのだ。「お義兄さんと呼んでもいいですか？」に始まり「よろしく願います、私の名前は」だの「死ねや、コラッ」などと奴らの感情は全く一致していなかった。ドサクサにまぎれてか現二、三年生も入り混じっていた気もする。ちなみに向かつてきた全員が今は例外なく保健室行き、もとい明らかに定員漏れだったので仲良く体育館で眠っている。

更に言えばその前の段階でも激しかった。新入生挨拶までは一部の一年生席を除いては清とした空気の中で偉いらしい人たちの価値のない挨拶が行われていたのだが新入生挨拶が始まつた途端にそれが崩れたのだ。体育館全体で「うおおおー」の雄叫びや「ああ」と言う何処か惚けた呟き声多数、「け、結婚してくれっ！！」と

ち狂う輩まで現れていた。折角萌が新入生代表としての挨拶だったらしいのだがその所為で中断。  
その時の萌の泣き出しそうな顔を思い出して、訳もなく一瞬息が詰まった。

恭一が軽い息苦しさを覚えた頃、教室のドアが開いた。

入ってきた男は恭一にも見覚えがあった。この学園の教師、更にはこの教室の担任であるはずの男。しかし、今は酷く慌てている様子だった。落ち着きもなくきよるきよると辺りを見回している。だが教室に生徒がいなかったことが原因ではなさそうだった。と言うよりもそのことには全くの興味が示されていない。

視線を窓の外へと戻しかけて、男の後に続いてきた相手に恭一は僅かに目を細めた。

従うように入ってきた二人目は初見の女のはずだった。肩よりも少し長いほどの緑髪りょくはつにきつい印象が表立つ意志の籠った鋭い瞳、身体が固くならない程度に伸ばされた背、すらっとした物腰に動作にも隙がない。だがその服装は間違いようもなく萌と同じ、この学園の制服であった。

女も吸い寄せられるように恭一を見つめてくる。

椅子に座ったまま、身動き程度に思える動きで恭一の身体が僅かに動く。

いつでも動けるようにと椅子を僅かに引いた動きにその女は反応を示した。僅かに、警戒するようひきまよに女の手が今はない何かを求めようひきまよに自らの腰元を彷徨う。その動きを見て恭一は少しだけ腰を浮かせた。

「あー彼女は本日転入してきた娘だ、よろしくやってくれ。それから後は自習だからな」

場の空気を全くといいほど読めていないらしい担任教師は早口でそれだけを言うときさっさと教室を出て行ってしまふ。

「え、ちよつと先生!？」

慌てて声をかけた転校生だが教師は見向きもしない。それも足音からして廊下も駆け足、と言うよりも全速力で去っていったようだった。普段は校則に煩い人物なのだが、余程急いでいたらしい。後には恭一と転校生、それと黒板に書かれた彼女の名前だけが残る。

『渫稿 凧』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人ともじつと見つめあったまま微動にもしない。

先に折れたのは転校生の方だった。恭一からは視線を逸らさずに教壇へと歩いていく。

「はじ・・・・、?」

初めて気づいたように、転校生は人一人居ない教室内を戸惑ったように見回し出した。

やがてどうしようもないと思ったのかそのまま真っ直ぐにただ一人いた男子生徒、恭一の事を見つめて、口を開いた。

「……………初めまして、ホシノ深槁風……………です」

そしてまた先ほどと同じ状況に戻った。転校生、風はじつと見つめたまま動かず、恭一も見つめたまま視線を逸らさない。互いが互いの緊張状態。

また耐え切れなくなったのか先に口を開いたのは風の方。

「何か用……………ですか？」

戸惑うような言葉とは裏腹に真っ直ぐに見つめてくる風の問いに恭一は何も応えず視線も逸らさない。

答えがないと分かったのか風は真っ直ぐと恭一の方へと向かってきた。無言のまま警戒したように向かってくるその動きはやはり隙が見当たらない。もっとも、隙がないだけで作れないわけではなかったが。

机一つを挟んだ位置で風の足が止まる。それから少し言いよどむように、口を動かした。

「先ほども言いましたが初めまして。それと、あなたの名前を伺ってもいいですか？」

「千里恭一だ」

「……………それでは千里……………さん、少し聞きますか？」

「何だ」

「この教室の生徒は一体何処に行っただんですか？ それともあなた

一人で全員だとも？」

「他にもいる。何処に行ったのかは知らない」

「・・・そっですか」

全くの茶番。互いが自分を守り相手の隙を探っているのが分かっている状況で会話などに何の意味があるといえようか。

「ではもう一つ聞きますが・・・」

凧が恭一に背中を見せる事無く僅かずつ間合いを開ける。

「千里・・・さん、さっきから私に用事がある・・・ありますか？」

「ない」

「ならどうして私の事をじっと見ている・・・のですか？」

無言のまま恭一が席を立つ。そして凧はまた少し後ろへと下がった。

逃げ腰の姿にとりあえず今は敵意がない事が分かった恭一はようやく凧から視線を外してその足でドアへと向かった。

「・・・何処へ？」

振り向く事もせずドアに手を伸ばして、

目前でドアが勢いよく開いた。

そこに現れた人影に半分反射的に恭一は拳を振り上げる。

「っ!?!?」

何かに当たる、否、握られて拳と共に動きを止められていた。

「あぶつ、危ねえな……」

その声に恭一は初めて相手が誰なのかを認識する。

改めて、もう片手で殴り掛かるとその相手、和佐は握っていた手を開放して後ろへと下がった。その為途中で止めた拳は空振りに終わる。

「しっかし、やっぱりのうのうと教室にいたんだな、お前」

呆れたようにしながらも絶妙な間合いを取っている和佐の姿に恭一は不快そうに眉を寄せる。ちなみに和佐の教室はここではない。

「何の用だ」

恭一の口から漏れた声は何処までも冷たかった。更には言外に『目障りだ』……とまでは流石に言わずも『一組のお前が何故三組にいる』と含ませていた。

「つれないな、折角の自習だって言うから態々誘いに来てやったつて言うのに」

表情は笑み、そこで肩越しに尻の姿を見つけたらしく和佐が少しだけ不思議そうな表情を浮かべた。

「まさか恭一以外に残っている奴がいるとは思わなかったな……  
誰だ、彼女？」

「転校生だ」

「へえ、転校生……ね。道理で美人なのに見覚えがないわけだ……  
……って、何処に行く恭一！？」

歩き出そうとしていた恭一は立ち止まると振り返って和佐を見返した。それだけで思い当たる節があつたようで和佐が納得したように頷く。

「あー、いつものところか……って、だからちよつと待て！  
！」

再び歩き出し掛けた恭一だったが再度呼び止められて、非常に不快そうに足を止めて和佐に振り向いた。

「さつきから……何の用だ」

恭一は言葉に殺意までも含めていたが、一方で和佐はその質問にとびつきりの悪戯をたくらむ子供のように、何かを含んだ笑みを浮かべた。

「いや、さ。三年ぶりの通過儀礼を一緒に見に行こうかな、と思つてな」

「一人で行け」

即答した恭一に僅かに和佐が肩を落す。

「相変わらず、つれないな……まあある程度想像は付いたが」

「……あの」

「ん？」

和佐が振り向いて、いつの間にかすぐ後ろに凧が移動してきていた。その姿に恭一は僅かに警戒を強めたが和佐は反対に笑顔になる。

「なんだい、その、えっと……」

「渫槁凧です」

「ああ、凧ちゃん、ね」

その瞬間凧の眉がぴくりと動く。それに伴って恭一も僅かに身じろぎをしたのだがそれだけだ。和佐は全く気にしていない。

「俺は上柳和佐。で、聞いたかどうか分からねえが一応こいつ、恭一の親友をやっているつもりだ。よろしく」

「あ、ああ……」

手を差し出した和佐に凧もおおずとした感じに手を差し出し、握手の後に二三度振ってから互いに離された。

「で凧ちゃん、自己紹介も終わったところで俺に何か用？」

「ああ……いや、はい。上柳……さんは教室に誰もいない理由を

知っているのですか？」

「あ………ああ、なるほど。凧ちゃん、君入学式に出ないだろ？」

「入学式？ ……はあ、まあ確かに」

「なら説明するよりも実際見に行った方が分かりやすいよ。今から俺らも行くとこだから、気になるのなら付けてくればいい」

「一人で行け」

いつの間にか『俺ら』になっていたのに口を挟んだ恭一だったが和佐は全く気にした様子はなく、振り向いて恭一に笑顔を向けて見せた。

「別にちょっとくらいいいだろ。どうせ暇なんだしさ」

恭一は近寄ってくる和佐を威嚇するように睨みつける。すると急に真剣な表情をした和佐が真っ直ぐに見返してきた。

「お前、萌ちゃんがどうなってもいいのか？」

改めて、恭一は完全に和佐に向き直ると一気にその間を詰めた。和佐の襟元を捻り上げてもう片手は相手の首に掛ける。既に二人の顔は触れ合いそうなほど近づいていた。

「どういふ事だ」

「なあに、行けば分かるさ」

襟元を攫み上げた手をやりわりと押されるが素直に離す恭一でもない。和佐は諦めたようにため息を一つついて、

「来いよ。まあ、お前も直接見れば思い出すだろう？」

「!！」

一瞬、昇ってきた和佐の手に恭一が掴んでいた襟元を手放して後ろへと跳んだ。

開放されて満足したように、制服の乱れを軽く整えると和佐は歩き出した。

「ま、慌てるようなものじゃないから安心はしてなつて。もしもの時も……非常に不本意だが舞がずつと傍に憑いているだろうからな」

すれ違いざまに恭一の肩を軽く叩いていく。その後を尻が恭一の事を避けるように一定距離をとりながら追って行った。

「おゝい、恭一。どうせ来るんだろ。早く来いよ」

後ろからの和佐の声。恭一はそこでようやく、二人の方を振り返るとその後を追って歩き出した。

和佐の足は階段を下りて一年の教室の方へと向かっていた。だが階段を下りてすぐの場所、まるで全校生徒が一ヶ所に集中しているかのような人口密度があつてそこで三人の足は止む無く止まる。

「凄い人の数だ……. . . . .」と思えます。まるで全校生徒がいるよう

「……です」

教室に恭一以外がいないと知ったときよりも唾然とした様子の凧に和佐は苦笑気味に頷いてみせる。

「いや、そのとおりだと思うよ、凧ちゃん」

「は？」

「だから、多分ここに全校生徒がいるんじゃないかねえの、って事。来てない奴は体育館でお昼寝かこいつくらいのもんだよ」

と言つて恭一を指差す。

出された指をへし折ろうと恭一が手を伸ばすがそれは直前で引つ込められた。

「さ、じゃあ行くか」

「いや、行くと言つてもこれでは……」

「心配しなくても大丈夫だって、凧ちゃん。それともこれだけの元がなんなのか、気にならない？」

「それは……確かに。これだけの事があるなんてそうある事じゃない……ですから。何としても真相を確かめる必要がある……  
……と思います」

「だろ？」

何故かさも可笑しそうに耐え切れないとばかりに笑い声を漏らす

和佐に凧が困惑の表情を向ける。だが和佐は何も言わずに、それが凧の関心を更に高めているようでもあった。

「と、言うわけで行ってみようか」

「で、でもこれだけ人の壁があるならどうやって・・・」

何処か血走った目をしながら我先にと先に進もうとしている人の壁を前に和佐は進む気漫々、凧はやや躊躇ためらいがち。そして恭一は、

「な、何ぶっ!?!」

「えなびっ!?!」

「おい、押すばっ!?!」

「・・・うぐっ」

「げぼっ・・・」

先にある障害物を物理的に排除しながら黙々と進んでいた。

「な、行けるだろ?」

「・・・そのようだな」

さつさと恭一が進んだ痕跡、死屍累々《ししるいるい》の道程を嬉々として進んでいく和佐の背中を見ながら、何処か疲れたように凧は肩を落としていた。

やがては人の壁の方も後方の事態に気づいたのか、血走っていた目は幾分なりを潜めてまるで肉食動物に怯える草食動物のように縮こまって今度は我先にと、進む恭一に対して道を空け出した。事態を把握していない者もついついつられて道を空けていく。

まるで王の道を恭一は進んでいった。ちゃっかりとその後ろには和佐と凧の姿もある。和佐は慣れたように周りの人垣に手を振るなどしていたのだが凧の方は顔を真っ赤にして俯きながら後を進んでいた。

障害もなくなり楽に進めるようになった事で程なくして目的地に辿り着く。

「あ、お兄さーん、こっちですよ、こっちこっち」

その声に一時だけ視線が恭一に集中するが首を一振りして見回すだけで誰ともなく視線を横に逸らしていた。

改めて恭一は視線を戻して、視線が重なった。

「……………お兄ちゃん」

今にも泣き出しそうだったが誰かに何かをされた様子も見られないその姿を見て、恭一は自らも知らぬうちに僅かな安堵を吐き出していた。

恭一は人が割れる中を進んでその教室の入り口までたどり着く。手を伸ばしかける直前、向こうからドアが開いた。ドアを開けたらしい舞がちよっとだけ驚いたような表情を浮かべる。後ろには萌の姿もあった。

その瞬間、沸き立っていた周囲が波をうったように静まり返った。時折感嘆のため息が聞こえてきたりもするが理由は定かでない。

萌の瞳は僅かに潤んでいた。昔から否応にでも人が寄ってきていた所為で余り他人なれしなくなってしまうた萌だ。これだけの人中にいればそれはもう恐怖だろう。

何も言わないまま恭一へと縋りつくように身を寄せる。

突然周囲が沸き立ったように騒然となった。その伝播は止まるどころを知らず輪を広げていく。

そんな中。

「こんにちは、お兄さん。今朝ぶりですね」

まるで周りの雑音を気にしていないとばかりに舞が笑顔を見せた。恭一は萌を抱き寄せてゆつくりと頭を撫でながら僅かだけ視線を送って応える。

「萌ちゃん、大丈夫だった？」

「お兄さんが来てくれてよかったです。これで萌ちゃんも安心できる……ね、萌ちゃん？」

「え……あ、わわっ」

余程切羽詰っていたのか、舞の声に周りの人たちを気にしだしたらしく萌が顔を真っ赤にさせて恭一から離れる。とは言っても身体をほんの少し離すだけで片手はしっかりと恭一の服を掴んでいたりするが。

「……無視かよ、おい」

何故だか和佐ががくりと肩を落していたりするが誰も気にしていない。

「萌」

目尻を拭いつつ、萌が顔を上げる。

「大丈夫か」

「……うん、大丈夫……だよ。舞ちゃんもいてくれるしまだ大丈夫。うん、大丈夫」

最初自信なさ気に、だが最後には微かな笑顔を浮かべて萌は頷いてみせる。恭一はもう一度萌の頭の上に手を乗せて、

「そうか」

まるで安堵しているように溜めていた息をゆっくりと吐いた。

表情を隠すように俯いて、萌は頭の上に乗った恭一の手を取って重ね合わせた。

それだけで蠟ろうの仮面が溶け落ちるように、それは控えめだが今までの表情が本当のものでないと誰もがわかるほどに心底嬉しそうに笑っていた。

「うん、そうだよ」

ほう……とまわりから感嘆かんだんのため息が幾重も漏れる。中にはそのまま昏倒する者まで現れ出す勢いだ。

変わって辺りもざわめきを取り戻した。「あいつ誰だ？」や「彼女の何なんだ？」「確か二年の・・・」などの詮索が始まったらしいのだが本人達は全く気にしていない。

「おーい、萌ちゃん・・・そろそろ俺がいる事にも気づいてくれると嬉しかったりするんだけどな・・・」

その声に萌は夢から現実に戻ったように一時瞬きをして、改めて声の主へと顔を向けた。

「・・・え、あ、うん。ちゃんと和ちゃんがいた事も・・・分かってるよ」

と、言いつつも申し訳なさそうに視線を逸らす。

どうやら嘘はつけないらしい。

「萌ちゃん、和相手に無理しなくってもいいのよ。素直に『ごめんね、存在が薄すぎて気づかなかったよ』って言ってあげなさい」

「ま、舞ちゃん・・・。そ、そんな事ないからね、和ちゃんっ」

後ろからの囁き声に再び笑顔を浮かべて和佐に向きなおる萌。だがその慌てた態度が何よりも真実を物語っていた。それを分かっているらしく和佐は僅かに引き攣った笑みを浮かべながらも何も言わない。

「そ、そういえば和ちゃんたちは何しに来たの？」

あからさまな話題転換だったが和佐は引き攣った表情を引っ込め

るとすかさずそれに乗った。

「ほら、萌ちゃん人ごみって苦手だろ。だから大丈夫かって心配になって。な、恭一」

「・・・ほんと？」

見上げるのは和佐ではなく恭一。

ずっと萌の事を見ていた恭一は僅かな間を置いて、首を縦に振った。

「・・・ああ」

「そっか」

ほっと息を吐いた萌の顔が目に見えて綻ぶ。それに伴い何故だか周囲から無数のため息が漏れていた。

「でも大丈夫そうだよな」

「うんっ、わたしは大丈夫だよ」

変哲のない笑顔を浮かべて見せた萌の事を見て和佐も安心したように僅かに肩を落した。

「そうみたいだな」

「当然、私がついているのよ。万が一にも京が一でも大丈夫じゃないなんてありえないわ」

「お前が憑いてるから違う意味で俺は心配しているんだがね」

「あら、それって一体何の下での心配？」

「・・・少なくとも今お前が思い浮かべているような内容でないことだけは確かだ」

幾分か居心地が悪そうに舞から視線を逸らす和佐。舞は初めから和佐など視界に入れていない。

と、

「お兄ちゃん？」

たった一言が二人の視線を一箇所へ逸らす。

恭一は言葉で応える代わりに萌へと目を向ける。視線が重なって僅かに、握られた手の力が強まった。何か言いたそうに萌の口が開きかけ、結局何も言わないままに閉じられる。そして握られた手の力が急に緩んだ。

名残惜しむように指一本ずつ、だが確実に互いに握られた手が離れていく。

「うん、そうだった・・・よね。ごめんね、わたしばかり」

完全に別たれる。

「ありがとう」

周囲から音に聞こえるほどの吐息が漏れる。

「・・・如何もない」

最後にもう一度だけ萌の頭に手を乗せて、恭一は身を翻すとそれだけで見事なまでに割れた人垣の中央を歩いてその場から離れていった。

「萌ちゃん、戻りましょう」

舞に促されて萌と二人、教室の中へと戻っていく。和佐は幾分か居心地が悪そうに頭を掻いて、結局恭一の後を追った。

「・・・ふむ」

空洞に広がっていた人垣が再び教室の窓に張り付く形で戻っていくその端で、結局最後まで場の流れについていけなかった転校生の少女が一人中央に眉を寄せながら難しい表情で腕を組んでいた。

三話「不運な転校生？」（後書き）

七宝殿「居間で興っている事？」

三和「不安な天候性？」

和佐 『今日は作者急病のため、私ことと和佐が代わりにお送りします』だってさ

萌 前回のあれ、回復しなかったんだね。大きな岩だったし、棘とかもあつたよ…

和佐 萌ちゃん、それは言わない約束だろ

萌 あっ、そうだったね。ごめん、和ちゃん（シユン）

和佐 （かつ、可愛い）いいよ、別に…さっ、さて三話の紹介です。今回は風が出て来ます

萌 あれ？ そういえば風さんとずいぶん仲良さそうだったね、和ちゃん

和佐 うん、そうかな？ でも設定じゃあよく喧嘩するって書いてあるぜ

萌 じゃあ、これから嫌われてくんだね

和佐　そんなはつきり……それにちょっと違う。嫌われるんじゃないの

萌　ふうん（少しつまらなそう）

和佐　あれ、萌ちゃん、もしかしてやきもち妬いてくれた？（笑顔）

萌　やきもち？　誰が？　もしかして和ちゃんに？　あはっ、面白くないよ、それ（天使の笑顔）

和佐　……

萌　…

和佐　……

萌　？　あれ、どうしたの、和ちゃん？　急に黙って。それにそんな暗い顔して

和佐　いや、なんでもないよ……うん

萌　そう？　ならいいけど

和佐　ぐすん

萌　それよりも、どうして入学式が中止になったり教室に人が少なかったりするのかな？

和佐　それは…そうだ！　その答って確か作者にもらった資料の中にあつたよつな……

ごそごそ、ごそごそ

和佐　あつた

萌　で？　ねえ、何だったの？この前の作者さん教えてくれなかつたし…

和佐　えっと『やがて解るさ、大人になればな。フッフ』ってなんだ、こりゃ

萌　うう、この前と一緒の答だよ、それ

和佐　うん？　もう一枚あるぞ、しかも萌ちゃん宛だ、これ

萌　え、本当？　読んで、読んで

和佐　ああ、では、『P S・事件の張本人が何言ってるか、自分の胸に聞いてみる。ぷぷーだ』

萌　……

和佐　…

萌　うう、くすん

和佐　…なんかどんどん性格壊れてってるな、あの作者、少しは

七宝伝～今起こったこと～

同情…しなくていいか

萌 うう、くすん

和佐 萌ちゃん、再起不能と。あっ、では、あねば四話で会い  
ましよう

四話「ある一日の下校」(前書き)

以下同文。

急いなので誤文があるかもしれません。

七宝伝～今起こったこと～

#### 四話「ある一日の下校」

屋上から街を見つめていた恭一はふと気づいたように視線を足元校庭へと下げた。

いつの間にか放課後になっていたらしく下校しようとする人影が幾重も見取れた。結局恭一があの場合から去った直後に掛かった放送で、緊急の会議があるとかで生徒会に始まり果てはPTA会長や理事長までがずっと会議室に籠りっぱなしだったらしく授業は始まらなかったようだ。もっともそんな細事恭一にはどうでもいい事ではあったが。

校門のところへ視線を向けるとそこには何故だか人だかりが出来上がっていた。何気なくそこを見ているとふと逆に見られている気がした。

「・・・・・・・・」

よくよく見るとわらわらという人の中、ほぼ中央部でたった一人だけがこちらを見上げて向かって大きく手を振っていた。一度気づいてみるとその姿はかなり目立つ。そしてその隣にあった身を縮めるような姿を見て、恭一はその場から身をひるがえ翻した。

心ならずも早足で教室へ戻るなり本日開く事のなかった鞆を手に取って廊下に出る。

「お、恭一。今から迎えにいこうと・・・・・・・・って、おいおい無視するなよな」

階段を下りて正面玄関へ足を進める。後から誰かが付いてきたようだが恭一は振り返る素振りも見せなかった。

正門には屋上から見たままの光景がまだ広がっていた。人が蟻のように何かに群がっていたが構わず足を進める。

「待ちなさい」

目の前に立ちはだかったものに恭一は足を止めた。見渡すと軽く二十程度の男子生徒が恭一の周りに群がっていた。しかも何故だか皆が皆体育会系だったりする。

男達の中でも正面にいた一際むさくるしそうな男が一人恭一の前に一歩進み出る。

「ちょっと、付き合ってもらおうか」

恭一は目の前の男に興味を持つでもなくもう一度自分の周りを見渡して。

「邪魔するのか・・・」

「ん？ 今なんて」

ポツリと零した恭一の声に男が怪訝そうに眉を寄せたのに恭一は僅かに息を吸い込みかけ、

「新藤先輩、いたいけな後輩を虐めるのはよくありませんよ？」

少しだけ慌てたように和佐が恭一と男の間に割り込んできた。

「・・・上柳か、今はお前に用はない。俺達は後ろの彼に用事があるんだ」

間に割って出た和佐を避けて恭一を見ようと男が動くがそれをすかさず和佐は遮る。

「俺は先輩達のために言っているんですよ。それに先輩達の知りたいうことなら多分俺でも答えられるだろうし・・・その用事、何なら俺にしません？」

「俺達の総意は初めから決まっている。お前に用はない。それに、荒事が本望とは言わんが流石にお前でもこの人数を相手にすること出来んだろう？」

言外に『だから後ろの彼を俺達に渡せ』というものを含ませつつ男が一步にじり寄る。

「だから・・・っ」

言いかけた和佐の身体がびくりと一度震える。だがそれは、決して困んでいる男達に対してではない。

実にへらへらした笑みを浮かべて後ろを振り返り、

「あゝ、恭一・・・頑張つて説得してみせるからできるなら後ちょっと我慢して欲しいな、なんて・・・」

「邪魔だ」

一言で一蹴された。

気圧されるように和佐は恭一に道を空ける。恭一を正面にして男

も気圧されたのか数歩下がり、それでも何かの意地なのかその場に留まった。が、愚かとしか言いようがない。

「し、仕方ないな。急ぐのなら場所はここで我慢してやろう」

何が仕方ないかは知らないがそれでも恭一は足を進めて、額に汗を滲にじませつつも男は蛇に睨まれた蛙の如く身を竦めたように動かない。周りを取り囲んでいたはずの男達もそれは同様で、囲む意味は既になかった。

「おま・・・お前と彼女は一体どういう関係」

「邪魔だ」

無造作に、それこそ道端の石ころを蹴り飛ばすような仕草で恭一は腕を払った。

その軽く見える動作の何処にそれほど力が籠っていたのか、全く反応出来ずに殴られ男は軽く吹き飛んで少しだけ地面を転がっていく。

「あちゃ～・・・」

後ろから届いたその声に男の呪縛がようやく解けたようで、自分が殴られたのを初めて知ったように顔を歪めながら緩慢な動作で起き上がった。頭を揺さ振られているのか最中、度々男の身体が揺れる。

「や、やってくれたな・・・」

掠れながらも声からは怒気が垣間見られる。男からしてみれば理

不尽に殴られて怒り心頭といったところか。

それを期に困んでいた男達もようやく認識が現実<sup>に</sup>追いついたのか夢から醒めたような表情を一瞬浮かべた後に一斉に恭一を鋭く睨みつけた。

恭一は改めて自分の周りを一度だけ見渡してから最後に正面に向き直りかけて、ふと視線を巡らせた。

「あ、やっぱり居ました。お兄さん」

一瞬、場の空気が霧散する。

その場に居た全員の視線が例外なく一斉に声の主、の隣へと移っていた。

「ほらね、萌ちゃん。お兄さんがもうじき来るって、言ったとおりだったでしょ？」

「う、うん」

朗らかに笑みを浮かべている舞とその後ろに隠れがちになりながら手を引つ張ってもらう形の萌、二人の姿が人垣を割るよう<sup>に</sup>して寄って来る。

恭一の前まで来て、舞が一度だけ恭一に微笑みかけて半歩後ろへと下がる。自然と萌が一人だけ前に出たように錯覚する。

「お兄ちゃん、帰ろう」

その言葉に恭一は周りをもう一度見渡しなおす。萌もそれにつられる形で周りを見渡した。いつの間にか先ほどまで感じていた敵意は微塵も残らず消え去っていた。だが代わりに全員の顔が熱に浮か

されたように赤みを増している。

何はともあれ、誰も邪魔する気はないようで恭一は言葉の代わりに一度だけ頷いた。

周りの視線の所為か少しだけ表情を翳<sup>かげ</sup>らせながら萌が腕にしがみ付き、恭一は然して気にした様子もなく歩き出す。

「ま、待てっ！！」

後ろから声が聞こえたが当然立ち止まる事もない。何しろ相手は後ろにいるのだから通行の邪魔になるはずがない。

「お前と彼女の関係は・・・」

ぱんっ、と手の平を叩いた音が響き渡った。然して大きな音でもないはずなのに不思議と注意を引く。その場にいた全員、萌と恭一さえも足を止めて振り返っていた。

全員の注目を一心に集めて手を叩いた彼女、舞はにっこりと微笑んで見せる。そして次の瞬間、ある意味ではとんでもない事を叫んだ。

「二人は両親公認の仲よっ」

一瞬でどこか血走った視線が舞から恭一と萌に、形的に腕を組んでいた二人へと移る。その姿は誰が見ても兄妹というよりは恋人同士といった方が納得できる仲むつまじさであった。

「ま、舞ちゃん・・・」

困ったようで恥ずかしそうにしながら萌が戸惑いの声を上げる。

それに舞は作り物でない本当の笑顔に向けて、静かに首を横に振った。

「駄目よ、萌ちゃん。ここまで注目されたら萌ちゃんが誰のものをはつきりとさせておく必要があるわ」

『誰のもの』という部分に反応して周りの視線がもう一度舞へと集中して、満足げに集まった視線を舞は頷きで受けた。

「お兄さんは萌ちゃんを護る騎士様なの。それも二人だけの秘密や他人には言えないあんな事やこんな事まで知り尽くした仲よ。更に同じ屋根の下で朝は布団の中でおはように始まり手作りご飯は勿論の事、登下校にお弁当、日用品の買い物や仲睦まじく夕食の買い物。そしてお風呂上りの濡れ姿に最後はおやすみのキス・・・はしてないけど、そうっ・・・割くに割けない関係とはまさにこの事を置いて他にはないわ」

感極まったように舞が演説(?)を続ける。周りはどんな事を想像しているのか顔色を赤や青にしながら呆然と立ち尽くしている。もっともその中で「そりゃ血の繋がった兄妹だから割けない関係だろうな・・・」などと冷めた様子の輩も一人だけいたが、誰も気にしていない。

「だからっ・・・もしも萌ちゃんと話したいなら先ずお兄さんを打ち倒して見せなさい!!」

鋭く舞の指先が恭一を指し示す。

血走った目が一斉に恭一へと向かった。

「・・・あら?」

が、その場所には既に誰もいなかった。少し先に校門に向かって歩いていく二人の姿が見える。

「み、見なさいあの余裕。あなた達なんて邪魔にもならないと背中  
で語っているのよ。出来るものならあの自信を打ち砕いて見せなさい」

怒り、嫉妬、殺意まで混在した視線が背後から恭一を貫く。ただ、諦めだけは一つもなかった。

向けられた本人は視線だけの相手など気にも入れない。ただ無いが如く萌と連れ立って歩いていき、校門を出た道を曲がって姿を消した。

「そして最後に、これが一番重要な事なの。聴きなさい」

視線がもう一度舞へと集中する。

「萌ちゃんは私のものよっ！！」

場の空気が一気に冷めた。最後の言葉、誰も信じてないのは明白であった。あの二人の仕草と置いていかれた舞を見比べれば一目両全だろう。恭一のものと言うのならまだ分かる気もするが、第一今までの言葉との関連性が一切抜けている。ただ舞は言い終えた事に満足したらしく浅く息を吐いてかいてもいない汗を拭う仕草をしてみせていた。

一呼吸の後、舞は「萌ちゃん待って〜」などと言いながら短距離走の選手並みの速さで恭一たちの後を追って行き、その場から消えた。

その場に群がっていた人達も、何処か血走った目を保ちながら、明日に向けて散り散りに散っていく。

「・・・なんだかなあ」

熱に浮かされていなかったただ一人、複雑な表情をしながら場に残っていた和佐は諦めともとれるため息の後に少しだけ早足で三人の後を追って行った。

恭一たちが去ってしばらく、一人の少女が息を切らせながら走ってきた。

「はあはあ・・・まさか今日掃除当番が回ってくるなんて・・・こんな事ならかなえ鼎に任せればよかった、かな？」

制服が違う事からして少女はこの学校の生徒ではない。  
目的の相手を探すために息を整えながら周囲を見渡して、とんとんと後ろから肩を叩かれて少女は一瞬身を硬くした。恐る恐るといった感じに振り返る。

振り向いた先にいたのは少女と同じ年ほどの、これまた少女。綺麗な黒髪と射る様に鋭い眼差しが特徴的な美しい少女だった。着て

いる制服は新調されたのか一目見て分かるほどに綺麗で、しかし少女に似合っていた。

「あなたは水月家の人か？」

少女の肩から力が幾分か抜ける。どうやらかの有名な『ナンパ』という類のものではなかったらしい。

「は、はい。そうです。そちらはさらし」

「ああそうだ」

言い終えないうちに少女が頷いてみせる。

素っ気無い態度と険しくなりがちな瞳に待ち合わせ時間に遅刻した事に怒っているのでは、と感じた少女は慌てて頭を下げた。

「あ、あの、ごめんなさい。此度はちょっと用事が出来て遅れてしまつて、いえ、言い訳するつもりは無いんですけど・・・その、ごめんなさい」

「い、いや。そんな事は然して気にしていない。おかげで興味深いものも見られたからな」

少しだけ慌てたように首を横に振って、少女は今一度険しい視線を学校の中へと向けた。その様子に少女が困惑を見せるが口を開くより先に少女は視線を戻していた。

「さて、では行こ・・・どうした、私の顔に何か付いているのか？」

不思議そうに自らの顔を触って探ってみせる。

初めて相手の顔を凝視していた事に気づいた少女は慌てて首を振った。

こほん、と仕切りなおしに息を吐いて少女はまだぎこちない表情に笑みを浮かべてみせる。

「でっ、では家に案内しますね。ついてきてください」

「ああ、頼んだ」

他校の制服を着た少女を先頭にして、二人は連れ立って歩いていた。

「手と足が同時に出ているが歩きにくくないのか？」

「あっ・・・は、はい。ど、道理で歩きにくかったわけですね・・・

「目的地に着くまで途中、何度か同じような事があった。ただそれだけの事。」

四話「ある一日の下校」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」

四羽「或いは血糊の下戸」

凧 失礼します、誰かいるか？

……

凧 何だ、誰もいないのか……ふうん……

凧 それでは……恐縮ながら、私が今回の司会をさせていただきます(赤面)

凧 ……、今回はある意味全部ぎゃぐ？ ですね、現実じゃ有り得ない、こんな学校崩壊

舞 そうねえ、まあ、萌ちゃんの魅力なら世界を墮とすことも可能でしょうけど

凧 それはそれで……すごい様な気が……

舞 そんなの萌ちゃんにとっては晩飯前よ

凧 ……

舞 ……

凧 …… (汗)

舞 ……?

凧 …… って、わあ！ 何時からそこに？ と言うか、あなた誰？

舞 あら？ ここには始めからいたわよ、ついでに言うと、私は舞ちゃんです

凧 …… 舞？ はて、どっかでその名前を聞いた様な。どこだったか…… うん

舞 そうなの？ 私は渚橋先輩とは逢っていない筈だけど

凧 えっと、確か…… そうだ！ 今回の『暴走』のもう一人の当事者！

舞 その嫌な言い方は止めて欲しいです、渚橋先輩、私達が何かした訳じゃないんだから

凧 …… そういえば私の名前、なんで知ってる？ 私たちってまだ会ってないはずって……

舞 …… そうですねえ、では、乙女の秘密ってことで (笑顔)

凧 …… えっ！ …… (汗)

舞 … (二〇)

凧 まっ、まあいいか、そんな事があっても

舞 もちろんですよ、黒槁先輩、乙女は秘密を持っていた方がいいんです

凧 でっ、では気を取り直して話の内容を、ということだ

舞 ええ

凧 ……………あの演説は何だ？

舞 全て私の本心です、それ以外はありません

凧 そ、そうか、しかしするとどうしてお前はそこまで細かく二人の生活、を…

舞 (二〇)

凧 まあ…知らない方がいい事もあるか

舞 まったくその通りです……………っと、あら、もう時間の様ですね。終わりにしましょうか

萌 あわわわ、遅刻しちゃったよう。あれから和ちゃん起こしてくれないんだもん

七宝伝～今起こったこと～

舞 & a m p ; 凧 ; では、五話で会えることを祈って、さよなら

萌 え！ ちょっと待ってよう！…そっ、そんなあ！

七宝伝～今起こったこと～

五話「ある一日の平和な夕食」(前書き)

もう書くのも面倒だ……。詳しくは二話あたりのまえがきを。

五話「ある一日の平和な夕食」

「今日のご馳走だよ。期待しててね、お兄ちゃん」

両手一杯に買い物袋を下げて家に帰ってきたなり、笑顔で発した萌の第一声がこれ。

精一杯笑顔を作ったつもりだろうが恭一からしてみればそれは何処かぎこちない作り物の笑みだった。

何も言わずにじっと見つめ続けると萌は顔を少し赤らめて恥ずかしそうに心なし目線を下に俯けた。

「なに・・・かな、お兄ちゃん？」

「無理は、するな」

少しだけ顔を上げた萌は笑顔で、

「学校でも同じ事言ったよ。わたしは大丈夫だよ、だってもう小さな子供じゃないんだから」

そこまで笑顔で、耐え切った。

堪え切れず恭一に飛び掛ると萌は抱きつくようにその胸に顔を埋めた。

「でも、お兄ちゃんが心配してくれるのは嬉しいかな・・・」

言葉は決して全てを語らない。

抱き留めるように手を当てた肩は小刻みに震えていて、服を掴む両手は皺しわに残るほど強く握られていた。顔が埋められた胸も微かだが服を通して湿り気が伝わり始める。

「・・・そうか」

片手は肩に。もう片手は軽く頭に乘せて、その指で何度も髪を梳すくように撫なで下ろした。

いつもと同じ温もりを感じ合える、零れ落ちた何かが胸の中に還って来るように錯覚できる瞬間。

しばらくして、埋まっていた胸を軽く押すと萌は身体を少しだけ離れた。

見上げてくる瞳は潤み頬も紅潮して、それでも何処か晴れ晴れとしているようだった。

「ありがとう・・・」

聴き間違いと、消え入りそうなほど小さな声。

もう一度恭一の胸を押して、手を完全に伸ばして萌が身体を離す。落ちていた袋を両手で拾い、萌は恥ずかしそうに恭一から視線を逸らすと駆け足で居間の方へと去っていった。

引っ込んだ、と思ったたらもう一度萌が顔を覗かせる。

「夕食の支度、急いであるからちょっとだけ待っててね」

本物の笑顔を残して今度こそ萌が居間へと完全に身体を引っ込めた。

「お邪魔します」

見事に重なった二つの声と共に一人が恭一の脇を通り過ぎて萌と同様、居間へと入っていった。

変な幻覚を見たとき恭一が僅かに顔を顰めて足元を見ると、

見慣れない靴が二つあった。

先ほどの二人を幻覚から妄想へと格上げすると恭一は靴を揃えて脱いで、階段の脇にあった萌の靴もついでに手に取って階段を上り自室へと向かった。

靴を置いて自室で制服から軽装に着替えた後、隣の部屋にもう片方の靴を置いて一階へと戻る。

居間に入るとある顔が二つあった。

「よ、遅かったな」とふんぞり返っているのは和佐。

「どうも、お兄さん。今日はご馳走になります」と軽く頭を下げたのは舞。

恭一は二人をいないものとして自分の椅子へと腰を下ろした。

「あの・・・お兄さん。迷惑、でしたか？」

ちらりと視線を向けると、舞が潤んだ瞳に上目遣い、祈るように両手を胸の前で組んでいた。

「気色悪いからやめろ」

もう一方から心底嫌そうな声が聞こえたが、どちらもよくある事なので恭一はそのまま視線を戻した。

「迷惑なら迷惑と行ってください。そのときは私、涙を呑んで出て行きます」

「うえ、マジ止める。鳥肌が立ってきたぞ」

「あ、でも萌ちゃんのお誘いは断れないわ。どうしよう・・・？」

「初めから出て行く気もないくせによく言っぜ、この女狐」

「・・・さっきから黙って聞いてれば随分と好き勝手言ってくれるわね」

「好き勝手？ 俺は事実以外を言った覚えはないぞ」

「可哀想に、遂に頭をやられたのね。でも同情はしないわよ」

「お前からの同情なんて・・・いや待て。遂に、って何だ。手前常日頃からそんな事考えてやがったのか!？」

「冗談は寝てから言いなさいよ。あ、でも今も寝ているようなものよね、ごめんなさい」

「こ、の・・・」

いつもどおりの騒がしくなりだすが態々何をして無駄な事を知っているので無視。

微かに届く台所からの鼻歌交じりのまな板を叩く音を耳にしなが

ら恭一は騒音から意識を遮った。

すぐ傍で食器の擦れ合う音が聞こえてきて恭一は再び目を開けた。目の前の机に並んでいた料理は宣言どおりいつもよりも少しだけ豪華のような気もする。

向かいに座った萌に視線を向けると照れたような微笑を返されただけだった。

心なしいつもよりも機嫌がよさそうな気はするが思い返してみても今日は入学式以外に思いあがるものはない。その入学式にしてもあれでは逆に気持ち沈みそうなものである。

恭一は思考を巡らせていたが事実は実に単純なものであった。久しぶりに登下校を一緒できた、単にそれだけだというのに。

「だめっ！！」

突然上がった怒鳴り声に恭一は考えを止めて意識を戻した。

見ると萌が和佐を睨みつけ、睨まれた和佐は実に済まなそうに身を縮こませていた。

舞は萌の隣でいい気味とばかりに忍び笑いをしていたが恭一の視線に気が付くと取り繕うような微笑みと共に手を振ってくる。

察するに、和佐が料理を食べようとして萌がそれを止めた、とそんな所か。

日頃から誰よりも先に恭一に食べさせたがるのを考えるとある意味当然の成り行きだろう。

ふと視線を感じて隣を見ると実に恨めしそうな和佐がいた。どうやら早く萌の作った料理を食べたいようだ。

「あの、お兄さん・・・？」

どこか乞うような声に顔を向けると、和佐の向かいで舞が潤んだ視線で見つめていた。こちらもやはり早く食べたいのだろう。

二人とも家に来る事はよくあるのだが、食事時となるとそうあるものでもないのだ。つまりは萌の手料理にありつける機会はそうあるものでもないという事。

一つ、僅かに息を吐いてから恭一は持った箸を両手で合わせた。

「頂きます」

小声で呟き、箸を伸ばす。

各皿から少量ずつご飯に取り、それらを口に運びよく味わってから咀嚼する。

恭一が食べている間誰一人として料理に手を伸ばすものはおらず、固唾を呑むようにして全員が見守っていた。特に不安と期待に揺れているような萌の視線が一番強く気に入る。

見られる事を気にするでもなく、恭一は一通り食べ終わると顔を上げて正面の不安そうにしている顔を見返した。

「美味い」

ほっ、と萌の表情が安堵と共に満面の笑みになる。

「頂きます」

恭一がしたように手を合わせてから茶碗を手取る。そして箸を伸ばしかけて、萌は不思議そうに凝固していたその二人を見る。

「ごめんね、わたしの我俣わがままで。でも舞ちゃんに和ちゃん、もう食べでもないよ?」

掛け声に、笑顔にやられて惚けていた二人が我に返った。

そうして、ようやく千里家の食事が始まった。

料理はどれも美味しく感じられた。

少々五月蠅い和佐や舞の話す声。それと、萌の笑い声。

二人の萌を褒め称える言葉や談笑など。それは千里家にとって久しぶりに二人のみ以外でとった賑やかで騒がしい、そして笑い声のある食卓だった。

いつにない萌の笑顔を眺めつつ、

これは何と無駄な事だろうか

何処からともなく浮かんでくる考えを恭一は軽く頭を振って頭の中から追い出した。

七宝伝～今起こったこと～

五話「ある一日の平和な夕食」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」

五把「在るーに血の平和な憂色」

ふふふふ、復活！ ついにやりましたよ、皆さん、還って来ました、作者です

萌 わっ、本当に久しぶりだよ、作者さん

そう、長かった、あの忌々しい岩のせいでも……ご丁寧に封印の印まで結んでいやがって

萌 ”ふういんのいん”ってファンタジーみたいな響きだけど…何なの、作者さん？

む、それを知るのはまだ早い、お前なら後で分かるから気にするな(キリッ)

萌 う、うん(何か、真面目になった…のかな)

では今回の話をする…食卓、以上

萌 ……えっ！？ そ、そんな、せつかく一生懸命作っただよ、料理、もっと説明してよ

そうは言ってもこれ以上説明する事はない、残念だがさっぱりと諦める

萌 うう、そんなあ………あつ、そういえば

うん？ 何だ、萌

萌 なんで作者さんはわたしの幸せを壊しちゃうような事を平気でしちゃうのかな？

はあ？ 何の事だかさっぱりですね

萌 お兄ちゃんとの二人きりの食事…新婚さん……夫婦、新妻…

……それに

なに赤くなっている、つーか何考えてる、いや言わんでもいいけどなむしる言うな

萌 作者さんって何だかわたしには冷たいよね、どうして？

ふんっ、単なる展開上の都合だ……いや、これ位で冷たくされたといい気になるなよっ

萌 怒られても困るけど………なに、その不穏な台詞、ちょっとしたお茶目さんだよな？ ね？

ふふふっ、それは見てのお楽しみみてね

舞 あら？ 何、綺麗っぽい事を言って私の大切な萌ちゃんを不

安にしているのかしらね（チャキ）

ぬう！？（振り向く）

チンツ　ズバツ　ツシャ　ズババババ　シュ　シュ　チンツ

舞　…後はこの霊験があるっぽいお札で封印すれば…完了ね

ぐっ、舞、貴…さ…ま……

舞　萌ちゃん…はい、さようなら（笑顔）

ぺたんこ

……

（この間一秒弱、しかも萌が瞬きをしている間）

萌　あれ？　舞ちゃん、いつからいたの？　それに…

舞　ちよつと前からよ、萌ちゃん、それと何？　それに…って

萌　それにその手に持つてる紅い液体が点々と滴ってる刀って…

舞　ああ、これ、玩具よ、何でもないの、萌ちゃん、気にしなくていいから（ぽいっ）

萌　あ、……うん（いいのかなあ）

舞 それより作者はもういなくなつたわ、これから楽しくやりま  
しょう、萌ちゃん&amp;#9829;

萌 は？ え、舞ちゃん、ちょっと、まって、何？ 急に…ちゃん、  
そんな、所…んっ、さわっ…

……ロク……ワデ……アイ……マ……シヨウ……

六話「夕食（うたげ）の後に」

食後の熱い昆布茶を飲み終えて一息。

恭一が椅子から立ち上がった音に萌の肩がびくりと震える。

「お兄ちゃん……」

聞くだけで不安を煽られる様な、いつもながらに胸を締め付ける声背後から恭一に届く。

その眩きに一瞬だけ動きを止めて、恭一は振り返る事をせずに居間を出た。

玄関口にかけてある上着を取ろうとし、ない事に気がついた。いっ無くしたかと思いを巡らせようとして、それもはたと止める。

「何の用だ」

「何の用だ、はないだろ、恭一。それを言うならお前だってこんな時間に外に何の用があるんだ？」

苛立ち紛れの声と共に鋭い視線を感じ、僅かな苛立ちを覚えながら恭一はようやく振り返って和佐を見返した。

「何の用だ、と聞いた」

「恭一……お前、まだ萌ちゃんにあんな表情させてるんだな」

正面を射抜いてくる和佐の瞳。その声は静かに、だからこそ重みを感じさせた。

そんな表情は知らない。何故なら呼びかけに応えて振り返った事は今の今まで一度もないのだから。

行き場の知らない何かに内心の苛立ちが募る。

「だから如何した」

爆発するように和佐の口が大きく開き掛けて、何も言わずに閉じられた。

「・・・言ってみただけだ。何でもねえよ」

言葉を吐き出すように首を振り、和佐が恭一の横を通り過ぎる。そのまま靴を履くと玄関の取っ手に手を掛けて、恭一へと振り返った。

「いつもの散歩、今日も行くんだろ。早く行こうぜ」

恭一は何も応えず、先に出て行った和佐に続くような形で靴を履くと開いたままの玄関を通った。

上着がない所為か外の風が薄身一枚に沁みる。

空を見上げると雲ひとつない、そして星一つ見えない晴天だった。地上を照らすのは街灯と月明り。

「あれ、いつもの上着はどうした？」

そう言う和佐の恰好は制服のみだ。

路端で恭一が来るのを待っていたらしい和佐を横切って行く。後ろから微かな吐息とついてくる気配が続いた。

「春って言ってもまだ寒いんだぞ。これで風邪でも引いたら当てられないだろ、萌ちゃんに」

恭一の応えがない事が分かったのか、また後ろから一つ微かな吐息が聞こえた。

それきり言葉が途切れる。

もとより恭一は何も話さないのと和佐が何も言わなければ自然と二人の間は無言になるのは道理である。

まだ然程遅い時刻でもなし、恭一が歩く先は異様に人がいない。それどころかすぐ傍に在るはずの家々からさえ人の気配は希薄だった。

まるで何かを恐れているような

人は無意識に危険を避けようとする。少なくとも明確な理由もなく危険に自ら飛び込みはしない。だから普通は無意識に避けている領域に人は気がつく事はない。

それは誰もが同じで。

恭一も同じだった。ただ違うのは恭一に理由がある事と、むしろ好んで避ける道を行こうとする忌憚のなさ。

よって恭一の散歩は道筋が一定ではない。しかしだからこそ、か。

狩場の空気につられる事がある。

今日は特にそうだ。

見上げた空が、空気が、風が、光が、全てが誘っていた。

だからか、昨日に引き続き心が躍るのは。自然と歩く速度が上がっていく。

「なあ、恭一」

高まる気概に水を差すような後ろからの声。

当然恭一が振り向く事などない。それは察しているのか、応えを期待してはいないようだった。

「お前がこれを止めるはずがないって事は分かってるつもりだ。これはお前にとっての最低限だからな。・・・でもな、もう少し」

恭一の足が止まる。

「もう少し萌ちゃんの気持ちも汲む気はないか？」

その名前が出た事に、恭一は一度だけ後ろを顧みた。その鋭くなつた視線が一瞬和佐を射抜く。だが当然、和佐は背中に向かって睨み返した。

「お兄ちゃんをお願い、だってよ。そりゃ萌ちゃんにお願いなんてされたら俺は断れねえよな」

「黙れ」

高まつた気分の所為か、いつもよりも更に苛立ちの入った恭一の

声。

和佐はしばらくの間その背中をじっと見つめて、最後に軽く息を吐いた。

「まあ、判ってるならしつこく言う気はねえよ」

止まっていた足を進めて和佐が恭一を追い抜いていくが恭一はまだ立ち止まったままだった。

「恭一どうし……」

振り返ってみた和佐が言葉を止める。ようやくある勘違いに気づいたのだ。

恭一はもとより和佐の方へと興味を示していない。だから和佐の話に足を止めたなど、おかしいのだ。

その事実はずなわち別の事実をはじき出す。和佐はもう一度前を、恭一が見ていた方へと向き直る。

目的は既に目の先に在った。

恭一が立ち止まったのはこちら一帯で唯一の公園の入り口付近。夜になると特に人気がなくなる場所でもある。

三つの影が先にあつた。

西南の入り口 恭一たちがいるのは南の入り口 にいる三人は丁度恭一たちと同じように公園へと入ってきたばかりのようで、いまだこちらに気づいた様子はない。

「へえ、珍しいな。ここに人が来るなんて。それとも、まともじゃないのか？」

和佐がおどけてみせるが目だけは笑っていないかった。

やはり恭一は応えない。ただしばらく公園の奥へと進んでいく三つの影を僅かばかり見送って、何事も無かったかのように歩を進めた。

「あ」

女性のものと思われる綺麗な高音の声が耳に届く。

聞き覚えのあるような感覚に恭一は足を止めて、何気なく 本  
当に何気なく 振り向いた。

視線が重なった気がする。

三人が恭一たちの方を向いていた。

一人は男。少年と呼べる、恭一たちよりも若いほどである。残り二人は女だった。こちらも少女と呼んで差し支えのないくらいの年頃に見えた。

三人ともが何に驚いているのか果然と立ち尽くしている。

「あれって確か・・・凧ちゃんじゃねえの？」

その中の一つに見覚えのある顔を見止めてか、和佐が三人に向かって歩き出した。恭一も彼女に応えて歩き出す。

「よ、凧ちゃん・・・だったよな。それにしても奇遇だね、こん

な所、つと」

一歩下がった和佐の前髪が振られたその風圧に巻き上がる。更に凧が一步詰め寄って、手にしていたそれを突き付けた。

「おいおい、求愛ならもうちょっと優しく」

「動くな」

おどけて見せた和佐だが突き付けられたそれを肌に押し付けられ  
ては押し黙らざるを得なかった。

「随分といい度胸だな」

手にした短い棒・否、『短剣』といった方がいいか、それを和  
佐の首筋に押し付けながら凧は和佐を鋭く睨みつけてみせる。

「お前もだ、千里。気配でもしや、と思っではいたが本当にそうだ  
つたとはな」

威嚇するように凧は和佐に突き付けた短剣を恭一に見せ付ける。  
が、当然止まるわけでもない。ただ恭一は彼女に應えるのみ。

「なあ、凧ちゃん。俺ってさあ・・・」

彼女、凧の害意に敵意を持って返すだけ。

恭一が地面を軽く蹴り上げようとした刹那。

「なっ!？」

凧の身体が宙に舞った。

「出会い頭に命狙われて黙っていられるほどお人好しでもないんだよね」

身体の動きと重心のみを使って相手を投げる無手投げ。それを放った和佐は呆然と地面に倒れている凧に対してにっこりと笑って見せた。それから振り返って事件の犯人にするが如く恭一を人差指で指した。

「フー訳で、恭一。お前も無闇に誘いになんて乗るなよな。どうせ余計な手間が増えるだけなんだから」

和佐が背中を見せた間に凧は素早く身を起こして残り二人の場所まで跳んで戻っていた。

それを見送りつつ疲れたようにまた吐息を一つ漏らす。

「あのさ、凧ちゃん。何か勘違いしてない？俺らに狙われる理由はな」

無い、と言いかけた和佐が押し黙る。

それを見て取った凧は我が意を得たりとばかりに淡い微笑を浮かべて、一気に間合いを詰めてきた。

「闇は闇に還れ、それが摂理だ」

まさしく斬りかかってきた凧の剣線を避けながら和佐は非常に慌てていた。

「あ、いや、待て、待ってくれ、頼むから、な、何か勘違いしてるだけだからさ、な、な？」

「言い訳は見苦しいぞ」

「いや、だから、さ、凧ちゃん、君も勘違い、いや、マジ待て、お前が動くと洒落に……」

和佐一人に対して相手は三人。例え未だもう一人の少女が呆けていようとまだまだ一人残っている。当然もう一人、少年は止まっていたはくれなかった。

そして凧も、和佐が言葉を向けているのが自分でないという勘違いに気づいてはくれなかった。

残念な事にその願いは叶わないようだった。

「お前の相手は僕だ!!」

少年がそう言い、威勢良く恭一に向かってくる。向けられたそれに反応しないなど恭一にはありえない。

「あ、や・・止めなさい、鼎!!」

ようやく我に返ったらしい最後の一人が何か言っていたが関係ない。

一歩踏み出す。

間合いを一気に崩された少年はそれに気づかず手にしていた棍状のものを振り下ろした。

相手の手元付近、そこを支点に力を流して腕を軸に回転させると共に自重を用いて相手を地面に叩きつけた。

「うわっ!？」

武器を持った手を蹴りつけると同時に握りの緩くなった棍を抜き取る。更に押さえつける意味も込めて腹部を踏み付けた。

その時になって初めて、恭一はようやく相手の姿を認めた。今までの行動は半ば反射で行ったようなものである。

いたのはやはり遠目の通り自分より幼いであろう少年。彼は叩きつけられた衝撃に耐えるようにその瞳を閉じていた。

戦いの最中視界を閉ざすなど確実に命とりになる愚行。

それを見て恭一は急に冷めていった。こんなどうしようもない雑魚が知っているはずなどないのだ。

だが逆手に持ち直した棍、既に少年の喉下へと下ろしていた手は止まる事無く、恭一もだからと言って特に躊躇ためらうでもなく突き下ろした。

伝わった思いの外鈍い手応えを不思議に思う事もなく、恭一はすぐさま後ろへ飛び退いた。

刹那、奔はしった銀閃が鼻先を掠めていく。

恭一はそれを放った相手を見、また相手も恭一を見た。

「おいおい、何してん、だよ・・・」

和佐であった。

先ほどまで風の近くにいたにもかかわらず今は恭一のすぐ傍にいた。少し彼方で風が驚きに目を見張っているのが判る。

何処から取り出したのか和佐の両手にはそれぞれ短い刀、小太刀が握られていた。先ほどはこれで斬りつけてきたのだろう。

それにしても。

呼吸は今にも絶え絶えで額からも驚くほどの汗が滲み出では流れていた。何故かは不明だが和佐が極度に疲労しているのは明らかだった。つい数秒前までは元気が溢れ出ているようですらあったというのに。

「人殺しの、お守り・・・はごめん、だぜ」

息も切れ切れにそう言っつて、和佐は両手を背中へと回した。再び手を戻したとき、その両手は何ももたれてはいなかった。

「それが悪い」

「まあ、な・・・」

たった今人を殺しかけたようにはまるで見えない風に応えた恭一に対して、そこは和佐も慣れたもので自分の足元にいる少年を見な

がら疲れたように一つ息を漏らしただけだった。

「鼎、今い」

凧の声とほぼ同時に和佐が動いた。

起き上がりかけていた少年の腕を取って自身は後ろに回る。締め上げると共にもう片手では口を塞いだ。

「お前もおいたが過ぎる、な」

「むぐつ・・・」

先ほどの凧と同様、今度は和佐が少年を盾にするようにして凧たちに見せ付けてみせる。少年は何も言えず、少しだけ顔を歪めて和佐を睨みつけた。

「鼎を・・・彼を離せ」

凧が手にした短剣を構えつつ睨んでくる。とは言っても口だけで手を出さないのは明らかだった。焦りがありありと見て取れる。

もう一人の少女も同様に、心配そうにおろおろとしていた。ただこちらは手の中の棍 恐らく少年と同じものだと思われる。は両腕で抱え込んでいる状態であり、凧とは違い本当に純粋に少年の心配をしているだけのようだった。

彼女に敵意はない 因<sup>よ</sup>って、恭一の意識にも入る事はない。

「おいおい、行き成り斬りかかって来て謝罪もないのか？」

対して和佐は飄々としたものである。その声色には若干の親しみ

と愉快さが含まれていた。

その態度が癢かゆくに触るのか風が更に苛こ立った様子じやうに変わる。

「早く解放しろ!!」

「何で？」

逆に和佐はさもおかしそうに聞き返した。それに風は更に言い返し、

恭一はふとある方角に視線を向けた。

「何でではな、くっ!!」

煩いそれに、恭一は手にした棍を投げつけて黙らせた。彼女はそれを受け止めている。

睨んでくるがそれも気にせず、というよりも気にも入らないように其処へ視線を向けたまま歩き出した。

「待て貴様。何処へ行く気だ」

横からまだ煩い声が聞こえてくるがそんなものは最早恭一に届いていない。

和佐はその恭一の様子を悲しそうに笑って見ていた。それから押さえ込んでいた少年の耳元に小声で何かを囁くと風たちの方へと突き飛ばすようにした開放した。

「鼎、大丈夫だった？」

少女が少年へと駆け寄ってくる。

和佐はその二人の様子を少しだけ見てから、恭一の後へと続いた。

「さてよ、恭一」

その呼び止めに当然、何に対しても恭一は応えない。あの一点を見詰めて蜜に誘われるようにしてその足取りを、

「あ、あの・・・！」

気紛れ、だろうか？

恭一は立ち止まっていた。その消えるような一声に。いや、もしかすると消えるような一声だからこそ、なのかもしれない。その声は酷く誰かを連想させるから。

「・・・あ」

その声を聞いたのは果たして誰だったのか。

「あの、恭一・・・さん？ですよ、ね？」

自分の名が呼ばれた事に対して恭一は振り返って相手を見た。

「知り合いだったのか？」

その声からは僅かに驚きが漏れていた。そして凧と少年も同様なように驚きに満ちた表情を少女へと向けていた。

答えはない。何故ならその相手、少女に対して恭一に見覚えはない。

「誰だ」

恭一の刺すような視線に、少女は寂しそくに俯いた。

「そう、ですよ。わたしの事・・・なんて憶えて、いませんよね」

ほう、と息を一つ吐いて少女は顔を上げた。だがその視線は未だ定まらず恭一の周囲を行ったり来たりするのみで決して重ならない。

「その・・・済みません。どうやらわたしの所為で誤解、があったみたいなので・・・あや、謝ります」

「「は？」」

「誰だ、と言った」

「昨日ここで助けてもらって・・・思い出せませんか？」

「「はい!？」」

先ほどから無駄に喧しい少女の傍の二人は放っておいて、恭一は昨日の記憶を探ってみた。

「・・・・・・・・」

思い出されるのは昨夜の散歩は相手の人数が多くて思いの外手間取り、帰宅が遅れたこと。そしてその所為で見た萌の悲しげな表情

が目について離れない事、だけだった。

第一人助けをした記憶などただの一度もありはしない。あるのは逆、人を傷つけたものだけで唯一ともいえるものは失敗しているのだから。

もう一度少女の顔を見てみるも、やはり見覚えはなかった。

思い出す気配がない事を少女も悟ったのか、寂しそうに僅かばかり俯く。

「え、と……恭一さん、もうい」

もういいですよ、と言いかけてか、不意に少女が一瞬怪訝けげんそうに目を細めた。だがすぐに取り繕うように僅かな笑みを浮かべて見せる。酷く下手だったが。

「済みません、恭一さん」

少女は振り返るなり後ろの二人に視線を合わせる。二人もそれだけで事を悟ったようで互いに頷き会つとそれぞれが表情を険しくした。

「……私もまだまだな」

凧は僅かに俯いて悔しそうに漏らし、

「ふんっ」

少年は恭一たちを威嚇いかくするように今一度だけ睨みつけてから、

「それでは、失礼させていただきます」

少女は一礼をして、三人は公園の奥へと走っていった。

「どうしたんだらうな？」

和佐が不思議そうに漏らす。恭一には届いていない。

恭一はもう一度先ほど見ていた方角を眺めた。それはまた、凧たちが走っていったのと同じ方向でもある。

今宵は思いのほか、ちんにゅうしや闖入者が集っているようだ。

憎しみを覚えておくれ、と。

誰かの声が聞こえた気がした。でも、それは気のせい。まだその時ではないと心のどこかで分かっているからか、それとも。

「邪魔は、させない」

そうして恭一はまた歩き始めた。向かう先はどれも同じで変わりはない。邪魔者が入るならばそれら全てを排除してでも進めばいい。それだけの事。

「恭一、お前は・・・」

言いかけた言葉を飲み込み、和佐は何かを振り払うように頭を振る。

しばらくの間遠ざかって行く恭一の背中を眺めて、和佐もまたその跡に続いて公園の奥へと入っていった。

七宝伝～今起こったこと～

其の狩場へと。

六話「夕食（うたげ）の後に」（後書き）

七宝殿（居間で興っている事？）

六輪「宴の痕には？」

萌　　こんにちは

和佐　　今回からは作者に代わり俺が司会をするぜ（萌ちゃんと二人、ヤッタネ）

萌　　えっと……舞ちゃんは（どきどき）

和佐　　え？　ああ。今回は用事があるから外すってさ

萌　　ふうん、そうなんだ（ほっ）

鼎　　で、僕が来たってわけ

和佐　　ぬお！　生意気坊主（二人つきりがあゝ、邪魔だ）

生意気ってなんだよ（むっ）

和佐　　そのままの意味だよ

鼎 何をっ（どこからか槍を持ち出して槍を構える）

和佐 ほうそんなに殺りたいか（何処からとも無く日本刀と小太刀を取り出して構える）

萌 さて、話が進まないの二人は放置しておいて今回の話の説明です

和&amp;鼎 何！！

萌 さて、作者さんの説明によると（がさごそ）

和&amp;鼎 （あの袋、一体どこから出したんだ？ それに前回作者封印されてなかったか？）

萌 えっと、『恭一恒例の夜の散歩です。そこで運悪く（？）凧達と遇う場面です』だって

萌 ふ〜ん、そうなんだ、私ちょっとしか出てないから…

和佐 この場面じゃ次回に続く、だな

萌 そうなの？ わたし出番あるかな？

鼎 ちょっと無理だと思っよ、僕は出てるけど

萌 うう、どうしてわたしより鼎君の方が出番多いのかな？

鼎 むっ、”君”なんて子ども扱いするなよ、それに、出番が多いのは僕が重要だからだよ

和佐 （ガキが重要なんで有り得ねえよ）、そういえばさあ…

萌 なに、和ちゃん？

和佐 何気に『少女』が良く出てきてるな、って思って、前々回も出てたし

鼎 それは一応メインヒロインだからだよ、それと馴れ馴れしく姉さんのこと呼ぶな！

萌 & amp ; 和 ええっ！！！！ そうだったのか

鼎 何だ、知らなかったの、二人とも？

萌 初耳だよ、（そっか、この人が私の好敵手こいがたきなんだ）

和佐 でもさ、まだ名前一回も出てきてないぜ、彼女

萌 そう言えば、…そうだね、なら、いつその事ここでばらしちやおつよ、鼎君

鼎 だから”君”って…ああ、もういいよ、でも名前は駄目、知られたら姉さんの身が…

萌 ああ、そうだね（和佐の方を見る）……って、あっ、もう時間だよ

萌 じゃあ、またね、七話で逢おうね

七宝伝～今起こったこと～

和 & a m p ; 鼎  
の に )

( 終るの早っ！ 俺 o r 僕まだ何も言っていない

七宝伝～今起こったこと～

七話「誰ぞ彼を知る」(前書き)

やっと復旧終了！

## 七話「誰そ彼を知る」

ゆっくり、ゆっくりと足を進める。本人に自覚はなかったがそれはまるで焦らしているかのようでもあった。

心が湧き立つのが分かる。感情が沈殿していくのを感じる。血が沸騰しているように全身が熱を帯びて、呼吸が荒くなっていく。

違う、と感じていても納得しているのでは決してない。

いつからかは憶えていない。だが少なくともあの人が居た頃に其れを見た記憶は恭一には無かった。何にせよ、大した意味のある事ではない。

分かるのは其れが奴と同じと感じる事。

感じるのは其れが違っているという事。

訴えるのは其れ等を赦すことはない事。

だが理由など如何でもいい事。

狩の気配が濃厚に漂い始め、恭一は其れ等が見えた所で足を止めて遠目に広がるものを眺めた。

生き物とは思えない不気味な叫び声。黒く生き物の形を取ってはいるが、液体とも個体とも取れずただ蠢蠢いているだけの多数の其れ等。明らかに現存する生き物ではありえない、生理的におぞましいと感じさせるもの。

そして、其れに対峙する三つの影。当然先ほどの三人だ。

隣に来た和佐が口笛を鳴らす。

「これはまた・・・一段と盛大だな」

だが恭一はそんな事聞いて、聞こえてはいない。

一時は止めた足を再び進める。その足取りに、そして瞳には迷いも嫌悪も、憎悪すらない。視線はただ其れ等、それよりも遙かに先の一点のみを見詰め続けた。

和佐は何も言わずに、恭一から一定距離を開きながら後を付いてくる。

蠢くものと戦っているらしい三人は恭一たちの事に気づいた様子はない。

と、一番近くにいた其れ等の内の一つが恭一を獲物と定め襲い掛かってきた。

其れは比較的形を保っており、見様によっては人の形を成していると言えた。

全身は勿論黒。節くれ立った酷く無骨な筋肉の身体に二周りほど大きな身の丈、棍棒のようなものを手にし、頭と思われる部分には大きな角が二つほど伸びていた。

鬼、と呼ばれる生物を基板にしたようなその形。

棍棒が恭一に向かって振り下ろされる。

ふ、と顔を上げて其れを見返して、恭一は上げた腕を軽く横に振るった。それだけで其れが振り下ろした棍棒が逸れた。

棍棒に添えた手で力の方向を自分から流した。言葉で表すとそれだけなのだが生身のみで行えたのは通常なら奇跡に近い。だがそれ



音は途切れて其れから力が抜けたように恭一へと倒れこんでいく。だがそれは恭一に触れる事無く、そのまま透過して地面へと倒れこんだ。

全身が碎け出し崩壊を始めた其れはやがては綺麗な粉の様なものになり、風に流されながら溶け込むように空気の中へと消えていった。

跡には何も残らない。

其れ等の中にいる僅か彼方で、先ほどの絶叫で恭一たちの事に気づいたらしく三人がそれぞれに二人の方を向く。それも一時、余裕がないのかすぐに視線は其れ等に戻っていった。

「これを黙って見ちゃ、男が廃るよな」

恭一からして右手にいた和佐も呑気なものだった。

向かってくる其れの一つを手にしていた小太刀で胴体から半分は両断する。

上半身と下半身に分かれた其れはそれでも動いていたがそこから更に六分割にされると恭一のもの同様に粉になって溶け込むように消えていった。

殺傷物を持っているだけ和佐の方が効率良く、自分から其れ等へと向かい次々と斬り伏せていく。ちなみに和佐が両手にしている小太刀二本は和佐が常に仕込んでいる物らしい。

そんな和佐を気にするでもなく、先を見据えた恭一はいつも通りに感慨のない表情でその狩場へと足を進めた。

「誰でも良い。ミズキを知っているか・・・」

答えはなく、其れ等のほぼ半数が新たな獲物の出現に恭一と和佐へと殺到した。

数十分後、あれだけ在った何かの姿は一つもなくなっていた。

今日の狩りも終わり鎮まりかえった公園で、五つの影が互いに肩を並べ合っていた。

「何をしに来た？」

「よお、凧ちゃん・・・って、そういえば何だか学校の時と雰囲気変わっていない？」

「・・・これが地だ」

「成る程、学校じゃ猫被ってたわけだ。ま、まだ一日目だったからなあ」

凧の眉がピクリと動くが和佐はそれに気づかず、というか気づいていても無視しているのか相変わらずの呑気な笑みを湛えたまま変わらない。

「それで、上柳。一体何をしに来た？」

「何って、決まってるだろ。お手伝いだよ、お手伝い」

「ふんっ、どうだか」

機嫌が悪いのを全く隠そうとせず、苛立った口調で風の隣にいた少年が聞こえる程度の小声でばやく。

「何だ、ガキ。いいたい事があるならこの恰好良いお兄さんが聞いてやるぞ？」

「冗談で言ってるの。三枚目、の間違いだろ？ それに、どうせ手下の様子見にでも来たんだろうけど、残念だったね。役に立たない雑魚ばかりで！」

「鼎！！！」

嗜めるような少女の声に憤りを見せていた少年は一度肩を震わせて、途端に大人しくなった。まだ何か言いたそうではあるが、口ごもりながらも明確に言葉を発する様子は無い。

「えっと……、済みません。その、助けて貰って……弟、が失礼で……あ、ありがとうございます」

人が良いのか警戒の様子がまるでない。逆にこちらが悪く思うほどに深く頭を下げられて、今度は和佐が戸惑いを見せた。ただ恭一は相変わらず無表情のままそこにいるだけである。

「いや、そこまでされると流石に悪」

「どうでもいい」

独り言、のようなものだったがその一言にその場全員の視線が集まった。

「あのモノを知っているのか」

「え、モノ……って、あの」

困惑しながら先ほど其れ等がいた場所をちらりと見る。当然其処に何かが在った痕跡一切が残っていない。

「その……どうして、ですか？」

ある意味当然の質問。だがその答えを恭一は、

「お前には関係ない」

拒絶を以って返した。

少女はその言葉に気を悪くするでもなく、まるで真意を探るように恭一の事をじっと見詰めてくる。だがそれも僅か、結局何も語らずに目を伏せた。

代わるように風が一步前に出る。

「素性も分からない、信用も出来ない相手に話すことなど何も無い。まして知りたい理由も言わないとなれば尚更だ」

「そう……か」

否定は肯定。知っている事。

だからその言葉に、恭一は口元を僅かに歪めて、笑った。瞬間和佐の表情が強張る。

その二人の意味を三人は知らない。

「知らないならそれだけ。だが気がないだけなら……」

言葉を切って相手を見る。その顔は相変わらず笑っていたが瞳だけが色を失う。

変化に気付いたのは一人、予め知っていたのもまた一人、計二人。ただし咄嗟に行動できたのは、

「聞き出すまで」

眩き。

地面を蹴る、そうするのがまるで当たり前のように。そして警戒していたのが偽りであるかのように誰もがその行為を当然の事として捉えた。

結果、それは反応ではなく予測でなくてはならなかった。

標的にされた風は一拍の後に気付き後方へ跳ぶが遅すぎる。

一步。

それだけで間合いは必殺の距離となった。

「っ!？」

敵を捉えかけた腕が横から割って入った誰かに掴まれる。

恭一は掴まれた腕を逆に招き入れると、それに向けて蹴りを放つ

た。だが手応えがなく空振る。掴まれた腕もいつの間にか離されていた。

凧は既に射程外。少年はただ驚きに固まっていて、少女は何故だか空中に向けて半端に手を伸ばした状態で固まっていた。

「邪魔をするか」

「まあ、そう睨むなって」

睨まれて、というわけではなさそうだが俗に言う『参った』の恰好をしている和佐は実に情けなく映る。特に恭一の動きに反応できた唯一の人物という事を考えると尚の事である。

攻撃の意志はないと言う姿のまま恭一に近づいていく。

一尺程度、手を伸ばせば互いに届く辺りでその歩みは止まった。

というか止められた。

問答無用で、恭一は間合いに入るなり迷わず拳を放っていた。だがそれも当たる直前、和佐が瞬時に下ろした手によって遮られた。

「おい、物騒じゃね」

二撃目を放つ。

言葉の途中と言う事もあってか、今度は鈍く確かな手応えが拳に伝わる。が、刹那の差を置いてその手は掴まれてしまったので完全かといえば、そうではない。

「痛え、な・・・おい」

拳を引こうにもつかまれていて出来ない。もう片手も振り上げる前に腕を押さえられる。

今度は脚か、と恭一が考えたところで和佐が表情を歪めながら詰め寄ってきた。

「俺は、そんな、焦るな……って言うてんだよ」

恭一だけに聞こえるほどの小声。

応えはない。ただ真っ直ぐ射抜いてくる瞳があるだけ。

和佐はそれ以上を諦めたのか恭一から視線を逸らして、ぼけっとした様子で見えていた三人へと顔を向ける。

につこりと、微妙に額に汗を滲ませながら引き攣った笑みを浮かべてみせた。

「凧ちゃんさ、その話は後ほどって事にしない？　ほら、今日は、もう、遅いし、さ」

「はっ、馬鹿じゃないの。今時十時が遅いなんて………凧さん？」

片手で少年の言を制して、凧はじつと和佐の様子を見詰める。少年はまだ何か言いたそうだったが隣の凧の様子を見て、次いで黙ったまま和佐を睨んだ。

「今日の用事は済んだ。それだけだ」

凧が身を翻す。

「ふ、ふん。今日は見逃してやるさ」

続いてやや戸惑いつつも少年が、少女も恭一と和佐に一礼をしてから二人の後へと駆けていった。

三人の注意が離れるなり、和佐は直ちに恭一に向き直った。そのまま三人の姿が完全に見えなくなるまで睨み合う。勿論恭一の両手は固定したまま。

喧騒けんそうが引き夜特有の静寂な空気が戻ってくる。ようやく、拘束が解かれた。

「もう少し、な……手加減、つても考える、このヤロ」

振り上げられた和佐の拳を、恭一は避けようとはしない。必要ない。

軽く触れる程度に胸部を撫でていき、そのまま全体重が恭一の身体に掛かった。

苦悶の表情のままぐったりとした和佐を見下ろして、気付くと口から小さな息が一つ漏れていた。

熱は冷めずとも、そう急ぐ事もない。

恭一が身を返すと和佐の身体はそのまま地面に倒れこんだ。それを当然の如く無視して足を一歩進め掛け、ふと出掛けに聞いた言葉が頭に浮かんだ。

空を見上げると、あの時と同じような空色だった。微かな水滴が頬をぬらす。

焦る事はないと言う。

「ふざ、けるな・・・」

あの時の幻聴が未だ耳の内にこびり付いて離れない。

「ミス、キ・・・」

虚空へと向けて、何かを振り払うかのように拳を一振りする。

当然空を切る。

身を翻して、恭一は三人とは反対側へと歩き出した。

二歩進んで、思い出したように引き返すと和佐の足を片手で攫んで引き摺りながら、今度こそ立ち止まる事無く公園を去った。

「凧さん、どうしてあそこで引く必要があっただんだよ？」

「無駄な戦いはしない方がいい」

咎めるような口調に凧は振り返らずにきっぱりと言い放つ。だが少年は納得いかないようで更に不満気になった。

「何だよ、それ。僕が負けるとでも言うの!!」

その様子をちらりと振り返りつて一つ、ため息を漏らす。

「そこまでは言わない……が、まだ敵だと決まったわけじゃない。それに」

「それに？」

「姉の恩人でもあるそうじゃないか」

からかうような口調で、それからその後ろにいる少女を見る。つられて少年も後ろを振り返った。

公園を出てから一言も発さずに、俯きながら二人に付いてくる少女。心配なのかそれを見て二人の表情はやや曇った。

「けど……けどおかしいよ、僕はあんなやつ等知らない。つまりあいつ等は蓮華じゃないんだ。なのに……っ!!」

「ああ、確かに気になる所もある。千里もそうだが、特に上柳。あれは間違いなく爛だ」

「ラン？」

「簡単に言えばかなりの使い手という事だ。問題はどこでそれを知ったのか、だが……」

「僕等は知らないよ」

「分かってる。……と、すれば素性を知る必要があるな」

一人で黙考に入った凧を見て、少年は今一度後ろを見た。

相変わらず俯いたまま付いてくる少女の姿がいつもより小さく見えて、少年は僅かに歯を強く噛んだ。

「どうしたんだよ、姉さん？」

応えはない。

いつもならどんな時でも返ってくる応答が、ない。

「姉さん？」

今度は同時に目の前で手を振る。

が、反応はない。

「姉さん」

今度は肩を揺さ振って、ようやく反応が返ってきた。

「かな、え？」

「どうしたんだよ、姉さん。さっきから姉さんらしくないよっ」

少年の言葉に、少女は更に目を伏せて俯いた。

「……………つた」

「え？」

「何、も……えなかったの」

力なく左右に振られた首がまた垂れた。心なし以前よりも頼りなく見える。

「どうした？」

二人の様子に気付いたのか少し戻ってきた風に対して、少年は肩を空かせてみせる事しかできない。

「何が、あった？」

風の問いにも少女は俯いたまま。それでもポツリと漏らした。

「何も……見えなかった。映ってなかったんです」

「何が……？」

「……寒いです」

両肩を抱いて更に少女が縮こまる。

「どうして、ですか……？」

誰に対して呟いたものか。

少なくとも少女のその問いに対して、残る二人は言うべき答えを持ってはいなかった。ただ少女を心配そうに見る事しか出来ない。そのまま、三人は家に着くまで一言も発することはなかった。

七宝伝～今起こったこと～

七話「誰ぞ彼を知る」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」

七和「誰ぞカレーの汁」

萌　　今回はお兄ちゃんの一人舞台だね！

舞　　そうね！！

和佐　いきなりそんなネタではじめんな！　俺だって魅せ場あったんだぞ

萌　　お兄ちゃんスゴイ！

舞　　萌ちゃんも負けてないわ！！

和佐　あんなもんすごくねえ！　被害にあつたの結局俺だけじゃねえかよ

萌　　あ、和ちゃん、お兄ちゃんのフォローありがとうね！

和佐　いやー、それほどでもないって(照れ)

舞　　……単純

和佐 黙れ、後輩

舞 あら、これはまた…女の子には優しい和佐先輩のお言葉とは思えませんね

和佐 お前に遣うのは重い槍おせうやりだけだ

萌 ねえ、さっきから二人で何こそ話してるの？ もしかしてわたしにだけ言えない事？

舞 & a m p ; 和 そんなことないわ（よ）

萌 じゃあ、何話してたの？

舞 えっと……（汗）和、どうぞ

和佐 えっ（汗）……！ そうそう、早く今回の話の説明をしなくっちゃなあゝ

萌 え？ でも……

舞 そうね、萌ちゃん。早くしないと時間がなくなるわ

萌 え………うん、そう……だね……（何かはぐらかされた？）

舞 和！ ほら、早くしなさい、今回和以外、私たちは出てないんだから

和佐 あ、ああ、そうだな、今回の話は……はあ、たく

萌 どうしたの、和ちゃん？

和佐 いや、あいつって言葉からして喧嘩調だから、あいつといると疲れるんだよな結構

萌 お兄ちゃん言葉数少ないから……だからぶっきらぼうな言い方になっちゃうんだよ

舞&amp;mp;和 (絶対に口も悪いと思う……萌ちゃんの前じゃ口が裂けても言えないけど)

萌 和ちゃん、もしかして……お兄ちゃんといるのメイワク？  
わたしが頼んだから？

和佐 そつ、そんなことないよ、萌ちゃん、確かに疲れるけどそれなりに楽しいから

舞 和、声がドモってる

和佐 うっさい

萌 と、言う訳で作者さんから短くすると『動き出す時、二度目偶然の邂逅』だそうです

舞&amp;mp;和 (そんなものあったのか！)

萌 何だか二人とも喧嘩しちやいそうだから……その前に今日は早く終わっちゃうね

舞&amp;mp;和 (そんなことしてない！)

七宝伝～今起こったこと～

萌　じゃあね、また八話でね……あれ、二人とも何で泣いてるの？

## 休章「お・れ・い」

結局昨日は舞と和佐の二人が泊まっていく事になった。

(正確には舞は泊まったが和佐は朝まで目を覚まさなかっただけ)

翌日の朝、昨日と同じように朝食を四人で囲っていた。

夜間はずっと居間に放置、朝になれば舞のうっかり(もしくはわざと)足蹴にされて目を覚ました和佐の機嫌はまさに不機嫌の極みだった。

だがそれも朝食までで、朝食が始まるなり機嫌は即座に直った。

そして今、和佐はある決断を迫られていた。

じっと見詰める先にあるのはたった一皿。いかにも食べてください、と言わんばかりである。またこの皿のみ誰も手をつけていない。

「これ、誰が作ったんだ？」

と、聞かすにはいられなかった。

もし萌が作ったのであれば安心、というよりもむしろ喜び勇んで食べるのだが生憎と現状は違う。

今朝台所に入ったのは二人。そのうちの一人は目の前で不気味なまでにニコニコと笑みを浮かべている、つまりは舞だった。

経験からして、萌が作ったのであれば当たり、むしろ天国。逆に

舞が作ったのであれば外れ、故意に中身だけを失敗させたものの可能性が大である。

ある意味究極の選択。

「・・・くっ」

もうかれこれ十数分になるか。膠着状態「じゅうちやく」が解けない。

滲んだ汗が頬を伝い、落ちた。

もう決断するしかない、と和佐が祈る気持ちで箸を伸ばした矢先、隣から伸びた箸が初めてその更に手をつけた。

「・・・恭一、何ともないか？」

毒見をした恭一に小声で尋ねるが、応えはない。だが吐く様子も無いので大丈夫かと安心しかかって、

「もう、お兄ちゃん。駄目だよ、それは和ちゃんのために作ったんだから」

拗ねるような声に反射的にそちらを凝視していた。

気付いて、微笑み返してくれる。

「ほら、昨日無理言っちゃったでしょ、そのお返しだよ。それに・・・わたしはこれくらいしか出来ないから」

悲しそうな、寂しそうな、いつもの瞳が和佐を覗く。それを見て胸が締め付けられた。毒でも良いからどうして早く食べなかつたのか、と今更ながらに苦々しく思うが、それが後悔というものだ。

「ねえ、和ちゃん、もしかして余計なお世話だったかな？」

「なっ・・・萌ちゃん、そんな事ねえよ」

「でも、ほら、さっきからずっと手つけてなかったでしょ。だから・・・」

「そ、それは・・・」

君の隣にいる人が原因です、とは言えない。外面だけはいいのだから。

失態を埋めるように慌ててそれに箸を伸ばし、

「いらぬなら私が食べるわ」

それより先に、と言うよりもまるでその瞬間を狙っていたように横から伸びた端がその皿に乗った料理の大部分をさらっていった。

「ま、舞、てめえ・・・!!」

衝動に任せて対面の舞へと詰め寄ろうと椅子から立ち上がったところで、隣から伸びた端が残っていた全てを取っていった。

同様に反射的に隣を見ると黙々と食べている恭一の姿。そのくせ先ほどのものは殆ど食べ終えてしまっている。

「ふう、美味しかったわ」

その声に我に返ったがとき既に遅し。かなりの量をとったはずの

舞も既に完食してしまっていた。

「和ちゃん、ごめんね。いらぬならいらぬって最初に言ってくれば良いのに……」

止めが悲しそうな萌の姿だった。

「ちっ、ちが……」

「大丈夫よ、萌ちゃん。おいしかったわ」

慌てた反論も、謀ったように舞が遮り萌の料理を褒め称える。そして、ぐうの音も出せない和佐に最後に勝ち誇ったように余裕の笑みまで見せ付ける始末。

完敗を悟らざるを得なかった。

その場に崩れ伏して、涙ながらに呟いた。

「お、俺のメシ……」

残念なことか、誰も和佐に構いはしなかった。

蛇足だが、和佐は残りの朝食を掻き込むように食べた後に三杯のおかわりをした。

間話「誰の為に鳴る鐘か」

「糞<sup>くそ</sup>つ、あの餓鬼<sup>がき</sup>共……俺の食事<sup>たのしみ</sup>の邪魔しやがって」

暗い眩きを漏らしながらその男は路地を歩いていった。路地、とは言っても人影もなく湿気も多い裏路地。少なくとも好んで人が来るような所ではなかった。

男は度々ここを使用していた。食事<sup>しょくじ</sup>時は人がいない方がやりやすい。連れ込んだ獲物は最初だけ五月蠅いのだ。生きが良い、と言い換えてもいい。

だがその日は違っていった。別に獲物を捕らえているわけではない。かといって腹が減っていないわけではない。でもなかった。

この身体になってから一度も食事はしていない。以前はあれ程愉しみだった狩すら、止めた。

頭にあるのは忌わしい少年と少女の姿。

「糞<sup>くそ</sup>つ、くそつ、くそつ！！」

八つ当たりに何度も拳を壁に叩きつける。

どうやって奴を殺すか？

どんな風に奴を辱めるか？

そのとき奴等はどんな声を上げて泣き喚いてくれるか？

それを想像すると胸の内に燻っていた苛立ちがほんの少しだけ収まった。

「そうさ・・・殺してやる。一度や二度じゃねえ、何回でも・・・何度でも何度でも、コロシテヤル」

「おや？」

その声に男は振り返る。誰かの接近に気付かないなど、どうやら思うが余り集中力が散漫になっていたらしい。

「ククク、丁度いい」

運悪く自分があるときに迷い込んだらしい。スーツを着た優男が一人いた。

この空腹を満たすのはあの餓鬼共と決めていても苛立ちを紛らわすくらいなら良いだろう、と男の眼に野獣のような光が灯った。

優男は余りにも落ち着きすぎていた。常人ならば男の異常さには必ず気が付く。しかも此処は人気のない、絶好の狩場でもある。

だから平然と、むしろ冷ややかな目で男を眺める優男は落ち着きすぎていた。だがそれに男は気付かない。

「残念、外れ・・・しかもカスですね」

一瞥をくれただけで優男が無防備にも程がある背中を男へと向けた。

優男の言葉は理解している。だからこそ、男の怒りは一気に融点

まで上昇した。しかもあの少年に似たような、自分を無視するような態度が尚更気に喰わない。

衝動のまま、男は襲いかかった。

「?」

男は内心不思議がる。当然あるべきの手応えがなかった。これではまるで空振りしたようではないか。

とん、と何かに軽く背中を押される。

体勢を崩した男はそのまま片膝を付くがすぐさま振り向こうとして、身体が動かない事に気付いた。

「分を弁えなさい、カスが」

背後から聞こえたのは先ほどの優男の声。いや、否か。優男にこんな芸当が出来るはずもない。

自然と身体が震え出すのを感じ、それ以上に男は怒りに身体を奮わせた。

「そうです。カスはカスらしく怯えて震えていればいい」

優男の声は明らかに嘲笑うしろめを含んでいた。表情もそれに見合ったものになっているだろう。それが気に喰わない。

「……………てやる」

「はい、何か言いましたか、カス?」

「殺す、殺してやる」

融点を軽く突破した怒りが沸点さえ超えて男の熱を上げていく。熱を孕ませながら、淵へと堕ちていく。

「殺してやる殺してやるコロシテヤルくそガキドモがころしてやる」

いつの間にか怒りは後ろの優男へ向けてではなくなっていたが、男はそれに気付かない。更に堕ちる、止まる事を知らない。

身体が、肉が膨張して男の姿を変えていく。

片腕は丸太ほどに太く、股はその倍ほど。形相は醜女のように爛れて元の人間としては見る影もない。

「ふふっ、ははっ、ははははははっ」

後ろからの笑い声。愉快でならないとばかりで、嘲りではない心底愉しくて仕方がないと言つもの。

無邪気で、童子がいい悪戯を思いついたような、そんな声。

「いいでしょう、殺しなさい。その怨讐に見合う力、私が与えましょう。だから思う様に暴れなさい、殺して見せなさい」

背中に何かに触れる。が、男だったものにはそれがなんだろうと構わない。怒りが全てをかき消している。

「それがあなたのためになり、そして私たちの目的の基ともなる」

何か、が身体の中に入ってくるのを感じ、男だったものの意識は



## 八話「糸無き操り人形」

「・・・・・・・・」

放課後、と言うよりも今日は一日中、恭一は感情の抜け落ちた様な表情でただ窓から外を眺めていた。いや、正確には様な、など曖昧なものではなく誰が見てもその通りであるだろう。

あの夜から数日、何も変化はない。ただ以前と同じように惰性の日常を過ごしているだけ。設問すべき相手の渫槁風に対しても恭一は何もせずただ無関心だった。本人である風が訝しがるほどに。

此処最近感じていなかった喪失感。

原因は分かっている。あの少女が最後に見せたあの瞳。あれが酷く似通っている所為だ。

誰に？

彼女に。

彼女とは？

それは、

「何の用だ」

思考を止め振り返る。

「お前なあ、んな顔してるなよ。元は良いんだからもう少し景気よくしたらちゃんとモテるぞ、俺みたいに」

そこにいた相手、和佐が呆れたように肩を落としてため息を一つ零した。

僅かに声を落として恭一は繰り返す。

「何の用だ、と言った」

「お前の様子見に来たんだが………やっぱりというか、なあ」

「だから何だ」

「酷い顔だ。もうちょっと気、抜けよ」

「触るな」

両頬に向けて伸びてきた手を払い除けて恭一は席を立った。これがある以上この場所にいる意味はなくなった、と言う事だ。

困ったように笑みを作りながら払われた両手に行く当てなく彷徨わせて、また一度和佐が肩を落とした。

「ま、俺の言いたい事はそれだけだよ。どうせ他は言っても無駄だろうしな」

机の横に下げている鞆を手にとってそのまま教室を出る。和佐はもう何も言わずに後を付いてきた。

下駄箱で靴を履き替えて、ある顔を昇降口に見止めた。  
何気なく気配を殺しながらその後についていく。

校門を出てしばらく路を歩いたが相手が気付いた様子はない。恭一もただ普通に足を進める。

「おい、恭一。置いてくなよ」

その声に相手が足を止めて振り返った。恭一も足を止める。

視線が交差した。

相手は尾行されていた事に気付いたのか明らかに警戒した鋭い視線。  
線。

「って、あれ。凧ちゃんも今帰りなのか？」

追いついてきた和佐の呑気な声。凧は一度和佐を見て、すぐに恭一へと視線を戻した。

そこで初めて和佐も二人の様子に気付いたのか戸惑いを見せ始める。

「私に何か用事か？」

「いや」

自分が何をしていたかを自問する事もなく、恭一は足を進めなおした。通り過ぎる間際凧の身体が緊張に強張ったが恭一は然して気に入れる事もなく、ただ通り過ぎた。

再び追いついてきた和佐が隣に並ぶ。

「あゝ・・・恭一よ、俺もしかして余計な事したか？」

一度だけ視線を向ける。

その目に責める色はない。と言うよりも何の色も無かった。

「そっか、ならいいわ」

和佐は納得したように頷いて、それ以上何も言わずに黙った。

家に帰れば妹が夕食の準備をしている頃だろう。

それは恭一にとって変わらない情性、そんな一日のはずだった。

少女は一人、夕暮れの中歩いていった。

この街で一番緑が多いのは、と聞かれたら住人なら誰でも風戸公園　ただし知名度は悲しいまでに低い　と答えるだろう。

確かに街唯一の公園である此処は都会にも珍しく緑が多い。だがその分、影になる場所も広い。つまり日が暮れると人が寄り付かなくなる場所でもあった。

何故この路を選んだか、と聞かれれば少女は「何気なく」と答えていただろう。だがつい最近も酷い目にあっている、しかも夕暮れ時に何気なくこの路を選ぶなど普通はありえない。例えば家までの近道であるとしても、だ。

少女の考えは公園の一角、其処に一步踏み込んだ瞬間に一変した。何気なく、ではなく蜜に誘われた、と言う勘違いに気付いたがまるで操られているように少女の足は意志に逆らって先へと進んでしまっ。

この一角だけが明らかに他と異なると感じられる。

誰もが無意識にでも避けるため生物の気配がまるでしない。この空気を少女は知っていた。

「よお、久しぶりだな」

身体が震える。

男性特有の低い声、少女に聞き覚えはない。少なくとも相手は知らない人間だ。

だが確かに少女は知っていた。

だから立ち止まる事を拒絶する、聞こえていないとする。

「ま、久しぶり……つっても忘れるほどに経っちゃいねえよな」

少女は立ち止まり振り向いた。いや、この場合は振り向かされた、が正しいか。

公園のベンチに堂々と座っていた一人の男。金髪ピアスに貴金属

ジャラジャラだ。

やはり見覚えはない。勿論古い知り合いでもない。

ただ知っていた。明らかに否定したい事実が在るものの、確かに少女は彼を知らず、けれど其れを知っていた。

身体は自然と応戦体勢へと移る。その上で少女は己を偽り、静かに意味のない質問をした。

「どちら様ですか？」

「とぼけるか、それとも本気で俺の事が分からない？」

実に嬉しそうに男は笑う。

嘗め回すような視線を感じるがそれを認めない、認めてはいけない。

「貴方と会うのは初めてだと思いますが……人違いではありませんか？」

「俺としてはどちらでも構わねえが……んなわけねえよな」

無駄な問答に痺れを切らしたのか男が立ち上がる。

もう認めないわけにはいかなかった。これ以上偽ると命が危うい。

周囲に目を奔らせるが残念な事に少女が武器に出来るような棒状の物はなかった。不運な事にいつも持ち歩いているはずの携帯用も今は家にある。

「足りねえよ」

目前に迫った男の姿。手を伸ばせばもう届いてしまう。

「……………あ」

動くに動けなかった。動いた瞬間に殺される、そんな確信さえある。

男の眼に映っているのは憎しみだけ。以前あった喜びや恐怖、そんなものが一切消えていた。

「お前も、何度殺つても殺り足りねえな」

その瞬間、少女の本能が動く事を命じた。

瞬時に光を纏った少女の掌底が男の腹部へと吸い込まれる。そして眩いばかりの光が辺りを満たし、その全てが吸い込まれるように男へと流れ込んでいった。

たった数瞬の出来事。

「う、嘘……」

少女の口から絶望とも取れる声が漏れる。その顔はかなり青ざめてもいた。

対して男は笑みを浮かべる。腹部に収まった少女の手首を握り捕り、愉快でならないとばかりに笑い声を上げた。

「全然、効かねえな。おい、今何したんだ？」

掴まれた腕一本で少女の身体は軽々と宙に浮いた。

身を捻って逃れようとした少女の首を男の五指が捉えてそのまま地面に押し倒される。

「くくっ、随分とご立派な、無駄な抵抗だな」

「や……あぐー!!」

上に被さって息が掛かるほどに近づいた男の顔に少女が顔を背ける、が、頬をぶたれて無理矢理正面を向かされる。

「俺から目、逸らすんじゃねえよ。ちゃんと絶望しようぜ、なあ？」

首を絞め付ける握力は弱まる事はない。なじるように刻一刻と、非常に緩慢な速度で絞まっていく。

「あ……く、ん……はあ……あ……あ」

「くくっ、イイ声で啼いてるじゃねえか。だがよ」

ふっ、と一瞬絞め付ける力が弱まって、

「っ、はああああ、は、は、は、あ……っ、っ!!」

強まった。今度は生半可な力ではない。少しでも力の掛かる方向がずれば首の骨が折れてもおかしくはない程である。ろくに呼吸も出来はしない。

「で、あのくそ王子様はいつおいでなさるんだ？」

男の眼は血走っている。絞付け過ぎで少女が喋れない事にも気づ

いていないだろう。

既に息も絶え絶えに、少女の視界に映る男の姿が次第に霞んでいく。

言われた王子様とは誰かという事も熱に浮かされたような頭では考える事も出来ない。

「っと、いけねえ。すぐに殺しちや詰まんねえからな・・・」

絞まる力が急になくなったが、遅い。圧倒的に足りない酸素に意識は遠のく。

「おい、生きて・・・ちっ、気絶しやがったか」

目前に映し出された狂気を見出す男の瞳。それを眺めながら意識が完全に途切れる間際。

数日前にこの公園で出会った少年。何も映さないような瞳。何故だかそれを思い出した。

「るるるる、んふんふん」

奥の台所からは機嫌の良さそうな鼻歌が届く。それを恭一は椅子の上に座りながら聞いていた。

おいしそうな匂いも少しずつ漂ってきている。夕食ももうじき出上がるだろう。

最近気が抜けている事が多いらしく、和佐に言われるまでもなく萌が心配しているらしい事は分かっていた。

だからといって如何する、如何する事が出来る、などと言う訳では決していない。

和佐の邪魔が入ったあの時、考え掛けていた事を思い出す。

あの瞳、あれは 妹のものに似ていたのだ。それも十年近く前のもの。

だがろくに当時の事を憶えてもいないのにどうしてそう言い切れるのか、ふと感じた疑問。

「お兄ちゃん、お待たせ、だよ。待つちゃった？」

盆の上に湯気のたった碗と容器を二つ筒乗せて萌が奥から出てきた。

恭一が両目を開いて萌を見ると、丁度向かいの椅子に座って碗をそれぞれの前に置こうとしているところ。

「……………ど、どうかしたの？」

声をかけられて初めてじっと見つめていた事に気付く。

ほんのりと顔が赤い気がするのだがもしかすると風邪か何かだろうか、と思い中腰で萌に手を伸ばそうとして身を引かれた。

「な、何かな、お兄ちゃん？」

「熱は・・・」

「ないと思うけど・・・？」

不思議そうに首を傾げる。嘘を言っている様子はない。

椅子に座りなおして、恭一はまた目を瞑ると大人しく夕食が並び終わるのを待つ事にした。

「お兄ちゃん？」

それほど時間は経たずに声が掛かる。

恭一は閉じていた瞳を開けて目の前の箸を取ると、いつも通りに手を合わせた。

「頂きます」

平穏な空気の中、いつも通りの夕食が始まる。

頬の辺りに痛みを伴い少女の意識は表層に浮上した。

身体を起こそうとして動かない、指一つ動かせなくなっている事に気がつく。続いて何か黒い靄のようなものが身体全体を覆っているのを感じた。

恐らくはこれが動きを封じている原因。

「お目覚めか、お姫様？」

馴染みのない男の声。

その声に少女は頬の痛みと、意識を失う直前の事を思い出した。そしてこんな男の前で無防備にも気を失った事に対して遅れながら気が遠くなる。

と、もう一度気を失いかけた意識を必死に現実に戻して。

身体は殴られた頬以外痛いところはない。目線で確認した程度だが衣服の乱れも見られず、取り敢えず気絶している間に何かをされた様子はない。その事実には少女はそっと安堵した。

「全然、足りねえんだよ」

低い、獣の唸るような声に意識が再び現実に戻る。

例え今までそうでなくともこれからそうなる可能性は大いにあるのだ。それも意識がある今の方が恐らくは辛い。

身を捻り、渾身の力を込めてみるがやはりピクリとも動かせない。身体が動かせないと言う現実を変えようがなかった。声を出そうとして、それさえ叶わない。

「何度殺しても、何度犯しても全く足りねえよ。なあ、何で気絶なんかった？ その間俺がどれだけ苦しくて、どれだけ愉しかったか。くくっ……」

ぞつとする。

暗い、押し殺した笑い声。この男は間違いない狂っている。それも最悪な方向に、だ。

「いいねえ、俺はそんな表情が見たいんだよ」

果たして今自分はどんな表情をしているのか？

少女は不安に思考を巡らせたが、どちらにせよ酷い表情である事だけは確かだった。

こんな表情、見せられない。

「？」

少女はたった今の自分の思考に疑問を投げ掛けようと、寸前まで伸びてきた手に我に返った。

男の手のおぞましい感触に耐える為に目を強く閉じて、

「……………」

いつまでもそれがこない事に恐る恐る目を開けた。

目の前の男は激しく不快そうに、それ以上の狂喜によって歪んでいた。

「つくづく気に入らねえな」

その視線を公園の一角へと向けて、だがすぐに喜びだけが抜け落ちた。

「お前に気に入られる必要はない」

聞こえたのは女性の声で、まだ霞んで見えるその影も女性のもの。

「鼎が帰りが遅いと騒いでいたのは正解、と言っわけか」

近づいてきて相手の姿がはっきりと見て取れるようになる。

「何の用だ？」

明らかに怒気を含んだ男の声。

その女性、凧は一度だけ男へ視線を向けたがすぐさま少女へと移し、男のことなどまるでいないかのように口を開いた。

「余り弟を心配させるものじゃない」

身体を動かさせないので応える事も出来ず、少女は自分が情けないような申し訳ないような気持ちになって、

「てめえ・・・俺の質問に答えねえか！！」

怒り狂ったその叫びに凧の視線が横に移った。

男の様子を極めて無表情に、淡々とした様子で見る。それを少女

は無機物を見るときの視線だと感じた。

「彼女を探しに来た。そして連れ帰る、ついでに」

軽い金属音。

腰に差してあった短剣が抜き放たれる。

「お前を狩ろう」

宣言し、凧は男へと歩み寄るが一步だけで前進は止められた。

「如何した、来いよ。俺を狩るんだろ？」

手を少女の首に当て、怒りだけで男は顔を笑みに歪ませる。

凧は進めない。もし進むのならそれは少女の命を諦める事に他ならない。あの男の手刀は易々と少女の頸動脈を絶ち切るだろう。それだけの事を出来る力が男にはある。

「如何した、早く来ないとこの女が死ぬぜ？」

男の手が食い込んで少女の首筋から赤い雫が僅かに垂れる。

近づけば殺す。止まっていれば殺す。男はそう言っている。恐らく離れても殺すだろう。

「くっ」

迷いを見せたその刹那。

男が風に向かって手を振り下ろした。それに伴って地面を割って何かか迫ってくる。

風は咄嗟に避けようと、

「動くな」

男と少女の姿を見ては止めざるを得ない。無情に、何か、が風を通り過ぎていった。

鮮血が舞う。

「ぐう……」

膝を折るようにして風の姿が崩れ落ちた。地面に座り込んで押さえつけられた太股からは手と服を伝わって、全く止め処無く血が滲み出ていく。

遅れて背後の木が鮮やかに斜めに切れ落ちて、その音が公園内に響き渡った。

片膝を着き表情を歪ませた風を見てか、僅かだがようやく男に喜びが戻る。

「小気味良い様だなあ、おい。誰が誰を狩るだつて？ もう一度言ってみるよ」

今一度振った男の手が今度は逆の太股を抉っていく。

「あくう……」

両腿から血を流した所為で体勢が取れずか、風が前のめりに倒れ

こんだ。それでも腕だけで上半身を起こし、男を気強く睨みつけて見せた。

だがこれでもう動けない。

「ああ、丁度いい。どうせもう一人の小僧が来るまでの暇つぶしだ。その前にこの女を殺しても仕方ねえし、変わりに手前で遊んでやるか」

少女から手を離し、愉快そうに湿った笑いを殺しながら男は上機嫌で凧へと寄った。

「貴様、私を甘く見ると痛い目を見る事になるぞ」

強がりか、そんな言葉を吐いた凧に男は愉快そうに笑った。そして倒れこんだ凧のすぐ傍で、それでも短剣の間合一步手前、屈み込んで態々視線の高さを合わせて見せる。

「やれるならやってみろよ。一体どんな痛い目なんだあ？」

明らかに嘲りに入り混じった言葉。

それに凧は口元を緩め、

「こつ言った目だ」

剣大の長さになっていた紅蓮ぐれんの短剣を背後から出し、男のにやけていた面へと突立てた。

「がああああああああ」

突き出した焰の剣が男の眼を捉えて焼き払う。

一步下がって剣が目から抜けて、男は眼の在った場所を抑えながら痛みに狂うように地面を転げ回り出した。

そんな様子を後目に、凧はゆっくりと自らの両足で地面に立ちその時もう両腿の出血は止まっていた。何度かよろけながらも少女が寝かされていたベンチへと歩み寄った。

「無事か？」

微塵も応えない少女。

身体が動かないのだから応えられるはずが無い。

だがその視線の先を追って、少女の真上、凧はそこに在った黒い靄のようなもの。凧には見えなかったが、を紅蓮となった剣を振るって焼き絶った。

「凧さん、足を見せてっ！！」

「お、おい・・・」

動けるようになったなり、少女は凧に詰め寄って制止も聞かずに太股の傷に手を当てた。

その瞬間凧の表情が痛みに歪むが少女は気に入れていない。

太股に当てた手の平がほんのりと光を放って、

「・・・うん、もう片方も」

手が退いた時には傷口が綺麗さっぱりなくなっていた。代わりなのか、少女の額にはかなりの量の汗が滲み出ている。

両腿ともそうして傷を治して大きな息を一つ。やっと少女が凧から離れる。そして今ようやくやく気付いたように申し訳なさそうな顔を上げた。

「凧さん、あのわたし・・・」

その先を遮るように凧は少女に背を向けた。

「言は後で取ろう。今は、」

男はもう転げまわるのを止めて立ち上がっていた。その全身からは男の怒りに応えるように黒い靄のようなものが立ち上っている。

「あれを片付けるのが先決、ね？」

腰に差していたもう一つのもの、少女の携帯用の棍を僅かな視線と共に後ろに投げ寄越す。

「はい」

少女は額の汗を拭くとそれを手に取って。

二人は男に向けて構えを取った。

「さあ、望みどおり貴様を狩ってやろう」

今度は挑戦的に、凧は男に向かって言い放った。

七宝伝～今起こったこと～

八話「糸無き操り人形」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」

チワワ「伊藤さんの居ない妖人形」

萌 何か……

和佐 ああ

萌 お兄ちゃんって主役だよ

和佐 ああ

萌 殆ど出てないよ

和佐 ……まっ、たまにはこんな事があってもしょうがないんじゃないの

舞 そうよ、(続けば)長い(はずだ)からこんな時もあるわよ

萌 そうはいつてもやっぱり悔しいよ

舞 お〜、よしよし、萌ちゃんは良い子、好い子

和佐 本音出てるぞ、舞

七宝伝～今起こったこと～

萌 & a m p ; 舞 え？

舞 こほん、まあそれはそれとして本題に入りましょうか

萌 本音つて何、舞ちゃん？

和佐 そ…

舞 黙れ、和

和 & a m p ; 萌 (びくっ) ……

舞 さあ本題に入りましょう

和 & a m p ; 萌 ……はい

……仕切り直り……

萌 今回の話だけど殆どが『少女』で彩られているね

舞 そうね、別にわざわざ『少女』にしなくても名前出せばいいの  
のね

和佐 そこはそこ、作者の都合だろうさ、ね、萌ちゃん

萌 うん……えっと、確か今回も預かったものがあるよ、ちよつ  
とまってる

ガサゴソ ガサゴソ

萌 うんとね、『名前九割がた必要なのに出せないのは辛い』だ  
って

舞 馬鹿ね、それならさっさと出しちゃえばいいのに

和佐 確かにその通りだな

萌 これは…わたしも舞ちゃんに賛成だよ

舞 あら？ 何か紙が…（空中に漂って来た紙を取る）

和佐 なんて書いてあるんだ？ …フムフム『速報：作者復活の  
兆しあ……』

チンツ…………チン

萌 今何か錨鳴（つば な）りみたいな音が…………って、あれ？  
舞ちゃん、手に持ってた紙どうしたの？

舞 ちよつと御免なさい、急用ができたからもうこれで戻るわ

萌 うん…って、あれ？ 和ちゃんもいない。え？ もう終わり、  
そんな聞いてないよう…

和佐 さて、変に区切ったところでサヨウナラ、また九話でな  
）

七宝伝～今起こったこと～

九話「汝の名、その目覚め」

「くく、くくくっ」

片手で顔を覆いながら男は笑っていた。

「まさか、手前が術者だったとはな・・・俺もちいとばかり油断しすぎたみてえだな」

訪来を歓迎するように、大きく両手を広げる。  
立ち昇った霧は目視できるほどの密度で男の周りを漂い、その姿を完全に飲み込んだ。

「いいさ、些か不潔だが・・・あの餓鬼が来る前にこの力、試しで見とくのも悪くねえ」

男を包んだ黒い霧が肥大化していく。それに伴うように男の声は音とも取れない発音に変わっていき、肌を突き刺す殺気も段差に膨れ上がる。

肉のひしゃげるような音が鳴り響き、それが本能的に恐怖を誘う。

「いいぜ、イイゼ・・・テメエヲ、アノクソヤロウヲコロス・・・  
・コロシテコロシテ、ヤル」

「「！！」」

靄を切ってその内から飛び出してきた何かをそれぞれ左右に跳んで避ける。

間置かずに地面に突き刺さった其れにより軽い震動が起こる。

其れは巨大な剣だった。

鋼とも黒曜石とも取れぬ黒光りを発する其れは全長が二間程はあろうか。大凡人の扱えるものではない事だけは確かだった。

黒の靄を割って腕が、次いで本体が姿を現した。

昆虫のように全身が甲に覆われているような身体。だが膨張した肉がその滑らかさを損なわせている。節は四倍ほどに膨れ上がりごつごつした其れは甲、と呼ぶよりは岩石の塊といった方が的確なのかもしれない。

頭部から僅かに覗く赤い輝きは其れの目か。

何より全身から立ち上る狂気、既に其れは人間を辞めているとしか言えなかった。

「もう喰い尽されていたのか」

男の変貌にも風は特に取り乱した様子は無かった。淡々と事実を語るのみ。

だがもう一人は違っていた。

「そん、な・・・」

信じられないものを見たように少女の声は震えている。いや、驚いていると言うよりも悲観している、と表した方が正しいか。

「如何した、まさかアレを見たのは初めて……か？」

その問いに少女の首が左右に振られる。

「あの人……いえ、あれは」

未だその事実が受け入れられないように、少女の言葉は震えてい  
る。

「九日」

「え？」

其れから目を離し初めて凧が少女を見る。

「九日前にアレを別の身体で見ました。間違いありません」

「なん、だと……それは確かな事なのか？」

すると少女は何故か僅かに頬を染めながら俯き、漏らした。

「はい。その……助けてもらった時ですから」

「助け……千里か」

「……はい」

ほう、とため息を漏らした少女を他所に、凧にもよつやく驚愕の  
意味を理解した。

それは絶対にありえない事。人の姿を保つたまま喰い尽すのは最低でも二週間は掛かる。桁外れに強いモノならば可能性はあるが禍々しいとはいえ目前の其れは突出し過ぎ、ではない。だが目の前の其れが、現実が事実を否定する。

ありうるならば偶発的発破か、それとも作為的な“何か”か。

出でた其れが辺りを見回し、先に出た剣へと視線が止まった。二つの距離は大凡五間ほど。

その距離が、一瞬で詰まっていた。

其れの腕部が剣の柄を取り、軽々と剣を引き抜く。そして何かを試すように数度空振りをして、納得したように止めた。

そして其れが二人を向いた。

其れの面の配置が微妙に動く。それが笑みだとは誰も思えない。

「取り敢えず、アレが先決だ」

「はい、そうですね」

ゆつくりと振り上げられていた剣の動きが頭上で止まり、次の瞬間其れと二人との間にあつた距離が二拍程度で消えた。

凶器が振り下ろされる。

地面に堕ちた其れは土を割り、そのまま刀身の半分ほどを飲み込ませた。

一寸の差を置いてその斬撃を見送った少女は舞い上がる空気に髪を靡かせながらも返し様に棍を振った。

「痛っ」

だが甲の前に棍は弾かれて、少女の手が痺れただけ。そもそも其れに痛覚があるのかどうかも怪しい。

其れが易々と刃を上げて少女を見、

「閃っ！！」

後ろから放たれた赤い刃が、だが同様に黒い甲に阻まれて弾かれる。

上げられた剣が周囲の空気を唸らせる前に二人は僅差を置いて其れから離脱した。

空気の唸る音が引いた二人の髪を巻き上げる。

「硬い、な」

嘆息を一つ零して、凧は自分から前に出た。

最初の攻撃で分かった事だが、どうやら速いのは脚の動きだけでなく腕を振る速度、つまり剣速は移動に比べればそれほどでもなかった。

斬撃を潜り抜けて其れの懐に入り込み、焰を腹部に衝き立てた。

「っ」

やはり弾かれるがそれでも無理矢理押し込んで、兎に角触れさせ

た。

「発」

静かに発した言葉に同調するように、刃が爆散した。その勢いを以ってして凧は身体を宙に浮かし後退する。

立った煙の所為で視界が悪くなっている。それでも完全に晴れ切る前に、凧は煙の先を見て僅かに目を細めた。

一振りした短剣が再びその身に紅蓮を纏う。

「くそつ、本当に硬い」

腹部が僅かに黒ずんだだけ、其れは全くの無傷とあってよかった。

向こうも煙の先に凧の姿を認めたらしくしつかりと見据えた後に、動いた。

迫り来る斬撃を見切る為に剣をやや上げて腰を据え

「凧さん突き！！」

掛け声に咄嗟に身を返した。

風が巻き起こる錯覚と共に其れが一瞬の内に通り過ぎて凧の背後にあった木を突き倒した。

振り返り様剣を一閃。宙を奔った焰は消えずに、そのまま数個の玉となった。

「行け」

凧の言葉と同時に火の玉が全て其れの元へと奔った。

「往きます」

続けて凧の背後から、少女がほのかに光を纏った棍を手に火の玉を追う。

其れは初陣の火の玉を剣の一振りで薙ぎ払い、爆散した火の粉がその視界を覆った。

「水月流鎧術・・・」

煙の向こうから少女の声。

一瞬煙の向こうに光る物が其れの目には映ったかもしれない。

「真突しんと!!」

閃光と言ってもいい。

光を纏った棍の衝きはレーザーのように鋭く其れの胸を突いた。

「グ・・・?」

己の胸に打たれたモノを見下ろして、

「ガアアアアアアアアア」

其れは景気良く吹き飛んだ。

「・・・凄いな」

その光景を後ろで見ていた凧が呆然と呟く。だがそこで少女の姿が突きの体勢のまま動かない事に気付いた。

「おい……?」

駆け寄って顔を覗きこむとその顔は酷く白かった。

息もしているのか危ない静止の状態で、不意に息を吹き返すように少女が荒い呼吸を漏らし始めた。

「っ……は、は、は……はあ。や、やりました、か？」

先ほどの一撃、威力が凄まじい筈だ。恐らく全力で撃つたのだから。もう顔を上げる体力も尽いたのか、俯いたまま聞いて来る。

「あ、ああ。あの様子なら……」

其れの吹き飛んだ方を向いて、

「っ!!」

咄嗟に構えた短剣は防御としてはまるで意味を成さなかった。

蹴飛ばされた石ころのように地面を転がり果て、仕舞いに木の根にぶつかり動きが止まる。

背中への衝撃に息が肺から噴き出される。

「かは……くっ……」

少し霞んだ視界で、すぐに少女の事を思い出して凧は顔を上げた。

少女は一応まだ無事だった。運良く力尽きたらしく風が吹き飛ばされたあの薙ぎは当たらなかつたらしい。だが所詮はまだ、でしかない。

足元に転がる少女の姿に其れは再び面の配置を微妙に動かして両手に持った剣を断首刀の如く振り上げた。

「くそ、止め」

身体を起こそうとするが鈍い痛みは無様に倒れる。

縦に動いていく視界の中で、其れが少女に向かって今まさに剣を振り下ろす。アレが直撃すれば先ず助かる見込みは無いだろう。

いつの間にか取巻く世界がまるでコマ送りのように一瞬一瞬動いていた。

宙で虚しく足掻く。どれだけ手を伸ばしても、足掻いても、この距離では如何する事も出来ない。たとえ近くにいたとしても今の風にあの斬撃を避けるだけの力もない。

全くの無力。

世界は確実に少女の死へと向かっていた。

その事実を、どうしようもなく確信する。

「・・・あ」

いつの間にか握り締めていた、鮮緑の石が填まった胸元の首飾り。その石から光が溢れ出す。

なんて、錯覚。

凧は地面に倒れ、  
轟音が大地を揺るがした。

「お兄、ちゃん？」

萌が不思議そうに見上げてくる。  
だがそんな事。

胸の鼓動が煩いほど打っていた。今にも破裂しそうなほどの勢い。  
食後の梅昆布茶をゆっくりと飲むのも忘れ、恭一は呆然としなが  
ら立ち尽くしていた。

今すぐこの場から駆け出して何処か……『あそこ』へ往きたい  
という想いが込み上げてくる。

そして同時に、息を呑むようなこの感情の渦は、

「お兄ちゃんっ！！」

泣きそうな、切羽詰まったような声に身体が震える。  
ふと我に返った。

「・・・何だ」

「どうか、したの？」

「何でもない」

いつもと変わらない。

出来るだけ安心させるように努めて伝えて、椅子に腰を下ろした。

不安げな眼差しがじっと見つめてくる。見返しているうちに萌の頬が段々と赤みを帯び始め、それと共に恭一は自分の気持ちが悪く落ち着いてくるのを感じた。

一過性の衝動のようなものか。

少しだけ温くなった梅昆布茶を一気に喉に通す。

「ねえ、お兄ちゃん？」

「何だ」

「今日は、ね・・・」

言い淀むように沈黙が続く。

恭一は萌から視線を逸らさず、萌も恭一から視線を逸らさない。やがて思いつめるように唇を結んで、萌が口を開いた。

「どこにも、行かないで」

これから往こうとする散歩を指しているのは分かった、それ以外にそれ以外の事も。

何故今日に限ってそんな事を言うのかは分からない。この十年間近く暗黙の内に続けていた事だ。それを萌が止めたのは今日が初めてだった。

だが今この目を離してしまうとまるで消えてしまいそうに、

「…………お兄ちゃん」

昔、家で一人帰りを待つ萌の姿を思い出した。

「ああ、そうだな」

あの時と同じように、手を伸ばして萌の頭をそつと撫でる。

その頃にはもう完全に、『懐かしい』などという感情は恭一の中から消えていた。

地面に倒れたまま、尻は動く事が出来なかった。

あの攻撃に対して少女は余りにも無防備だった。恐らく命はもう無いだろう。

友を失った事に対する念が胸を苛んだ。

だがそれも一時。すぐに思考を切り替えるように、傍の木を頼りに身を起こそうと顔を挙げ、ぎよっとした。

いつの間に現れたのか、目の前に男の姿が在った。

歳の頃は四・五十か、だが決して無駄に歳を取ったのではなく、一種の威厳を醸し出していた。

服装も長い今の物ではない。ボロ布、昔の和服のようなものだった。

しかし何より、風が驚いたのはそんな事ではなかった。

其処に在るといふのにまるで存在感の無さ。目視してでさえ在る者として扱ふ事が出来なかった。

その男は困ったように頭を掻き、何故だか笑ってみせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

口が何かを紡ぐ。

だが音は無い。

「何だと？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やはり音は無い。

訝しがるように風は眉を寄せて、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は諦めるようにため息を一つ付くと幻のようにその姿を消した。  
まるで悪い白昼夢のようだった。

兎に角、思考を切り替えて凧は傍の木を頼りに今度こそ身体を起  
こした。

「は？」

その瞬間、凧は自分の状況を把握することが出来なかった。

身を起こした其処は吹き飛ばされた木の傍などではなかった。少  
女の、そして其れのすぐ傍、というか真ん前。

手にした剣が、白色の焰を纏った剣が其れの肩に突き刺さりその  
動きを止めていた。

驚きながら手を反すとまるで豆腐を切るような滑らかさで其れの  
片腕が落ちた。先ほどまでの硬さがまるで嘘のような手応え。

「え？」

「ガアア・・・クロス・・・コ・・・ロ・・・テヤル」

隻腕せきわんになった其れが剣を振り上げて、振り下ろす。  
凧は訳も分からぬまま下ろされた剣と刃を交わし、

「ガアアアアア!!!!!!」

剣のみならず易々と其れの身体を引き裂いた。

袈裟<sup>けさがた</sup>方に身体を斬られた其れの身体に、斬口から全身に向けて亀裂が奔る。そして呆然と見つめる中で亀裂は碎け散り、その内側にあったと思われる肉も漏れずに其れは黒い粒子のようなものになって空に舞い上がって、消えていった。

醜い外見とは裏腹に何と幻想的な最後だった事か。

何も残ってはいなかった。男の影は、存在を示したものは何一つ無い。呆気ないほどの、信じられないほどの最後。

いつの間にか短剣を纏っていた焰が赤色に戻り、ただの短剣になっていたのだがそれにも気付かない。

凧は一人、しばらくの間呆然と立ち尽くしていた。

「凧さん、姉さん、無事!？」

後方から声に我に戻る。振り向くと少年の姿を認めた。

「何か凄い光が見えて急いできたけど………どうしたの?」

不思議そうに聞いて来る少年だがそれに答えることは出来ない。自身でさえ何が起こったのか理解できていなかったのだから。

「う、ん……」

僅かに、凧の後ろで倒れていた少女が身じろぎした。

「あゝあゝ、お気楽なものですね。こっちの気も知らないで」

公園とはとても結びつかない、遙か彼方の建物の屋上。

その少女は公園の方角を眺めながら嘆息を一つした。当然だが公園の方角を眺めたからといって目視できる距離ではない。

「でも……やっぱり見つかりますよね、あれじゃ。む、困った、のかなあ？」

困ったと言っている割には少女の口調は弾んでいた。にこにここと笑みを浮かべながら、楽しそうな雰囲気を出している。

「それでは……早速こちらから動くとしますか、ね」

少女の姿が屋上から消える。

ゆっくりと止め具を軋ませながら屋上の入り口が閉まっていった。

九話「汝の名、その目覚め」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」

急須「難事の南、その眼差し」

萌 お兄ちゃんがいよいよ！ お兄ちゃんが出てないよ！  
お兄ちゃんが出てないよ！

萌 ……？ あれ、もしかして誰もいないの？

萌 ……  
?????? どうしてだろ？

萌 ……  
あれ、本当にわたし一人だよ、もう誰か呼んじゃおっと、え  
っと…お兄ちゃん

恭一 ……呼んだか？

七宝伝～今起こったこと～

萌 あっ、お兄ちゃん、いらっしやい

恭一 どうした？

萌 あのね、今回の紹介、誰もいないみたいだから来てもらったの、一緒に…しよ？

恭一 そういう事が、分かった

萌 やった〜

恭一 早く始めるぞ

萌 あ、うん

恭一 今回の…戦い……か、これは

萌 え〜っと…うん、そうみたい、凧さんが戦うんだよ〜

恭一 まったくダメな文だな、一人一人しか取り上げられてない

萌 う〜ん、それは…そうなんだけど……批評じゃなくて説明だよ、お兄ちゃん

恭一 そうか、文が下手なのは措いておくのか

萌 ……えっと、相手の生物全部『其れ』で表されてるんだよ、分かった、お兄ちゃん？

七宝伝～今起こったこと～

恭一 ……今から此処へ行っても間に合うか？

萌 無理…だと思っよ、それよりも説明…

恭一 あの最後に出てきた『少女』が気になる、何か手がかりになるかもしれない…

萌 お兄ちゃん…

恭一 心配するな、大丈夫だ、お前のことは絶対に守る

萌 お兄ちゃん…うん

恭一 ……戻るか

萌 うん！

萌 ……あのね、お兄ちゃん

恭一 なんだ？

萌 今日がんばって夕食作るよ

恭一 ……ああ

…

恭一 ん、あと十話で会おう

七宝伝～今起こったこと～

十話「詰問、最後の日」(前書き)

十話「詰問、最後の日」

その日のお昼休み、恭一はいつもなら待っているはずの妹の到来を待たずして席を立った。教室を出て、その足取りで上へと向かう。付いて来ている事を確かに感じながら階段を上り、屋上へと出た。そのまま物陰へと身を隠す。

繋ぎの軋む音と、人影が屋上に現れる。

「……いない？」

彼女が周囲を見渡し終えた一瞬、恭一は身を置いていた屋上の更の上から標的の背後へと躍り出た。

「なっ!？」

気付いたようだが、遅い。

両手を取って捻り上げ更に身体を密着させて頭突きと蹴りを封じ込める。抵抗する間すら与えない。奇襲は完全に成功といえた。

完全に相手の力を奪い獲った後、

「何の用だ」

彼女の耳元に極めて無情な声押し付けた。

「なっ・・・それは私の台詞だ、出会い頭にこんな事・・・貴様正気かっ!？」

つい数日前に出会い頭に斬りかかってきたとは思えない物言い。  
だがそんな言葉にひるむ恭一でもない。

身をよじって逃げようとする相手に抵抗は無駄だとばかりに更に腕に力を込めて相手を締め上げた。

「何の用だ、と言った。答える」

「何の用事も無い、だから離っ!！」

より強く腕を捻る。

「答える」

「・・・昨日の夜お前がどこにいたか知りたかったただけだ」

「昨日・・・」

ふっと昨夜の萌の姿が思い出された。それと同時に昨夜何もしなかったという事実が胸を苛む。

力が抜けたその一瞬、腕を解かれて逃げられる。

その逃げた彼女、凧は恭一と距離を置きつつ軽く肩を振ってから射るように睨んできた。意図した事だが屋上の出入り口は恭一の背後にあるので逃げる事は叶わない。

「まさかとは思いが、初めからそのつもりで彼女を助けたわけじゃないだろうな？」

「助け……」

人助けなど、そんな立派な記憶は恭一には無い。だが数日前にそんな事を言っていた者がいたような気はした。

それ以上の応えが無い恭一をどう思ったのか、視線から鋭さが幾分か抜ける。

「そうでないにせよ、お前達は怪しすぎる。何故一般人のはずのお前に彼女を助ける事ができた？

何故数日前のあの時あの場所にいた？

もし偶然だと言い張る気ならどうしてその後にも聞いてこない？

「そうだ、私は彼女ほどお前を信用する気にはなれそうにない」

内容の半分以上、恭一は理解しなかった。

本当にどうでもいい。彼女が何を喚こうが、障害だと判断した時点で駆逐すればいいだけの事。

だから風の間を伺って、ふと当然のようにそれに気付いた。

「今の行動からでも分かる。千里、お前は明らかに異じよ」

「それは、誰だ」

「……何？」

少し戸惑いを見せながら風は恭一の視線を追って、反射的に胸元を両手で覆っていた。

「ど、どこを見ている貴様っ！！」

怒鳴り声を上げる凧の顔が赤いのは羞恥の為か。

まあ、そんな事。

「それは、」

もう一度同じ言葉を繰り返しかけて、背後の出入り口の止め具が軋む音に恭一は咄嗟に身を反して回し蹴りを放っていた。

「っと」

相手の手がそれを阻む。

初撃を軽く止められた事に恭一は一旦後ろに跳んで警戒の色を強く

「おいおい、俺以外だったらどうするつもりだよ、恭一」

呆れるように肩を落とす和佐の姿を見止めて恭一は上げていた両腕を落した。だが警戒、鋭い視線はそのままに和佐を睨みつける。

「何の用だ」

「何の用って……教室に行ってもいないから待ってる萌ちゃん  
の代わりに俺が探し」

ふと、何かに気付いたように和佐の視線が横に向かった。その先  
にあったのは胸元を両手で隠している凧の姿。

和佐は何かを心得たように手を打ってみせた。

「ああ、二人であいび」

「違うっ！！」

凧が叫んだ事に対して和佐は意地が悪そうに笑ってみせる。

「冗談だよ。凧ちゃんは兎も角としてこいつは逢引なんて絶対しねえよ」

景気良く肩を叩こうと近付いて来た和佐の腕を掻い潜って恭一はそのまま腹部へと深い一撃を決めた。

手応えは実に軽いものだったが和佐は腹を押さえながら大袈裟に後ろに下がってみせる。

「おまつ・・・今昼食時、だぞ。飯が食えなくなったらどうするつもり・・・だ」

恭一が一睨みしてみせると和佐は何事も無かったかのように身体を伸ばした。

「で、萌ちゃんが待ってるからさっさと中庭に行こうぜ？」

「萌が待ってる。そう、か」

懲りずに近寄ってきた和佐にもう一発、とだが流石にそれは軽々と避けられた。

屋上から見下ろすと校舎の間、中庭に僅かな人垣と中央にいる二人を認める。一瞬二人がこちらを見上げたような気がして、そのま

ま視線を逸らした。

見られていた事で忘れていたが、ようやく恭一はいつもの事を思い出した。

昼食に、中庭に行く事。

またもや昨夜の萌の表情が脳裏にちらついて、今度は他の事がどうでもいい事になる。

「な、いただける・・・って、うをつ」

今度は自分から近付いてきた恭一に和佐が身構えるがそれをそのまま素通りして恭一は屋上のドアをくぐった。最早和佐の事も気にしていない。

「・・・ははっ、小恥ずかしーのね、俺」

残された和佐は照れを隠すように頭後ろを軽く搔く。

凧はどう反応すればいいのか分からないように戸惑いの表情を見せていて、それに和佐も一瞬気まずそうな表情を浮かべた。だがすぐに笑顔が浮かぶ。

「恭一ももう行ったし、そういう訳で俺もお邪魔様」

凧に片手を上げて挨拶、そのまま屋上のドアをくぐって恭一に続き・・・かと思うと、急に後ろを振り返った。

「凧ちゃん、夜更かしはお肌の大敵だよ」

「・・・何が言いたい？」

自然と身体が身構える。

和佐は気付いているのかいないのか、調子は変わらない。

「疲れてるんなら早く寝た方がいいって事。自分の顔、鏡で見ても  
たら？」

んじゃ、と軽く手を振って今度こそ和佐は屋上を出て階段を降り  
ていった。

最後に残ったのは風一人。

下から悲鳴のようなものが聞こえて見下げてみると中庭に集まっ  
ていた人の一角が見事に崩れていた。そしてその道を通る恭一の姿  
を認める。

「・・・早いな」

凝った緊張を落として、何かやるせないようにその口から小さな  
ため息が漏れた。

十話「詰問、最後の日」（後書き）

七宝殿（居間で興っている事？）

実話「質問、サイコロの火って？」

萌 うーん、とりあえずここで一区切りらしいよ

和佐 へー、そうなのか？

萌 一応ここまでで物語の一章だって

和佐 んな、一章なんて言って良いのかね、この作者

萌 どういう事、和ちゃん？

和佐 そりゃ、一章なんて立派なものつけたら先書かなくっちゃいけないだろ

萌 うんうん、それで？

和佐 それだけ書ける根性はこの作者にはない！

萌 うわ、言い切っちゃった、言い切っちゃったよ、和ちゃん

舞 ま、大丈夫でしょ、事実なんだし

萌 ほえ？ …… 舞ちゃん

舞 はい、愛しの舞ちゃんですよ

萌 ど、どこ行ってたの？この前急に消えちゃうから心配しちゃうよ

舞 ごめんね、急な用事だったから、ちょっとある祈願の舞を舞いにいったの

萌 ほえ、舞ちゃんってそんなことできるんだ

舞 みたいなら今度見せてあげようか？

萌 え、本当！いいの？

舞 ええ、もちろん、萌ちゃんなら大歓迎。それでは、今度二人

和佐 盛り上がっているところで悪いが話題を戻した方がいいぞ

萌 あ、そうだね

ドコッ

萌 あれ？ 和ちゃん、どうしたの、急にうずくまって

和佐 急……に、腹に衝げ……き……が……（がくっ）

舞　で、今回の話だけど……これって前回と次章のつながりにあたる部分みたいね

萌　え、舞ちゃん？　でも、和ちゃんが……

舞　睡眠不足でしょ、それに構っているより早くしないともう時間ないわよ

萌　え、あ、うん……

舞　それで尋問って所みたい

萌　そうだね

舞　……それにしてもお兄さん、なんて大胆な事を……萌ちゃん、羨ましい？

萌　ま、舞ちゃん！！　わ、わたしは別にそんなおにいちゃんとみ、みつちゃ……く……

舞　真っ赤になった萌ちゃん……ああ、可愛すぎるわ

萌　あ、と……もう終わりみたい……ね、舞ちゃん

舞　もうもう、理性が……え、そう？　……ええ、では……せいの、

七宝伝～今起こったこと～

萌 & a m p ; 舞

ではでは、次回二章、十一話で会いましょう

## 在りし日のいつか、雨

ざあ、ざあ、ざあ、と雨が降っていた。

地面の土には既に十二分に水気が含まれており、水溜りも所々に見え始めている。

日は雲に隠れながらも既に空にはなく、今雲を取り去ったとしても空に見えるのは月か、地上の明かりに消されて見えない星星だけだろう。

太陽は当の昔に沈んでいた。

雨が降り、日も沈んだ時刻。まさに誰もが進んで外に出ようなどと思わない時間帯である。

静として雨音以外は車の音や足音さえも聞こえない中、そんな緩やかな雨音にかき消されるようにして音がひとつ、鳴っていた。

キィ、キィ、と錆び付いた金属が擦れ合って発せられる特有のその音が聞こえてくるのは公園の一角。

雨は降っているものの特に風は吹いていない。それでも止むことなくその音は定期的に鳴り続ける。

公園の、どこにでもあるような二つ仲良く並んだブランコの片方、

幾年も雨風にさらされて大方錆び付いている二本の鎖につるされた一本の木の板、それが乗る重りに揺れて音を発していた。

木の板の上にあるのは一人の少年の影。一体いつから、どのくらいそこに座っているのかその少年の全身は既にびしょ濡れ状態だった。

彼の歳は見た目5・6歳。いつて精々7歳が関の山、といった感じだった。

そんな少年と呼ぶのも幼い彼がどうしてこんなところに、それも雨の降っているこんな場所にいるのか、それは当然の疑問であろう。

だけれども、少年は俯き加減でただ定期的にブランコを揺らし続けているだけ。当然その表情に楽しさなど一過たりとも見られるはずもない。

そもそもどこにも楽しさなどないのだから、それはその少年にとって当たり前のことだった。

両親のどちらか、もしくは片方が迎えに来る様子はまるでない。

だがそれも当然、家に帰ったとしてもどうせ両親は居やしないのだから。

まだ幼い兄妹を残して二人ともせくせくと仕事をしている。二人とも滅多に帰ってくるなどなく、在るのは定期に家事をしにくる年配の家政婦さんが一人だけ。

しかしそれも今の時間となつては既に夕食を作り終えて帰宅している事だろう。

だから今家に居るのは……………

少年の濡れた身体を寒気が襲い、反射的に両腕で冷え切った身体を抱いていた。

今しがた行った行動に気がついて、まるでその行動が不服であったかのように彼は地面を一回蹴ると両手を再び左右の鎖へと戻した。そのとき寒さが身体を襲うがもう気にしないことにした。

(どうせもう寝てるぞ)

勝手にそう決めたことにした。

しかし代わりに昼間の事が思い出された。

ムカムカムカ、とだんだん腹が立つてくる。

無意識のうちに少年の左手が鎖から離れ頬へともっていかれた。

「っ」

指先が触れた瞬間表情がゆがむ。それも当然、そこは周りと比べて赤く腫上がっていた。

妹を馬鹿にした事と、両親が帰ってこない事をいいことに「見捨てられた」だの「いらぬ子」だのといった奴等に相応の仕返しをしてやったのだ。

腕には少し自信があった。どーじょーという場所に通い、せんせい

という人にやり方を習っていたのだ。一対一なら負ける気は全く無かった。

けれど今回は少し相手の人数が多かった。これは不本意にもその時に受けた傷だった。

当然、そんな事を言っていた奴等はずっと酷い傷を負わせて泣きながら逃げていった。

いい気味だ、と思いつつもどこかですっきりとしない自分が居た。だから気分を鎮めるためにそれからずっとこの公園に居た。

途中、雨が降り出したがそれも気にするようなことではなかった。

どうせ心配など誰もしない。家に帰って、着替えてしまえばそれで終わり。後は元通りだ。

それこそ気分が静まらないうちに誰も居ない家に帰ったところでどうせ思い出されるのは逃げていった奴等の事やその言葉の、もしかしたら・・・ということ。

とてもじゃないが少年にとっては帰る気にはなれなかった。

だから少年はここに居た。

一向に静まる様子が見えない苛立ちを胸に抱えながら雨に降られてずっとブランコの上に座っていたのだ。

どうして気分が静まらないのか、苛立ちがなくならないのか、そんな理由はどうでもよかった。ただ、今胸にある気持ちは不快、なのだ。それだけで少年がとどまり続ける理由としては十分なものだっ

た。

それでももう限界が近い。精神はいくら大丈夫だと意地を張っていても肉体の方はそうはいかない。雨に濡れた身体は確実に刻一刻と少年の体力を削ぎ取っていた。

だが、気の張った少年はそのことに気づいていなかった。

痛んだ頬から手を離してもう一度鎖に手をかけると、少しだけ俯き加減で再びゆっくりとブランコを揺らし始めた。

（頬が痛くなくなったらこのムカムカもきつと無くなってるさ）

確証どこにもないその考え、それが間違っているという事にまだ幼い少年は気づかない。

ただ、少年の体力はもう既にほとんど残っていない。それだけは確かなことだった。

「っ・・・？」

頭が揺らめき、視界がほんの少しだけ消えた。

それが最後の肉体からの警告。

しかし少年は頭を軽く振って、それを気のせいだということにしてしまった。

やはり気がつかず少年はその行為を続けるだけ。

倒れるのは、もはや時間の問題だった。

不意に少年は顔を上げた。音が聞こえたのだ、それもすぐ間近から。雨を弾く音。ビニールの傘に雨の雫が落ちて、それを弾く音がすぐ間近から聞こえてきていたのだ。

それが近づいてくる事にはまったく気づかずに、今間近にある事だけ気がついた事に少年は内心動揺していた。

「君、何やってんの？」

澄んだ高い声と、ほのかに匂ってきた香ばしい香りが耳と鼻を掠めて、少年の上がっていった瞳はその上にあつた二つの瞳と重なった。

そこには、片手で中華まんを食べつつもう片手で中華まんの覗く袋と傘を持っている女性の姿があつた。

在りし日のいつか〜雨〜（後書き）

取り敢えず、一章分だけ乗せてみる。

後は読んだ人の感想なり反応なりを見てこれ以降の返信を感かて行きたいと思います。ので、よろしく願います。こちらは応援していただけるとその分だけ殺る気が出ますっ！

感想希望

七宝伝～今起こったこと～

十一話「今日来た猫はいつ去るか」(前書き)

この作品ってどのくらいの興味で読まれてるんでしょうね？

十一話「今日来た猫はいつ去るか」

「はあ」

学校帰りの道のりで少女は一つ重いため息をついた。

それにしても、と思う。

公園で襲われたあの日以来何だか凧さんの様子がおかしい。時々ぼっと自分の首飾りを見てはため息をついて、心ここにあらずといった感じでもっとも心配になる。凧は何も気付いていないみたいだけれど……

それにあれの事も気になる。一体どうしてあんな事が起こったのか、絶対にありえないはずなのに。

でも、と偶に思う。もしあの時……

「凧さんが来てくれなかったら」

ぞくつ、と寒気が奔った。

わたしは今頃生きていないだろう。いや、それだけじゃない。もっと嫌な……ううん、浮かべる事もしたくない。

「王子様、か……」

あの時アレが言っていた事は後になってようやく彼の事を言っているのだと気付いた。

勿論そんな都合のいい王子様なんていないのは分かっているし、そこまでの少女趣味でもないつもりだけど。

もしあの時また来てくれていたらと思うと、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・う」

わ、わたししたら一体何を考えて・・・彼は王子様でもなんでもなくて、そもそもそんなのじゃないし勝手に思っちゃ失礼で・・・

「あゝ、もしもし、ちょっといいですか？」

「っ!？」

出かけた声を何とか呑み込む。

・・・突然の事でかなり驚いた。胸を撫でつつ軽く息を吐いて心を落ち着ける。

ほっと最後に息をついてから後ろに振り向いた。

「こんにちは」

そこにいたのはわたしとさほど歳が変わらないであろう子。整った顔立ちをしているけれど、綺麗というよりも可愛らしいという言葉が最初に思い浮かんでくるようなそんな印象のある女の子。それが第一印象だった。

状況から考えるに彼女が話しかけてきたと思うのが普通だと思う。でも、そう。わたしが彼女に抱いたのは第一印象(、、、、)。

会った事はないはず。

「なに、ですか？」

「ん〜」

勇気を出して声を出したけど返事はなかった。

彼女は何か考えているようで考えていないような瞳でわたしの瞳を見返してきている。

じっとしているだけで逸らす事も、話す事も、それ以外何もしてこない。ただ見詰めてくるだけ。

一瞬、その瞳の中に映る色がとても澄んでいて綺麗だと感じた。  
我を忘れたのは本当に一瞬で、彼女の視線にもう一度勇気を出してみる。

「あ、あの……」

「ん〜」

反応無し。も、もう一度

「あ、あの……」

「ん〜」

再び反応無し

「あ、あのっ、すみません！」

三度目で思わず大声を出して、彼女が応えてくれた……のかどうかは怪しい。

「ん、大丈夫！ ……かな？」

……どうやらわたしの声に応えたというのではなく観察が終了したといった感じだった。

「あの！ わたしに何か用事ですか？」

「ん、あー。ごめんなさいね〜」

ようやく彼女がわたしの事に気付いてくれたみたいだった。今まで見詰め合っていたはずなのにそこではじめて彼女と顔を合わせたなんて、変な気分。

「もうあんまりにも無防備で……ちょっとこっちも戸惑っちゃいます〜」

そう言って笑顔を向けてくる見た目普通の少女。出来得るならその言葉で気付いておくべきだったと思う。

「昨夜、公園にいましたよね？」

何の前触れもなく、突然彼女がそんな事を聞いてきた。

『昨夜』と『公園』の二つに『あの出来事』が思い浮かんだけど、目の前の少女にはおおよそ無関係であったので自然と除外した。

他には……と考えて、止めた。

だってこの近くの公園は唯一つ、風戸公園だけ。だから彼女が言っているのは昨夜いた公園の事になる。

なら昨日の事を知っている彼女は……

「蓮華の、方……？」

弟の所属している組織に自然と行き着いた。

けど口に出してから少しだけ不思議に思う。蓮華はそんなに大きな組織じゃない。だけれどこんな子は今まで見たことがないような気がする。

「んー、そんな感じ、かな」

「それなら鼎を……？」

「いやいや、用があるのは現場にいたあなたか、もう一人の彼女、だ・け・ですから」

「わたしか風さ……」

口に出しかけてある事を思い当たる。

わたしは確かに昨夜公園にいたしもう一人、風さんもいた。つまり二人。でも昨夜蓮華の人。つまり鼎が電話で報告していた人物には『あの時起きた事』だけで、誰が何を、まではまだ伝えていなかったのではなかったか？

軽い問答をしながら隣で聞いていたから、よく覚えている。間違いは、ない。

そう思ったとき瞬時に顔がこわばった、それが分かる。

警戒を見せちゃいけないと思つてすぐに気を引き締めた……つもりだけど、彼女は気付いたかどうか……変わらない楽しそうにしている様子からは読み取れない。

「一体どっちが持っているのか判らなかつたのですよ。中りだと嬉しいんだけど……もしかして、違つてました？」

探るような瞳。でも、それ以外は本当に何の含みもなさそうな笑顔。思わず緊張が和らいでしまつて、

「持つてるつて、何を……？」

「やだな、とぼけないでくれますか。七宝ですよ、七宝……それとももしかして本当に知らなかつたりします」

「七・・宝・・」

それは聞き覚えのある単語。

確かわたしの家、つまり水月家が代々守っている家宝の『緋槍』と『金碑』がその中の一つと、昔聞いた覚えがあつた。そして凧さんの実家、漑槁家も七宝を保持しているらしいと聞いたことがある。でも同時にそれは秘密事項で門外不出であるとも聞いていた。

わたし自身見たことは一度もない、そんなあやふやな物……のはずだつた、けど。

実在している？

「あ、知ってます？ わ～一発で当たり、かな？」

目の前には嬉しそうにする普通の少女。  
でも、普通に見えたその笑みの意味はもう

「はい」

満面の笑みを浮かべたままで彼女の手が差し出される。

戸惑いと、困惑と、頭の中がぐちゃぐちゃになる。

と、彼女が不満そうに頬を膨らました。可愛い、とこんな時でも  
思わず見入ってしまう。

「だ・か・ら、持っているんですよ、七宝のどれか。剣か、それ  
とも珠か。ね、渡してくれます？」

「……………」

頭の中で危険と信号が鳴っているはずなのに、体がそれに反応し  
ようとしない。むしろ緊張が抜けてしまうように彼女は自然体で。

「あはは、そんな警戒しなくても悪いようにはしないですよ。む  
しろわたしはあなたたちに危害が加わらないように動いているつも  
りですから。だから、ね？」

思わず後ろに下がりがけたわたしに彼女はさらに間を詰めてきた。

彼女の言っている事は嘘だとは思えない。真っ直ぐに見詰めてく  
る瞳は真剣だけど澱みのないものだって分かるし人を騙しているよ  
うな後ろめたさもない、と思う。

そもそも七宝なんてお祖母ちゃんから聞いた事があるだけで実物があるのかどうかも疑ってしまうほどのものだったのだ。それを出せといわれてもできるはずもない。

でも、そうすると昨日・・・？

思い当たる節は、ある。凧さんの家は溌檜。持っけていても不思議ではない。そしてそうだとすると多分凧さんが最近見つめていたあの首飾り。

でもどっちにしてもわたし、持っけてない・・・

困惑が伝わったのか、彼女は手を引っ込めると初めと同じようにわたしを見詰めるような、観察するような表情になった。心なしか唸り声が聞こえる気もする。

自分に向いているはずの瞳に直感的に視ているのは瞳じゃなく、もっとう奥のものだと思えた。

濁りのない視線に思わず何処かに吸い込まれていくような錯覚を覚える。

何か・・・見透かされている？

「うん、何か・・・違・・・うような・・・」

彼女に見惚れていたのはどれだけか。一瞬にも思える長い思考の結果そう言っけて彼女は手をぽんと一っ打った。何が分かったのかは知らないけど何かに納得したようっで何度も頷っけている。

「そっか、そっか、昨日見たのは『真紅』だったのにあなたは今時珍しいほど綺麗な『白光』だもんね。ちえ、ハズレか」

そう一人で言っただ端にある石を蹴るような動作をしていじけてみせていた。それが自然とわざとやっているという感じでなく本心からやっているという様に感じてしまっただけでまた思わず口元が緩んでしまう。

「あ……でもよく考えれば素直に渡してくれる確率って今みたいにずいぶんと……」

だからその動作に見惚れていて彼女が何かぶつぶつと独り言を呟きながら同じ動作を繰り返しているのにも気を向けられなかった。

「多分もう一人ってミツキかサラシマのどっちかだと思うし……」

彼女から漏れた言葉に身体が固まる。

そっだ、わたしじゃなかったら次に狙われるとすれば凧さんになる……!?

凧さんにこの事を伝えないと……

何か良い案を思いついたようでまた手を一つぼんと打ってから彼女は突然わたしに向き直った。

向けられたのは余りにも無邪気な笑顔。どうしてわたしが怖がっているのかが分からなくなってしまうほどの。身体の緊張が勝手に緩む。

「協力お願いします、ね」

彼女が向かってくる気配はちゃんと分かっていたと思う。でも緊張が途切れ、言葉に対する反応が鈍っていたのは確か。

え・・・？

けど、一度。

あまりにもその動作に違和感がなくて鮮やかで、避けようとする気すらも起こす間がなかった。たったそれだけで足の感覚がなくなつて視界が暗くなつていく。

「ほんと、ごめんなさいね。ちょっとだけ我慢、して。大丈夫、誰も危険な目になんてあわせませんから・・・絶対に」

腹部に感じるはずの痛みも何故か感じず、それほど不快でない気分です。遠のく意識の中、彼女の腕に抱かれる感触を感じながらそんな言葉が微かに耳に届く。

間も無く、わたしの意識は完全に闇に沈んだ。

十一話「今日来た猫はいつ去るか」（後書き）

七宝殿「居間で興っている事？」

銃一羽「北極の猫は生きているか？」

萌 萌・新キャラ？

和佐 どうだろうな、何処かで見た気もするようないような……？

萌 うん…でもそれはそれとして、またお兄ちゃん、また最初に出てこなかったよ

和佐 ま、どうせ一章でそうしたからこれからもそうしようって作者の下らない魂胆だろ

萌 でもそれならどうしてまた『少女』さんが主になってるのかな

和佐 この章は仕方ねえんじゃない？ 一応、始めからこの展開だったようだしさ

萌 うん、じゃ、いつかはわたしももしかしたら出れるかな？

和佐 いつかは……出れるんじゃない……かなあ？

鼎 あんた達、一体何和んでるんだよ!!!

萌 あれ、鼎君？

和佐 おう、どうした生意気坊主

鼎 だ・か・ら・姉さんの一大事に一体あんた達は何をしてるんだ、って聞いてるんだよ!!

萌 何…って、いつも通りの物語の解説だよ？

和佐 少し落ち着け、シスコン

鼎 黙れ、この物語中不幸率ぶつちぎり第一位決定野郎

和佐 …ほう、いい度胸じゃねえか、坊主、骨の二、三本は覚悟できてるだろうな…？

萌 落ち着いて、和ちゃん……で、本当にそんなに慌ててどうしたの、鼎君？

鼎 そ、そうだよ、だから…ね、姉さんが…

萌 う…ん、そう言われても…

和佐 なあ…？

萌 うん

和佐 俺ら彼女とまだ面識ほとんどないし

萌 わたしって普通の女の子ひ・せんとうごんなんだって？

和佐 って、萌ちゃん、それを言っちゃ……第一、確か俺や恭一と…

萌 もう、それは言わない約束だよ、和ちゃん？

鼎 くっ、またほのぼのしやがって…お前等に頼ろうとした僕がバカだったんだ、くそー

和佐 ……あらら、行っちゃまった

萌 一体何しに来たんだろ、鼎君

和佐 このコーナーの場所潰しだろ、きつと、それで役目終わってたから帰ったんだ

萌 え！……ということは……もしかして今回はもうおしまい？

和佐 そうなるな、というよりちょうどそんな時間か…

萌 あ、ほんとだ、丁度良かったね〜

和佐 じゃ、いくぞ

萌 うん、せーの……

七宝伝～今起こったこと～

萌 & a m p ; 和  
待ちしています

またまた次回、十二話でお会いできるときをお

七宝伝～今起こったこと～

十二話「散策といづ名の冒険」(前書き)

五人くらい？

## 十二話「散策という名の冒険」

鉄琴を鳴らしたような昔ながらの音が響く。

チャイムが鳴り本日の授業の終了を報せていた。

生徒達がせわしなく帰る、もしくは部活に行く用意をしながら次々と教室から出て行った。それは時間が経つにつれ静まり、教室から人が消えていく。

そんな様子を見るでなく、恭一はただ一景色として視界に収めていた。

「・・・・・・・・」

殆ど人がいなくなってきた頃、ようやく恭一は見ていた窓から視線を外すと動き始めた。のろのろと帰り支度をする。とはいっても机の横にかけてあるカバンを取るだけなのだが。

最後にもう一度窓の外に視線を移してから恭一は鞆を手に教室を後にした。

廊下に出て下駄箱に向かう間に幾つかの集団とすれ違う。靴を履き替えて出たグラウンドでも同じような集団が群れをなしていた。

どうやらあちこちで部活を見学しているらしい集団の中に自然と誰かの姿を探しつつも見つける事は叶わず校門を出る。

いつもどおりの帰り道を途中まで進み、不意に恭一はその過程から逸れた。

見えない何かに導かれるように真っ直ぐと、其処へと足を踏み入っていた。

終着点は周辺で唯一の公園の入り口。

しばらくその方角をどこに焦点を合わせるでもなく見ていたのだが、ふと在るものを見つけたように一点を睨みつけ、先へと進んで行った。

「・・・・・・・・」

だが二・三步程度で立ち止まる。

視線はずっと前方一点に定まっている。何も無いはずのそこを、恭一は確かに視ていた。

先へと手を差し出す。

僅かな違和感に一瞬恭一は顔を顰<sup>しか</sup>め、それでも手を先に伸ばして、指先が何も無いはずの空間にのめり込んだ。

その光景を然して驚く事無く、最終的には手首までが消えた。更にもう片手を伸ばして、其処に存在する何かを決じ開けるかのよう  
に両手を広げた。

何かが変わるといっわけではない。

恭一は自分の両腕の間を何も映していない瞳で眺めると、歩を進めた。

その間に恭一の姿が足を踏み入れたとき、千里恭一の姿は公園から完全に消えていた。

静寂だけが戻る。

目の前に広がる空間は決して公園などではなかった。

「・・・・・・・・」

恭一が無言で見つめる視線の先には在るのは何処とも知れぬ場所。砂地ばかりで所々には石岩地にあるような大岩が点在している、ただそれだけ。

一言で言うならば、砂漠、が最も的を得ているだろう。

更にそんな岩々の先、異物であるように一つの人影だけがぼつんと景色から浮かんでいた。

「おや？」

進んでいくとその人影も恭一の事に気付いたようで驚いたような声が届いた。声からして相手は男だということも窺えた。

「あらら？」

まるでおかしなものでも見るように、向こうからも近づいて来た男は心底不思議そうな表情を浮かべていた。

男は今では見なくなった流しの和服を着ていて、ぱっと見、何処となくのんびりとした印象が感じられる。だがその懐にある物を恭

一は見逃さない。

間合いに入るなり恭一は問答無用で、しかも渾身の一撃を放ちかけ。

「おわつと・・・と」

慌てたように腰を引いて下がった男に寸でのところで踏みとどまった。

偶然か、それとも必然か男は恭一の間合い一歩手前で距離を保っている。

「いきなり何するんですか、あなたは・・・・・・・・・・というよりどうやってここに入ってきたんです？ 見たところ普通の人のようで・・・・・・・・・・そうでないような？」

怒って、訝しがって、首を傾げて不思議がる。

男の取った態度全ては気の抜けるようなものばかりだった。だと言うに男そのものの動作は流れるように美しく一分の隙もない。故に恭一は手が出せずにいた。

「あなた、誰です？」

「誰だ」

ぴたりと重なった声に男は声を押し殺しつつも可笑しそうに口元を隠した。だがその端からは抑えきれない笑いがこぼれている。

恭一は不思議とその様子に余り不快感を抱かなかつた。あくまで余り、程度だが。

一步、にじり寄るように恭一が男と間合いを詰めようとすると、男は笑い声を半ば無理矢理押し込みながら片手を上げた。まるで制止するようなその仕草。

「済みません。でも別段悪気はなかったんですよ？」

「どうやら本当に制止しているらしい。」

恭一は今は男に素直に従うとし、足を止めた。そして改めて男を一瞥して、再度同じ言を口にする。

「誰だ」

「失礼しました。こちら、かみやあき神谷洸と言います。あ、呼び方は好きに呼んでくださって結構ですよ。なんならあつちゃんなんてのも可愛らしいかもしれませんね、勿論謹んで遠慮しますが」

自分で言っておきながら男、洸の表情が微妙にいやなものになる。……そんな呼び方こっちから願い下げだった。

「今までのほほんとしたものだった洸の瞳に微かに鋭いものが雑じる。」

「で、君は一体どちら様なんでしょうね？」

「恭一だ」

昔教わった『相手が名乗ったらこちらも名乗りましょう』に基づいて恭一も素直に名乗る。

「恭一君、ですか」

何とはないはずの洸の様子に、恭一は微かに違和感を覚えた。だがそれが何かは分からない。

「何だ」

「いえ、いい名前だな、と思ひまして」

特徴のない、実にありふれた名前だ。特にいい名前と言えるわけでもない。が、どうあれ恭一が気にするような事ではなく、恭一は素直にその言葉を聞き入れていた。

「ここで何をしていた」

「それは……勿論内緒、ですよ」

一見ふざけた物言い。だがその内に在るのは確実な拒絶だった。だがそれも、相手が何をしようとする関係はないだろう。一番重要な事は。

「ミズキを知っているか」

沈黙。

洸は一瞬真剣な表情を浮かべた後、満面の笑みを浮かべた。

「いいえ、そんな女性ひとは知りませんね」

その言葉は何故だか酷く恭一の癪しゃくに障る。考えるよりも先に言葉が出ていた。

「ミズキは今何処にいる」

「すが 縋る気持ちではない。あえて言うならばそれは直感だった。

笑みを湛えたまま首が横に振られる。

「ですから、そんな人僕は知りませんって。ですから無理です」

「言え」

「お断りします」

「言え」

「言えません」

「言え」

「駄目です」

「そうか・・・」

「それで、っ!?!」

恭一の放った拳は寸でところで空を切っていた。

「問答無用でうわっ」

「二撃目も空を切った。」

三劇目、を放とうとする間際、洸が懐のモノに手を伸ばしたのを見て恭一は僅かに身を引いた。  
だが予期していたものではなく、その隙にとばかりに後ろに下がった洸に二人の距離が開く。

「どうやって入ってきたかは知りませんが、元の場所に戻ってくる気は……ありませんよね」

「邪魔、するか……」

洸の身体が感じた何かにピクリと震える。

「邪魔するなら……潰す」

瞬間、恭一の身体から殺気が吹き上がる。

防衛本能か洸は懐から取り出したモノをしつかりと握り締め、恭一は踏み出そうと僅かに腰を沈めた所で、ほぼ同時に二人は同じ方向、恭一から見て右やや後方を向いた。

「こんな所に面白いものが有って、覗いてみたら……」

つい先ほどまでは確かに誰もいなかった空間、其処に男は一人、在った。

もし街中で見かければ普通の営業者ぐらいにしかなかったであろう、だがこの場にいる限りではそれが異様以外の何物でもないと、その存在全てが語っていた。

「興味深い逸材が、二人も」

口元に僅かな冷笑を浮かべた男が近づいてくるのを見て、恭一は半ば反射的に構えを取っていた。今この瞬間、洗の存在に価値はなく、目の前に迫る敵だけを睨みつける。

「さて、では一体どちらが私を此処に招いてくれたんですかね。それと、もう一人の招かざる愉快な乱入者はどちらかな？」

洗と恭一を交互に見て、愉しそうに目を細める。

「私としてはどちらでも有りですが・・・少年、君の方が随分と生きが良さそうですね。先ずは君からいつてみましょうか」

煌々とした男の瞳の奥に、今にも光を発しそうに妖しい輝きが灯る。そしてそれは同時に恭一の発火点でもあった。

向けられる敵意に応える様に、恭一は地面を蹴って男へと駆けていこうとして、そこで信じられないものを見た。

「全く、もう少し他人の都合ってものを考えてくれませんか、ねえ？」

呆れた、そしてどこか諦めたような物言いで洗が男の真後ろに立っていた《、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、》。

「どうやって、と言うよりもいつの間にと言う方が分かりやすい。たった先ほどまで洗は恭一の傍とは言わないが近くにいたのだから例えば瞬間移動でもすれば可能だろうか、と思われる。」

「なっ!?!」

驚いたのはどうやら男も同様だったようで後ろを振り向きかけて、

自らの首筋に当てられているものに気が付いて動きを止めた。

「せめてどちらか一方だけで来て下さいよ。ただでさえ僕一人の手に余るのに……もう僕にどうしろって言うんですか」

と、喋りつつ洗は躊躇ためらいもなく手にしていた小刀を引いた。同時にその場から大きく離脱する。

切られた傷から明らかに致死量と思われる勢いの血流が吹き上がって、それはどんどん男のスーツを染め上げていく。

血を垂れ流しながら男は切れ掛けの歯車のように首を回転させて洗を見た。

「此度の主催者こたひ えものはあなた、の方……か」

まだ血があふれ出てくる首筋を男の手の平が押さえ込む。それだけで止まるはずもないのだが。

「と、すると昨夜のアレについて少なからず知っている、と言う事ですね」

首筋に当てていた手が外れる。

其処に、男は何事もなかったかのように立っていた。

あれだけあふれ出ていた血はもう一滴も流れていない。それどころか男の首元にあったはずの傷口さえきれいになくなっていた。起こった事が幻でない証拠として血塗られた男の服が上げられるだろうが、まるでその血は自分のものでないと言わんばかりに男の血色は良好だった。

「……やっぱり首を刈るくらいじゃ意味がありませんか」

「しかも先ほどからの物言い・・・ただの徒いたずらでもないようですね」

男は洩に向き直り、つまり恭一に完全に背中を向けた。

「・・・いいでしょう、しばしの間遊んであげま、？」

男が振り向くが、遅い。

恭一が振り下ろした拳は男の頬を捕らえ、たはずがまるで見えな  
い壁に遮られるように直前で止まっていた。

「そつえば、あなたは何ですか？」

振り向いた男の瞳が恭一を捉えた瞬間言いよのない寒気が全身  
に奔る。だがそれは恐怖などではない。むしろ狂喜に近い。

続けて放った蹴りはやはり同様に男に当たる直前で止まった。

「愉快的乱入者にしては実に陳腐な攻撃で・・・」

言葉を止めて上げた男の手を恭一の拳が捉える。

初めて触れた恭一の体に男はほんの少し関心を抱いたような表情  
を浮かべかけ、次の瞬間頬を捉えた拳に僅かに地面を転がっていた。

恭一は男を追いかけて、止めた。その時には地面を転がっていた  
はずの男は不敵な笑みを浮かべつつ既に身を起こしていた。

「なるほど、中々興味深い」

言いつつ男は手を上げる。丁度そこに収まるように飛び込んでき

ていた洗の小刀が振り下ろされた。

「あなたもあなたで、意外と抜け目ないですね」

掴まれた小刀を洗は未練なく手放すと再び離脱していく。男の手の中で小刀が砕かれ、欠片が砂地に落ちた。

「さてさて、一体どちらから相手をすればいいのやら」

肩を竦めつつも男の様子は明らかに嬉しそうである。

「さつきから……」

ほぼ同時に、男と洗が振り向いた。

「何を知っている……」

「何、とは？」

からかうような男の口調。

相手の言う気のない言葉に恭一は一度瞳を閉じて、開くなり地面を蹴った。

「いいでしょう、あなたから……いいえ、二人同時。それもまた一興」

歓喜するように男が大きく両手を広げる向こう側、洗も同様に男に向かって踏み出していた。

恭一が拳を振り下ろし、

「先刻の勢いはどうしました？」

「またもや直前で止まった拳を男は煽るように振り払う。」

「払われた腕にそのまま身体を回転させて回し蹴りを打つ。」

「一体どういう仕組みなのか、今度は男は腕を上げてその打撃をしっかりと受け止めた。」

「そうそう、そうでない」と

「男が屈みこみ、その向こうで恭一の視界に手を振り上げた洸の姿が急に現れる。」

「愉しめません、よっ！！」

「昇ってきた衝手を後ろに一步下がって避けて、恭一はその腕を取るなりそのまま捻りを加えて関節を極めに入る。が、両手を組むより先に凄いいかに引つ張られるように身体が中に浮いた。身体を投げられてから、恭一は男が信じられないほどの腕力で振り上げた事を悟った。」

「反射的に着地の衝撃に身体が受身に動いて、それが視界に映った。」

「うん、ぴたりですね」

「相変わらず手を振り上げて突進し続けている洸の姿。相変わらずの笑顔で振り上げた手は鈍い煌きを放ち素手ではない事を物語っている。」

「まるで初めからそうするつもりだったと言わん呼吸で洸が手を恭」

一に向かつて振り下ろす。

回避は不可能。

「くっ・・・」

完全に避けられるものではないと分かりつつも、恭一は咄嗟とつたに身を捻り上げていた。

「へ？」

致命的に斬られた、と言う恭一の思いと、洗のものだろう間の抜けた声が重なる。だろう、と言うのはそう思った瞬間に恭一の視界が暗転したためだ。

「なるほど、そう言う事か」

男のどこか感心したような声を最後に恭一は視界と同じように意識の方も遠のいていった。

十二話「散策という名の冒険」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」

ジュニア「ささっと行く菜の花」

萌 久しぶりにお兄ちゃんの一人舞台！！

和佐 久しぶり、というよりも十二話にして恭一の一人舞台は初めてだけどな

萌 うう、本当にお兄ちゃんが主人公って解っているのかな、作者さんって…

和佐 いくらなんでも忘れてはいないだろ……多分、な

鼎 お前ら、姉さんがぴんちだって時に心配は無いのか、心配は！

萌 あ、鼎君、また来たんだね

和佐 お、また場所取りに来たのか

鼎 場所取りって何だ、じゃ無くて心配しろ、探せ！ 探しに行け！！

萌 そんな事言われても…本編じゃわたしは『少女』さんの事知らないよ？

和佐 俺も…似た様なものだしな

鼎 くうく、まったく役に立たない、もういい！！

………

萌 結局何しに出て来たのかな？

和佐 やっぱ、場所潰し、だろ

萌 かなあ………と、それはさておき説明しなくっちゃ

和佐 ふむ、今度こそ新キャラ登場、だな

萌 うん、冴さん、だね………なんとなく裏の有りそうな人みたい………

和佐 ようやく少しだけ物語が動き出してきたって感じかな

萌 それじゃ、わたしこれからどんどんと出番、無くなっていくんだね

和佐 ……萌ちゃん

萌 でもお兄ちゃんの出番が増えるのなら言っことは何も無いよ

七宝伝～今起こったこと～

和佐 あ、さいですか

萌 でもさつき鼎君にはあんな事言っちゃったけど、ほんと『少女』さん大丈夫かな？

和佐 大丈夫でしょ、次回は俺も出るみたいだし、いざとなったら俺が助けに行くさ

萌 え、本当なの？

和佐 ああ、こんな時こそその便利キャラ…って誰だ、俺にこんなこと言わせたのは

萌 ？ どうしたの、和ちゃん？

和佐 ……、ごめん萌ちゃん、しばらくここに来られそうも無い

萌 それってどういう…あ、もう行っちゃった

萌 ……考えたら和ちゃんもお客さんだったから別にいなくても大丈夫なんだよね

萌 次回から誰を呼ぼうかな？

舞 次回からは…

萌 あ、今日はもうお仕舞いの時間なんだ

舞 わた…

七宝伝～今起こったこと～

萌 それじゃ、次回十三話『情景と後ろめたさで（嘘）』（？）  
でね

萌 （…最後、誰かいたような？）

十三話「来訪者の憂鬱」(前書き)

はてさて？

七宝伝～今起こったこと～

### 十三話「来訪者の憂鬱」

逸る気持ちで足を急がせる。

校門を早足で通り抜けていく最中、悔んでも仕方ないと分かりつつも和佐は繰り返し心中で悔み続けていた。

最近様子がおかしかった恭一。それに加えて昨日の怪しい光でその翌日に昼休みのあれ。勘繰るな、と言う方が無理と言うもの。

ちよつとした先約を済ませた後に向かった教室に恭一の姿は無かった。萌がいる手前待っているだろうと高をくくっていたのが悪かったのか。

それともちよつとした先約 部紹介に参加した時間が拙かったか。だがあれは春休み前からの約束であってあの頃に今の事を察するなんて神業できるはずもない。

なら萌が見に来ていると知って張り切りすぎたのがいけなかったのか。いや、あれも時間は喰ったが問題となるほどではない、はず。それに新入生の受けもすこぶる良かった。

などと延々と思考が巡っていたが結論が出るはずもない。問題はもう動いてしまっているのだから。

恭一と風の間に何があったのかは知らないが目を離すべきではなかった、と早足で進みながら和佐はつくづく感じた。

先ず昨夜のあの光。恭一は気付いている様子は無かったがそれは

あくまで表層だけ。

時折神掛かっているほどの直感を見せる恭一ならアレに気付かずとも他の何かに釣られる事は無きにしもあらず、なのだ。

あんな事があつた翌日に、こつも油断してしまつとは。

だが悔いても仕方ないものはもう仕方ない。下手な被害者が出る前に恭一を見つけないければいけないだろう。仮にそんな事がおきてしまえば彼女が悲しむ。

だからこそ

何よりも避けるべきもの、守るべき事があるのだから。

足は急ぎ、もう早足ではなく全力に近い駆け足に変わっている。  
滅多に働かない嫌な予感だけが膨らんでいた。

「十一年・・・十一年だぞ」

我知らず口から零れ落ちる言葉。

十一年前にあつた事、和佐自身忘れたわけでは決してない。いや、幼かったとはいえ殺されかけた記憶を忘れるなんて出来るはずもない。生憎と恭一にあつた事を知っているわけではなかったが、和佐自身特に知りたいたいと思つた事はなかった。

だが自身が殺されかけた事よりも更に鮮明に記憶に残っている、  
今も寝るたびに耳に響いてくるようなあの泣き声。十年以上経つた  
今でも彼女の表情は今見ているかのように全く色褪せる事無く思い  
出すことが出来る。

和佐自身にもこびりついて癒える事ない心の傷。

「くそっ……」

嫌な光景、十一年前、当初の事が嫌でも頭にちらつく。

昔の光景が繰り返される事、それだけは避けなければならない。たとえ親友を半殺しにして自分が彼女に恨まれる目にあっても、である。

それでもまだあの頃のように誰もが生きた屍、人形よりも性質の悪いあの状態になるよりは遥かにましだと言えた。

今現在の救いと言えば最悪の起こる場所を昨日の内に確かめて置けた事、だろうか。凧の姿を部紹介の場で見つけたのはありがたかった、と思う。

何よりも古い付き合いだ。もし知っているならば恭一の性格上見逃すはずがないのは明白。知らないとしてもあそこに居ないのなら心配は杞憂だったと言う事。

だがそれはないと直感が言っている。

足取りは当の昔に目的地、この近辺唯一である公園へと向かっている。

「頼むぞ、恭一……俺が行くまで、手遅れになるなよっ」

言って無駄だろう事は重々承知の上。それでも言わないわけには不安を拭えず。

和佐は最早全速力で目的地へと快走を続けていた。

「誰だ？」

凧はその言葉を聞いて、それを語った少女を睨みながら静かに臨戦体勢にはいった。

事の起こりは学校の帰り道。

一人の少女が凧の事を待っていたように道端にいた。そして凧の顔を見るなり嬉々として顔を上げて、こう言った。

「ミツキさん？　もしくはサラシマさんですよ。取引をしましよ  
うか」

その言葉の真意がわかりかねたのだが次の言葉が凧を瞬時に臨戦体勢に入らせたのだ。

「剣か、もしくは珠。七宝を持ってますね」

七宝とは　家に古くから伝わっている剣と珠の対の事。そしてその存在は凧が育った里の中でも凧の一族にのみ知られている極秘中の極秘。里の・・いや、組織の者達でも誰が持っている、と言うよりも名前すらも知らないだろう。

そんな存在が、例えば姿が少女であれ現れたのだ。警戒の理由はそ

れだけで十分事足る。

「たははっ、そんなに緊張しないでくださいよ。ほら、りらくす、りらくすう」

見本を見せているつもりなのか少女は奇妙な動作で肩を上下に揺らしている。

次第に、見るからに少女の全身から力が抜けていった。その姿は臨戦態勢の凧とは違いそれこそ自然体、そこいらの娘とこれからお茶しにいくと言えば誰もが信じるだろう程にありふれた自然だった。

「何故七宝の存在を知っている？」

少女は不思議がるように少しだけ首を傾げてみせる。顎下に乗せた人差し指が小憎たらしい。

嫉妬もばかばかしいほどに似合っていて愛らしい姿だった。

「不思議な事を言いますね。なら逆に問いますが、あなたはどうしても七宝の存在を知っているんですか？」

「それは私が・・・」

言いかけて、ある答えが思い浮かんで詰まる。それを肯定するように少女はにっこりと微笑んでいた。

「ええ、そうですね。あなたの家に七宝が存在しているから、ですね。まさにわたしの答えがそれですよ」

「嘘だ!!」

間おかず、気が付くと凧は叫んでいた。

少女の言葉は嘘のはずだった。何故なら七宝を所持していた家は三つのはずだから。そして、今は水月と漂槁の二つ。そのどちらもがこんな回りくどい事などする必要はない。だが、

「どうしてわたしが嘘を言う必要があるんです?」

その問いは心底不思議そうに。少女は再び小首を傾げてみせる。本当に嘘を言う必要などないかのように。

「貴様が私を騙そうとしているから・・・だ」

「可笑しな事ですね。これは親切心からの忠告ですけど、自分の信じられないものほど他人に信用されないものはありませんよ」

「・・・黙れ」

そう言う凧の言葉に力はない。その忠告を凧自身も痛感しているのか僅かに俯いてそれっきり沈黙を守った。

「仕方ありませんね、なら少し言い方を変えましょうか。わたしが七宝の存在を知っている可能性は大きく分けて四つあります。一つ、現存する二家どちらかからの刺客である」

すぐさま凧が首を振ってそれを否定する。

「ありえない」

「そうですね。ではありえそうなのから行きましようか。二つ、七宝の存在を知っている者達が家族以外に存在している。これは流石に否定できませんよね？」

凧は答えない。

満足そうに少女は微笑みながら頷いてみせる。

「ふふ、では三つ、終滅した最後の一家もしくはその分家の生き残り、またはそのときの賊である。これもどうですかね、中々ありそうな理由だと思えますけど？」

「それもない・・・はずだ。私と同年代がいると聞いた事はないし、賊だとすれば年齢が若すぎる」

「賊説は否定ですか。でも生き残り説は知らなかっただけかも知れませんよ。はい、これでまた可能性が一つ残りましたね。では最後に、現存二家のどちらかの一族に裏切り者が出た」

瞬間、反射的に凧は抜いていた。

手にした短剣の剣先を少女へと向ける。

「兄さんを・・・溧槁涼を知っているのか？」

少女は笑顔のままの自然体に変わりない。しかし何処かほっとしたように僅かに胸を下ろした。

「よかったです。どれか、と言うよりも四つ目に心当たりがあるみたいですね。ならもうわたしが七宝の存在を知っている事に納得程

度はできますよね？」

「貴様……一体何者だ？」

「わたし？ あれ、まだ名乗ってませんでしたか？」

凧はじつと少女を睨みつける。

会ってからずっと、少女の姿は凧の琴線に触れるものがあつた。どこかで見た事があるはずなのだ。だが後一步、と言うところでもうしても少女を何処で見たのが思い出せなかつた。

「わたしの名前は弧月真衣こつきまきって言います。いい名前でしょ、えへへ・  
・真衣ちゃんって呼んでくれると嬉しいな」

少しだけ恥かしそうに、自分が『誰』なのかを名乗つた。

聞いた事はない名前だつた。だが、と言うところで凧が何処で彼女を見たのかを思い出せないのに変わりは無い。

とにかく少女、真衣には緊張感がなかつた。凧の方は明らかに殺気立っていると言うのに全く気にする様子がない。

考えうる理由は二つ。場の空気が読めないほど鈍感か、余程の修羅場をくぐってきているのか、である。そして凧は躊躇いなく後者だと感じとつていた。

「では取引を……って、そんなに緊張しないでくださいよ。ほら、その危ないモノもしまっちゃんしましょう。わたしはやり合う気は全くないんですよ、ねね？」

言葉程度で緊張を抜けるはずもないが、こんな公道でいつまでも短剣を抜いているわけにも行かず凧は目の前の少女と周囲に気を配りながらも短剣をしまいこんだ。

「・・・何が目的だ？」

「言ったとおりです。取引をしましょう」

「取引に対する私の利点は？」

「そうですね、その喋稿涼さんの行方とか言えば凄く食いつきがよさそうですね、生憎と違いましたね。人を一人、えつと昨夜一緒にいた人・・・を預かっています。名前は・・・分かります？」

彼女の像が浮かび上がるのと同時に凧は目の前にいる女をはつきりと敵だと認識した。それに個人的にも逃がすわけにはいかなかった。

可能性がある以上聞かなければいけない事が、ある。

「彼女の身の安全だけは絶対ですから、心配は要りません」

その言葉に、改めて凧は苦々しげに真衣を睨みつけると口を開いた。

「私が要求に従う限りは、と言うわけか」

「そうなりますね」

睨みつけながら、凧は何故だか同時に真衣の事が信頼できてしまった。少なくとも言葉に嘘はないと感じてしまう。そう思わせる何かがあった。

「それで、要求は何？」

「あ、はい。町外れの廃工場・・・あそこに見えるんですけど分かりますか？」

真衣が指した先、塀や家の先に煙の出ていない煙突が一本見えた。その存在のなさに内心驚く。越してきたなり町並みは一通り把握したはずだったが、今の今まで気がつけなかったのだ。

「わたしと彼女はあそこにいますので、あなたは七宝・・・昨夜使った宝具を持ってきてください。それと彼女を交換したいと思いません」

「昨夜使った宝具だと・・・？」

「はい。あ、でも出来るだけ早くにお願いしますね。ほら、そろそろ日も暮れてきましたし早く家に帰って夕食を食べたいですから」

凧の内心の揺らぎに真衣は気づいていないらしく、自分の言葉を証明するようにわざとらしい動作でお腹に手を当てて見せた。

一度につこりと微笑んでから、用件が済んだのか真衣は実に無防備に背中を見せると鼻歌交じりに歩き出した。

相手の目が逸れるなり凧は我知らず胸元にある首飾りへと手を伸ばしていた。それは祖父から里を出る間際に渡された、饞別。

そう、あくまで選別。決して家宝などではない。ないはず・・・だった。

「あ、そうだ」

振り向いた真衣の姿に思わず固まる。出来るだけ自然に見えるよ

うに、ゆっくりと胸元から手を引いた。

凧の怪しい動作を真衣が気づいたかどうか、少なくとも真衣の素振りには一切変化はなかった。

「わたし、戦いつて好きじゃないんです。あなたの判断がどうなるかは分かりませんが……わたしは出来るだけ穩便に済ませたいと思っっている事を覚えて置いてください……って、わわっ」

真衣が慌てたように両手を振った一瞬、向けられた視線に凧は違う意味で固まってしまった。今までおどけていた少女が見せた一瞬の本気、と言えはいいのか。

一度だけ彼女が頭を下げる。

もうさつき感じた威圧感は全くなかった。だがそれでも動けず、凧はそのまま真衣の姿が曲がり角に消えるまで後姿を見送っていた。

「兄さん……あなたの仕事、なの？」

困惑気味に呟いた後、凧は我に返ると慌てて駆け出した。攫われたと言う、彼女の身を確認するために。

十三話「来訪者の憂鬱」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」  
じいさんが「来訪者はU2？」

萌 本当にごめんなさい、前回最後に言った題名、違う話のものでした、うう…

凧 根本…話の世界から違っていたからな、ちなみには星の舞降りる夜にの物だ

萌 と、一区切りついたところで話しに内容に入ります

凧 もう反省終わりなのか？

萌 では、今回のお客様は今回の話しの中心でもある深槁先輩に来てもらいました

凧 ど、どうも(照)

萌 紅くなっちゃって可愛いです、深槁先輩

凧 そ、そんな事…

萌 そんな事有りますよ、深槁先輩は元も(、)良いんですから

凧 ぞくつ…!？ そ、それよりも早く解説をしなくてはいけないのでは？(焦)

萌 あ、そうですね、わたしっばいつも忘れちゃって、ダメだな

凧 はい、それでは今回の解説です、……よかった

萌 始めは前回の予告通り和ちゃんがちょこっただけ出て……

凧 後は私、だな

萌 はい、それに今回も新キャラ……って呼んでいいのかな、真衣さんは？

凧 多分……良いかと

萌 それでは……今回も新キャラが出てきてますます賑やかになっってくるね

凧 そうだな、それに私達の所属する組織……蓮華れんげの人も出て来て人数はより増えるはずだ

萌 わー楽しみ……って言いたい所なんだけど、多分わたしの出番って減っていくんだよね

凧 そうなのか？

萌 うん、でも深槁先輩はある意味（、、、、）では割と中心人物だから出番は増えてくるんだよね

凧 そ、そんなことは……

七宝伝～今起こったこと～

萌 謙遜しなくても良いよ、それにわたしは気にしてないから

凧 ……申し訳ない

萌 では、真衣さんの紹介を簡単ですけどしようと思います

凧 え？

萌 今回から入ったんです、では…

姓名、こぼりつき 弧月真衣、年は16歳位で女の子、家族構成その他もろもろ不明

萌 と、以上です

凧 ……大して参考にならない、と言うよりも歳が分かったところで意味がないな

萌 それはそうかな、だって結局はこんなところで出せる程度だからね

凧 それもそうか

萌 はい、ではここで今回は終わっちゃいまーす

凧 そうか

萌 はい…と、言う訳で皆さん、次回、十四話で会いましょう

七宝伝～今起こったこと～

(…誰かいたよっかな?)

十四話「繋がるは時のいし」(前書き)

とじろがどっこい

(…何が?)

七宝伝～今起こったこと～

## 十四話「繋がるは時のいし」

全身への衝撃と共に恭一は一気に意識を覚醒させた。

全くの習慣的に耳を澄ました物が音は一つもない。見渡そうにも周囲には微かな埃が舞い上がっており、開いたばかりの瞳を僅かに細めながら恭一は身を起こした。

斬られたはずの傷口に手を当てて、不可解そうに眉が顰められる。

「……ないな」

手を当てた場所には切傷や打撲はおろか服さえも全くの無事だった。斬られた、万一に殴打されたと言う形跡さえない。

埃が晴れてきたところで辺りを見渡してみる。

どうやら建物の中らしかった。四方を人口石に囲まれた無愛想な造り、僅かに開いた四角の窓口からは赤い光が差し込んでいた。また草臥れた石の壁に床には随分と埃が積もっていて人の出入りがなかった事を示している。

少なくともこの景色、恭一に見覚えはなかった。

覚えている限りの前の記憶は洸に斬られた場面。しかし今は男も洸の姿も周囲にはない。どこるか気配、要は勘と経験則からの他人が潜んでいる可能性、もないと思われた。

僅かに考える素振りを示す、事もなく恭一はもう一度辺りを見渡してみた。

現在恭一の周囲だけが埃の量が減っているのは先ほど感じた衝撃の所為だろう。

それ以外では少し離れた、精確に言えば恭一がいる部屋から出た通路と思われる場所に僅かに誰かの足跡と思われる埃の少なくなった場所が一人の往復分だけあった。

通路から放り投げたにしては余りにも距離が離れすぎているし受ける衝撃も覚醒時とは比べ物にならないだろうことは想像に難くない。

取り敢えず、見つけた誰かの足跡を追って恭一は部屋を出た。

通路に出るとあったのは大きく広がった空間だった。工具のような機器が幾つもあった、何かの工場だったと思われる。だがそれらも一目で分かるほど埃にまみれていてここ数年、もしかすると数十年以上は使われていないといわれても信じられるような荒れ様だった。

足跡は左右の往復分。

彼方を見て、恭一は恐らく入り口ではないだろう方へと足を進めた。

やがて。

足跡は一つの部屋の中へと続いていった。耳を澄ましても音は何もなく、恭一は恐ろしく無遠慮に足を踏み入れた。

「・・・・・・・・」

少女が一人、転がっていた。

両手両足を縄で縛り取られ、尚且つ後ろの柱に繋ぎ止められた状態で横たわっている。今は意識がないようだがこれでは意識があったとしても動くのは無理だろう。

近づいて見てみるとどこかで見たような少女である。それが何時だったかを思い出し掛けて、止めた。

彼女が誰であろうと恭一にはどうでもいい事だから。

恭一は先ず捕まっているらしい少女 恐らくは自身と同じようなもの の首筋に手を当てて生存を確認。次いで口元において呼吸の有無も確かめた。  
どちらも良好である。

外傷は無い様子。

さっと少女の身体に視線を走らせてから恭一はおもむろに手を伸ばし 少女の意識があれば顔を真っ赤にさせて拒絶しただろうが 身体調査をした。

他意も悪気も興味も、その他一切ないのだが 触診で武器の有無を確認。その際出てきた短棒を少女から遠ざけて床に転がす。

相手が完全に無害になった状態で初めて、恭一は至極まともな行動に移った。

「起きろ」

声だけでは反応が無かったので身体を揺らしつつ、何度か頬を叩

く。

「おい、起きろ」

「……………ん」

「おい」

「ん……………んん……………」

覚醒する仕草を見せた少女の身体を念のために押さえつけつつ最後にもう一度声をかける。

「起きろ」

「う……………ん？」

少女の目がゆっくりと開いた。  
まだ焦点があっていなかったようだが構わない。

「何処だ」

「ん……………え？」

身動きをして、身体の動かない事に気付いたのか一気に少女の瞳が大きく開かれて、

「や、嫌っ！！」

「黙れ」

「や、離してっ!?!」

「黙れ、と言っている」

予想通り《、、、、》暴れ出した相手を更に力づくで押さえつけて、恭一は正面から少女の顔を睨みつけて、殺気すら混めて低く呟いた。

ぴたりと少女の動きが止まる。

「え、あ・・・きよ・・・」

瞬間、茹蛸のように少女の顔が真赤に染まった。

「きよ、きよ、きよ、恭一さん!?!?! ど、どうしてここに?..?」

「気付いたら此処にいた」

「きき、気付いたら、気付いたらって・・・」

「少し黙れ」

言われたとおりに少女が押し黙る。顔は赤いままだったが。

少女の様子からしてどうやら彼女も恭一と同じ口らしい。と、なると彼女から情報を聞き出す事は実質不可能。無駄ということになる。

「あ、あの、恭一さん」

「何だ」

「その、わたし、どうしてこんな所に？　そ、それに服が……」

言い淀んだとおり少女の着ている制服は先ほどの触診の所為で着崩れていた。

恭一は言われた事を確かめるように少女を一瞥し、

「あ、あまり見ないでください。恥ずかしい……ですから」

頬を染めながら身をよじる少女をただ言われたとおりに視線から外した。

室内を一瞥してもう完全に用事がない事を確認した後、恭一は少女から身を離して質問に答える事無くそのまま部屋の出口へと向かう。

「あ、その、恭一さん……？」

控えめなようどこか切羽詰った声に振り向いた。

「何だ」

「わたし、どうしてこんな……服、が……」

そこまで言っつて沈痛そうに顔を俯ける。恐らくは自分にどういった事があったのかを想像しているのだろう。が、

「武器を除いた」

恭一の言われるままに視線を動かし、床に転がった短棒を見止めると恐る恐るといった感じでもう一度恭一を見上げてきた。

「恭一さん、が？」

頷く。

「……………よか、たあ」

目に見えて肩から力が抜け、だがすぐにその顔一杯に紅潮した。

「きよ、恭一さん!!」

「何だ」

突然の大きな声だがその程度、恭一にとって威嚇にもならない。ただじつと見つめて次の言葉を待つ。

「あ、え、その……………できれば、縄を解いてほしい……………です」

先ほどまでの勢いは何処へやら。

瞳をじつと見つめると少女はすぐに恥ずかしそうに視線を逸らした。

少女に害意はない。ただ在るのは、

「……………分かった」

ふと郷愁の念を感じている自分がいた事にわずかながら戸惑いを

覚えながら、おもむろに近づいて素直に縄を解いていた。

「ありがとうございます。」

「ひと……。」

出かけた言葉を呑み込む。

「いや、いい。」

目の前の少女が彼女であるはずがないのだ。彼女とは歳、容姿、声、全てが違うし、何よりも、懐かしさを感じていたのは彼女に、ではなくて自分に、ではないか。

「恭一さん？」

不思議そうに見てくる少女を見て、言葉が漏れていた。

「誰、だ」

「え？」

「誰、だった」

「あ、その……わたし、ですか？」

頷く。

「あ……はう、その……佐久、弥……です」

違う、そうではない、と。  
だが恭一の内面など気付くはずもなく。

「名乗るのが遅くなってごめんなさい、恭一さん。それと、よろしくお願いします!？」

何がよろしく、なのか分からないがそういつて深々と頭を下げて、自身が縛られていた柱の角に頭を見事に打ち付けた。

「う、うう」

打ち付けた部位を両手で押さえる少女、佐久弥の瞳は痛みを耐えるようにほんのちよっぴりと涙が滲んでいた。

「大丈夫か」

と、言うてから恭一は自身の発した言葉に心底驚いた。

佐久弥の方はさほど気にしていない、というかそれを見る余裕が持てていなかったのだが。それに恭一の事を余りよく知るはずも無い彼女にとってそれがどれほど驚く事は分かるはずも無いだろう。

「だ、大丈夫・・・です」

「そう、か」

纏わりつく何かを振り払うように、恭一は向けられたものから視線を逸らして踵を反した。

「あ、あの」

もう用のない部屋を出て、今度は足跡の反対側へと向かう。

「恭一さん……?」

後ろから追ってくる気配はするがもう構わない。彼女には敵意はない。だから、

だから安心していい、と?

「恭一さんっ!」

煩いほどの叫び声に足は自然と止まり、気がつくまで恭一は振り返っていた。

「何だ」

「え、あ、そのお……」

応えたと言うのに佐久弥の方は視線を合わせようとせずに戸惑いを見せている。

生憎か、同様の反応には慣れていたので恭一は視線を逸らさずにただじっと待つだけ。

その内気ましくなってきたのか彷徨っていた視線が稀に恭一を覗くようになり、見られていると分かるとすぐさま俯いた。

ふと、何か素晴らしい事を思いついたように佐久弥は顔を上げ、

「そ、そうですねっ、恭一さんはどうしてこんな場所にいたんですか?」

「気付いたら此処にいた、と言った」

「そ、そうでしたね」

再び俯く。

しかも以前よりもより気まずそうに。

同じように、素晴らしい事を思いついたように佐久弥が顔を上げた。

「そ、そうですっ!?!」

「だから気付いたら此処に」

「ち、違いますっ!?!」

顔を真っ赤にして否定する。どうやら嘘はないらしいと分かる。

「それはその……忘れてください」

「なら何だ」

「女の子……恭一さん、同い年くらいの短髪の女の子を見ませんでしたか?」

短髪の女の子、と言われて思い出す顔が一つはあったが見たか、と問われて見たと答えるうちには見ていないと判断。  
首を横に振った。

「いや、知らない」

「そう、ですか・・・」

聞かれた事により逆に恭一にも一人の男の顔が浮かんでいた。  
あの神谷洸と名乗った男。

「男じゃなくて女、か」

「え・・・あ、はい。女の子、ですけど・・・それが何か？」

「ならいい」

しばらく見つめて、佐久弥は見返しては俯いてを繰り返して、  
もう用事がないと判断した恭一は再び前へと向き直り歩き出した。  
後ろからは追ってくる足音が一つ響いている。

「あの、何処に向かっているのですか？」

後ろからの窺うような声。それに恭一は何処へ向かっているのか  
を考えてみて、

「知らない」

「そう、知らないです・・・え！？ 知らないんですか？」

「知らない、と言った」

「そ、そうでしたよね」

申し訳ないような寂しいような憂い声。

また、零れる。

「足跡に聞けばいい」

「え、あ……なるほど」

歩きながら、理由は定かではないが恭一は次第に苛立ってきている自分があるのを感じていた。

おっかなびつくりと言った感じで後ろについてくる彼女。その存在がどうしようもなく忘れていたような何かを思い浮かばせる。

「あの、恭一さん……？」

「何だっ……！」

振り返って叫んで、自分が叫んだ事に気がつく。

「あ、そ、その……なんでもないです、はい」

身を縮めるような姿に浮かぶ何かを振り払うように、恭一は再び前を向いて先ほどよりもやや早足で歩き出した。

後ろから聞こえる小走りですついでくる足音。

小さく響く足音を聞いて、何となく、本当に何となく、安心した。どうしようもなく納得していた自分がある事に恭一は気付かなかった。

足取りが合わせるように緩やかに変わる。

七宝伝～今起こったこと～

十四話「繋がるは時のいし」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」

十姉妹「番と磨ぎ石」

萌 はい、今回は名前の初出祝いに『少女』こと佐久弥さんにお客に来てもらいました

佐久弥 こ、こんにちは

萌 本当はここって本編の出番が少ない(?)人たちが来るところなんだけど…

佐久弥 そ、それじゃ…もしかしてわたしの出番ってこれから減っていくんですか？

萌 ううん、そんな事無いと思うよ

佐久弥 そうですか(ほっ)

萌 でもわたしの出番はこれから逆鱈登りに…

佐久弥 ……あの、少し

萌 ブツブツ……はい？

佐久弥 最近その話題ばかりでは？

萌 ……………

佐久弥 ……………

萌 さて、今回の説明に入りたいと思います

佐久弥 そうですね

萌 今回はお兄ちゃんと佐久弥さんの三度目の邂逅でやっと互いに自己紹介する場面です

佐久弥 はい、今回でやっとわたし、恭一さんに名乗る事ができました

萌 と、言いますか…初めて名前が出たんですよ

佐久弥 ……はい、実はそうみたいです

萌 お兄ちゃんなんか一話で名乗っていたのにね

佐久弥 申し訳が無い限りです

萌 ま、まあそれほど気にしてないと思うよ

佐久弥 そうですか？（涙）

萌 うん……むしろお兄ちゃんの方から名前を聞いたなんて驚きだよ

佐久弥　　そうなのですか？

萌　　それはもう……わたし、悔しいくらい……だよ

佐久弥　　そ、そうですか（喜）

萌　　そういえば佐久弥さんってどうしてお兄ちゃんには普通に話せちゃってるんだろ？

佐久弥　　………分かりません

萌　　設定ではわたしと同じくらいの人見知りの筈なのに

佐久弥　　萌さんと同じくらい？

萌　　………

佐久弥　　………

萌　　さて、今回はこれ以上突っ込まれないうちにお開きというところで

佐久弥　　あ、もうですか、はい、分かりました

萌　　はい、では次回十五話で会いましょう、次はお客様に誰を呼ぼうかな？

七宝伝～今起こったこと～

十五話「遅れて来た騎士（ナイト）」（前書き）

そんな柄じゃないでしょ？

十五話「遅れて来た騎士（ナイト）」

一人の少女が工場跡の入り口付近で佇んでいた。手頃な場所で腰を下ろすと小さなため息が一つ、零れた。

「素直に従ってくれる……ような人には見えなかったよね」

少し丘になつているこの場所からはこの街が一望できる。だと言うのに此処の存在に気付く人は殆どいない。ここはそういう場所。少女は眼下に広がる街を見下ろした。つい先ほどとは違う鋭い視線。

「でも、誘いには乗ってくる甘い人」

その確信はあった。

素直に渡しはしないだろうが、それでも誰かを騙すではなく真面目に取引に応じてくれるだろう、そんな確信。

そして現物さえあれば後は如何とでもなる。無傷で相手を無力化する事も、今の彼女の實力ならば少女にとっては何んら問題ないのだから。

「それにしても……」

少女の表情にほんの少し苦笑が浮かぶ。

「人質なんて、まるで悪人ですね」

それともう一人の彼女には本当に悪い事をしたと。

「ほんと、気が重いですよ・・・」

無関係、とは言わないがそれでも他人に迷惑を掛けて落ち込まずにはいられない。しかも人質を取っている自分を思い浮かべて存外似合ってしまったと感じてしまつのも嫌だつたりした。

それでも、と。少女はもう一度眼下の町を鋭い瞳で見下ろした。

「一度使ってしまった以上はもう猶予はない、か。奴等が来る前に・・・例えばあの子がミツキであれサラシマであれ、巻き込まれていはずがない。」

私は彼等を怨んでなど・・・いない」

そして少女は日暮れを数え、謡いながら静かに待った、約束の来訪者が来るその刻を。

切れる息を整えながら和佐はたどり着いた周囲を見渡した。

昨夜見に行つて確認した事だが、所々に、隠してあるらしいが此処で何かがあったらしい。明るい状態で見ではつきりとした。

数箇所気があつたはずの場所がただの地面になつていたり、地面を抉つたような痕がほんの微かに見て取れる。

だがそんなことは半分以上昨日の内にわかつていた事。

「……いない？」

何処にも標的、恭一の姿どころか人一人としていない様子になつた。

此処には来ていなかった、と言う考えが一瞬浮かんですぐさま消えた。そう言い切るには此処は余りにも静か過ぎる。ならば自分が遅かつたのか、と考えて

「……あ？」

其れを見つけた。

数日前、恭一と共に風たちに遭つたときと同じ違和感。まるで塗皮一枚隔てたような感触の悪さ。

あの時はつられるように半ば無意識にした事。今は意識的に、和佐は全身に力を巡らせた。

「……在った」

感覚を凝らして視れば確かに、在った。見えはしないものの確かに断層のようなものが存在はしている。

隙間を縫うようにその内部へと身体を割り入れる。

「あ？」

広がっていた景色に呆ける。何故なら何も変わりがなかったから。強いて上げるならば生物の気配が全くといっていいほどない事、だろうか。だがそれ以外は全く変わるところはないし、誰もいない。

誰も、恭一の姿も何処にもない。

「ちが、た……いや？」

そんなはずはない、と。ならばこの存在すら意味はないはず。だが存在している。その意味は、

「どうしたんです？」

「っ!？」

背後からの声と肩に掛かった手。

突然の事に和佐は半ば反射的に振り向き様、背中に仕込んでいた小太刀を相手の存在の目視と同時に首脈へと斬りかかっていた。

「うわっ、と」

返ってきたのはそんな気の抜けた声だけ。伝わる手応えはない。軽く息を吐きつつ和佐は後ろに跳んで大きく相手と距離をとった。

「お前は……？」

向き合って見ると流し姿の男が一人。

近辺では見た事はない。が、その男は尋常ではなかった。今時珍しい着物姿が、ではない。確かにそれは異常の一つなのだがそれだけでは大した問題ではない。

殺傷が無数、それも明らかに刃物で付けられたもの。更にはそれでも平然と佇む男の平静さ。

「ふう、今日は厄日ですね。問答無用で殴りかかられる事一度、斬りかかられる事一度。人違いだったりしたら今頃死人が出てますよ、絶対」

男が呟いた中に琴線が触れるものがあつた。

「恭一……を知っているのか？」

問答無用で殴りかかる奴などたかが知れている。誰かに追われているか、今の和佐のように未知の場所に足を踏み入れたときか、最後にそういう習性があるか、である。

最初の二つは兎に角として最後などは恭一でしかありえない。そして和佐はそれを半ば確信していた。

刹那男に浮かんだ驚きもそれを助長している。

「おや、恭一君の知り合いの方ですか？」

確定。

隠すこともなく男は恭一に会った事があると言った。仮に恭一の知人であったならば自分が知らないのはおかしい。

どうして恭一が名乗ったのかは定かではないが、恐らくこの公園、此処で遭った。

「恭一は何処だ？」

負けるはずがない、とは思いつつも男に切傷はあっても打撲は一つもない。そして和佐の知りうる限り恭一は刃物を使わ  
使えない。

男の動向を探るが隙はまるでなかった。一仕事終えて家に帰る詩人、と言われても傷がなければ違和感がないだろう様子。

かなりできる。

和佐が警戒の色を浮かべると男は落胆するように肩を落した。

「あー、やっぱり・・・そうですか」

余裕とも取れるその仕草が、酷く癪に障る。

「恭一をどうしたっ!!」

「恭一君、ですかぁ・・・」

まるで昔に思いを馳せるように彼方へと視線を向けながら、

「ああ、大丈夫・・・じゃないですかね。少々手違いがあって現在行方不明ですけど。それに精々が迷子で済みますよ」

行方知れず、というところが気になりはしたが経緯は何にせよ男

が隠し事をしている様子はない。

恭一を探して此処に来たというのに。胸の中で嘆息を一つ零す。

目の前の男に対して余計な事を考えるだけの余裕は和佐にはなかった。

「お前、何者だ？」

「僕ですか？ 僕は神谷洸というものですよ。決して怪しくは無いので悪しからず」

何よりもその言動自体が怪しさ爆発である。

まるでたつた今、とても重大な事を思い出したように洸がため息を一つ零した。

「あー、そういえば僕って今疲れている上にすごく忙しい身だったりするんですよ」

眉を顰めるその仕草は心底嫌そうだ。

「ですので、君の・・・君達のお遊びに付き合っている時間はないんですよ」

「へえ、お遊び、ね・・・」

細心の注意を払いつつ、もう一本小太刀を抜いて構えを取る。そのまま少しづつ洸へとにじり寄っていく。

一方近づいてくる和佐の雰囲気か　を見て、洸の顔に明らかな落胆の表情が浮かんだ。

「ほんと、僕疲れているのに聞いてくれませんか」

「俺の質問に素直に答えてくれるなら聞いてやってもいいぜ？」

「無理ですねぇ」

即答だった。

和佐としてもさほど期待してはいなかったので表情に変化はない。

「そうか」

呟いて、足が止まった。此処が一足一刀の距離。

洸は嫌そうな顔のまま、まだ動かない。

「ああ、そう言えば僕の方も一つだけ聞いておいてもいいかなって  
事がありましたよ」

「・・・何だ」

「君の名前、何て言うんですか？ 何だか君って一度纏わりつくと  
離れないって言うのか、しつこそうなんですよね」

「・・・上柳、和佐」

しつこい、という単語に僅かに眉を寄せ、同時に踏み込んでいた。  
刃は一応峰打ち。が、一応だ。

洸はまだ動かない。

和佐が小太刀を振り下ろす。  
ようやく、動いた。

片手は懐に、もう片手を袖の中に隠すと同時に横へ流れた。まさにそう表すのが正しい流暢な動き。

僅か遅れる事、誰もいない場所を斬撃が通り過ぎた。

「ちっ」

二撃目、と首を傾けた。

見えたのは袖から出されていた洗の手の内の輝き。それが、放たれた。

「？」

和佐の右を通り過ぎる。だがその軌道は避けるまでもない明らか  
な誤投。

手元が狂ったのかという思考は一瞬で、和佐はすぐに二撃目を放  
った。

「わっ？」

金属の擦れる音と間抜けな叫び声。

止められた。

洗の獲物は懐から出した手に握られた棒手裏剣。それが和佐の小  
太刀を受け止めている。

唐突に、全身の寒気に従い思い切り後ろへと跳ぶ。  
視界に収まったのは笑みを浮かべながらもう片手にあった手裏剣  
を構える洸の姿。

到底間に合わない。

「っ!!」

息を呑んだ刹那、周りの景色が早送りのように素早く流れていっ  
た。

次に和佐が足をついたとき、一秒と満たないその間に二人の距離  
は六間ほど離れていた。

「はあはあはあ、は、は、は、は……はあ、はあ。はあ……ふう」

荒立つ呼吸を必死に宥める。

「すごいですね」

届いたのは感心するような、そんな声。

「？」

呼吸も儘ならないと言うのに洸が襲ってくる様子は無い。

訝しがりながらも呼吸を整えた後、和佐はある一つの事実気付  
いた。

にこにこ笑っている洸の手に握られているもの。手裏剣は結局  
投げられていない。

投げられなかったのか、という考えはすぐに否定された。仮にそうだとしてもその後にはできた隙を見て投げていけばよかったはず。だとすると残りは故意に投げなかった事になる。それはどうしてかと考えて、

「でもまだまだですね」

たしなめるような声に今はそれどころではなかったと我に返った。

恭一も見つかっていない状況、無駄に時間を掛けるのは好ましくない。なら必殺の一撃を放つまで。正直それでも終わるかどうかわからないが。

決意するなり、和佐はすぐさま実行に移った。

一本、必要ない小太刀を背中に収める。残りの一本を相手に構え、膝を折って体勢を低く取る。

放つは必殺。

この程度の距離、間合は関係なかった。

折った膝、腕を限界まで張り、その力を衝に換えて前方へと放つ。  
・・刹那前。

「あ？」

首筋に感じた僅かな痛みと共に意識が遠ざかっていくのを感じた。

恐らくは倒れ往く身体で洗を見た。

あつたのは微笑み。一見両手は何も構えていない。だが今の一撃は、

「油断大敵。本当に、まだまだですよ」

最後に聞き取れたのはそんな言葉。

全身が打たれたはずなのに感じない。和佐の身体が地面に倒れこんだ。

十五話「遅れて来た騎士（ナイト）」（後書き）

七宝殿「居間で興っている事？」

十五夜「遅れてこないと」

萌 はい、最近はずっかりわたしのコーナーになっちゃいました  
あとがきです

真衣 もう作者さんの出る幕がなくなってきてますね、あの人  
何処に逝ったんでしょう？

萌 さあ？ と、言う事で今回のお客は最初に少しだけ出てきま  
した真衣ちゃんさんです

真衣 どもども、はじめましてです。萌さん

萌 ……ほあ

真衣 どうしました？

萌 ほんとに舞ちゃんにそっくりなんだ、と思って

真衣 いやいや、そんな、照れちゃいますよ、そんな美人だなん  
て本当に、褒められると

萌　でも今のところ舞ちゃんを知ってる人と未だ会ってないんだよね

真衣　（ツッコミ無しですか）はい、そです、でも会っちゃったら大変な事になるかも…

萌　そ、その大変な事とは？

真衣　はい、恐らくその舞ちゃんさんとやらの立場がものすごく悪くなりますね

萌　どうして？

真衣　だって知り合いといったらあの恭一さんか、あの和佐さんしかないでしょ

萌　…確かにそうかも

真衣　でしょう？

萌　舞ちゃん、大丈夫かな

真衣　ちなみに近日わたしと恭一さんと遇ってしまつ予定が有るらしいですよ

萌　ど、どうしよう

真衣　どうしようもないでしょう…放つときましょ

萌 ……いいのかな？

真衣 どうしようもない事ですしね！

萌 う、ん………あっ！ 話の紹介、未だしてないよう

真衣 （きつぱりと）大丈夫です

萌 ほえ、どうして？

真衣 （何の迷いも無く）今回が和佐さんの話だからです

萌 そ、そうなの？

真衣 そうです（それはもう）

萌 う、うん…分かった

真衣 分かっていただけで嬉しいです

萌 ……あ、そういえば舞ちゃん、しばらく姿見てないけどどうしたのかな？

真衣 ……わんせの多分作者退治でしょ

萌 あ、そうなんだ、悪者退治って…頑張ってるんだね舞ちゃん、すごいよ

真衣 はい、という事で今回もお開きの時間になりました

七宝伝～今起こったこと～

萌 あ、はい、じゃ皆、次回十六話でまたねーそういえば和ち  
やんも如何したのかな

七宝伝～今起こったこと～

十六話「重なるは運命の環」(前書き)

ぶぶぶ (…だから何が?)

## 十六話「重なるは運命の環」

然して広い場所でもなく、程なく足跡は外へと向かっている事が分かった。

「・・・・・・・・」

もう目の前のドアを行けば外、と言うところで恭一が足を止めた。後ろに続いていた佐久弥の足も自ずと止まる。

「どうか・・・しました？」

「誰かいる」

実に淡々とした物言い。

佐久弥が恭一を凝視したまま固まって、数秒の後に不安そうな目で見上げてきた。

「誰、でしょうか？」

「・・・・・・・・」

その問いには答えずに、恭一はしばしの沈黙の後再び歩き出した。歩みに迷いや不安は一切ない。

「恭一さん？」

「一人で行く」

「で、でも・・・」

振り返って佐久弥を見る。

「邪魔だと言っている」

「あ・・・はい。わかり、ました」

寂しそうに俯く佐久弥。その姿を見せずして恭一は再び歩き出していた。

途切れた足音、それだけが重要な事。

「え？」

外に出たすぐ傍、そこに彼女は座っていた。

恭一の姿を認めるなり立ち上がり距離を取ったがそれ以上動こうとしない。まるで恭一が、いや誰かが中から出てきた事に驚いているようだった。

「お前、は・・・」

鋭い視線で睨みつけてくるのは一人の少女。同い年くらい、短髪と佐久弥の言った条件に一致する。

服装は着飾るのではなく、あくまで動きやすさを重視したようなもの。だが似合っていないかと言われればそうではない。また一瞬の身のこなしから見てもかなりできるのは間違いない。

が、そんな下らない事より何よりも、恭一は彼女がそんな表情を向けてくる事、恐らく彼女の驚き以上に、また非常に珍しい事に戸惑ってさえいた。

「誰です、あなた？」

初めて聞いた、刺す様な声は彼女のもの。

見間違いでも聞き間違いでもありえない。この距離で間違えるほど耄碌もろくはしていない。

「・・・違う、のか」

目の前の彼女から相違点を見つけようとしてもどこも見つからない。

容姿、体躯、声、どれをとっても妹の友人、“如姿舞という少女”のものに違いなかった。

ただ態度だけが真逆。親しみではなく憎しみさえ感じ取れる。

「失礼ですが、何方ですか？」

「お前こそ、誰だ」

しかしそれはそれ。敵愾心を向けてくる相手をみすみす逃す恭一ではない。たとえ相手が知人であり妹の親友だとしても、だ。

戸惑いはもう何処にもなかった。

目前の相手は別人だ、と。正確には別人であって欲しい、だったがそれに自覚があるかどうか。

「・・・では、この先で何をしていたんですか？ 返答次第では容赦できませんよ」

緊張感を漂わせる少女。だがそれが何故焦っているように見えるのか。

如何でも良い事だ、と。

「何もしていない」

「・・・本当ですか？」

「何もしていない、と言った」

少女のやや緊張が和らいだ。

「それならば、速やかにこの場から立ち去る事をお勧めします」

「断る」

街へ降りる道を示した少女に、そちらへは行かずに恭一は一步、近づいた。

「何のつもりですか？」

少女の警戒が再び戻る、が気にしない。

「お前は誰だ」

「・・・言う必要性を感じませんね」

「ここで何をしていた」

「あなたには関係のない事ですよ？」

「そう、か」

「それで、す？」

喉を握られて、少女の声が詰まる。

何が起こったのか解らないと言うように呆けた少女の表情。

「話せ」

「っ!!」

最大まで少女の頬が引き攣る。

ようやく何をされたか気付いたらしい少女に恭一は力を加えて掴んだ身体を足払いと同時に引き倒し、身体を引いた。

三寸先を風が過ぎていく。

跳び蹴りに続いて、その足で逆に腕を固められそうになって恭一は彼女の首を解放した。

足を空いた少女はそのまま恭一と距離をとるように離れていく。

「誰かは存じませんが……帰ってくれる気はないようですね」

嘆息。

恭一はもう答えない。無言のまま、数歩の踏み込みで少女との間が詰まる。より早く、少女は袖の内より出した物を恭一に向かって投げつけていた。

跳んでくるものを紙一重で避けて少女へ向かおうと、腕に絡みつく何かの感覚があった。

視線を落として目に入ったのは腕に巻きついていていた鎖。

前に引き摺られる。

突然の加力に体勢が前のめりになりかけて、構わず恭一は加速した。招待されているのなら素直に向かうまでの事。

意図に気付いたのか少女はすぐに二人を繋いでいた鎖を放棄した。少女の側の鎖が恭一の横手に生えていた木に巻きついて止まる。

今度は逆に身体が後ろへと引き、強制的に止められる。

すかさず少女が再び手の内から何かを投げた。投げられたのは丸い玉。

恭一の足元に着弾したそれは煙を上げて爆発した。

「ちっ……」

爆発の威力は殆どなかったのだが、数秒もたたずに吐き出した煙が完全に視界を遮ってしまう。

腕に捲きついた鎖を解き、少女の姿を最後に見た場所へと駆ける。

「何処に行くつもりですか？」

後方から聞こえた声。

恭一は振り返って、背後からの空を切る音に咄嗟に身体を横に投げ出した。

跳んだ先、煙の向こう側に人影を見止める。その影が手を振り上げる。

「ご苦労様でした」

振り下ろされた。

煙の中でも微かに影の手元が光っている。

構わず、前が出る。

手を差し出して、振り下ろされる影の腕へと撫でるように添える。

「え？」

驚きに満ちた少女の顔を真横から眺め、恭一は少女の動作そのままに、誰もいない空間へとその腕を彼女の腕と同時に振り下ろした。

当然、少女の腕は空を切る。

添えていた少女の腕を取りそのまま関節を取りにいき、寸前で力任せに振り払われた。そして少女の姿が再び煙の中に消える。

耳を済ませるが何の音もしない。

少しずつ、煙が晴れていく。

煙がなくなつたとき周囲を見渡しても少女の姿は何処にもなかった。

ふと気配に上を向き、少女の姿を認めた。手にした獲物 警棒  
ほどの長さの鉄の棒を構えたまま降つて来る。

半歩後ろに下がり正面からそれを向かえ打つ。

「恭一さん!？」

「え!？」

背後から聞こえた声に少女の身体が目に見えて強張つた。

降つて来る少女に手を伸ばし、掴んだ腕を自らの元に引き込む。

少女が振り下ろした鉄棒を掴んだ手で薙ぎ払い、勢いを殺さずにもう片手をそのまま拳を水月へ。

「かはっ……」

少女の体がくの字に曲がる。

更に腹部に数度、容赦なく拳を叩き込んで止めとばかりに上段蹴り。

力なく少女の体は地面を少しだけ転がって、止まった。  
少しの後に少女が身を引き摺るように起き上がるうとする、が  
来ずにその場に膝を崩した。

恭一はその少女に目をくれるのではなく、後ろを振り向いて駆け寄  
ってくるそれを睨みつけた。

「恭一さん！」

剣呑な雰囲気気付いたのか向かってくる足が止まる。その場で  
踏鞴を踏み、視線を逸らしつつも完全に逸らせない様子。

「え、と・・・その、音がして・・・恭一さんが、怪我・・・とかして  
ないかなって心配、になったのですが・・・どこか怪我し  
ていませんか？」

「見れば分かる」

「そう、です・・・ね」

恭一の体を見て、怪我がない事を見たのか佐久弥からほっと肩の  
力が抜けた。

「良かったです、恭一さん」

無邪気な笑顔を見せる、その姿が。

何処にも似ている箇所などありえないのに。

何時か在ったような風景。太陽が昇っていたあのとき、何処だったか？

もう、あんまり無茶しちゃ駄目でしょ？

自分は拗ねて、何かを言い返した。

だ・か・ら、それが心配なんだって

少し困ったような、それでいて安心できる優しい笑顔。

でも良かった、大事がなくて・・・ね？

「恭一さん？」

戻っていた。

夕日が出ている。真昼などではない。

いつの間にか佐久弥の顔が間近に迫っていた。両手も肩を掴んでいる。それに気付いて恭一は肩から手を離すと共に半歩下がった。

「何でもない」

鉄棒を払った方の手の鈍痛に、ほとんど無意識に佐久弥の視界から外れるように動いていた。

胸の中に去来する感情に、恭一は居た堪れないように視線を逸らした。どうして後悔と懺悔を感じているのか、その真意はまるで分からずに。

丁度視界の端に建物の壁を支えに立ち上がっている少女の姿を見止めた。立ち上がるとはいつても膝が笑っていて、軽く押しても倒れるだろう程の弱々しさではあるが。

ぴたりと、視線が重なる。

「……………が……………る」

『敵』に構える。

「恭一さん？」

不思議そうな声。その声に恭一は構えを解いた。

一瞬、今にも倒れそうな少女から気圧されそうなまでの殺気が溢れたのだが、今は完全に霧散していた。

「はは、はっ……………こんな愛らしい女の子相手に此処まで容赦無用とは、流石に効きますね」

後ろで佐久弥が息を呑んだような気がしたが、気にしない。額の汗と苦笑を浮かべる少女の下へと歩み寄った。

少女は動かない。動けない、かも知れないが。

「知っている事を話せ」

「……………お断りします、と言っただら？」

「吐かせる」

「ふ、ふふふっ」

恭一の答えに満足か、それとも自嘲か。少女の口から笑いが漏れる。

「千里・・・恭一さん？」

先ほどのからの佐久弥の言葉を聞いていたからか。確認するように少女は恭一に視線を向けてきた。

恭一は無言だったが隣まで来た佐久弥が二人の間を交互に見ていて、丸分かり。

今度は明確な自嘲が少女に浮かぶ。

「そうですね。貴方が千里恭一さん、ですか。ふふ・・・」

「・・・あれ？」

二度目にしてようやくか、佐久弥が不思議そうに声を上げた。それは自分が言っていないはずの恭一の姓を少女が知っていた。つまり彼女が予め恭一の事を知っていた、と言う事なのだが。

恭一にとってはそんな事。目の前の相手が敵であるのだからそれ以上は何もない。

「はぁ・・・で、恭一さん。貴方はどうしてこんなところにいるんですか？」

何かを諦めたように発せられた少女の言葉からは最早敵対心がない。

「気付いたら此処にいた。それよりも」

恭一が更に一步近づいて、気付かなかった。敵対心がまるでなかった所為かもしれない。

「話してもらおう」

「丁重にお断りしましょう、“王子様”」

不敵な笑みが少女に浮かぶ。そして手に握っていたそれを足元に転がした。

丸い、玉。

「恭一さん!!」

横から飛びついた佐久弥に押し倒される。こちらも敵意がないから気付かなかったのか。

視界の端で玉が爆発した、小さく。

煙が勢い良く広がっていき、瞬く間に視界を塞いでしまう。あのときの煙玉だった。

佐久弥をどかして急いで少女がいた場所に手を伸ばしたが、空振り。

「王子様、今回は貴方の御名に免じて隣にいるお姫様は素直にお返ししましょう」

どこか芝居がかかった声が聞こえてくるがまるで空間全体から聞こえてくるように場所が特定できない。

「あ、そうそう。わたしの名前は弧月真衣と言います。一方的に知っているのは対等じゃないでしょう?」

次第に声が遠ざかっていく。だがそれも空間全体から特定は無理。

「次会う時は愛情を籠めてマキちゃんと呼んでくださいね、囚われの王子様」

どこか哀しげな声を最後に少女、真衣の声は聞こえなくなった。恐らく何処かへ逃げ終えたのだろう。

煙が引いて、やはり真衣の姿は何処にもなかった。人がいる気配も傍の佐久弥以外は感じない。

息を一つ吐いて、体に残っていた力を抜く。

もう一度周囲を見渡してから恭一は足を街へ降る道へと向けた。最早誰もいないこんな場所に用はない。むしろ初めから用事などなかったのだが。

「あ、待ってください」

後ろから小走りで声が近づいてくる。

恐らく数歩後ろ、歩幅の違いからか多少早足で佐久弥がついてくる。

「あの、わたしの言った女の人を覚えていますか?」

「憶えている」

「彼女、でした」

「そうか」

別に態々言われる必要もなく、結局何が言いたいのかわからなかった。が、それだけで何かを気にする恭一でもない。ただ普段と変わらずに坂を降りていく。

「あそこって……街外れの工場跡、だったんですね。分かりませんでした」

独り言か話しかけているのか、どちらにしる恭一に答える気は無いが。

少しだけ困ったような気配が背後から伝わってくるような気がした。

「あの、何処へ向かっているのですか？」

「家だ」

「そ、そうですね」

本当に、何が言いたいのかわからない。

そういえば、と。萌もよくこんな言い淀む事があった事を思い出す。

「あっ」

気付いた時には右手を引かれていた。いや、握られていたと言っべきか。

反射的に振り払おうとするもそれよりも強く、両手で握られてしまい仕方無しに恭一は振り返った。

「駄目です」

突然言われても何の事だか分からない。

恭一がそれを口に出すより先に、今までで一番強い調子で佐久弥がはつきりと言った。

「やっぱり怪我、しています。少しじつとしていてください」

握られていた手が今度はそっと包み込まれる。

鈍い痛みを発していた其処がじんわりと熱を孕んでいくように温かくなって

これくらいなんともないよ

世界に亀裂が入った。

はつきりと、幻聴は実際になっていたのではないかと思われるほどに響いた音。

溢れるように湧き上がってくるのはどうしようもないほどの恐れ  
の感情。

ただただ、力任せにつかまれている佐久弥の両手を振り解いた。

「あ、駄目で」

「触るな」

拒絶を表す言葉。出た瞬間に遣る瀬無さが湧き出たが、今更。

振り払われても尚伸びかけていた佐久弥の手がぴたりと止まった。

「す、済みません。わたし……」

逃げるように いや、実際逃げたのか 恭一は佐久弥に背を向けると今まで以上の早足で坂を降りていた。

振り返って彼女がどんな表情をしているかなど見る気もさらさら起きない。

拭っても拭っても拭いきれない怒りの感情。それを振り払うように 恭一は走り出した。

後ろから誰か、佐久弥が追ってくる音も気配もない。

あの場所に留まっているのかもしれない が、どうでもいい。

振り返ることなく先、戻るべき場所へ向かって進むのみだった。

十六話「重なるは運命の環」（後書き）

七宝殿「居間で興っている事？」

十六課「傘要るのは雲停の日」

萌 本日は久しぶりに舞ちゃんの登場です

舞 ほんと、久方ぶりね

萌 今迄どうしてたの？

舞 いえ、ちょっとした野暮用を片付けていたのよ

萌 ふうん……そうなんだ？

舞 ええ、それと余り深く突っ込まないでね、詳しく説明したくないの

萌 え、うん……じゃ、早速今回の説明に入ります

舞 ……お兄さんが珍しく活躍しているのね

萌 うう、お兄ちゃん、主人公なのに反論できないところが哀しいよ

舞 ま、まあまあ、きつとこれから増えていくわよ……………多分だ  
けど

萌 ……………うん、そうだよ

舞 え、ええ

萌 ……うん、前回の予告どおり真衣さんがお兄ちゃんに会った  
かったよ

舞 私、本編で大丈夫かしら？

萌 ……きつと、大丈夫だよ

舞 萌ちゃん…？

萌 だってこのとき舞ちゃんわたしと一緒に部活動見学してたも  
ん

舞 まあ、あのお兄さんがそれを解してくれる御仁だと私、大変  
嬉しいんだけどね

萌 大丈夫だよ、お兄ちゃんだって話せばきつと分かってくれる  
って

舞 そう？

萌 うん、きつと、多分、恐らく……………ううん、絶対だよ！？

舞 萌ちゃんがそこまで言うのなら信じてみてもいいわね

萌 う、うん！

舞 ……それじゃ、時間もないので早速次の話題へ

萌 切り替え早いね、舞ちゃん

舞 折角用事も一段落して休暇をもらってここへ来られたんだからしたい事しなくっちゃ

萌 ？ 舞ちゃんのしたい事って？

舞 それはもちろん萌ちゃんと時間を共有する事よ

萌 でも…本編でもいつもわたし舞ちゃんと一緒にいるよ？

舞 それは……（より濃密な時間の共有を、と）またそれって事

萌 そうなんだ

舞 それじゃ、こんな茶番劇を早く終らせちゃいましょう

萌 うん、そうだね、わたしも久しぶりに舞ちゃんといっぱいお話したいよ

舞 ささ、皆さんにご挨拶、（そそくさと退場）

萌 それじゃそういう事で御免ね、また次の十七話で遭えることを楽しみにしてるよ～

七宝伝～今起こったこと～

十七話「徒然なる終演者達」(前書き)

ぶぐぽー

…何か書かずにはいられない。

十七話「徒然なる終演者達」

「頼むぞ、無事でいて」

日は沈み掛けているがまだしばらくは夕日として見えるだろう程の時間。

凧は必死に走っていた。

念のため、と言う事である後に真衣と名乗った少女の証言が正しいかどうか確かめるべく一旦家に戻った結果、時間を浪費してしまった事を今はただ後悔する他ない。

探した範囲では結局佐久弥の足取りは捉えられなかった。

そうなれば言われた通りに指定の場所へと向かうしかない。

「どうしてこんな・・・」

呟いても現在の理由だけははつきりしていた。

手が胸に掛けた首飾りに掛かる。

全ては、今佐久弥の身が危ないのはこれが原因だが分かっているのはそれだけだ。分からない事は多々有りすぎた。

七宝伝～今起こったこと～

一つに昨日の男の変貌、あれは佐久弥の言葉どおりなら確かに異

常としか言いようがない。

二つにこの首飾り、あれから幾度試してみても全く遣えなかった。うんともすんとも言わない。そもそも何故こんなものを渡されたのか、それも疑問ではある。

三つに弧月真衣という少女、彼女は余りにも内情を知りすぎているような気がしてならなかった。

どうにも昨夜辺りから何かはずれてきている、浮かんだ考えに頭を振って必死に取り消す。

「っ!？」

「うわっ、と」

T字路の曲がり角、ぶつかりそうになり咄嗟に右へ避ける。相手も運良く反対側に避けてくれたようでぶつかる事はなかった。どうやら考えに没頭しすぎだったようで、軽く反省して

「いめんなさい」

最低限の謝罪を済ましてからすぐに駆け出した。

「あ、ちよつと・・・」

背中から相手の声が届いてきたが今は一刻を争う。掛け声に振り返る事なく風はひたすら目的地を目指した。

「カーズーちゃん」

今まで聞いた事もないような甘い声と紅潮した頬。恥ずかしげに、それでも身を寄せてくるその姿は紛れもなく見慣れた幼馴染のものだった。

「ねえ、和ちゃん・・・」

「な、何だ？」

自分で緊張しているのがわかっていつつそれをどうする事も出来ない。でもそれでもいいか、と内心思える自身がいる。

「あの、ね」

胸に向かって『の』の字を書きながら見上げてくる潤んだ瞳。

「ごくり、と喉がなる。

「恥ずかしいけど、和ちゃんならわたし、いいよ？」

何かを期待するように瞼を閉じるその姿に、肩に両手を掛けて身を今以上に引き寄せると自身も瞳を閉じた。

顔をゆっくりと近づけていき、触れるかという刹那。

「ねえ、和くくん？」

瞳を開けた、瞬間全身に鳥肌が立つ。

目の前の“彼女”がにこりと、間違いなく最上の笑みを浮かべる。

そして、

「じふっ！？」

殆ど消化した昼食を戻すほどの圧力が腹部に係り、

「お目覚めかしら？」

和佐は目を覚ました。

最初に目に入ったのは何故か自分を踏み付けて見下している舞の姿。程よい長さのスカートの下からその中身が見

「！！！！」

下腹部よりちよつと下の部分に伝わった激痛に声も出ずに意識すら跳びかけた。おまけに全身が打ちつけられる様な衝撃にも襲われる。

「萌ちゃん、酷いわ。和つたら今私のスカートを下から覗き込もうとしたのよ」

可愛らしく身を反してその後ろにいた萌へと抱きつく少し涙目の舞の姿が霞んで見える。

「え……和ちゃん、それって本当？」

少し軽蔑の混じった視線、先ほど夢で見たものとは雲泥の差であった。

ただ見られる本人、和佐は言葉を発する事も出来ずに地べたで苦しみに耐えながら声無き叫びを上げることしか叶わなかったのだが。

「何も言わないのは認めた証拠よ。折角風邪を引かないようにって私が起こしてあげたのに恩を仇で返すなんて、そんなの酷すぎる」

声が出ないのはお前の仕業で酷いのはお前だ、と言いたいのだが声が出ない。

「うん、でも舞ちゃんの起こし方ももうちょっと優しくても良かったと思うよ？」

「それは……初め、折角萌ちゃんが優しくしてくれたのに起きない和が悪いのよ」

「うん、それもそう、かな？」

「そうよ」

「そうなの？」

「ええ」

「ふうん」

「違っわっ！！！！」

身を起こす。ようやく痛みも引いてあそこの具合も落ち着いてきてくれた。

「で、和佐君は何だっってこんなところで優雅に寝てたの？」

こんな所、と言われて和佐は初めて自分がいる場所を認識した。地面の上、公園の風景。そして自分がいたらしいのはベンチがすぐ傍にある。

瞬間、意識を失う直前の記憶を思い出す。

「そっだ！ きよ……」

普段と変わらない萌の姿が目に入って、和佐は飛び出しかけた言葉が慌てて呑み込んだ。

「きよ……キョンシー？」

「違っわ、萌ちゃん。今日、よ」

微妙に惜しい。

「今日？ 今日って何かあったの、和ちゃん？」

「あ、その……えっと、な……」

「うん……って何、舞ちゃん？」

萌の方に手を置いた舞は何も言わずに首を横へ振った。それから耳元で何かを呟く。

「! ! !」

萌の顔が真赤に染まった。

果たして何を吹き込んだのか、非常に気になりはしたが直感に従って和佐は何も言わずに言葉を呑み込んだ。ここで突っ込むとそれこそ負けになる、そんな気がしたのだ。

と、現状を思い出した。

「悪いな、一応起こしてくれた礼は言っておこう」

手を上げて、和佐は身を翻すなり走り出す。

「か、和ちゃん。ほどほどにね・・・」

背後から聞こえた声はあえて無視する方向で。

公園を出て、奔りながら思考を巡らせる。

夕日の翳った今から探しているもたかが知れている。と、すればばれずに捜し出す事はほぼ不可能。だがだからと言って諦めるなんて論外。

兎に角。

取り敢えずの指針として人の少ない方へと足を向けて。

「つと、わる・・・」

ぶつかりそうになった相手の顔を見て、それ以上の言葉は出てこなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その相手、恭一は和佐を一瞥だけしてその横を通り過ぎる。

「て、ちよつと待て、恭一」

慌てて恭一の肩に手を伸ばして、殆ど反射的に動いてきた恭一の動きに和佐はすぐさま身を引いた。

「何だ」

「何とも、ないか？」

言っておいてから観察もしてみる。

恭一の様子に変わった様子は無い。あえて言うならばいつもより不機嫌そうなところだろうか。

だがそれならば問題は何も無い。

「余計な世話だ」

用はもう無いとばかりに恭一は身を返して遠ざかっていく。

和佐はしばらくの間それを眺めて、

「・・・・・・・・・・は？」

七宝伝～今起こったこと～

予想外も予想外の返答に心配も何もが吹き飛んでいた。  
数分もその場で立ち尽くした後、全身から力を抜くと和佐は所在無さ気の後頭部を軽く書いてみせる。

「まあ、よかった……のか？」

未だ混乱の内にながら、和佐はとりあえず自分も帰路につくことにした。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

目的地はもう目の前。

切れる息を整えつつ、凧は敢えて余裕を持たせるようにゆっくりと丘を登っていった。

丘を登りきり、工場の入り口付近に座っている人影が目に入った。向こうも気付いたらしく立ち上がる。

「来たぞ」

「あはは……そうですねえ。七宝は持ってきてくれましたか？」

何故か彼女、真衣と名乗った少女は疲れ気味の様子で、半分自棄になっっているようだった。

何の策略か、兎に角警戒を解かずに肯定を示し、鋭く相手を睨みつける。

「佐久弥は何処？」

「あ、はははは。それがですね……」

一層、壊れたように笑う。

凧の脳裏に最悪の光景が思い浮かび、思わず詰め寄りかけた所で真衣は笑いを止めると一層疲れ気味に口を開いた。

「態々急いできてもらい大変申し訳ありませんが……囚われのお姫様はもう王子様に助け出されてしまっていたりします」

「……どういう事だ？」

「言葉通りに。わたしは報告と言うか……とりあえずそれを伝えるためだけに貴方を待っていましたから」

真衣が一步近づぐ。

凧は反射的に腰の短剣を抜いた。

「それでは少々予定とは違いますが、頂くものを頂きましょうか」

言うが早いか、真衣が一直線に凧へと駆けた。更に動こうとする凧に牽制に袖内から出した手裏剣を抛る。

「くっ」

短剣で手裏剣を撃ち落とし、

「やっぱり素直に渡してくれませんか？」

眼前にはもう真衣が残念そうな表情で、いた。

短剣を振り下ろす、が手首を取られて止められる。

もう片手が首に掛かった首飾りに伸びて、凧は咄嗟に蹴りを放った。

空ぶる、が代わりに真衣は首飾りを諦めて遠退く。凧も同じく距離をとって下がった。

二人に、間が空く。

「佐久弥がここにいない以上、お前に渡す理由は無い」

「それは、そうですね……でも解せませんよね。どうしてあの人がこんな」

考えるように頷いた真衣の様子が変わる。鋭い、射抜くような視線。だがそれは凧を通り過ぎてその後ろへと向いていた。

真衣の余裕が一切消えている事を不可思議に感じながらも凧は振り返って見るべきかどうかを迷っていた。

後ろに誰かがいるのは明確、だがこのままこの少女に背を向けるのもどうか、と。

「あら？ あらら・・・人、お嬢さんが二人もいますね」

何故か聞き覚えのあった声に凧は思わず振り返っていた。

いたのは一人の男。それも記憶が正しいならつい先ほど、此処へ向かう途中に街角でぶつかりかけた相手のはず。

認識するなり、凧はその男の眼に入らないように抜いていた短剣を仕舞い込んだ。

「貴方は・・・」

「おや、何処かで見たかと思えばつい先刻僕がぶつかりそこなった人じゃないですか」

間の抜けた、緊張感の欠片もない声。

「それともう一人・・・お友達？」

尋ねるような声に凧は我に返った。

今まで敵に背を向けていた事実慌てて振り返るが、真衣は先ほどと同じ真剣な表情のまま全く動いてもいない。

「・・・ど」

微かに真衣のものと思われる音が風に乗って届く、が何を言ったのか。

にこり、と真衣が笑みを浮かべた。今まで抜けていた余裕も復活している。

「どうやら、とんだ邪魔が入っちゃいましたね」

ため息が一つ、真衣から構えと緊張が解ける。そのまま凧の方へと歩いてくる。

咄嗟に徒手のまま構えを取るが、特に気にする様子もなく真衣は凧の真横をそのまま素通りして行ってしまふ。

「また、近いうちに伺います。それまでに考えを改めてくれると嬉しく思いますね」

すれ違い様に囁くように、それだけ。

真衣の姿を追って振り返る。

その姿は今来た男の脇も何事もなく通り過ぎて、そのまま街へと向かう坂道へと消えた。

交代するように、何処となく曖昧な笑みを浮かべながら男が凧へと歩み寄ってくる。

「何だか、お取り込み中でしたか？」

「いや」

正直、助かったと思った。

徹して真衣の動きがどこかぎこちないものと感じはしたが、あのままでは首飾りを獲られるのも時間の問題、それほどの実力差をただ一度の交差で痛感してしまっていた。

がぶりを振ってその考えを振り払う。

今回は何とかなった、今はそれでいいではないか、と。

「それよりもこんな場所・・・何か用事でも？」

此処は忘れられた街外れ。余程の事がない限り足を踏み入れる事もない。つまりこの男はそれだけの理由があつたという事、それを考えると自然と警戒心が強まった。

だがそんな凧の様子も気にしていないようで男は一度珍しそうに辺りを見回して、少しだけ照れたように笑みを浮かべた。

「いやあ、実はこの街に引越してきたばかりなもので少々散歩がてらに探検でも、と思ひ歩いていたのですが・・・実は道に迷いまして、困ったものです」

少しだけ頬が赤いのは男のようないい歳になつて探検などと言っているからだろうか。

はは、と笑う男の邪気のない様子に自然と凧は肩の力を抜いていた。

「で、貴方の方はどうしたのです？」

「もう終わった」

短く返す。

別に答えるのが面倒だとか警戒しているからではなく、今すぐ佐久弥の無事を確かめたいのと削つた精神力に気疲れがでているだけである。

少しだけ早足に、凧は男の脇を通り過ぎて丘を下る道に行った。

「礼を言う。助かった」

「？」

すれ違いざま囁く、聞こえない程の声。当然目の前の男には聞こえないように。

何処となく湧き出た気恥ずかしさに自然と駆け出そうとし

「名前」

背後から聞こえた男の声に振り返っていた。

「名前、お尋ねしていいですか？」

唐突の事に凧は思わず警戒心を強めた。

道は自分の後ろにあり、逃げる事は出来ると認識しつつ口を開く。

「・・・どうしてだ？」

「いえ、ね」

男が何かを言いよどむような仕草をする。

凧が訝しみ、半歩後ろに下がりがかけたところで男が淀むのを止めた。

「また会えそうな気がするんですよ、可愛いお嬢さん？」

ぼっ、と火が出るように顔が紅潮するのを自覚して、凧は男の視

線から顔を隠すように横を向いた。

「深槁・・・凧、だ」

ぼそり、と呟く。それでも男には聞こえていた。

「凧さん、ですか。良い名前ですね」

まるで社交辞令。

それを分かっているのに、なお顔が熱くなる。

「また近いうちに逢えると良いですね、凧さん」

微笑む。

「あ・・・ああ」

どうしようもない居心地の悪さに何と云っていいのか、口の中が乾いて緊張する。

「よ、用事が無いならもう行く」

「はい、それでは。引き止めて済みませんでした」

背後からのなんとも穏やかな声に一層理由も解せない居心地に悪さを感じ、

「じゃ」

短く一言だけ言って、全力で駆け出した。

「はい、では“また”」

そんな声が聞こえたが、聞こえない。

ふつつつと湧き上がる怒りとも取れない感情に風はひたすら、家にたどり着いて酷く落ち込んだ様子の佐久弥の出迎えを受けるまで走り続けた。そして同時に、佐久弥が無事だった事を思い出して安心した。

十七話「徒然なる終演者達」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」

柔軟な「徒然なれ終始立って・・・」

萌 題名が『徒然なる終演者たち』ってというのは…

舞 ただ単に余者達の行動って事でしょ

萌 ま、舞ちゃん、そんな言い方…

和佐 還ってきたなり聞く言葉がそれか

萌 あ、和ちゃん……和ちゃんも還ってきたんだ

和佐 おうよ、って今度は舞までいるんだな

萌 そうだよ、前回から舞ちゃんも復帰したみたい

舞 悪い？

和佐 悪い、以外の言葉が見つからないな

七宝伝～今起こったこと～

舞　そう……（すすす）

和佐　…おい、そう言っただけで気配消しながら俺の後ろに迫ってくるの、辞めろ！

萌　でもこれでいつものメンバーが勢ぞろいだね

和佐　皆脇役ってか？

舞　和限定で、ね

和佐　その言葉そっくり返すぞ、なんて言っただけで今回は俺も出てくるんだから

萌　って言ってもほんのちょっとだけだけどね

舞　ほんと、それにそれをいったら私達だってちゃんと登場してるわ

萌　そういえばそうだね、久しぶりに、わたしは八話、舞ちゃんなんて十話ぶりだよ

舞　それは…残念だわ

萌　どうして？

舞　実はここに來られる休暇は今回までなの

和佐　あ、実は俺もそう、今回顔出せたけど一回限りになりそう

萌 え〜、二人とも……じゃあまた前みたいに戻るの？

舞 そうなりますね

和佐 そうなるな

萌 ……でも、それも良いかも。お兄ちゃんも呼べるし

和&amp;舞 駄目、それは絶対ダメ（即答）

萌 どうして？

和&amp;舞 そんな本編でも出番のある人を持ってきたらこの意味が無くなる（わ）

萌 それじゃ、佐久弥さんもダメなのかなあ

和&amp;舞 ん、それは別に良いんじゃない？

萌 と、いうわけで次からはお兄ちゃんも呼べちゃう紹介コーナー  
|

和&amp;舞 し、しまった！！！！

萌 じゃあまた次回十八話で会おうね

和&amp;舞 ちょ、ちょっと待って萌ちゃ……（本日は終了〜）

## 間話「黒の部屋の狩人」

閉め切られた真つ暗な部屋の中。外から光が漏れてくるわけではなく、外へ光が漏れるわけでもない。

真実に近い昏闇。

光はなく、内の様子など誰にも分かるわけもない。何かが動く物音がするでもなければ誰かが居るような気配すらなかった。

と、一角の壁が開きそこから外界の光が漏れてくる。

その光を遮る影は背のやや低い、まだ少女、もしくは少年と思われる陰影。そして壁と思われた出入口が再び閉まり、内部はまた闇に閉ざされた。

「どうしたんですか、その姿？」

暗闇の中、女性特有の高い声がからかい口調で上がる。たった今入ってきた人物、少女のものだ。

入ってきた時の光によって内部の様子を僅かだが見ていたからだろうか、何も無いはずの、暗闇の部屋の中に向かって話しかける。

「あ、もしかして誰かにやられちゃって、それでおめおめと逃げ帰ってきたんですか？」

「何、だと・・・?」

続いて恐ろしく殺気の籠った低い男性特有の声先ほど少女の声の上があった方向に向かって発せられた。

声からすれば最低でも男が一人、初めからこの部屋の中に居た事になる。何も無い、ただ暗いだけの部屋に、である。その異様な行為だけでも男の精神が尋常でない事だけは判る。

「そ、そんなに怒らないでくださいよ。ほんの冗談じゃないですか?」

先ほどよりも多少切羽詰った、高くおどけた少女の声上がる。

雰囲気だけでも声の主が殺気に中てられてかなり焦っているのが十分に窺えた。

真暗闇だというのに、あくまで擬似闇であり慣れてしまったからだからだろうか、男の瞳にはしっかりと顔に笑みを浮かべながらも焦った少女の陰影が映っていた。それを見た男の唇が微かにつり上がったが、当然少女の目には見えていないだろう。

「・・・冗談なら相手を選ぶ事です。次は無いですから、覚えて・・・は居ずとも結構」

「・・・」

「・・・まあいいでしょう。今はあなたにやってもらう事があって態々こうして会っているのですから。多少の無礼は大目に見てあげるとしましょう」

「わたしが、やる事ですか？」

不思議そうな女の声が上がる。

少女はこの男に呼ばれてこの場所まで来ていた。会った事はないものの、恐らくは少女の目の前に居る彼とは以前からの知り合いであった。だからある程度だがこの男の事は知っているつもりだった。決して、他人に頼みごとなどをする性質ではなかったはずである。少なくとも少女はそう記憶していて、不思議に思うのも尤もだろう。

実際、男の方も頼み事などする気は全く持っていないかった。彼にとつては、今から彼女に与えるのは上位者から下位者への確固たる命令ではない。

「実に興味深い相手を見つけましてね、彼を見つけてもらいます」

「彼、ですか？」

「ええ。男が一人」

それだけの、無碍も少女の拒絶の意思も持たせる気のない男の言葉。

少女は次に発せられる言葉を待った。が、それ以上男の口から発せられるものは何も無かった。

その沈黙で逆に返事の返ってこなかった男の方が少しだけ苛立たような言葉を発する。

「何か不満でも？」

「男……この街で、ですか？ そんな、こんな広い場所です。一人、それも男を探せただけ言われて見つけられるはずがないじゃないですか……」

少女の言うことは尤もである。どれだけ多くてもたった一つの『男を捜せ』とだけ言われて目的の人物を探せる方がどうかしている。だがそんな少女の不満も男はなんら気にかける様子はなかった。空気の揺さぶりが感じられなかったのがその証明。

「心配は不要。彼……いえ、あの年頃なら少年、でしょうか。どちらにせよ一目見れば解せます。特にあなたのあの能力ならおの事、ね」

あくまで自信に満ちた男の言葉。それに少女はこれ以上の無駄な詮索は止めにした。

心の中でその人物に予測をつける。が、どれだけ考えてもろくな人物像にならなかった。一目見ただけで分かる相手などたかが知れている。

存在感、または狂気、そのどちらか？

無駄な考えに終わり、少女は一旦考えるのを止めた。

「で、もしわたしがその人を見つけたとして……どうするつもりなんですか？」

「それはあなたが気をかける事ではない」

少女は黙った。その男の大きな態度に、ではない。もしも彼の探している人物が見つかったとして、彼がその人をどうするかを想像していた為に、である。

結果は散々足るものであった。どう転んでもその人物にろくなことなどありはしないだろう。少女の考えでは最悪・・・いや、最善でさえ満足に生きていられるかどうか、怪しかった。

思惑に少女の表情が自然と曇り、それを暗闇の中で男の目がしっかりと捉える。男の口元に微かに笑みが浮かんだ。

「どうした？ まさか断る、とても言う気ですか？」

嘲るようにして言う男に対して少女は勢いよく首を横に振ってから、今までの彼女の声を考えると驚くほど静かな声で答えた。

「いえ、分かりました。とりあえず言われたとおりに探してみましよう。けれど期待通りに見つかるかどうか、知りませんよ」

「絶対見つかりますよ。すぐに、ね。あれはそういうモノだった、あなたたちよりも、むしろ我等に近い」

「・・・・・・・・・・」

不適に笑う男の事を少女は不気味なほど笑顔を崩さずに見ていた。張り付いた仮面のような、でも確実に本心を表したその表情で。

「それで、用事って言うのはそれだけなんですか？」

「はい、その通りです」

「そうですね。それなら、わたしはこれで行かせてもらいますね。わたしだってこれで結構に忙しいんです」

「・・・ふん」

詰まらなそうに声を漏らす男を後目に、少女は暗闇の中でも入ってきた出入口を正確に開けると、入ってきたときと同じようにして出て行った。

ずっと、少女の顔に浮かんだ仮面の如き笑みが消えた事は一瞬たりともない。

「あの笑み、相変わらず間抜けそうな小娘ですね」

男の小さな声が響き、後は何も聞こえなくなり空間がまたほとんど完全な闇へと戻っていた。

七宝伝～今起こったこと～

十八話「無礼者の礼儀作法」(前書き)

これは良いマスカラだ、と誰かが言った。

## 十八話「無礼者の礼儀作法」

恭一は、一人教室に残ってぼっと窓の外を眺めていた。

気がつくとも結局は今日一日中そうして過ごしていた。それ以外の事をしたのは萌が昼食を食べようと言いに来てそれに返事をした事くらいだろう。

学校の先生にしても恭一のそういった態度は二年目にして既に決して珍しい事ではなくなっていた。だから誰もが完全に諦めた状態で無視していたので一切それを邪魔するものはいなかった。

元々この学校に来るといふ事は恭一自身にとつてはまったく意味を成さないことだったのだ。来ているのは萌を不用意に不安にさせないためだけといつても過言ではない。

今日一日中考えていたのは昨日公園で会った神谷洸と名乗った男、その場に現れた名を知らぬ男、そして工場跡で遇った弧月真衣と名乗った少女の事だった。

考えてはいたが思い浮かんでくる事は何一つ無かった。この約十一年間にして初めての手がかりかもしれないものなのに、結局は何も出来ずに通り過ぎてしまった事がただ苛立たしかった。

もう一度会う事が出来るのなら、必ず……

居ないと分かつてはいたが目の間を過ぎていったものを何もせずに見ていることなどできるはずもなく、恭一はもう一度あの工場跡へといくという結論に達した。

自分の力のなさを悔いながら、ずっと、窓の外へと視線を向け続けていた。

どこか遠くでさよならの挨拶が聞こえ空間内の人の気配がどんどんと減っていった。それを感じ、いざ帰ろうと恭一は立ち上がろうとした。鞆に手をかけたときに横方に一つの気配が止まるのを感じた。

「千里・・・恭一、今日これから時間はあるか？」

声が聞こえ、その方向を鋭く睨むとそこにいたのは凧だった。

「何だ」

「会わせたい人がいる」

その物言いに恭一は訝しがったが、そこで凧が更に言葉をつなげる。

「お前の質問に答えられるかもしれない」

最後に出た言葉に反応して、そこで初めて恭一は完全に凧の方へと視線を向けていた。

「何処だ」

「私が案内する。が、私は少しこれから用事があつて少しばかり遅くなるから校門の前で待っていてくれ」

それだけ言つて凧は一つ頷いて返事をした恭一を確認するとすぐさま振り返り自分の席へと向かつていった。しばらくその様子を見ていたが、どうやら帰り支度がまだだったようで机の中から教科書類を取り出して鞆へと詰めていた。

恭一はそれを見て先に校門の前まで行っていることにした。

「よし」

「……………」

当然のように校門の前には和佐がいて、当然のように恭一に声をかけてきた。

恭一は何も答えずにただ和佐の事を睨み付けた。

黙ったまま互いに顔を合わせる。和佐はその場を動こうとしないし恭一もまた動こうとはしなかった。互いにぴくりとも動かぬまましばらく見つめ合っていると風が現れた。

「悪い、待たせた」

その声に恭一は一度風の方を物言いそうな目で見たが、すぐに先ほどからしているのと同じ視線を和佐へと戻した。一方、和佐はそんな視線は気に留めていないように平然と立っていた。

恭一の視線の先で見詰め合っていた二人に気付いた風がと短く言葉を入れる。

「ああ、上柳もついてきてもらう事になっている」

実直な理由を聞き、それだけで恭一はそれに興味を完全に失った。

「それで、俺らをどこに連れて行ってくれるんだ、凧ちゃん？」

「私が今厄介になっっている家だ。二人ともついて来ればいい」

和佐に向かつてそれだけ答えると凧は一人で歩き出した。後に恭一、和佐と続いていく。

ひたすら三人とも無言で歩いた。

もとより話す気などない恭一、先頭を黙々と歩いていく凧、そして最後に困ったような笑みを浮かべつつ最後尾についていく和佐。この面々では話せという方が無理があった。

三人が固まって歩いていて、なおかつ無言なのだからその集団は周囲から見ればかなり奇異なものだった。明らかに周りと違う雰囲気も纏っていた。

そして、その沈黙は目的地にたどり着くまで破られる事は決まらなかった。

「ここで少し待っていてくれ。今連れてくる」

一軒の家に入って客間らしきところに招いてから凧はそういい残して姿を消した。後には和佐と恭一の二人が残される。

「敵地侵入、みたいな感じか？」

和佐が顔を合わせずに独り言のように呟いた。恭一はそれに答えな

い。和佐の方も答えは期待していないようだった。もしかすると本当に独り言だったのかもしれない。

「お前、凧ちゃんに何かしたのか？」

今度は確実に和佐が恭一に向かって聞いていた。

「……溍槁には何もしていない」

「には？にはって事は他の誰かには何かしたって事か？」

目ざとく聞きとめた和佐がすぐさま恭一へと寄って聞き返す。

恭一はそれ以上何も言わずに、寄ってきた和佐に向かって牽制の意味合いで睨み付けた。

向けられた表情を見てとり、溜息をつく。和佐は答を諦めて顔を離し元の位置へと戻った。

「それにしても……」

「何かあるのか」

独り言のように漏らした和佐の声に恭一がすかさず反応を示した。少しだけ難しそうな表情をする和佐。

「いや、個人的な事なただけどよ、ここの家って確か……」

和佐が何か言いかけたところで景気よく戸が開いた。和佐は言葉を止めて、恭一とそろってそちらに視線を移した。

「待たせた」

最初に現れたのは凧だった。一言だけ言うと室内に入ってくる。先ほどの制服姿から私服と思われる服装へと着替えていた。

そして次に現れたのは一人の老婆だった。こちらは初見だ。そしてその後からは見覚えのある二人組みが続いて入ってくると、戸は閉められた。

「おま・・・」

「鼎！」

後から入ってきた二人組みのうちの片方の少年が恭一と和佐の姿を見た瞬間何か言いかけたが、もう片方の少女が叱って黙らせる。それで少年　確か鼎と呼ばれていた　は少し顔をしかめたものの何もいわなくなった。

そして恭一と和佐の正面に老婆と凧、そしてその斜め後方に鼎と、少女　佐久弥が控えるような位置に腰を下ろした。

「こちらがその二人です」

老婆に向かって畏まった風に凧が恭一と和佐の方を示した。

「そうか・・・」

老婆は短くそう言うと恭一と和佐の顔を交互に、じっくりと見やっ

「誰だ」

じつと見られて、敵意を隠そうともせず、無造作に恭一が声を上げた。もつとも恭一は初対面の相手に対しては大方同じ程度なのだが……それを知る者はこの場には和佐以外いないしその和佐自身を取り繕う気配は無かった。

「そうだな……こちらが話していた人で水月千代、この家の当主だ」

凧がそう言つてその老人の方を示した。

「で、そつちの二人は？」

和佐が横に控える二人を指して言う。初対面ではないにしろ何者なのかは全く知らない。

「わしの孫じゃよ。それぞれ佐久弥と鼎じゃ」

言つて、応えるように佐久弥がその場で軽く頭を下げた。一方鼎の方はふてくしたように顔を逸らしていた。

「ふうん……佐久弥ちゃん、ね」

呟きつつ和佐が佐久弥の方を見た。すると佐久弥は恥しいのか、その視線に顔を俯かせた。その様子を見て逆に鼎が和佐に対して顔を向ける。

「お前らに気安く呼ばれるいわれはないんだよ」

聞こえはしたが子供の戯言と軽く流して無視する和佐。

「これが上柳の孫の跡継ぎか」

どことなく 一方的に、気まぎれになった雰囲気のところでききなりの老婆 千代がそんな事を口にした。

「……資質は有りそうだがまだ全然、鍛練が足りぬようだな」

「じいさんを知っているのか？」

「知らぬと言わぬ」

そう言うとうとうしてか嫌そうに顔を歪めた。

「……そんな事は如何でもいい」

突然の恭一のその呟きにその場に居た全員が反射的に恭一の方を向き直る。いつの間にか恭一は立ち上がり、上から見下ろすように千代の事を睨み付けていた。

その姿がこれ以上は我慢できないと、語っていた。

「ミズキという男の事、知っているのか……」

今にも掴みかかるかのような勢いで恭一が言葉を発する。

「それを知ってどうすると？」

「殺す」

千代の言葉に迷わずそう答える恭一。その一言に千代と和佐以外の三人が驚愕の表情を表したが誰も何も言うことは無かった。

「上柳のは如何か？」

不意に恭一から視線を外すと、千代は促すように和佐にも聞いた。

「多分……止めない」

少しだけ辛そうに俯きながら答えた和佐に千代は一度納得したように頷いた。

「そんなことより……」

「その男」

恭一が更に言い出そうとしたところで恭一向き直って千代が話し出したのでそのまま黙る。

「ミズキという男の事は知らんが……神蕪伎かたなの家いへの事については  
よう知っておる」

「「なっ……！」「」

千代の口から出てきた『神蕪伎かたな』という言葉に反応して恭一と和佐がほぼ同時に声にならない声を上げた、がそれだけだった。いや、正確には声を上げて掴みかかろう、立ち上がるうとしたがそれは叶わなかったというべきか。

「それに知らぬまでもその男の事も大体の見当はつく。……何か  
な、怖い顔をして？」

言いたい事をいったのかそこまでいってから千代はややわざとらしく自分を睨んでいた恭一と和佐へと話をふった。

「……………何をした」

「さて、のお」

まさに一発触発、されどもう動いていてもおかしくない恭一未だに動かず。一方の和佐も微動だにしていなかった。

それに凧は何事も無かったような顔をしていて、佐久弥は心配そうなおろおろ顔、鼎はザマアミロといった顔をしていた。

「わしももう歳での、誰かに突然襲い掛かってこられると骨の一本や二本では済まんかも知れぬ……………」

そこまで言うってから千代は歯を食いしばりながらその場を動かさない恭一と動こうとしているのかはよく分からないがとりあえずは同じように動いていない和佐の方を交互に見た。  
双方とも動ける気配は無かった。

「上柳の……………経の老いばれから何か教わっておらぬのか？」

「少なくとも、こんな妖術じみたものは教わってないな」

「妖術、の……………あながち間違いでものうて」

恭一のように抵抗しているのかどうかは分からないが、表面上何事も無いように振舞いながら和佐が答える。そしてそれに少し考えて答える千代。

「それよりも・・・佐久弥」

「は、はい。なんでしようお婆様」

不安そうな眼差しで恭一と和佐の二人の事を見ていて、急に振り向いて千代に声をかけられた佐久弥は答えつつ、慌てたように背を伸ばした。

「今日は孫の世話になった者と会うからとどんな輩か楽しみにしておったが・・・こんな腑抜けとは・・・。これでは例えミスキとやらに会えたとしても無駄に命を落とすだけじゃの。そんな輩に助けられるとは・・・」

溜息を一つつき、口を開けかけたところで突然に関心顔になると改めて、ゆっくりと正面へと向きなおした。

「千代様！」

「恭一さん!？」

千代の動きに一瞬遅れて凧と佐久弥の叫び声はいる。

「御託はもういい」

声の主は恭一。その場全てを埋め尽くすような殺気を放ちながらそこに、居た。その存在だけで場の空気が明らかに張り詰めたものへと変わっていた。

その姿を見ていた四人は四者四様の反応だった。

佐久弥は立ち上がりかけて、その場で凍りついたように動きが止まっていた。

鼎はただ驚愕の表情を浮かべていた。

凧は二人と違い、千代と同じようにどこか感心するような顔をしていた。

そして和佐は、恭一を見てなにやらおかしそうに笑っていた。

「ほう……少しはやるか。まあ、そうでなくては……」

今にも襲い掛かってきそうな恭一に下がる事もせず、千代は感心し他表情で立っている恭一を見上げていた。その表情には明らかに余裕が窺えた。

「……知っている事全て、話せ」

研ぎ澄まされた刃の様なその言葉にも、千代は可笑しそうにしながら笑い声を押し堪えた。

「そんなに知りたいか？」

無言のまま睨み続ける恭一。場の空気が更に張り詰めたものになる。漸く笑みを止めると千代はその場から滑らかに立ち上がった。

「どちらにしる、それはお主の実力次第じゃな。初関は合格、といったところか。こつちじゃ……ついて来られ」

振り向いて、戸を開け千代は部屋から出て行った。が、一歩出たと

ここで振り向くと未だその場に居た恭一に振り向く。

「来ぬのか？」

促しに、無言のまま恭一が着いていった。

続いて、慌てて席を立った佐久弥が心配そうにして付いて行った。

次に動いたのは鼎。鼎は一度まだ動かずに座っている和佐をバカにしたような視線を一度おくってから出て行った。

後には誰も続かなかった。

「・・・凧ちゃんはいかないのか？ それともまさか俺と一緒に居たいとか？」

しばらくしてから未だ立とうともせずずっとこちらの事を視ていた凧に向かって和佐が可笑しそうに言う。

「莫迦な芝居はやめろ」

どこか呆れた響きを含ませながらそう言うと、凧は静かにその場から立ち上がった。

「俺としては裏方に回りたかったんだけどなあ・・・」

口惜しそうに呟く和佐。

「千代様もわかっていた。お前も同行者だ」

最後にそれだけ残して、凧は部屋から出て行った。

七宝伝～今起こったこと～

「ちえっ・・・あのガキは気付いてなかったけどな」

微笑みながら呟き、和佐は何事も無かったように立つと風が続いて最後にその部屋を出て行った。

十八話「無礼者の礼儀作法」(後書き)

七宝殿「居間で興っている事？」

銃は痴話「無法者の礼節殺法」

萌　　なんだか久しぶりな感じ……どうしてだろ？

……

萌　　やっぱり一人だと寂しいかも、こういう時は……今回のお客さん、とーじょー

鼎　　……で、何で僕なわけ？

萌　　だってえ、他に来てくれる人がいないんだよ

鼎　　他には姉さん、凧さん……くらいか、確かに僕が一番の脇役っぽいけど……

萌　　それに鼎君、今回は(、)、出てるでしょ

鼎　　……なんか引つかかる言い方だね、萌さん

萌　　そうかな？わたしは別にそんな事はないけど……

鼎 ま、別にいいけどね、こんな脇の下で何言っても変わらないし

萌 わ、脇の下って、それはさすがに言いすぎだよ

鼎 僕はただ事実を言ったまでだよ

萌 ……いいよ、もうこれからはここでわたしの物語なんて連載しちゃうんだから

鼎 勝手にすれば？ 僕の知ったことじゃないし

萌 うん、そうする……ということで今回の見所だね

鼎 いきなり話題飛びすぎ

萌 はい、時間無いからちゃちゃっと言っちゃうよ……題はずばり『お兄ちゃん』です……！

鼎 それじゃいつもと変わらないよ…

萌 別にお兄ちゃんだって悪気はないんだよ、少し言葉が足りないだけだよ

鼎 それを言い切るところはすごいと思うけど……あれは絶対にそれだけじゃないって

萌 それにあれば感謝してないね、お兄ちゃんの偉大さ加減が大きすぎ理解出来てないよ

鼎 無視しないでくれる？ とうかあれ、君の兄さんはもう病気の域だと思っよ、確実に

萌 そうだよ、人にお礼をする時はちゃんと誠意と真心を持ってしなくちゃ駄目だよ

鼎 …… まあ始めから期待してないしね、なんて言ってもあれにしてこの妹ありだろうね

萌 それにしても…もしかして鼎君シスコン？

鼎 な、よりによって何で僕が姉さん相手にそんな事言われなくっちゃいけないんだよ！？

萌 そ、そうなんだ、わかったからそんなに大声出さないで

鼎 それにそもそも既に兄妹の域を出てそうなあんただけはそんな事言われたくないよ

萌 ……え？（真赤）

鼎 ああ、もう、判ってるからそんなことで顔を赤らめるなよ！

萌 へへ…ふへっ

鼎 はあ、こんなの相手なんてもう嫌だ（そのまま歩いて退場）

萌 ふゃあん…て、あれ、鼎君、どこ行ったの？

七宝伝～今起こったこと～

……

萌　ま、いつか、それにもう終わりの時間だし……それじゃ、また  
次回十九話で会おうね

十九話「物事とは常に交換なり」

「・・・・・・・・・・」

無言のまま振り向いた千代を睨み付ける恭一。

恭一達が連れてこられたのは家の奥にあつた道場と思われる建物だつた。

「お主らの力量を知りたい。話すかを決めるのはそれからじゃ」

「何をする・・・」

恭一の言葉に千代はその後ろへと視線を向けた。それに恭一も後ろを振り返る。

「そうじゃな・・・上柳のは鼎、お前さんには佐久弥にそれぞれ相手をやってもらおうか」

千代の言葉に、和佐はどこか呆れた表情を浮かべ、鼎は不適に笑みを漏らしていた。凧は少しだけ眉を寄せ、佐久弥は驚きの表情で固まっていた。

「千代様、ここは私が・・・」

「いや、凧殿はそこで見ているとよい」

「しかし・・・」

「それに久しぶりに孫たちの成長も見てみたい」

そう言われると凧としては黙るしかなかった。素直に一歩下がりに引き下がった。

「・・・分かりました」

下がった凧を見てから改めて千代は残りに視線をめぐらせた。

「それではまず・・・」

千代がそこまで言いかけて前に出た者がいた。

「はい、先にやらせてください」

凧だった。声を上げて手をあげている。それに千代はチラリと恭一の様子を一度伺ってから頷いた。

「ふむ、まあいいじゃろ。上柳のも準備を」

「わりいな、恭一。さっさと済ませるからちよつとだけ我慢してくれ」

睨む恭一に詫びを一つ入れてから和佐も前に出た。それに恭一は何も言わず道場の端で腰を下ろすとそのまま目を瞑った。残りの、和佐と凧以外も近くに腰を下ろす。

凧は早速練習用である木製の槍を取りにいつていた。

「木刀、普通のと小太刀有るか？」

和佐のその問いに千代が頷く。それを確認して和佐も木刀を取り

にいく。

しばらくしてから二人は道場に向かい合って並んだ。

「ふん、いい気になれるのも今のうちだよ」

聞こえるか聞こえないか位の声で鼎が和佐に向かって囁く。それが聞こえていた和佐も見下しながら応えた。

「口だけが一丁前だな」

「な・・・!」

「いいかい?」

タイミングよく千代の声が入る。

「取り決め無用。勝負は相手が動けなくなるか負けを認めるまで。双方構え・・・」

それに従って二人が持っている武器を構えた。

「・・・・・・始め!」

掛け声と共に鼎が一直線に和佐へ向かっていく。

「莫迦か?」

槍というのは要は突くのが主な用途である。つまりは正面から向かってくるのならその軌道は呆れるほどに限られてくる。

和佐は莫迦にする眩きと共にその正直な一撃を楽々と避けた。そして片方の刀で鑓を押さえ込みながら小太刀で側面へと一撃を放った。

「はっ、莫迦はお前だ・・・よ！」

鼎はいともあっさりと槍を手放して下がり斬撃をかわすと、和佐に向かって両手をあわせて突き出した。普通ならそれは決して届く位置ではなかった。

それでも和佐は表情を曇らせた。

一瞬の判断。

次の瞬間には派手な打撃音がしたと思うと和佐が文字通り、吹き飛んだ。その拍子に和佐は片手の木刀が落ちる。そして今度も派手な音がして壁にぶつかり、ようやく和佐の動きが止まった。

「・・・・・・・・くっ」

鼎の悔しげな眩きが漏れ、それから場にしばらく静寂が訪れた。

「まあ・・・・・・・・少しはやるみたいだな、坊ちゃん？」

あれだけ派手にぶつかっておきながら特にダメージを受けた様子でもなく和佐が余裕の表情で壁際から立ち上がった。そして肩を振ってその調子確かめるようにしながら中心へと戻ってきた。

それを鼎は足元に落ちた槍を拾いながら憎たらしげに睨む。

「ま、その程度じゃ俺に勝てるにはまだまだみただけだな」

逆に和佐は余裕綽々で笑みを浮かべていた。

「で、まだやるつもりか？」

言つと和佐は鼎ではなく正面、千代へと視線を向けた。

「あ、当たり前・・・」

「そうじゃな・・・」

叫ぼうとした鼎の声と千代の声が重なった。それに驚いて鼎が千代の方を向く。

「そんな、僕はまだ・・・!!」

「強がりはいしない方がいいぞ。言つとくが上柳の業はどれも一撃必殺が基本なんだ。まともにくらつたら お前程度だと手加減は出来るけど、それでも たじやすまないぞ。ただでさえ不利なのにダメージあるお前じゃまず当たる。ちなみに俺の方は今でも殆どダメージないんだがな」

何か言おうとした鼎に割つて入るように和佐が忠告と取れる言葉を余裕の笑みを浮かべながら発した。

「ふむ・・・」

千代が少しだけ唸って沈黙が訪れた。

和佐の一撃は鼎に当たっていた。ただそれが完全ではなく衝撃は

完全には伝わらなかったのだ。ただ、それでもダメージは残る。一方和佐の方は鼎の攻撃が当たると思った瞬間自ら後方に飛んで衝撃を和らげ、しかもわざと刀を捨てて片手を空にして壁にぶつかる衝撃もその手と足の受身で殆ど吸収していたので先ほど言ったとおり殆どといっていいほど身体にダメージはなかった。つまり、態と派手に吹き飛んだからダメージは微少だったのだ。

しばらくしてその沈黙を破ったのは凧だった。

「千代様、私が上柳の相手をします」

そう言っただけで凧が立ち上がった。

「凧さ……」

「……いいじゃろ」

鼎が何かを言う前に千代がそれを認める。それを聞き凧が試合場へと上がった。

鼎はその場で一度和佐を睨んでから悔しそうにしながらも腹部を押さえて凧のすれ違いに試合場を出ていった。そして変わりに凧が試合場に立つ。

「私はこれを使う。お前も背中のもので使った方がいいぞ」

腰から抜いて、凧が手に持っていたのは短剣。古そうな、一目で使い込まれたと分かるものだった。殺傷能力はそれほど高くないものもちろん刃はついていていた。

軽く、挑発程度に凧がそれを前に出して構える。

「あぶねえな」

それを見て漏らしつつも和佐は笑みのまま足元に転がっていた木刀を蹴って場の外に出した。それから手にしていた小太刀も投げ捨てると背中に手を回した。そして抜き出したときには両手に小太刀が一本ずつ握られていた。もちろん、これも刃が付いているものだった。

「女相手だと気が引けるんだけどなあ」

そうぼやきつつ、和佐も構えを取った。

「その余裕、いつまで持つかな？」

「さあて……な！」

応えるが早いか、和佐が凧と距離を詰めた。当然その間に前回のような開始の合図はなかった。が、凧も当然のようにその状況を受け入れていた。

そもそも稽古には開始と終了がはっきりとあるのだが、たとえ殺意がなくても双方が真剣を持った死合いともいえる今では開始は相手が武器を持ったときであり、終了は相手が動けなくなるか真に負けを認めたときだけなのである。それが互いの認識であり、そこに相違は無かった。

間合いに入るなり和佐は踏み込んですかさず抜き身の右の小太刀を右下方へと斬り下ろした。

ガキッ

金属の重なる音がなり、凧が手に持っていた短刀がその斬撃を受け止める。

「言葉で言った割には手加減がないように感じたぞ」

「気が引けるだけで手加減するとは言っていないだろ？」

「それもそうだな……」

その密着状態でおかしそうに凧が笑った。

和佐もそれに笑みで返すと左手で重ねて斬り上げて十字を斬った。力負けして凧の持っていた短刀が弾かれる。そこへ和佐は更に右の小太刀で左へと薙いだ。

凧は一步前に詰めて和佐との間合いを外しその一撃を無効化、そのまま和佐の胸へ向かって短剣を突き立てた。

それに和佐はそれを左の小太刀で払ってそのまま左へと跳んで距離を離れた。

「手加減できる相手でもないからな……って、ああ、せつかくの二帳刀なのに。一つでも高いんだぞ、これ。弁償してくれるのか？」

口惜しそうに言った和佐の左の小太刀は途中の刃の部分が溶けたようにへこんでいた。

「お前が未熟なだけだろう」

そう言っつて再度構えた凧の短剣の周りにはいつの間にか火のような紅い靄がかかっていてそれは既に短刀の長さではなくなっていた。それはもはや靄の部分を含めると普通の剣と同じほどの長さだった。

「はぁ……… 厳しいねえ」

チラリと道場の正面を見てから和佐は左の小太刀を前方に出してその後方に右手を重ねた衝きの構えをとった。

「あんま、時間も無いみたいだし……これ一発で終わらせてもらっぞ」

凧も同じように道場の正面へと少し視線を向けると同じように頷いた。

「そのようだな」

同意して、凧の方はその剣を自分を中心にして円を描いて回した。そして改めて構えを取る。そのときにはその円の軌道上には幾つもの火の玉が浮かんでいた。

「いくぞ………」

囁き、和佐がその場から前の小太刀を手首と後ろの衝きを使つて飛ばして投げた。それと同時に片足を少し踏み出す。更にその瞬間に身体のスウィッチを入れた。そして右手を再び後方へと少しだけ引く。

凧の周りにあった火の玉はその円の中心へと集まっていた。高

熱、高密度の炎弾が風の正面に出来上がる。そのとき投げられた小太刀を避けた際に、それは火の玉の一つに当たってそれ共々蒸発した。

「させるかよ……くられ、式輝！」

既に加速を果たしていた和佐は投げられた小太刀に殆ど遅れることなく、方向修正をさせる間もほとんどなく避けた風に向かって衝きを放っていた。

「くつ……羅生蓮！！」

風の方もそれに殆ど遅れることなく集まっていた火の円盤の中心を赤の剣で衝いた。

和佐の小太刀と風の火の円が両者の間を交差した。

「……」

「……」

突き出した和佐の小太刀は風の喉に当たる数ミリ前で止まっていた。一方風の出した火の円は和佐の目の前にあり、繰り出した衝きはその円に当たる数ミリ前で止まっていた。ほんの少しだけ和佐の髪の毛から焦げたにおいが漂っていた。

双方が双方一瞬でも動けばどちらか、もしくはどちらにも命はない状況である。

「……それまで」

それを見届けて千代は終了の合図をならした。

同時に風の火の玉が消える。そして和佐も小太刀を風の喉元から退くと最初と同じように背中に回した。次の瞬間には和佐の手には何も握られていなかった。

風の傍から数歩離れてから突然和佐がその場へと膝を折り身体を倒すと、息を切らしながらも嘆き出した。

「あ……はあは……俺……の小太刀……かつは、は……が……」

息を切らしながら和佐が何とか嘆いたとおり最初に投げた小太刀は跡形もなく蒸発していた。見る影すらも無い。

「ふう……」

一方風の方も一息ついてから短剣を腰にあつた鞘にしまった。

「す……」

「すっげー。風さんってこんなにすごかったんだ!!」

「すごいです、風さんも上柳さんも!」

それを見届けて一気に鼎と佐久弥の二人が歓声を上げた。ただし鼎の方は風の方に、だが。当然ながら恭一はそれに参加していない。そこでようやく瞑っていた目を開けたくらいだ。

「ふむ……上柳の跡取り実力は大体分かったわい。ちなみに風殿のも、な。双方中々、かのう……」

千代の感想も終わるか終わらぬかの内に音もなく恭一が立ち上がった。

「・・・・・・・・・・」

無言のまま試合場の中へと向かっていく。それを鼎も佐久弥もただ呆けて見ていた。

「あー、わりいわりい。ちょっと・・・ふう・・・遅れたわ」

ようやく息が整って身を引きずるようにして歩いて来た和佐とすれ違って中へと入る。凧も和佐と同じように元の場所へと戻って行っていた。

「・・・・・・・・・・」

恭一が試合場の中心へと立つ。そして千代の方を睨んだ。それを受け取って千代が隣を見る。

「・・・・・・・・佐久弥」

千代にそういわれてようやく佐久弥の恭一に固まっていた視点が動きだした。

「あ・・・・・・・・はい」

「・・・・・・・・どうしたんだい？」

「いえ、何でもありません」

七宝伝～今起こったこと～

「それなら、いいね」

そんなやり取りの後、佐久弥は立ち上がると練習用の槍が並べてある棚へと少しふらふらとしながら向かっていった。

十九話「物事とは常に交換なり」（後書き）

七宝殿「居間で興っている事？」

「未来とか、この亡霊達」

萌：はい、今回のゲストは洸さんです

洸：はい、それにしても僕、いつになったらもう一度本編に出てこれるんでしょう？

萌：ありやいや、出てくるなり愚痴さんだよ

洸：あ、すみませんね、そんなつもりでいったのではないですから、お気になさらず

萌：はあ……でも作者さんの言い分だと少なくともこの章に出番はないんだって

洸：題名が仲間、なのにですか

萌：もしかして洸さんってお兄ちゃんの敵さん？

洸：それは……本編でのお楽しみということであっておきましよう、とりあえず今の所は

萌：……それもそうだね、今気まづくなったら嫌だものね

洸：はい、そうですよ……それで話の説明に入りましようか

萌：あ、そうだね

洸：今回の話は……おや、和佐君が活躍してますね、もう一人は……あれが凧さんですか

萌：あ、そういえば和ちゃんとは前に一度会ってるみたいなんだよね

洸：はい、あの時僕がぼろぼろで油断、と多少の焦り……ですかね、正直助かりましたよ

萌：え、それじゃあ洸さんがずば抜けて強いってわけじゃないんだ？

洸：それはそうですよ、和佐君だって相当のものですよ、それよりも圧倒的だなんて……

萌：ふうん、そうだったんだ……で、そういえばどうしてその時ぼろぼろだったの？

洸：……逃げてきたもので

萌：逃げてきた？

洸：はい、あんなのとなんて正面から戦えませんよ、少なくとも僕は

萌：？ 話がよく見えないけど……とりあえず今は関係ないから次に行くね

洸・はい、そうしてくださると助かります

・ 萌・それにしても・・・凧さんや和ちゃん、人間離れしてるよ・・・

洸・そうですか？

萌・だって人は火の玉を出したり見えない速度で動いたりなんてできないよ

洸・人には隠された力があるんです、きっと

萌・そ、それは・・・？

洸・後は次第に新しくなっていく用語説明でも見ましようね

萌・ヨウゴセツメイ？ 何それ

洸・そこな辺は割愛です、大人の事情で

萌・大人の事情？

洸・そうですね、大人の事情です

萌・それなら仕方ないね

洸・仕方ないんです、ついでに言うと大人の事情でもう時間が迫ってますんで僕帰ります

七宝伝～今起こったこと～

萌・え、いきなり、ってほんとに時間無いよう・・・あわわわ、に、  
二十話でまたね〜

二十話『未来と過去の亡霊たち』(前書き)

シスコ

七宝伝～今起こったこと～

二十話 『未来と過去の亡霊たち』

「……早くしろ」

恭一は既に手ぶらのままで試合場の中に入って待っていた。その声を聞いて佐久弥は並んでいた槍の中の一本をとると慌てて試合場へとかけていく。

「……あの？」

そして中心線へと立つと何うような視線で恭一を見上げて声を上げた。

「恭一さん、武器は何か……」

しかし恐る恐る出したその声にくら待っても答えは本人から返ってこなかった。恭一は会いも変わらず自然体のままで佇んでいる。結局代わりにとばかりに和佐が答えた。

「そいつは何も要らないよ、徒手だから」

それを聞いて佐久弥は完全ではないものの納得したようにして開始線へと並んだ。

「二人とも……いいかい」

千代の声に二人は互いに構えを取って肯定を伝える。

「始め！」

千代の開始の合図と共に先ず恭一が佐久弥との間を一気に詰めていた。佐久弥が驚きに固まった間の一瞬に射程の距離が長いはずの槍の間合いを通り越して先に自分の間合いへと入る。

即、拳撃を放った。

佐久弥は少し焦りながらも一撃目を槍で受け止めた。しかしすぐさま二・三撃目と続けて放つ。

右、左、下、そしてまた左と蹴りを混ぜて続く連撃を佐久弥は何とか槍の柄の部分で受け止め続けていた。しかし、それでもこの間合いでは佐久弥の分が悪いのに変わりはなく次第に恭一が押していく。次第に佐久弥が端の方へと追い込まれていっていた。

恭一の攻撃は休まない。

道場の端の方で追い込まれて逃げ場も無くもう中ってしまおうというところで、佐久弥が初めて攻撃を放った。その苦し紛れのような一撃は当然のごとく恭一に棍の部分を押まれて防がれる形となる。そのまま棍を引き寄せ相手を引き寄せようとする。

「っ！！」

しかし恭一が棍を掴んだ瞬間、佐久弥が気合の入った声を上げた。同時に佐久弥の持っていた槍の周りに一瞬光が舞い火花が散った。それに恭一の手が弾かれ、棍から手が離れる。

小さかったもののその衝撃が恭一の体全体に響いていた。脳裏にフラッシュバックするひとつの影。声を震わせる自分。

・・・・・・・・ふふふ

死に化粧をした一人のひと。頭が、混乱する。

あはははは

同じ様な事が、いつかあったような気がした。

温かったあの時。

(・・・・・・・・)

「旋推!!」

そして佐久弥がそれをチャンスとばかりに続けて身体全体を回転させ横薙ぎの衝きを放つ。

それに恭一は何の反応も示さなかった。むしろそれは目に入っていないようであった。ただ弾かれた棍へと虚ろな視線を追っていた。

「どうしたの？」

声が漏れた。

「・・・・・・・・え？」

「恭一！」

和佐が恭一のその様子に驚きの声を上げ、思わず立ち上がる。しかし和佐がどうする時間もなく事は進んでいった。

途中槍の動きが鈍ったがそれでも止まる事はなくその一撃は当然の

ごとく結局避ける事のなかった恭一のわき腹へと綺麗に入った。それは思いのほか破壊力を持っていったのか恭一を独楽の様に四分の一回転ほどさせて中央あたりまで吹き飛ばしていた。

「きよ、恭一さん!!!」

そこまで綺麗に中るとは佐久弥も思っていなかったのか、手にした槍を投げ捨てて慌てて吹き飛んだ恭一の下へと駆け寄っていった。和佐はその場に立って驚愕の表情で恭一の方を見て動けないでいた。千代や凧、鼎もまさかあそこまで綺麗にきまるものがあるとは思っていなかったのだろう、三人も驚いて少し焦ったような表情を浮かべていた。

しかしその心配とは別に、佐久弥が完全に駆け寄る前に恭一は起き上がった。しかしその表情は何か抜け落ちたようで、未だに映る双方の瞳には色は無く焦点も合っていなかった。

立ち上がった恭一を見て佐久弥、千代、凧、そして鼎の四人はそれを確認してひとまずほっと肩の力を抜いた。駆け寄る佐久弥の足が少しだけ緩まる。

しかし和佐だけは先ほどまでの心配とは微妙に違うものの緊張の表情に変わりはなかった。

「恭一さん……大丈夫ですか？」

心配そうにして佐久弥が恭一の元へと歩み寄っていく。

「まさかあそこまで綺麗にあた……」

「……さん、……ん……ちゃん、お……い……ん……」

「恭一……さん？」

しかし何の反応も示さずただ先ほどからずっと何かを見ている恭一をさすがに変に思ってたのか恭一の少し前で止まった。そして近くまで来たことで恭一が何かを呟いている事にも気がつく。

「……やん？」

ようやく視線を上げたが恭一の瞳の焦点はまだあっていない。そしてその瞳で佐久弥のいる方角を向いて何かを呟いた。恭一の瞳の中の焦点が一気に合わさった。

「今すぐ恭一から離れろ！！」

それとほぼ同時に和佐が叫び声を上げる。そして切羽詰った表情で二人の下へと駆け寄ろうとする。

「え？」

叫び声に佐久弥は思わず和佐の方へ視線を向けていた。それが決定的だった。

「逃げろおお！！！！」

「姉さん！？」

「「佐久弥！！」」

上から順に和佐、鼎、凧と千代となる。それぞれに叫んでいた。言葉はそれぞれ違っていたが意味はどれもさほど違いはなかった。す

なわち、『危ない』と。

聞こえた言葉にではなく、身体に感じた危険に佐久弥は恭一へと視線を戻した。

恭一は突然佐久弥のすぐ近くにいた。そして視線を戻した佐久弥に既に拳を放っていた。突然の事ではあったが佐久弥は驚きながらも半ば反射的に何とか顔だけを後ろに引いた。しかしそれを見計らったかのように恭一が更に一步踏み出して体重が後ろに乗った佐久弥の足をはらう。佐久弥は当然それにバランスを崩しその場に倒れた。

倒れこんだ佐久弥に馬乗りになった恭一が覆いかぶさる。そしてそのまま佐久弥へと向かって拳を振り上げた。

恭一の視線は、しっかりと佐久弥の事を捉えていた。

「くそっ」

和佐が走りながら背中へと手を運ぶ。尻も同じようにして腰から短剣を抜き取っていた。千代も立ち上がってその懐へと手を入れていた。

しかしどれも遅かった。明らかに恭一の一撃が佐久弥に入る方が早い。

狙いは顔面。遠目から見ただけでも確実に容赦のない一撃だった。

あの表情を浮かべているものが手加減などできるはずも無い。

そして、恭一がそれを振り下ろす。

それは見ている者にとっては絶望的な間合いだった。

「怖・・・い？」

ドンというすごい音がして完全にその拳は振り下ろされていた。

「佐久弥ちゃん！」

「姉さん！」

「「佐久弥！」」

それぞれが駆け寄ろうとした。しかしその後、微かに聞こえてきた声に四人ともその足を止める。

「どうしたんですか？」

静かに、微かに佐久弥の声が上がった。組み拉がれた状態で、しかし無事であった。

恭一の拳はその顔の横、その床へと打ち込まれていた。その床は割れている。もしそれがあのまま佐久弥の顔面に入っていたら下手すると頭蓋骨陥没もありえたかもしれない、それほどの割れ方であった。

それでも当の本人はそんな事は目に入っていないかった。

いつの間にか上げられた佐久弥の手が恭一の頬へと添えられる。

そして再び言葉が繰り返った。

「どうしたんですか？」

聞いていた他の、千代たちにはその言葉の意味が分からなかった。恭一も何も答えない。その代わりに暖かいものが恭一の頬を伝って佐久弥の顔へと流れ落ちた。自分の頬を流れ落ちるその水滴を気に

もせず、そして視線を逸らさず佐久弥は恭一の目へと視線を合わせ続けた。

「何が、怖いのですか？」

「いか……ないで……」

恭一がまるで子供のような情けない小声で咳く。

「え？」

「いか……いで……ちや……」

「何が……」

佐久弥はよく分からないといった表情をする。それでも恭一は何も変わらない。

「い……だ……よ」

その咳きを最後に恭一は瞳を閉じると全身の力を失った。そしてその身体は重力のままに佐久弥の上へと落ちていき重なった。

「きよ、恭一さん!？」

慌てと焦りで声をかけた佐久弥だったが恭一はすでにもう意識がない様で返事を返さないどころかピクリとも反応する兆しが見えなかった。明らかに全身から力が抜けていた。

「姉さん!」

「佐久弥！」

「佐久弥ちゃん、大丈夫か！」

それぞれに佐久弥と恭一の下へと駆け寄ってくる。千代もほつとした表情でしかしどこか複雑な表情で、それでももう腰を下ろしていた。

何の反応も示さない恭一に、佐久弥は少し迷ってから自分の両手を背中へと回すとそつとその両腕をそのまま恭一の身体へと添える様にして下ろした。

「大丈夫、ですよ」

駆け寄ってくる皆には聞こえないほどの小声で呟いて少し腕の力を強める。

「きつと……誰も一人に、しませんから」

そう、誰にも、すぐ間近にいなければ聞こえないであろう本当に小さな声ですぐそばにある恭一の耳元へと呟いたのだった。

二十話『未来と過去の亡霊たち』（後書き）

七宝殿「居間で興っている事？」

苦渋の「未来とか、この亡霊達」

萌 はい、今回のお客様は……何と、佐久弥さんです！

佐久弥 はい、どうも、こんにちは

萌 今回の話はお兄ちゃんと佐久弥さんが主だね

佐久弥 主だなんて……それに恭一さんだって…

萌 むっ、そう言えば佐久弥さん？

佐久弥 はい？

萌 どうしてお兄ちゃんの事は名前に”さん”づけで呼んでいるのかな？

佐久弥 それは……名前を聞いた時に苗字を聞けなかったからだからで特別な意味は別に……

萌 ふうん…ま、それはそれとして、やっぱりどうしてそんなに

お兄ちゃんと話せてるの？

佐久弥 え？

萌 説明には人見知りが激しい（特に異性）って書いてあるのに！！

佐久弥 それは…

萌 それに私と話している今だって、実はこれずっと電話だよっ、直接じゃないんだよ！？

佐久弥 そう言われても…

萌 も、何？

佐久弥 私にも解らないんですけど自然に言葉が出ているんです…不思議ですよ

萌 自然に…

佐久弥 はい、そうなんです

萌 ……ん、なんとなく…解る…と思う、その感じ……きつとわたしと同じ感じかも

佐久弥 え、今最後の方はなんて…済みません、聞こえなかったの…？

萌 ううん、なんでもない、気にしないで

七宝伝～今起こったこと～

佐久弥　？　そう言われるのでしたら

萌　うん、それで、今回の話……

佐久弥　恭一さん、大丈夫でしょうか？

萌　あ、そう……だね、それは………心配だよ

佐久弥　萌さん？

萌　もしまたあの時と同じにお兄ちゃんが戻っちゃったら……

佐久弥　どうしたんですか、萌さん？

萌　嫌だ、嫌だよ、そんなの

佐久弥　萌さん！？

萌　あの時はまだ気づいてない振りしてたから耐えられたの、今は耐えられないよ！！

佐久弥　萌さん！！………行ってしまいました

………

佐久弥　あれ……もしかしてわたしがこのまま終わらせるのかな？

佐久弥　そうみたい………それでは皆さん、二十一話でまた会いま

七宝伝～今起こったこと～

し  
ょ  
ひ  
ね

二十一話『過去と今の心』（前書き）

とんとんとん

七宝伝～今起こったこと～

## 二十一話 『過去と今の心』

視界に映っている色は赤、あか、アカ。

辺り一面が火の海だった。いや、火のためだけに赤に見えるのではない。そこら中に血が飛び散っていた、真つ赤な血が。足元には元々人の形をしていたであろう赤黒い肉塊もいくつか転がっている。

赤い世界の中、一人の女性が立っていた。表情は背を向けていて見えない。だがその手にはつい先ほど空気に触れたかのような鮮やかな赤い血を吸った一振りの刀が握られていた。

異常であるはずなのに、その中に見た僅かな日常に澱んだ思考はよりりよろりと不安定な足を運ばせて女性へと向かわせた。

「おね・・・ちゃ・・・？」

どうして怖がっているのかも分からぬまま彼女に手を伸ばす。

「・・・え？」

彼女に触れようとした瞬間、伸ばしていた手が何かに弾かれるように火花を散らして弾かれた。驚きのまま数歩下がる。

「な、なに？」

分かっていた。この場に在るものは全てが自分の日常とはかけ離れているのだという事が。

だが、それでも。

周りの状況が理解できなかつた。したく、なかつた。

「・・・・・・・・・・ふふふ」

突然その女性が笑い出す。其れは明らかに狂気を含んだ笑い。

「ど、どうしたの？」

言葉でそう言いながらも自らの足は狂気に震え、今にも崩れ落ちそうになる。

「あははははは」

「どう・・・・・・・・」

そして彼女が振り向いた。

その顔が、その表情が見えると思った瞬間。視界は暗転した。

「あっ・・・・・・・・」

恭一はなんとも言えず不快な気分で目を覚ました。全身が嫌な汗でびっしょり湿っている。

「こんな夢を見るなんて、な・・・・・・・・」

夢の内容ははつきりと覚えていた。いや、忘れられるわけではないのだ。それにただの夢でもない、あの出来事は・・・・・・・・

「最近は見えてなかったのに、な」

そこで漸く心に周囲の風景に気を向ける余裕が出来た。

映ったのは見た事の無い風景だった。少なくとも自宅ではない。

「あっ！」

声上がる。

いつもなら考えられない事であり恭一自身でも驚きだったが、そのときまで傍に人がいることに気がついていなかった。その事実に関心驚愕しながらその方向を見るとそこには佐久弥がいた。それで気を失う前の状況を思い出す。

(確か攻撃を受け止めて、その瞬間……)

そこまで思い出して思考にヒビがはいった。もっとも深いところの無意識、本能が自己防衛のためにそれ以上の事を拒絶する。

「恭一さん、大丈夫ですか？」

聞こえて改めてそちらに意識を向けると佐久弥の手には水の入った桶があった。そしてさらに布団の上に落ちているタオルを見て恐らく自分の額に濡れたタオルが置かれていただろう事にも気がつく。

「此処は……」

「あ、はい。ここはまだ私の家です。わたしとの立ち合いの最中に突然倒れられたんですけど……覚えていますか？」

「……ああ」

正確には倒れた事は覚えていなかったが記憶がぷつりと途切れていたので恐らくはそこだろうと判断する。

「ん、千里……起きたのか」

再び同じ方向から声が上がった。そちらに視線を移すと入り口付近

に凧の姿があった。

恭一が見返したのを見て取って凧が部屋に入ってくる。

「それなら単刀直入に言うが、千代様が言うには今のお前に話せる事は何も無い、だそうだ。後、上柳の方は用事ができたようので先に帰った。お前によるしく、と言っていたぞ」

後半部は蔑ろにそれを聞いて恭一は布団から飛び出ようとする。しかし腹部に奔った鈍痛に、手を当ててその場にうずくまる事になった。

思わず手を当てたそこは周りよりも少し熱を持っていた。この感触からして少し酷い打ち身であると推測。そこを殴打された記憶が無いのは恐らく記憶が途切れた後に受けた物だったからであろう。それでも動けないほどの痛みでもなかった。

「どういう、事だ」

その場から凧の事を睨み上げる。それをそのまま受け流して凧はさりと応えた。

「一度お前は倒れた。そして戦場ではそれは死を意味する。つまりお前はどんな理由が在るにせよ負けて、敗者に弁は無い。そして、それだけの事……という事だ」

それを聞いて恭一は下半身にかかっている布団を跳ね除けて今度こそ起き上がった。腹部に痛みはあるものの抑えられないほどではないのだ。そして無言のままその部屋を出て行く。

出た後の廊下は見覚えがあった。来るときに通った道だ。それを恭一は迷わず奥への道へと歩いていった。

「そつちは出口じゃないぞ。どこへいくつもりだ？」

後ろから声がする。しかしそれに答えずに恭一は先へと進んだ。

「あ、きょう……」

「誰に会いに行くのかは知らぬが、その先には誰も居らんぞ」

続いて上がったその声に恭一は振り返った。そこには風、佐久弥、そして恭一が探そうとしていた千代の姿があった。

「………言え」

千代を睨み今にも飛び掛るような勢いで言う。それに風が前に出て何か言おうとしたがそれを千代が手で制す。それに風は少し複雑な顔をしたが素直に従い後ろに引いた。

千代は恭一を軽く見返すと、明らかに大振りに首を横に振った。

「やれやれ……今聞いた事をもう忘れたのか？ それとも覚える事も出来ぬか？」

明らかに挑発を含む口調であった。

もちろん恭一は迷わずその挑発に乗った。

「関係ない」

その行動は今までの経緯からしても見通せた事だったがそれでも三人の中で佐久弥は息を呑んだ。

恭一は千代に向かっていく。このまま殴りこむ予定だった。

「ふん……」

しかしそれに廻りの誰も動こうとせず恭一の行動を見る。そして恭一が殴りにかかったところで千代がチラリと恭一の腕へと視線を送った。

「……………ぐっ」

たったそれだけで恭一の拳は千代に当たる前に完全に止められていた。しかもそこに見えない何かが当たったように、では無く体全体がそれ以上動けなく何か縄のようなものに縛られてしまっているようだった。そのため腕以外の部位も動いていない。

「これが見えんようでは……………例え素質があるうとわしに勝とうなんぞあと最低五年は早いわ。それにわしにすら勝てんようでは到底……………」

少し顎で指すように首を上げる。すると止まっていた拳は、今度は恭一自らの方へと向かっていった。そしてその拳は動けなかった恭一へと当たる。

恭一は自らの一撃を痛めていた腹部に再びくらってその場に膝を付いた。

「お婆様っ！！」

何か言いたげにして佐久弥が叫ぶ。

「何だい、佐久弥？」

振り向いて、千代が逆に佐久弥の方を少し見るとバツの悪そうな表情をして佐久弥は顔を俯かせて沈黙を守った。

それから思い出したようにして蹲っている恭一の方へと駆け寄っていく。

「この程度では返り討ちもいい所じゃて……。先刻申したことに変更は無い。それだけなら即刻、この場から居ない」

言葉に反応するように、恭一は佐久弥が支えようとした手を振り払いゆらりとだが腹部に手を当てて起き上がった。が、ダメージがあるのだろう。そこで少しよろめく。

「きよ、恭一さん、大丈夫で……」

「……………」

それを見て再び支えようとした佐久弥の手を改めて振り払うと、無言のままゆっくりと歩いて千代達の方へと向かっていく。その瞳の色はもはや怒り一色に染められていた。それ以外は何も感じられない。まさに狂人のそれだった。

「……………千代様」

凧が何かを言おうとし踏み出そうとしたがまたもや千代はそれを途中でさえぎる。そして千代は次に佐久弥へと視線を向けた。それにつられて凧もそちらへ視線を向ける。

佐久弥は困ったような、それでいて心配しているような、複雑な顔を恭一と千代の間で彷徨わせていた。

その表情を見てから凧が再び千代の方に視線を向けると先ほどよりも一歩前、つまり凧の前に出ていた。

恭一はそのゆつたりとしたままの動きで再び近寄っていく。それに対して千代の方も先ほどからなんら変わりはなく、あえて言うならば少し呆れている感じがするくらいだった。

ある一定の距離、つまり自分の間合いに入るなり恭一はその緩慢な動きから踏み込み、一瞬にしてその間を詰めた。同じようにそのまま殴りかかる。

しかしやはり先ほどと同じように恭一の体は拳を繰り出したその場で停止してしまっていた。

「身の程も判らんのか？」

そう言った千代をさらに強い殺気を発してにらむ恭一。その瞳の中にはもはや理性というものは感じられなかった。おそらくすでに話を聞きだすという本来の目的すら忘れているだろう。

膨れ上がった殺気はすぐさま弾け跳び、恭一はその場から無言のままその腕を振り上げた。体が動かなかつたはずなのに、である。

「むっ！」

千代が目を見張る。そこで今度こそ凧が千代の前に立った。その手にはすでに腰から抜かれた短剣が握られていた。

「千里、叩き出されなくなったら退け」

「・・・・・・・・・・」

それに恭一は無言の行動で指し示した。

何か切れる様な、弾けたような音が響いて恭一の振り上げていた腕が一気に加速に入る。

「ちっ」

凧もその音を聞き短剣を構えてそれに対抗する。

「駄目っ！！」

大きな声がして恭一の腰の辺りが重くなった。

拳を下ろすのを中断し後ろを振り向く。そこには佐久弥がしがみついていた。

恭一が振り返り、見上げていた佐久弥と目が合う。

その瞳は何かにすぎるような、とても見慣れたものによく似ていた。その瞳の意味は当時の恭一には理解できないものだった。それでも何故か胸が締め付けられるように感じていたのは確かであった。

そして今、それは何一つ変わらない。恭一にはその意味を理解する事はできなかった。

それでもやはり何も変わっていたものはなく、その瞳を見た瞬間かすかな胸の痛みと共に頭の中にあつた靄が晴れてきた。振り下ろしかけていた手をその場に下ろしていた。

「放せ」

次に発せられたその一言でその場に漂っていた緊迫感がほとんど一気に散った。凧はやや緊張しながらもその構えを解く。

「あ……はい」

その拍子抜けした態度に佐久弥は素直にその言葉に従った。手を離してから何故だかその場で顔を俯かせる。

そんな佐久弥の態度には見向きもせず恭一は再び千代へと向き直った。

「殺してみる」

何の高揚もなく恭一が言う。

その場にいた三人は耳を疑った。その言葉ではなく、感情を失ったその音に対して、である。しかしその後と同じ音が続く。

「まだ動き生きている。停めたければ殺せ」

「あ……」

後ろで何か動く気配がして恭一は反射的に振り返っていた。そして振り返りざま飛んできたそれを見極めると自らの手で掴んで停める。

「なん……」

「そんな事、いわないで下さい」

恭一の言葉の前にそれが入る。

佐久弥はまだ俯いていた。しかし先ほど掴んだもの、佐久弥の腕が小刻みに震えていた。

「自分の事を殺せ、なんてそんな悲しい事いわないで下さい!!」

そして顔を上げる。その両の瞳からは涙が溢れていた。

見て、訳も分からぬ憤りに襲われた。

「……がわかる」

恭一は再び沸きあがってきた衝動の赴くままに空いていたもう片手で佐久弥の首をつかんだ。そしてそのまま力任せに壁に叩き付ける。

「佐久弥！」

風が叫んでいたが恭一にはすでにその存在は入っていない。一方で

佐久弥の方も二人の事を気にする余裕などないのか見向きもしなかった。

「貴様に何が解る」

言葉と共に手の力が強まり、それに佐久弥が苦しさのため顔をしかめた。それにかまわず恭一は佐久弥の眼前まで迫った。

互いに目をそらす事のできない、これ以上近づくと触れ合ってしまうほど近い距離。

それに佐久弥も口から息を洩らし、目を潤ませながらも逸らさなかった。

「分かり………ません。……けど！」

そして震えながらではあるが佐久弥は自分の首を握っている恭一の手の上に自分の両手を重ねた。それは無理に引き剥がそうとするものでなく、ただ置いた、そっと包み込むだけのものだった。

「………だからと、いつて……放つて、もおけ……ませ………ん」

次第に息が詰まりながらも佐久弥はそうして意思のこもった強い瞳で恭一の事を見つめ続けていた。

果たしてそれと同じような瞳を見たのはどれほど前のことだったろうか？

いつの間にか逸らせなくなっていたその瞳を見続ける恭一。そしてその目の前でその瞳がゆっくりと閉じられた。それと同時に恭一の手を覆っていた両手が静かに落ちる。

その全てが恭一の瞳にスローモーションで映っていた。そしてそれはどこか現実味に乏しいものに思えた、そうまるであの夢のように。

残っている現実の感覚は自らが握り締めた相手との接点から伝わってくる人のぬくもりと力の抜けた重さ、それだけ。

「佐久弥！！」

「佐久弥あ！？」

二つの叫び声を聞いて不意にすべての現実感が一瞬にして戻ってきた。それと同時に手の力が抜けおちる。

「あ……………」

恭一の手から解放されて重力のままにその場に崩れ落ちる佐久弥。力なく身体が地面に倒れこむ。

呆けている恭一の目の前で駆け寄ってきた風が佐久弥の事を抱き起こしていた。そして仰向けにしてそつと自らの膝の上へと乗せる。それから首に手をやって、命ある事を確かめたのかほつとため息を一つついていた。

一連中、恭一はそれをただぼつと見ていただけだった。

「千里……………お前……………」

下方から聞こえてくる風の声がどこか遠くから聞こえるように思えた。すぐ近くから言っているはずなのに……………それに何故だか視界に歪みが生まれていた。

「……………きよ……………いち……………さん」

その声はすぐ近くから聞こえてきた。そう、この距離が正しいはずである。

声の聞こえた処に視線がいくと佐久弥がうつすらとだが眼を開けて

いた。しかしその垣間見える瞳はまだ明らかに焦点が合っていないかった。

「佐久弥、大丈夫!？」

佐久弥は風の方を見て微かに頷くと、再び恭一の方角へと視線を向けた。だがそれも微妙に位置がずれている。まだ酸素が十分に送られていないのだろう。

「だい・・・じょうぶ、ですよ」

そう弱々しく微笑んでから佐久弥は再びその瞳をゆっくりと閉じた。もう一度開かれる様子は、なかった。

どうしたの？

嬉しそうな笑顔。何がそんなに嬉しいんだろうと不思議に思った。

どうだ、参ったか

誇ったような笑顔。子供相手に大人気ないと、子供ながらにそう思った。

何がそんなに嫌なのかな？

困ったような笑顔。それでもやっぱり笑顔だった。

大丈夫、だよ。あなたは一人じゃない。だから、そんなに頑張らなくていいのよ

泣き出しそうな笑顔。その涙を見たのはそのときが初めてだった。

大丈夫、大丈夫だから、ね？

焼き付いて決して離れない。

それから、それから……

「う……あ……つあ、あ……あ、ああ……」

言葉にならない声。周囲が滲んでいく。

そしてその意識は浸蝕する闇へと墮ちていった。

絞り出された声が途切れた時、恭一のその瞳に映るものは何一つなくなっていた。ただそこに在るのは一枚の絵としての風景だけ。

虚像の現実。それ以外、何も在りはしない。

恭一は全てのものがはつきりしないままふらりとおぼつかない足取りで凧と佐久弥へと一步、また一步と近づいていった。その恭一に警戒を強める凧。

しかしいつもの恭一ならすぐさま反応していたであろうその空気の変化も、凧の臨戦の姿も今の恭一にとっては何一つ心に映ってはいなかった。

そのままふらりと二人に近づいて、その場に跪いた。

正体の分からないあまりの異様さに凧は咄嗟に動けなかった。同様に後ろにいる千代も動く様子はない。

それに、誰もが、恭一が何を考えているのかが分からなかった。

当たり前、何も考えてなどいないのだから

恭一は二人の傍で跪くと手を差し出してそのまま下へとおろした。そしてそれは倒れこみ尻の膝の中にいる佐久弥の胸へと収まる。

「なっ・・・！」

「っ・・・！」

その恭一の行為に尻と千代は思わず息をのんでその目を疑った。しかしその驚きに恭一が反応する事は無い。恭一にはそれが映らないどころか彼女らは居ない、のだから。

それがどのくらい続いたのか、恭一は何かを探すような仕草をした後、佐久弥の胸の中から手を離れた。

「傷、塞がっている・・・」

そしてポツリと、本当に小さな声で恭一はその言葉を洩らしていた。近くでその言葉が聞こえていた尻は首を傾げる。もとより佐久弥の胸の辺りに傷などついていないのだから。仮にあつたとしてもどうして恭一がそれを知る事が出来ようか？

恭一は次にそつとまるで大切なものを慈しむような感じで恐る恐ると佐久弥の顔の方へと手を差し出した。

しかし、それが触れる直前で止まる。そしてそれはそのままその頬に触ることなく恭一の下へと戻っていった。

「・・・・・・違う」

再び言葉を洩らすと恭一はふらり、とその場から立ち上がった。

次の動作に咄嗟に緊張を高めた尻だったが恭一はそのまま方向を百八十度変えた。

そして今度はその千代の方へとふらついている足取りのまま向かっていった。

全く真意が掴めず、再び警戒を強める千代と凧。

だがしかし、何故か千代は恭一を正面から見るとなりその警戒を一切解いていた。そして少し身体をずらして道を開けるようにする。それに凧が驚きを表す間もない。恭一はそのままより、よりりとその方向へと向かっていった。

そして、そのまま恭一はそこを通り過ぎた。

その後ろでは凧が驚いた表情をしていたがそれは恭一は知らない。

もとより今はその存在すら気づいていなかった。千代の事ですら道を明けていなかったらぶつかってしまっていただろう。

何も、見えない。

恭一はそのままそこを後にしていた。

そう、今の恭一に映っているのはただの一枚の絵、ただそれだけ。

例外は、ただ一人の彼女だけ。

そしてその絵の中を何かを求めて彷徨った。

何をしてても現実からは、過去からは逃げ出せはしないのに。それを分かっているはずなのに。

今はその現実さえないものだった。

「あ……れ？」

気がついたときそこは自分の部屋だった。しかしそこに至るまでの

記憶があやふやでどうもはつきりとしれない。戻ってきた記憶もなかった。

「佐久弥、大丈夫だったかい？」

すぐ目の前にたたずんでいた千代がいつもより表情をこわばらせながらも普通の口調で聞いてきた。そしてその口調の中に心配が含まれているのは明らかだった。

改めてわたしは気を失う直前の行動が思い出した。そしてその心配の意味を知った。

「あ、あれは……すみません、お婆様」

後悔、するはずもないが心配をかけた事をとて済まなく思い、顔を俯かせて何も言えなかった。それ以外いいようがない。今思えばあれは無茶以外の何ものでもないのだから。

その様子を見て千代は何かあきらめたようにため息をついた。

この状態になればもはやよほどのことが無い限りは千代の負けであった。なんだかんだいってもやはり孫には甘くなってしまうのが人の子というものである。

「別にいいよ、無事ならそれ以上何もいう気はない。それよりも・

・  
「……はい」

いつもよりも真剣で滅多に見せない千代のその口調に自然と緊張がはしった。しかし言葉を出す直前、千代は顔を綻ばせてとても優しい表情になった。

「もしかして……あの子に惚れているのかい？」

そう言った口元にはまだ少しの微笑み。

「そそそ・・・お祖母ちゃん！」

それを聞くなり顔を真っ赤にさせて叫んでいた。言葉も思わず崩れる。

目の前の千代はそれを見ておかしそうに笑った。学校自体も女学校であるしこういった話題は慣れていない。漸くからかわれた事にながった。

少しだけ怒ったような表情に笑っていたが改めて、千代の顔にいよいよ真剣な表情に変わった。それに膨れっ面を止めて表情に緊張を戻す。

その様子を見て取ってから、千代は口を開いた。

「佐久弥、あれにどうしてそこまで必死になる？」

「それは・・・」

真剣な口調だった。今まで感じた事も無いくらい。よほど切羽詰まったことがあるのか、無いのか。判断はしかねた。それに、うまく説明をする自信がなかった。

口籠っている事を悪い方向に取ったのか千代の口調が厳しくなった。

「それは、なんだい？」

「・・・分かり、ません。ただ、何も・・・見えなかったから」

重く、とても辛そうにして俯きながらそれを言い切る。

そう、本当にそれだけだった。底が無いのにどこまでも吸い込もうとする壺のようなもの。少し、怖くなった。

千代が残念そうに溜息を一つつく。

「そうかい……」

その姿に不安がよぎる。

「お祖母ちゃん……どうか、したの？」

「いいや、何でもないよ」

そうは言ったもののその表情は明らかに心配しないでいれるものはなかった。それでも浮かべられた表面上の笑みにわたしは言葉をそれ以上出せなかった。

千代はそれから静かに部屋から出て行った。その後から風が入ってきた。

「佐久弥、大丈夫なのか？」

起き上がっているわたしを見て一言。心配が伺えた。

「まだちよつと身体だるいけど……」

力なく言って笑みを浮かべる。

「千里の奴……」

風さんが思い出したようにその言葉を呟く。

その言葉に改めて、気を失う瞬間の事が思い浮かんだ。

「あの、恭一さんは……？」

「千里？ いや、あの後出て行ったが……」

それ以上は知らないようで戸惑ったように言葉を発する風。それも当然だった。わたしが心配だったからずっと家にいたのは明白なのだから。

あの、瞳が思い浮かんだ。

気を失う僅かに前、わたしの方に向けられていた、あれ。

暗い瞳、なんて物は生易しすぎる。あれが本当の、色のない瞳。

自分の事のように胸が締め付けられるように痛んだ。

二十一話『過去と今の心』（後書き）

七宝殿（居間で興っている事？）

二重の二重「格好と今野心」

萌　こほん、まずは前回の最後は取り乱しちゃって失礼しました

萌　って、そんなに落ち着いてるばあいじゃないんだよ

萌　まさか前回思ってた事態が本当になっちゃうなんて……わ、  
わた、どう…どうしょ…

おろおろ、おろろお、おろおろおろおろ

真衣　まあまあ、落ち着いてください

萌　で、でもこのままじゃ本当にお兄ちゃんが…

真衣　大丈夫、大丈夫ですから

萌　でもでもでも…

真衣　ああ、もう、話が進みません！！　大変申し訳ないのです  
が、萌さん退場ー！！

萌　おろおろおろおろ…

… …

真衣 それでは改めて、あとがきコーナーに入りたいと思います

真衣 はい、今回の話はですね……ふむ、ふむふむ、フムム

洗 なにやら本編は大変みたいですね

真衣 そうみたいですな……って貴方、誰ですか!?

洗 いやいや、自己紹介が遅れて申し訳ありません、僕は神谷洗  
というものです

真衣 あ、これはどうもご丁寧に、わたしは弧月真衣です、よろ  
しく願います

洗 はい、真衣さんですね、今後ともどうぞよろしく願いま  
す

真衣 はい……ってそうじゃありません!! 違うでしょっ

洗 まあまあ、そう熱くならず……これは仕方ない事なんですよ

真衣 仕方ない?

洗 はい、舞さんも和佐君も色々忙しいみたいですから……

真衣 ああ、ぶつちゃけ言っちゃえば暇なのがわたしたちくらい

しかないって事ですね

洸 　　やはりその通りです

真衣 ……………切なくなるのでこの話は止めましょう

洸 　　そうですね、時間もありませんし……では早速ですがこの話の感想をどうぞ

真衣 ……まあ、今のところ年長である千代さんも大変そうですね、て所ですか

洸 　　ええ……あ、それと重要な所はこの話では恭一君の回想に出てきた女性、ですね

真衣 　　誰なんでしょうね、気になります……恭一さんの傷痕とじしづま、っ  
ぽいですからね

洸 　　ま、気にせずともそのうち分かるでしょう、恭一君の成長と共に

真衣 　　恭一さんが成長なされば……ですけど？

洸 　　まあ、……それこそ今後の展開に期待、という事でまとめた方が良さ気ですね

真衣 ……………と、というのがいい所でしょうか、それでは突然ですがさよならです

洸 　　はい今回はこれで、僕に次回があるかは分かりませんが、皆

七宝伝～今起こったこと～

様はまた二十二話で…

? 萌 ……………どうして皆お兄ちゃんの心配してくれないの〜!?!? ?

二十二話「縛り者は過去か現代か」

気がつく和外にいた。

いや、気がつくと言っつのは正しくない。あの家の中で闇が蝕み始めた瞬間から、そして今も身体を動かしているのは恭一の意志ではなく一つの深い衝動なのだから。

だからここが何処か、外か内かと言っつ事は意味を成さない。今まで何をしていたかと言っつ事も僅差ない。

ただ変わらず一つ、恭一が持ち続けたものがあつた。

恐怖。

怖かつた。恐ろしかつた。何か、かは知らないし知る気もない。もしかすると分かつているかもしれないがそれこそが、知る価値こそ恐怖だつた。

脳裏に焼きついて離れないのは今の情景ではなく過ぎた時のもの。赤い、アカイ色が、炎の熱さが、いや、そんな細事ではなく怖いものはあの事だけ。

今、恭一の目の前に空き地があつた。街灯すら疎らなその通りは日が沈んだ今となつては一寸先さえ暗闇に包まれている。

それ以上に目の前の空き地は闇が深かつた。まるで何かを引き込むような闇が空き地の先へと誘いを求める。

そんな暗闇さえ恭一の瞳には関係しない。

ぼつ、と頬に冷たいものが当たり恭一は自然と顔を空へと向けた。それは衝動にも似た自然の行為。

上を向いたそれはもう一度恭一の頬に当たると、つう・・・と頬を伝い顎から喉へ、身体を離れて吸込まれるように地面へと落ちていった。

頬に残った涙の後を拭う事無く、恭一はその闇の中へと一歩、また一歩と歩を進めて、誘われて行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

テーブルの上にあるのは数時間前までは湯気を昇らせて芳しい香りを経たせていただろう二人分の料理。

萌はテーブルに付いた二つの椅子の片方に座っていた。力なく俯いて、料理に手をつけることさえしていない。

対面の椅子には本来座るべき相手、両親が不在の今、仮初の主である少年の姿は無かった。

今にも泣き出しそうに、いや、泣き出す力すらないように、萌はたった一人の誰よりも近い兄の帰りを二時間弱の間、身動きさえせずに待っていた。

微かな空気を振わせる音。

呼鈴が鳴るその刹那、今まで彫刻のようですらあった萌はその場から動いていた。

跳ねるように、一切の乱略を許さず一目散に玄関へと向かっていく。

永劫とも感じる数秒の後、辿り着いた玄関。その取っ手へと手を伸ばし、仕切を空けると同時に、

「お兄ちゃ・・・」

「きょうい・・・」

発しかけた言葉、発されかけた言葉は止まり、永遠に出てこない。来訪者と萌の二人は呆けるように互いを見て、いや、ただ視線だけを向け合っていた。

先に我に帰ったのは偶然、萌の方だった。

「な、なに・・・和ちゃん？」

何とか笑顔を作り、少なくとも本人はその気で来訪者、和佐へと声をかける。同時に、和佐の方は自らの用事が済んだ事を悟った。

「あいつ、居ないんだな・・・？」

それはどれ程の望みか。だが声色は疑惑と言つよりも確認のそれに近かった。

答えは言葉でなく表情ではつきりと返る。  
引き攣った萌の笑顔は直ちに消え去り、表情には何も浮かばなくなつた。

見たくもない、それが全ての返答。

「あいつ、何が……っ!？」

一瞬和佐の表情が強張り、だがすぐさま何かを考え込むように萌から視線を逸らす。

だが所詮は無駄な行為。それを見逃す萌でもない。

「お兄ちゃん……の事、何か知ってるの、和ちゃん？」

声色は酷く落ち着いたものだった。だがそれこそが恐怖。落ち着いているなどんでもない。ただ単に、何も籠っていないから落ち着いて聞こえるだけ。

瞳を見れば全てが解る。僅かに悲観、それ以外は何もない。

だからこそ、和佐は視線を逸らした。知っているからこそ決して見たくないものだったから。

全てが逆効果だとは知らず。知っていたならば逸らしはしなかつただろうに。

「知ってるんだね、お兄ちゃんどうかしたの、大丈夫なの？ 平気なの?? 無事なの??? 今どこにいるの、ねえ和ちゃん!!!」

責めるように、だが乞うように、そして何処か狂ったように、萌は和佐に攫みかかり激しく聞きたてる。

和佐は変わらず視線を逸らし、強く噛み締めたからかその唇からつっ、と血が漏れた。

それさえ萌には気付かないのか、攫みかかった和佐を一層激しく揺さ振る。

「お願い、和ちゃん。教えて、教えてよっ・・・お兄ちゃんが何処にいるのかどうしたのか、知ってるんなら教えて!!!」

和佐は何も言わずにただされるがまま。

「ねえ、教えて・・・教えてよ！ 和ちゃん、和ちゃん!!!」

涙が溢れ出ている、必死なその表情。

僅かに覗いた視線にそれが入って和佐は力なく、萌の肩を手にとって身体を引き離れた。

期待に濡れた瞳が見上げてくる、それを直視せずに。

「悪い、俺もわからない」

「っ!!!」

萌の瞳が大きく見開かれて、

「萌ちゃ・・・!!!」

和佐の反応は一瞬遅かった。

靴も履かずに薄着のまま、萌は和佐をすり抜けて外へ、夜の街へと出て行ってしまふ。伸ばそうとした手も逸らした視線の為に反応が一瞬遅れて、空を切る。

「ちっ」

舌打ちをする間も惜しく、和佐はあいたままのドアを叩き閉めて萌の後を追って身を翻す。

直後、ぽつり、と。

空から落ちた雫が一滴、また一滴。数分も経たないうちにそれは完全な雨に変わった。

雨が降り続いていた。あの日と同じ、冷たい雨。

そこには雨音以外何も無い。物音一つ届かない。

あれだけ五月蠅かった野次馬の声も、今はもうない。

そもそも場所自体が違うのだがそれに気付く余裕も当然なく、恭一はただずぶ濡れの身体を僅かに震わせた。それ以外は動く事さえしない。

一点のみ。

空き地の一点、その先にあるものへと視線を送り続ける。ただそれも眼に映っているのか、定かではない。

その静寂の中、破るように駆け来る足音が二つ。

「お兄ちゃん!!」

次の瞬間、どんな静寂でも届かなかったというのにその背後からの声は実に呆気なく恭一の元へと届いた。

空虚なはず。恐怖しているはず。だがそれ以上に、酷く感じる感傷に、恭一は緩慢に振り向いていた。

向いた先にいたのは全身雨に濡れた少女。その髪からは水が滴り落ちて止まらない。駆け寄ってくるのが目に入る。

映った風景は何処か懐かしさを感じさせ、それでいて見た事が無い、あるはずもないもの。

少女の名は何と言ったか。

「も、え・・・?」

浮かぶより先に肉体がその答えを発していた。だがそれも僅か。冷え切った身体は震え、声は霞んで何処にも届かない。

だと言っのに、

「お兄ちゃん!!」

彼女は当然のようにその呟きに言葉を返した。

駆け寄り、向かってくる萌の姿が闇の中でも見えるような距離になり、後数歩で手が届くと言っのに彼女は止まっていた。否、止まらざるを得なかった。

在ったのはひとの姿。だが見たのは久しくなかった彼の漆黑に澱む澄んだ瞳。

「お、に……ちゃん？」

震える声。

困惑、ではない。それは恭一と同じ、けれど違う恐怖。

恭一は何も返さない。口から出た言葉、彼女の姿。だから彼女が何者であるかなど当に分かっている。それでも、恭一は萌の事を見てはいなかった。

「そ……な……」

目の前の少女の体が激しく震える。顔色は血が引けたように真っ青になり、通り越して真っ白へと移る。

直視出来ない、とばかりに彼女は俯いた。そして現実を見たその瞳は色が削げ落ちていき、やがてはその兄と同等のものへと

「萌ちゃ……っ!!」

遅れてきた二つ目の足音に恭一は萌を通り越しその姿を見止めた。全身ずぶ濡れの、男。彼は間違いなく和佐であるが。

目の前の濡れた少女と近づいてくる一人の男。酷く懐かしく感じる、儚い夢のように。哀しむ現実のように。

「ミズ……キ」

その光景が今に重なった。

あれが誰であろうと関係はなく、重なるその男の名はミズキと言  
う。

ならば、全てはもう同じだった。恭一の中の色全てが一色へと塗  
り潰されていく。怒り、憎しみ、恐怖、なんでもいい。ただ、殺意  
と言つ名の害する目的さえ同じならば構わない。

「ミズ、キイイ!!!」

「っ!?!」

叫び声が響いたのと、萌が肩を震わせ顔を上げた事、和佐が息を  
呑みつつも己の武器を抜き構えた事、そして恭一が動いたのはほぼ  
同時だった。

「お兄ちゃ……」

消えるような声。だがそんなものに今の恭一が反応などするはず  
も無い。

萌が伸ばした手は恭一が通り過ぎた後を切り、恭一の姿はもう萌  
の背後へとあった。

驚くべきはその脚力か。和佐が一刀の小太刀を手にしたとき恭一  
は既に直前へと迫っていた。

「くっ」

挟んだ刃の腹に恭一の拳は打たれ、刃が反る。慌てたようにすぐ  
に刃の裏へと和佐の拳が当てられて、反りが止まる。

「きよ、恭一、待て俺だ和佐だ、目を覚ませせて・・・ああ、分かんねえのかっ！！！」

「 殺す」

放たれる拳を刀で受け止めつつ、必死に似た和佐の叫びに答えは単純なものだった。

だから恭一の暴拳は止まらない。

邪魔な小太刀を鷲掴む。刀は引いて初めて切れる。だから、刃が手を傷つけるより先に恭一はそれを支点にして跳んだ。

蹴りを放つ。

「っ！！」

和佐は身体を捌いて蹴りを避ける。が、構う事は無い。恭一は着地と同時に身体を回して肘を打った。

身を伏せた和佐にその一撃はまたも空を切り、

「ぐっ」

肘を折って打った掌底は咄嗟に頭部を庇うように挟まれた小太刀によって防がれた。

間置かずに下段へ蹴りを放ち、動く気配を見せた小太刀を手で押し留める。

「ちよ」

っと待て、と言う言葉を最後まで吐かせずに恭一の蹴りは見事に伏せていた和佐のわき腹へと捻入った。

左手の痛み　和佐が引いた小太刀によって斬られた　に構わず、地面へ転がる和佐へと更なる追撃を

「だめえ!!!」

動きを止めた。

声の方を向き、歩み寄ってくる萌を視界へと収めた。

「お兄ちゃん。駄目、だよ」

そうして、新たに目に入った獲物へと恭一は飛び掛り

「萌ちゃ、ちっ!」

横から来た、初めて殺気の籠った剣戟に大きく跳んでそれをかわした。

「恭一、てめえ・・・今誰を攻撃しようとしたか分かってんのか?」

一瞬の内に身を起こし、萌の前に立ちはだかるようにして和佐は殺気とも怒気とも取れるものを全身から発していた。

「か、和ちゃん大丈夫・・・」

「萌ちゃん、離れろ」

「え？」

「今の恭一に何言っても多分・・・無駄だ。だから許せとは言わないし第一余裕もないけど、俺は今から徹底的にこいつをぶちのめす」

「で、でも和ちゃ・・・あ」

跳んでくる和佐に恭一は当然、迎接する。

斬りかかってきた刃を紙一重で避けて一足で間を詰め、和佐に密着しながら小太刀を持った腕を押さえ込む。

「ちっ」

面に向かって打ち込まれてくる拳に構わず、恭一はそれに合わせるように拳を放った。

互いの拳が互いの頬を捉えるがどちらも構わない。いや、相乗効果で和佐の体制が僅かに崩れた。

出来た隙にすかさず恭一は打って出て、いつの間にか空中に投げられた小太刀が拳と和佐の身体の間にあった。しかも刃は拳を向いてある。

打ち出した拳、それをぎりぎりのところで止めて、容赦ない蹴りが腹に決まった。

「っ」

すかさず振り下ろされた刃に恭一は手を離して大きく後ろに跳んだ。

二人の距離が開く。  
だがそれも一瞬。すぐさま和佐は恭一を追撃し、恭一はそれを迎撃し、

「……やっぱり違う……！」

その叫びに和佐が止まり、そして恭一も萌の方を向いていた。

「こんなの違うっ！！ 間違ってる！！ どうしてお兄ちゃんと和ちゃんがこんな事もなくちゃいけないの！？ お兄ちゃんはわたしのお兄ちゃん、和ちゃんはわたしの友達、お兄ちゃんの友達なんだよっ……！」

絶叫は、今度こそ恭一の関心を引くのに十分な音量だった。

「お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ！！ わたしを置いて往かないって、傍に居てくれるって言うてくれたよね！？」

恭一に答えは無い。

届いていないのか、届いて尚聞こうとしないのか。じっと、動きを止めて萌を見ていた。

「何があっても、お兄ちゃんはわたしのお兄ちゃん……だよな？」

萌は恭一しか見ておらず、恭一も今はただ萌を見ていた。  
瞳に映るのは空虚な今。

その瞳に、その姿に、その心象に、恭一は湧いた恐怖と憎しみに、萌へ向かって一直線に駆けていた。

「っ、待て恭一!!」

後ろから和佐が追ってくるが、構わない。今は一刻も早く目の前の少女を、否、目の前の恐怖の具現を消し去る事が先決。あれが誰かなど関係はない、はず。狂わんばかりの具象を潰し熨す。

「・・・お兄ちゃん」

萌は動かない。向かってくるその人を正面から受け止めるべく、心底信頼するようにその場で両腕を広げた。

更に加速。

「駄目だ、止める・・・萌ちゃん!!」

和佐の必死の語りに、萌はにっこりと無言の笑顔で応えた。

迫った恭一は振り上げた拳を微塵の躊躇いも見せずそのまま萌へと放

風が吹いた。

一陣の風。そして恭一の拳は誰も居ない空間を切っていた。

「ぜっ・・・っ、は、はっは・・・かつ、く・・・は、は・・・」

「なん、で・・・」

恭一から遠く離れた場所に和佐と萌の姿はあった。和佐は息も絶え絶えに萌を抱きかかえるように地面に倒れこみ、萌は目を見開い

て自我茫然とした様子で恭一がいる場所、自分が居た場所を見ていた。

僅かに視線を巡らせた後、恭一は離れて倒れこんでいた二人へと視線を止めた。

映る瞳は恐怖と憎しみに、色が変わる事はない。たった今誰をどうしたか、など浮かんでもいなかった。

「何で!!」

その叫びは恭一に向けたもの、ではなかった。すぐ傍に倒れこんでいる和佐へ無慈悲に攫みかかる。

「何で、和ちゃん!! 邪魔しないで!!」

「う・・・はっ、は・・・ぐっ」

和佐は息を切らせて身体を揺すられて、答える事もしない。そんな二人に構う事もなく、恭一は一步、萌たちへと踏み出す。

「っ!!」

荒立つ呼吸も整えずに和佐が身を起こして二人の間に立ちふさがる。

恭一が踏み込んでくるなり、和佐の腕が振られた。奔った一閃に恭一は後ろに跳んでそれをかわす。

「和ちゃ・・・」

「黙れ!!」

「っ」

「・・・頼むから、下がってくれ」

和佐の牽制に恭一はつかつには近づかない。まだ息が荒れているとはいえ気迫は明らかに前以上。それが一気に詰める事を躊躇わせていた。

「・・・頼む。ちゃんと現実を見てくれ。あれは・・・本気だ」

答えは無かった。

最早構わず、忍耐が切れた恭一が動くより一瞬先に和佐が動いた。和佐が浮かべた瞳は恭一と全てが逆であり、何一つ違うものがない色。背中のひとだけは何としても守り抜くと言っ決意の表れ。

だが、そんなもの。

後ろに控える恐怖の元を断つのに邪魔な障害物に、恭一は容赦しない。

その障害に迎え撃つべく振り上げた拳を恭一は放ち、

「ふっ」

間合を見誤ったのかそれは空を切った。

そうして間合をわざと遅らせた和佐が上段に構えていた小太刀をそのまま右下方へと斬り落してくる。

かわす事は即座に断念。

振り下ろされた刃の軌道を手の裏を当てて逸らし、更にその拳で掌打を繰り出した。

狙いは顎。

だがその一撃は刀と共に体勢を落した和佐の頭上に行く。更に追いつちに返し刀が迫った。

恭一は身を反らしてかわす。が、続いて来た側面からの蹴り上げに側頭部を打たれる。

和佐が身を起こし、重力に従い恭一の頭部を打った足は頭を巻き込んだまままるで刈り獲るように振り切られ、地面へと着地した。

「がっ」

一応受身は取るものの、地面に叩きつけられた威力はそれほど弱くない。激しく脳を揺られた衝撃に恭一の意識が一瞬飛ぶ。

当然、和佐はまだ止まらない。ここで止めたらその一瞬の内に自分が殺られる事を知っているから。

逆手に持たれた小太刀が恭一の頭に狙って自重と共に振り落とされる。

「・・・っ」

突き立てられる刹那、漏れる息も漏らさずに和佐の手から小太刀が零れ落ちた。それは恭一の顔すぐ横へと突き刺さる。

和佐の動きが止まった。

出来た大きな隙を見逃すはずもなく、恭一は揺れる焦点を無理矢理定めると逆に手を交差させて和佐の首元を攪み自らに引き寄せた。下腹部には膝を叩き込み、落ちてくる勢いと合わせてそのまま強く蹴り上げた。

和佐の身体が空中で回転する。

更に交差させた手で縦に横回転を加えて、最後に大きく一引きした後に手を離れた。奇妙な回転を行いながら和佐の身体は恭一を通り越していく。

「和ちゃん!!」

「がつう・・・」

萌の叫び声と同時に恭一の頭上の地面へと叩きつけられた。

まだ朦朧とする頭を軽く振りながら恭一は身を起こす。

一方で和佐は身を起こす事は無かった。あの投げられ方ではろくな受身も取れはしないだろうし、僅かに整いかけていた息も今は絶え絶え、過度の運動による呼吸困難で呼吸をするのさえ苦しそうな様子だった。意識も朦朧としているかもしれない。

「は、は、は、は、は、は、は、は、は、は・・・」

ただ短い息だけが漏れ出る。

ようやく障害物を除け終えた恭一はそんなゴミに構う事はなく改めて萌へと、恐怖の具象へと顔を向けた。



絡まった手に、引き寄せられた温もりに、恭一はようやくただ一人のかけがえの無い妹の姿を見た。雨と泥水でぐちゃぐちゃの、悲しげな表情を浮かべたものだったが見間違えるはずもない。

絶対、破ったら私が赦さないわよ

あの時の誓約<sup>けつぎ</sup>。

どうして今になってこんな約束<sup>ちか</sup>を思い出すのか。失くしていたはずの胸の中が何故だか激しい痛みを訴える。

「そうだよ、お兄ちゃん。わたしは萌、だよ」

悲しげな表情が儂く、だが微笑みに変わった。

「どうして……此処、は」

気が付くと、憶えのない場所に立っていた。何処かの空き地。自分分は泥まみれで、萌も泥まみれだった。

「っ!!」

激しく頭が痛み、その刺激に数枚の写真のような情景が頭の中を駆け巡った。

自覚はまるで無いが、そこには和佐に殴りかかっていく自分がいた。振り返り見ると、確かに情景通りに和佐が地面に転がっていた。

「お兄ちゃん、大丈夫……？」

不安そうに見上げてくる瞳。

それはいけない。それだけはいけない、と。

手を上げて大丈夫だとの意を伝えようとしたが、叶わなかった。手は上がらず、自分にはどうしようもないほどに全身に力が入らずに身体は萌へと寄りかかっていた。

それでも大丈夫だと伝えようとして動かした唇は酷く凍えていてどうにも自分の意思どおりには動かずに、言葉は口から漏れ出なかった。

ただ、やっと出したのはそのときの空色を眺めての一言。

「もう・・・夕食、か」

最後まで言えたかどうかも分からないまま、恭一はゆっくりと、だが確実に意識を遠ざけていった。だがそれは以前の侵蝕されるような気色悪さはなく、繋がれた手と身体に伝わってくる温もりに覆われたほっとするようなものだった。

自ら全身の力を抜き、恭一は意識を手放した。

今度は取り乱す事無く、萌はゆっくりと恭一の身体を抱き寄せて、大切なものを扱うように包み込んだ。

「ううん、まだ大丈夫だよ」

寝ている子を起こさぬように優しく呟き、自分も身体を相手に預ける。

萌の身体は恭一同様に酷く冷え切っていた。それでも互いに触れ合う部分が時間と共にじわりじわりと温もりが戻ってくる。

「だからお兄ちゃん、早く、帰ろう？ もうご飯冷めちゃってるけど、また暖め直すね？」

微笑んで恭一の頬へと手を伸ばして、萌は糸切れる操り人形のように恭一へと体重を預けた。

手は宙を切り、頬には触れずに垂れ落ちた。

「あ・れ・れ・れ……？」

睨みがゆつくりと下りる。

恭一と萌の身体は支えをなくして互いに横へと倒れた。倒れた二人の身体は、やはり雨に凍えて酷く震えていたが、互いに重なりあう様はまるでそれぞれがそれぞれを護り合っているようだった。

「っ、萌ちゃん！！ 恭一……」

息を整え、膝を立てた和佐は軋む身体に無理をいいながら二人へと身を引き摺りながらも近寄った。こんな雨の中、もう痛みや息がどうこうと言っている場合ではない。

大いに苦勞して二人へと辿り着き、二つの倒れた身体を抱き起こす。

酷く身体は冷えているようだったがそれだけで、色々な意味を込めて和佐は一度深く安堵の息を漏らした。

温めるように、二人の身体を抱き締める。

「くそっ、くそっ・・・くそっ・・・たれ・・・」

和佐でも、恭一でも、まして恭一でもなく、誰も責めないままそれでも和佐は雨の中でその言葉を吐き続けた。

雨が止むほど雲はまだなくなっていない。

二十二話「縛り者は過去か現代か」（後書き）

七宝殿「居間で興っている事？」

甘庭「縛った干物は恰好の現代化」

佐久弥　今回は萌さん、風邪でお休みだそうです

鼎　だから僕たちが引き受けた、と？

凧　そのようだな

佐久弥　だってわたし達、今回は出番が無いでしょ？

鼎　まあ、それならそうだね、ここは暇人の集まる場所だし

佐久弥　鼎……もうっ、そんな酷い事言っちゃ駄目って言うてるでしょ！

鼎　で、でも本当のことなんだし……ねえ、凧さん？

凧　…今回は鼎が悪いと思うぞ

鼎　そんなあ

佐久弥 か・な・え？

鼎 ……はい、酷い事いってごめんなさい

佐久弥 うん、よく出来ました

鼎 つゝゝゝ、だからそうやって頭を撫でて子ども扱いするの止めてよ、姉さん！

佐久弥 あ、ごめんね、ついついいつもの癖で

凧 まあ、姉弟の団欒はこの程度にしておいたらどうだ？

鼎 そ、そんなんじゃない！

佐久弥 そうだね、そろそろ今回のお話の説明をしないと…

鼎 ……

凧 では、今回の話……これは…？

佐久弥 わたし……萌さんに悪い事をしちゃっていたんだね

鼎 別に……姉さんが悪いって訳じゃないよ

佐久弥 でも、恭一さんはわたしが…

凧 あー…んんつ、兎に角今回の話の概要を言えば今回は千里の心の傷だそうだ

佐久弥　　という事はこれが…恭一さんの心の中？

鼎　　…ふん、まるつきり、凶戦士だね、これじゃ

佐久弥　　……………

鼎　　つああもう、先刻から何だよ姉さん、恭一さん、恭一さんって、あいつが何なんだよ！！

佐久弥　　え？……………鼎、どうしたの？

鼎　　どうしたの、じゃ無くて…ああ、もう、いい、僕はもう行くからね

佐久弥　　かな…え、行っちゃった、どうしたのかな、鼎？

凧　　……………はあ、分からないなら気にする必要はないと思う

佐久弥　　凧さんには今どうして鼎が怒ってたのか、分かるの？

凧　　怒っているのは分かるのか…いや、しかしあれは単に…っと、もう制限時間のようだ

佐久弥　　あ、そうですね、その続きが少し気になるけど…後は舞台裏でということだ……

凧 & amp ; 佐　　それでは皆様、また二十三話で会いましょう！

## 「二十三話」歩み寄る目覚めの時

目の前に広がるのは赤、あか、アカ。

周囲からは物の焦げる臭い。頭の中は警告を発するが身体は指先すら動く事を拒絶する。

焦げる臭いと共に黒煙が充満していき、それが更に行動を妨げる要因となっていくのがぼんやりとだが感じられた。

「お兄・・・ちゃん？」

声が出た方を見る。

炎の海の中に一人の少女が立っていた。それは自分の事を兄と呼ぶ少女、何処か何時かに見覚えがあった。

少女の隣に陽炎のように揺らめく影がもう一つ現れる。少女と同じ歳ほどの少年。

「恭一？」

少年が誰かの名を告げる。その名前は何処かで聞いた事のあるはずの名だった。だがどれだけ考えてもそれが誰を指すのかを思い出せない。

最後に一人。

少女や少年にしてみれば大人と言って差し支えないような女性が同じようにして二人の後ろに現れた。

「恭・・ちゃん？」

告げたのは少年と同じもの。だが決定的に何かが違っていた。彼女の声に、言葉に、理由も知らずにこみ上げるものを感じて胸の辺りが幽かに傷んだ。そして涙が溢れ出るのを自分でも止める事が出来ない。

ようやく、何の根拠も必要なく。

言われた名は自分を指していたのだと言う事を臆気ながらに直感した。

何かを訴えるような三人の、六つの瞳が見つめる中、唐突に炎の勢いが増す。煙が肺に入ったのか、呼吸の最中に少しだけ咽た。

それは咳に瞳を閉じた一瞬の事だった。三人の頭上の建物が崩れ落ち、現実には死を容赦しない。

（危な・・・・・！）

声を上げかけて、初めて動けないどころか声も出せない事に気がついた。

何も出来ぬまま、直視を避ける事も出来ずに存分に炎を纏った板が三人へと、落ちた。

周りにも煙が充満した所為か、自分の意識も急速に薄れていく。

（萌！！ 和佐！ ひー姉え！！！！）

あきらめるなど選択に無い。

声に成らない声で必死に三人の名を叫ぶ。先ほどまで全く思い浮かばなかった三人の名を知らずの内に呼んでいる事に気付くことなく、やはり叫びは空気を震わせることはない。

( ! . . . ? )

炎の中、意識も薄れてはっきりとしないというのに。

一人。

炎の向こう側にまだ誰かが、笑って、立っていたような気がした。

誰かが近づいてくる気配に恭一はその瞳を開いた。

何か夢のようなものを見ていた気がして頭の中が重く感じられた。気を晴らそうと頭を振って感じた鈍い痛みを顔に顔を顰めてその動作を止めた。

気配の元がたどり着いたのを感じ、ドアの開く音がした。

「お、恭一。もう起きたのか」

声の主を見ると和佐だった。何故か手に服とタオルを持っている。そして、改めて気付いた。長椅子の上に寝かされている自分の姿、見覚えどころか毎日見ている風景。

「ここ、は」

「お前の家だよ。それと萌ちゃんも自分の部屋に寝かせてある」

和佐の言葉を聞きながらぼんやりと辺りを見回して、それが目に入った。冷え切った手付かずの料理が恐らく二人分。

瞬間、思い出した。

「萌・・・は！」

身を飛んで起こすが、重い頭痛と軽い眩暈を感じて全身の力が抜けた。お陰で膝が崩れて長椅子の上に逆戻りする。

「萌ちゃんは部屋に寝かせてあるって言ったろ。だから安心しろよ。それと恭一、お前も疲れてんだからちゃんと休め。尤も、俺も本気でやったから草々自由にも動けねえだろうけどな」

和佐の顔を見て、力が抜けた。萌が部屋で寝ているのなら今は何でもいい。

気だるい体に小さく息を吐いて、ようやく自分の身体に関心が向いた。

気付くと裸同然の姿だった。下着と身体に掛かっている毛布以外意は何もない。だからといって何ら束縛がある訳でも行動に支障が

ある訳でもなく、気にしない。

だが唯一、先ほどから続いている頭痛だけが気に障った。濡れた頭に手を当てると一ヶ所だけ、じわりとした熱を持っている部位があった。

触れた瞬間、鈍い痛みが伝わる。

「っ」

「お、おい大丈夫か？」

「問題ない」

痛みは一瞬。それも分かっていればたいした事は無かった。取り敢えず他の部位も触診してみると、左手に包帯が捲かれている以外は問題ない事を確認する。

「まあ、取り敢えずこれ着ろ。その恰好じゃまだ寒いだろ。それと髪も拭いておけ」

放られた服とタオルを受け取って、先ずはタオルで頭を拭いた。その間に和佐は傍の椅子へと腰を下ろしていた。

少しだけ感じた寒気に、髪も程々にして服を着た。それからもう一度濡れた髪を丁寧に拭きなおす。

「お前、どこまで覚えてるんだ？」

不意に語りかけてきた和佐に恭一はタオルを置いて視線を向けた。

「どつという意味だ」

「記憶に切れた箇所はないか、って意味だよ。あるだろ？」

思い出し、いや、言われるまでもなく記憶には途切れたところがあった。水月家で佐久弥に食い掛かり、ぶつんと途切れていた。後は泥まみれの萌の姿、それからこの場所だった。改めて頭の中で確認して、和佐を真っ直ぐ見る。

そういえばぼんやりとした記憶の中に和佐もいたような気がした。

「何があった」

「やっぱり、覚えてないのか」

大きなため息を一つ。

何処か寂しそうに、安堵していたように見えた。それが唯一ある泥まみれ、萌の泣きそうな表情を思い浮かばせて、不安に襲われる。

「何を・・・した」

「俺を襲った」

どうでもいい、そんな事。

「他に」

「それだけ、だ」

和佐の答えはどれも即答だった。ただ、最後の一瞬の躊躇い。

触れるものに恭一は問いたただそうと、口を閉じて後ろへ振り返った。和佐も遅れてそれに気付いた様子。

開いたままのドアから舞が姿を見せた。そして恭一を見るなり微笑む。

「あら、お兄さん起きられたんですか？」

「ああ。ついさっき、な」

恭一は何も言わない。代わりに和佐が言うてから、その視線は恭一に向いた。

「ああ、こいつな。俺一人じゃ色々とまずいから舞にも来てもらった・・・ってか、勝手に来たただけだけだな」

「何ほざいているの。私がいなきゃどれだけ困ったかをその低能で理解できないのね、哀れな男」

「ぐっ・・・それは感謝している。けど、どうしてあんな時間あんな場所にいたんだよ？」

「ふっ、萌ちゃんに危険が迫れば私がそこにいるのは必定。理由なんて萌ちゃんへの愛だけで十分よ」

何処まで本気なのか分からない台詞を掃いて堂々と胸を張る舞。それに和佐は諦めたようにため息を一つついて、

「で、終わったのか？」

「ええ、ちゃんと寝巻きに着替えさせてきたわ」

「おーおー、ご苦労様で」

「まさか。十分に堪能させてもらったわ」

「……………」

二人には一切の興味はなかったが、その会話の中の一言にひきつけられて恭一は舞の方を見た。

着替えさせた、と言えばこの場に居ない者、萌の事を指す他はない。だが着替えさせると言う事は自分では出来ない、という事になる。

恭一の視線に舞は和佐を睨み見た。自然と恭一の視線も和佐へと移る。

「お兄さんに説明してなかったの？」

「本当に今起きたところなんだよ」

「あ、そうなの」

「……………何の事だ」

「全身雨と泥でびしょ濡れ。だから風呂で洗い流して着替えさせた。それだけだから深く気にするな」

泥だらけの萌の顔が思い出される。そしてなるほど、と納得できた。

だから、次の行動に出る。

「あ、お兄さんどこへ？」

当然のように応えはなく、恭一は舞が退いたその場所から居間を出て、脇目も振らずに階段を上った。後ろからは二人が付いて来ているようだったが気にする事はない。

目的地はすぐに着いた。

立ち止まった瞬間に軽い頭痛と眩暈が襲ったが、気に入れずに目の前のドアを数度軽く叩いた。

「・・・・・・・・・・」

少し待っても返事はない。

「あ、萌ちゃんは・・・・」

追いついてきた舞が何かを言いかけていたが構わず、恭一はそのドアを開いて中に入った。

最初に目を送ったのは部屋の右端においてあるベッド。すぐに目的の、この部屋の主の少女の姿が見えた。

音を立てないように、ベッドに近づいていく。

「も・・・・」

言いかけた残りの言葉は寝ていた萌の顔を覗き込む途中に呑み込んだ。その理由は少し苦しげに、萌は寝息を立てていたから。

だから恭一は、ベッドのすぐ傍へと腰を下ろすとそっと自分の手

を萌の頭へと添えた。

「萌」

「んっ」

小さな呼びかけと異物の感触に応えるように萌は少しだけ身動きをする。その動きに逆らう事はせずに、指で髪を梳くようにして萌の頭を撫でる。

「お兄さ・・・」

後ろで上がりかけた声も途中で止まり、消える。

少し後にドアの閉まる小さな音と共に後ろにいた二人の気配が部屋の中から消えた。

その頃には苦しげだった萌の表情は心底安心したような、本当に安らかなものへと変わっていた。

恭一は静かにその行為を続ける。まるでそうする事でそのひとが其処に在ると、そのひとが生きていると、温もりを確かめているようにもあつた。

「う・・・ん・・・」

どれ程同じ事を繰り返していたのか、手の下で萌が身動きをしたかと思うとその瞳がゆっくりと開いた。

「萌」

最初と同じ呼びかけに、萌の瞳が恭一を向く。

「お兄、ちゃん？　ここ、は」

まだ意識が完全に覚醒しきっていないのか、萌はぼんやりとした様子で辺りを見回す。

恭一は極めて簡潔にその問いに答えた。

「家だ」

「いえ……あ、わたし……の、部屋？」

「そうだ」

「帰って、きたんだね」

喜びを噛み締めるような、弱々しい声。

何も応えず、恭一は再び頭に乗せていた手でゆっくりとその頭を撫でた。

萌が微笑みを浮かべ、完全に覚醒した瞳が恭一を見る。

「お兄ちゃん、わたしね……怖い夢、見たよ」

「そうか」

「お兄ちゃんが何処かに行っちゃうの。可笑しいよね、お兄ちゃん  
はここに居るのに」

「そうだな」

「だから、わたしね、悲しくて、いっぱい叫んだよ。それ  
にお兄ちゃんは振り向いてくれて、そこで怖い夢はおしまい」

「そうか」

「目が覚めたらお兄ちゃんが傍に居て、ずっとわたしの頭を撫でて  
いてくれた」

「ああ」

「嬉しい、なあ・・・」

いつのまにか萌の瞳から滲み出ている涙が一滴、伝ってそのまま  
枕へと流れ落ち、その直前に恭一が指でそれを掬い取った。だが溢  
れ出た涙は一向に止まらず、流れ出てくる。

「でもね、お兄ちゃん。寂しかったよ、怖かったよ」

涙を掬う事は諦めて、恭一は涙を流し続ける萌の頬へと手を当て  
た。

「わたしをひとりに・・・しないで、お兄ちゃん」

「ああ」

その言葉は普段感情を見せない恭一にしては力強く、はっきりと。

「萌を置いて、何処にも行かない」

だが感情は一切籠っていない、その言葉、その姿に、萌は涙を止める事もせずただ小さく頷いた。ただ、酷く悲しそうに。

萌は添えられた手を自分の両手で包み込んで、まるで幸せを噛み締めるように瞳を閉じた。恭一は何も言わずにその様子をただ眺め続ける。

沈黙が流れた。

「ご飯、温めなきゃ・・・ね」

思い出したように、瞳を開けた萌がそんな言葉を漏らした。名残惜しそうに包んだ手を介抱して、その身を起こし

「あ・・・」

途中で揺れた身体は結局再びベッドの中へと戻った。

「あは・・・は。ちょっと、失敗しちゃったね」

半身だけをゆっくり起こして、明るく振舞う萌の姿。だが恭一にでさえそれが演技と見て取れる。

だから恭一は萌の頭を両手で挟み込み、そのまま近づけた。

「お、兄ちゃ・・・」

有無を言わずにおでこおでこを重ね合わせる。

「・・・・・・・・・・」

しばらく密着したまま体温を測り、自分と然して変わりない、強いていうならまだ萌の方が冷たいその温もりを確認してから顔を離れた。

それでも、力ない様子の萌に恭一はその両肩を押しもつ一度ベツドへと寝かせた。それから毛布を身体に被せる。

「疲れたなら休め」

熱が出たように顔を真っ赤にさせていた萌はしばし惚けたように、即座に顔まで隠すように毛布を被ってから、静々と顔半分だけ出した。

「・・・・・・・・・・うん、そうする」

聞き違いかと思えるほどの小さな声。

萌が目を閉じて、疲れていたのだろう、すぐに安らかな吐息が聞こえてきた。それを聞いてから恭一はベッド際から立ち上がり、静かに部屋を後にした。

音を立てないようにドアを閉める。

すぐ傍に、何処か落ち着きのない様子で和佐と舞の二人がいた。

二人にしては珍しく揃っていても言い争っていない、がそれを当然無視して通り過ぎ、軽い眩暈と共に身体が揺れて思わず壁に手を

ついていた。

「恭一!？」

慌てた様子で和佐が駆け寄ってくる。

伸ばされた和佐の手に、振り払おうとするが上手く手に力が入らずに空振った。

「どうした、何だか調子がよくないみたいだが……もしかして」

伸ばされた手が額に当てられる。その感触は酷く冷たく、気持ちよかった。だがすぐに手が離される。

「熱あるな、お前」

その言葉に、力が入らない事も無視して和佐の手を払い除けると恭一はつい先ほど出てきたドアを勢いよく開いてその中へと戻った。

「あれ……どうかした、お兄ちゃん？」

開いたときの音が五月蠅かったのか、ぼんやりとだが萌の目が開かれていた。いつのまにか萌の傍らには舞の姿もあった。

恭一は無言で萌へと近づいていき、もう一度額同士を合わせて体温を比べる。

やはり先ほどの認識に違いがあるはずもなく、やや恭一の方が熱いくらいの体温だった。

額を離し、萌を見つめる。

「熱が、あるな」

「え、そんな事……」

言いかける萌に、素早く横から手が入り込んできた。

「……ちよつと熱い」

「ま、舞ちゃ……」

すぐに額に当てていた手を引いて、珍しく萌の戸惑いの声にも耳を傾けず、難しい表情のまま部屋から出て行った。

身を起こそうとしていた萌を引き留め、恭一は再び布団を正してから先ほどと同じようにベッドの傍へと腰を下ろした。

「診ているから、ゆっくり休め」

「で、でもわたしお兄ちゃんと同じくらい」

「休め」

恭一の強い言いように萌は口を噤んで、行き成り閉じていたドアが勢いよく開いた。部屋に入っていた和佐と萌はびっくりしてそちらを見て、恭一は一切無視。ただ身を乗り出しかけた萌を押し留める。

勢いよく入ってきた主、舞は大股でベッドまで直進して、恭一の前すぐ傍へと同じように腰を下ろした。

片手には二つの小さな紙包み、もう片手には器用に水の入ったコップが二つ。一つを萌へ、もう一つを恭一へと差し出した。

「萌ちゃん、これ飲んで。それでお兄さんはこっち」

有無をも言わせぬ口調だった。

押し切られる形で萌は受け取った水と共に紙包みの中に入れていた粉末状のものを飲み込んで、恭一も少しの躊躇いの後に萌の視線を受けつつその粉末を呑み込んだ。

「萌ちゃん、とりあえずこれ。測ってみて」

何処からか舞が取り出したのは体温計。それを萌に渡してから、振り返った。

「和、出て行け」

「なん……」

いつも通り文句を言いかけたのか、だがその言葉は途中で止まった。そして何かを読み取ったのか珍しいほどに何も言わず素直に部屋から退出した。

和佐が出て行ったのを見て、萌は恥ずかしそうに恭一を見たが恭一がその視線の意味に気付くはずもなかった。舞も舞でこちらは止めようとしていない。

何かを諦めたように、だが恭一からは身体を隠すようにして萌は服を捲り上げると脇へと体温計を挟み込んだ。

そのまましばらく。

体温を測り終えた体温計を舞が受け取って、小さく息を吐いた。

「やっぱり、熱があるわね」

萌が捲っていた服を下ろして、何故か丁度よくドアが開いた。勿論入ってきたのは和佐。

「熱、やっぱりあったのか？」

和佐の言葉をきれいに無視して、舞が向いたのは萌と恭一の方。

「多分雨の中で体が冷え切ったのが原因だと思うわ。それと余り言いたくないけど、精神的な負荷の部分もあると思う。兎に角、ゆっくり休みましょう」

上半身を起こしていた萌を寝かせて、布団を整える。

萌はただじっと、少し不安そうに視線を恭一へと向けていた。

「何だ」

「お兄ちゃん、わたし・・・風邪、うつっちゃうよ？ 離れなきゃ」

恭一は動かず、ただベッドの脇に座ったまま萌を見続けるだけだった。

少し困ったような、それでも嬉しいような表情を萌は浮かべて、今度は舞と和佐へと視線が向く。

「舞ちゃん、和ちゃんも。風邪がうつっちゃ困るから、わたしから

離れて？ それにもう時間が遅いから二人とも家に帰らなきゃ駄目だよ」

萌のその瞳に見られる事数秒。

音を上げたのは二人同時だった。舞が立ち上がり、和佐もドアへと向かう。

「ま、ゆっくりと休んでくれよ」

「私がいる事で心配を掛けるなら出て行くけど、してほしい事があつたら遠慮はしないでね、萌ちゃん。私すぐにでも駆けつけるわ」

互いに言葉を残し、部屋から出て行く。

「お兄ちゃん、は」

二人を見送った後に萌はもう一度恭一を見て、結局出て行った二人が最後に浮かべていたものと同じような表情を浮かべる事になった。

そして困った、それでいて嬉しさを隠せないような表情を浮かべたまま、萌は恭一を傍らにおいて静かに目を閉じた。

ベッドに背を預けて、恭一は静かに萌の寝る様を見守り続ける。

二十三話「歩み寄る目覚めの時」（後書き）

七宝殿（居間で興っている事？）

仁藤さんは「ああ、祐美が夜に目を覚ましたとき」

佐久弥 萌さん、まだ風邪で治るまでにもう少しかかるみたい

鼎 で、引き続き僕らが、て訳ね

凧 そうだな、確かに本編で出番も無いようだし丁度いいか

佐久弥 ……萌さん、大丈夫でしょうか？

凧 確かに、身体も冷え切っていたみたいだったからな

鼎 大丈夫だと思うよ、この話でも十分過ぎるほどに元気そうだったんだから

佐久弥 あ、そうだよね、今回の話は………あう

凧 だが、こういうのを見るとなんだか……

佐久弥 はい、他人のプライバシーを覗き見しているみたいで気が進まないですね

鼎 別に、本人にはれたり本編の僕らがどうなったりする訳でもないからいいんじゃない？

佐久弥 そういふ問題じゃないの！ ……鼎？

鼎 ……わ、分かってるよ、そのくらい

凧 まあ、なんにせよ仕事は仕事だからな、話の説明をしてもうか

佐久弥 あ、はい、そうですね、凧さん

凧 さて、今回の話だが…

佐久弥 ……

鼎 ? どうしたの、二人とも黙り込んで？

凧 いや、いい話だなと思ってな、やはり兄妹というものはいいものだな…

佐久弥 はい、そうですね

鼎 ……何処が？ ねえ、この話からどうしてそんな結論になるの？

凧 何を言う、麗しい兄妹愛じゃないか

鼎 ……ブラコンにシスコンなだけだろ

佐久弥 …… かなえ？

鼎 はいはい、分かってるってば、ちょっとした冗談だよ、冗談、これでいいんでしょ？

佐久弥 ちゃんと分かっている、ならいいけど…

凧 何だか私も、兄さんや姉さん、妹たちに会いたくなくなってきたな

佐久弥 そうですね、離れているのは寂しいですものね

凧 ちょっと、電話してくる

佐久弥 はい、いつてらっしゃい、凧さん

鼎 …… どうして、僕の周りにはこういう人しかいないかな？

佐久弥 え…今何か言った、鼎？

鼎 …… なんでもない、それよりももう時間だよ、姉さん

佐久弥 あ、そうみたいね、それじゃあ…

鼎 3、2、1…… せーのっ

佐&a m p；鼎 佐&鼎；また、二十四話で会いましょう、その時を待っています！

## 休章「兄妹の休日」

「萌」

夢心地。

呼ぶ声に、瞼が上がった。

「大丈夫か」

目前まで迫っていたのは恭一の顔。

頬がほんの少し熱を持つのを感じながら浮かべたのは多分、苦笑。

「ちょっと風邪を引いただけだよ、お兄ちゃん。そんなに心配しなくても、わたしは大丈夫」

起き上がり、途中で身体を支えられる。

薄着の上から伝わる温もりに体中が熱くなっていくのを感じて、恐らくは今鏡を見たら顔が真赤になっているだろう。

それをどう見入ったのか、恭一の表情は僅かに曇った。それを見て同様に悲しくなる。

大丈夫だよ、とは伝わらないものなのか。

「こんなものしか作れなかった」

言葉の後に出されたのは一つの茶碗。お盆の上に乗ったそれは熱そうに湯気を発している。

中身は、粥。

単純なものだがあちらこちらに工夫、苦勞とも言うが、の痕が見えて萌は知らずのうちに僅かに苦笑していた。

「うっん、わたしはお兄ちゃんが作ってくれたものなら何でも嬉しいよ」

心からの本心だった。

「悪い」

その事が粥の出来の悪さを言っているのではない事はすぐに察せる。そんな事で謝るような人ではないから。

「うっん、過ぎた事なんてどうでもいいの」

まだ何か言いたそうに恭一の口が開きかけ、

聞きたくない。

それを遮るように萌は気持ちを吐いていた。

「わたしはね、お兄ちゃんが傍に居てくれる、それだけで十分なの。それ以外は何一つ望むものなんてない。だから、だから・・・ね」

それ以上は言えなかった。

言葉に出すのが怖く、万が一にも言葉が真実になってしまえば耐えられないと、分かるから。

涙腺が緩むのを感じ、それを恭一にだけは見られまいと、それを見れば絶対に自分を責める事を知っているからと、萌は隠すように顔を俯かせた。

ぼん、と温かなものが髪の上に乗った。

「もう、大丈夫だ」

それが何かは見ずとも判る。恭一の手の平。

「絶対に、萌を置いていかない」

乗せられた手の平に自らの両手を添えて、ほんの少しだけ耐えるように、沈黙。

その言葉が何よりの嘘だと分かっってしまうから。

今は本心だとしても、その言葉だけは絶対の嘘だから。

でも今だけは、真実になる。

口元が綻ぶのを感じて萌は顔を上げた。

「うん、お兄ちゃんはわたしを置いて往ったりしない。そう」

口元が震える。それ以上の言葉を出せない。けど、言わない事はいえぬ。

「……だよな？」

「ああ、そつだ」

普段と全く変わらない姿。無表情、無感情。それが今の恭一。

「ただどそれでもいいと思う。」

居なくなる事に比べれば、自分を見てくれなくなる事に比べればそんな事は本当に細事。目の前に在ればこそ、その優しさと温もりに変わりは一つもない。

「食べて、ゆっくり休め」

「うん」

茶碗が出されたそれを、ふと思いついた事に手を伸ばすことはできなかった。

「恥ずかしい、恥ずかしいけどそれ以上に望んでいる事が分かる。」

「あの、ね。お兄ちゃん？」

「言う一言だけでも震える。」

不思議に思ったのか、俯いた顔を覗き見るように下から恭一の顔が迫っていた。

「かつ、と身体の心から熱が出る。」

何を思ったか、恭一は茶碗を傍に置いた。

そのまま、両頬を挟まれて無理矢理顔を上げられる。

「お、お兄ちゃん？」

顔が、近づいてきた。

まるでキスするような。

ああ、いつものだと思いつつも鼓動は一層早打ちを続ける。

コツ、と互いのおでこが当たった。

「んっ」

目を開いてその顔を見るのも恥ずかしく、目を力一杯に瞑る。

一秒、二秒、三秒・・・一体どれだけ経ったのか。

「少し、熱いな」

恭一の顔が遠のいていく。

少なくとも心臓がその鼓動に破裂するより先だったらしく、全身の力が抜けてそのまま萌は恭一の手を支えられながら少しだけ身体を傾けた。

「お兄ちゃん、気持ち良いね」

自分でも何を言ったか分からず、まるで今も夢の世界にいるかのよう。緩やかになっていく心音が現実を彷徨わせる。

恭一が茶碗と匙さしを手にして、傍かたわらに腰を下ろした。

「ほら」

碗の中から掬われた一尺の粥が口元に差し出されて。

何が起きたのか分からない。それともまだ夢の中にいるのかどうか。

これが現実と言う答えはすぐに返ってきた。  
泣き出しそうになるのを堪えて、口を開く。

粥が口の中に入ってきて、適温のそれを数度かんでから喉に通した。

「熱い、か」

心配そうに聞いてきた恭一に、

「大丈夫だよ、お兄ちゃん」

もし熱くてもきつと答えは同じ。

どんな事があるうと大丈夫でないはずがない。たとえ毒でも笑顔で同じ事を言える確信がある。

再び、恭一は粥をよそって、それは萌の口元へと運ばれた。

口を開く。

恭一は空になった茶碗と盆を手に、最後に一度だけ眠った萌の姿を見てから部屋を後にした。萌の寝顔はとても幸せそうに見えた。

そんなはず、ないのに。

階段を下りて台所へと向かう。

「っ」

眩暈と、吐気。

汗が出るのに寒気がする。全身が震えるその身体を気力だけで押さえ込み無視した。

やっとの事で台所に辿り着き、その惨状は出て行ったときとやはり変わりなかった。

料理器具は散乱して酷いもの。何に使ったのかまるで憶えない鍋やフライパンまである。

何とかできた成功作は先ほど萌の食べさせた一杯のみ。

恭一は全くの無表情で数秒間それを眺め。

「ふう」

腕を捲り上げて意を決し、惨状を片付けるべくそれに向かい合っ

七宝伝～今起こったこと～

て  
い  
つ  
た。

七宝伝～今起こったこと～

休章「兄妹の休日」  
（後書き）

心が欠けます。

七宝伝～今起こったこと～

二十四話「今日、徒然なる一日」(前書き)

尽きた。

二十四話「今日、徒然なる一日」

それは来訪を告げる呼び出しの音。

「……………」

恭一は相手を迎えるべく玄関へと向かった。

ドアの前、来訪者が誰であるかは察しがついている。

開いた。

其処には竜虎がいた。一発触発竜虎相見ゆ、と言った感じである。片や男、片や女。二人は互いに見詰め、もとい睨み合っていた。

一人、男は和佐。制服姿なので学校帰りだろう。女を睨んでいて恭一は眼中にない。

一人、女は舞。私服姿であるがこれは当然。彼女は本日自主休校によりずっとこの家において、今は夕食の買出しの帰りであった。こちらも同様、男を睨んでいて恭一に気付く様子はない。

概視感があるのは気のせいではない。

どちらにせよ、恭一には関係のない事だった。

「何の用だ」

二人が同時に恭一へと気付き向き直る。  
互いに牽制し合いながら、同時に微笑んだ。

「萌ちゃん、大丈夫でしたか？」

「よ、萌ちゃんの見舞いに来たぜ」

言葉も全く同時。それから互いに顔を見合わせ、睨み合い、最後に顔を背けた。

恭一はいつもと同じ二人を最後まで見る事もなく、早々に内へと引き戻るとその足で階段を登り、二階へと上がった。

開け放しにした玄関から二人が上がってくる音がしたが、どうでもいい。ちなみにどちらが先に入るかを競っていたなど尚の事恭一にはどうでもいい事である。

一つの部屋の前で足を止めて、叩く事数度。

「・・・・・・・・」

返事はない。この部屋の主は先ほど恭一が見守る中眠ってしまったのである意味当然の事。

構わず恭一はドアを開いて部屋の中へと入った。

「お邪魔します」

「それじゃ俺もお邪魔」

「あ、和は駄目。女の子の部屋に許可なく入るなんて礼儀がないのね、この愚図男」

などという会話が後ろで聞こえたが無視。

結局。

「それじゃ、後は私とお兄さんに任せて、和は……そうね、ここで一人寂しく朽ちていればいいわ」

その言葉を最後に舞だけが部屋の中に入ってきた。

恭一は部屋の隅のベッドへと真っ直ぐ向かい、傍で腰を下ろして萌の寝顔を覗き込んだ。

「とつても、幸せそうな寝顔です」

横から静かに割り込んできた舞が萌の頬に手を添える。

そつと撫でて、その手は離れたが萌はただ胸を規則正しく上下させて穏やかに眠っているだけだった。

舞が身を引いて、恭一は萌のおでこと自分のものを重ねて比べてみた。

「熱は、下がったな」

ほんの少し、安堵するような表情を浮かべた事に本人が気付いたかどうか。傍でそれを見た舞は何も言わない。

最大の用事が済んだので恭一は立ち上がって出て行こうと足を向けて、

「お兄さん」

背後からの声に振り返り、見た。

「買って来た食べ物階の脇に置いておきました。それで、私はまだ萌ちゃんの傍にいたいと思いますけど、いいですか？」

恭一は何も言わずに部屋を後にする。それが何よりの返事。

部屋から出るとすぐその壁に和佐が寄りかかり、いた。実に詰まらなそうに、奇妙な表情を浮かべている。

「萌ちゃん、どうなんだ？」

「熱は下がった」

用事はそれだけと、通り過ぎようとしてそれを和佐が遮ってきた。恭一はその障害物を見る。

「何だ」

「お前もそろそろ休んだらどうだ？」

尋ねているもののそれは有無を言わせないような口調だったが変わらない。

「必要ない」

切り捨てた。

「おまつ・・・!!」

叫びかけた声が、恭一が出てきたドアを見て小声になる。

「どうせお前の事だ。昨日から何も食べてないし寝てもいないだろ？」

答えはない。だがそれは真実で、どちらもそれを分かっている。

「そもそもなあ、お前の方が熱高」

「萌が」

遮るような恭一の言葉に、和佐の言葉が止まる。

「萌が熱を出した責任がある。だから治るまで休まない」

「お前、なあ」

盛大にため息が漏れ、明らかに全身が脱力する。

「お前がそうやって倒れでもした方が萌ちゃんは余計に心配する、って事を分かってんのか？」

恭一はやはり何も応えはしない。

見る和佐の視線が僅かに鋭くなった。

「忠告じゃなく、命令として言っただけ。お前、今すぐ寝ろ」

僅かに眉を顰めるが和佐は一向に構う様子はない。

「断るならお前の好きな実力行使で寝かせるぞ。尤も、今のお前じや俺の敵にもならねえけどな」

預けていた背が壁から離れて、僅かに和佐の半身が引ける。その瞳が恭一を貫いて。

考えた結果答は出た。

「萌が起きるまで、だ」

唇を綻ばせて、和佐が再び壁へと背を預ける。

「そりゃ当然だ。萌ちゃんが起きたときにお前が顔見せない心配するからな。だからそのときになりゃ俺が遠慮無しに叩き起こしてやるよ」

和佐の不敵な言葉に応える事無く、方向転換をして萌の部屋二つ隣にある自分の部屋へと向かった。

部屋に入り、ドアを閉める。

「・・・・・・・・」

一気に力が抜けた。

気力で押さえ込んできたものが溢れ出すように、息は切れて手は震える。

恭一は重い足で這うようにしてベッドへと向かい、そのまま倒れこんだ。

ベッドの柔らかさが投げ出された身体を優しく受け止める。

倒れこんだ恭一はまるで死んだかのように、びくりとも動く事無くそのまま意識を閉ざしていた。

誰かが近づいてくる気配に恭一は目を開いた。

壁に掛けてある時計を見るといつのまにか短針は数字三つほど進んでいた。代わりに全身の寒気や気だるさは若干ながら引いている。

部屋の向こう側、気配が止まった。

「何だ」

扉越しの主がドアを開けるより先に、声をかける。

「お、恭一。起きたのか」

予想通りの人物だった。少し前に聞いた声質よりも僅かに明るく聞こえる。

「何だ、と言った」

「んな事、決まってるだろ。萌ちゃんが起きたから来たんだ。つい

でに夕食・・・を舞の奴が作った。腹減ってるだろ？」

何も応えずに恭一は部屋から出た。ドアの目の前にいた和佐を素通りして一階、そのまま居間へと向かう。和佐も平然と後に続いてきていた。

途中、漂ってきた香りに恭一は初めて思いの他にお腹が空いている事に気付いた。思い起こせば昨日の昼から一日以上何も口にしていなかった。

居間に着くと萌と舞の二人が既に食事の並べられた卓に着いて待っていた。

「お、おはようお兄ちゃん」

「今日は、お兄さん」

「おはよう」

二人の声に、というよりも萌の声だけに応えて恭一はいつもの席へと座った。後に入ってきた和佐も空いている席とは言っても残り一つしかないがに座った。当然のように和佐に声をかけるものは誰もいなかった。

「今日は舞ちゃんすべしやるく、ですよ。いつもの五割程増し、私が精一杯腕を振りましたからね」

舞がにっこりと微笑む。余程の自信作らしい。そして料理は病気がかりに合わせたのかどれもじっくりと熱を通した消化に良さそうなものばかりだった。

だが恭一は対して料理に関心を持つでもなく萌を、その顔色を改

めて見て殆ど無意識に軽く息を吐いていた。

「お兄ちゃん、その・・・」

「何だ」

「ごめんね」

俯いて、表情は見えないものの声色が悲しそうだった事だけは恭一にも何となくだが判った。だが言葉が指すのが何かは分からない。

「何の事だ」

「わたし、熱がある時に変なこと言っちゃった・・・よね？」

思い起こして、心当たりは無い。

ただ、何がそれを動かしたのか。

「大丈夫だ。それと、悪い」

「あ」

腰を少し浮かせて、恭一は手を伸ばして萌の頭をそつと撫でていた。

今にも泣き出しそうな、潤んだ瞳がしたから見上げてくる。

「う・・・うつん、うつんそんな事ない。わたしが、わたしが・・・」

「あー、そのね。少し、いい？」

気まずそうに入ったその声に、萌を見ていた恭一が、俯いていた萌も気まずそうにしていた和佐も彼女を見た。

「私の作ったものだから冷めても美味しいのは当然だけど、温かい方がより美味しいですから先ずは食事にしましょう。ね、萌ちゃん？ お兄さん？」

二人に向けたその笑顔が一時的ではあるが場の雰囲気弾けさせる。

萌は少しだけ呆けたように舞を見てからぎこちないが笑みを作り、恭一は僅かに萌が落ち着いた様子を見て撫でるのを止めると再び椅子へと腰を下ろした。

「そう、だよ。舞ちゃんが折角作ってくれたものだもんね」

「ええ、その通り。私が腕を揮ったんだから暗いのはもうなし、ね？」

片目を一度閉じて見せて。

「何にせよ、だ。さっさと食べようぜ？」

最後に和佐の一言で、食事は始まった。

「いただきます」

「うん、いただきます」

萌が作ったのでない為か萌と恭一がほぼ同時に箸を取って、萌が一口食べたのを見届けてから舞も料理に手を出した。

ただ食器の擦れる音の中、一人和佐だけが未だに沈黙を守っていた。親の敵でも見るような視線で自分の目前にある皿を睨みつけている。

それに、萌が気付いて手を止めた。

「どうしたの、和ちゃん？ おなか空いてない、とか？」

一瞥をやったものの、和佐は珍しく萌に対して何も応えなかった。ただもう一度皿の上にある料理を睨みつけて、舞を同じ視線で見た。

「おい、舞」

「何よ？」

「俺のだけに毒を入れた、なんて事ないよ・・・なあ？」

言いながら、自分の言葉が真実に見え出したのか和佐の視線に混じった疑惑が一層強くなっていった。

手を止めた舞の口から呆れたようにため息が一つ零れる。

「一応、“まだ”入れてないわ。けどもしお望みなら和のにだけ入れてあげてもいいわよ。当然、即効性じゃなくて長時間に渡り対象を苦しめ続けて最後に死に至る、みたいなやつ。もちろん特注品よ」

「ってかお前、そんな物持ってるのかよ」

「さあ、どう取るかは和の勝手よ」

輝かんばかりの満面の笑み。

多大に頬を引き攣らせながら和佐は今一度目の料理へと視線を落として、力なく首を横に振った。

「遠慮するわ」

「そう、それは残念ね」

その言葉は心底残念そうだった。

偶然に、恭一はそれを見る。舞が机の下で隠すようにしながら僅かに上げていた手を再び下ろしたのを。ただ恭一はその行為に対して興味を持たなかった。ただそれだけである。

そんな事もあり、夕食は実につつがなく進んでいった。

だが口数がそれ以降、殆ど無かった。もとより口数の少ない恭一は言うまでも無く、萌が黙々と食べているので話しかけるわけにもいかず舞と和佐の二人は黙るばかり。ちなみに和佐と舞が話す事は論外である。

最初に箸を置いたのは恭一だった。

「ご馳走様でした」

両手を合わせて、少し頭を下げる。

「あ、お粗末さまです」

舞の言葉に一瞥だけやって、席から立ち上がるとそのまま出口へと向かう。

閉まっていたドアを開いて居間を出

「あ」

椅子と床の擦れる音。そして掻き消されるように漏れた声。恭一は足を止めると振り向いてその声へと視線を向けていた。

「お兄ちゃん」

視線の先にあつたのは萌。恭一は何を言うでなく、ただその姿を見つめる。

「あの、ね」

視線は逸らされそうで、それだけは絶対にならない。恭一はただいつもどおりに次の、出るべく言葉を待つだけ。

「その・・・ね」

何度も口を開いては、言葉に成らずに閉じられる。

吐き出すべき答が見つからないのか、それとも訴えるべき感情を怖れているのか。はっきり言える一つの事は、いつもの萌とはどこか違うという事。

恭一は踵を返すと萌の元まで戻っていき、目の前で立ち止まった。何処か怖がるように萌が身を引きかけるより先に、恭一は伸ばした片手をその頭へと乗せていた。

「んっ」

ゆつくりと髪を梳かすように、優しく壊れ物を触るように、撫でた。

「此処に居る」

言葉に、互いに視線を逸らしていないにも関わらず初めて互いの視線が重なり合う。本当の意味で、相手を見た。乗せた手を頬へと移して同じように撫でる。

「今、此処に居る」

「あ」

漏れ出した声と共に萌の両膝が折れた。

温もりは頬を離れて身体は下の椅子へと倒れこみ、俯いて隠れたその両頬から涙が伝うと流れ出た。その意味は果たして何か。

「あは」

泣き声か、笑い声か。

「あははははは。うん、そうだよ。お兄ちゃんは今わたしの傍に居てくれる。そうなんだよね？」

どちらもが正しくどちらもが間違っている。

笑いながら、泣きながら、それでもやはり微笑を絶やさずに萌はその視線を再び恭一へと向けた。

恭一は応える。いつもどおり、無表情に。無感情に。力強いわけではなく弱いわけでもない。

「ああ、そうだ」

宙に彷徨っていた温もりに萌は自分の両手を重ね合わせた。

「お兄ちゃん。わたしもいるよ。此処にずっと、居るよ」

何も応えず、一度だけ添えられた両手を握り締めてから恭一は手を引いた。

今初めて気付いたように、萌は自分の前に並べてあった料理に箸を伸ばして、一口食べた。

数度噛んで、喉に通す。

「うん、舞ちゃんが作ってくれた料理、美味しいね。えへへ、どうしてかな、今までよく分からなかったよ」

自然に、笑みが浮かぶ。

萌が浮かべた表情を見て、恭一は改めて身を返すと改めて居間を去るべく出口へと向かった。

「あ・・・お兄、ちゃん？」

その声は先のものとは含むものがまるで正反対。だが恭一は変わらず立ち止まり、もう一度萌へと振り返った。

「何だ、萌」

視線が彷徨った。恭一は変わらず、次の言葉を待つ。

「その、ね」

「ああ」

「もう一度だけ、撫でてくれる？」

頬を染めて萌はこれ以上言う事は出来ないように俯いた。

何も言わず、ただ要望に応えるため恭一は萌へと近づいて同じように手を頭の上へと乗せた。

期待に満ちた眼差しが上目遣いで見詰めてくる。

撫でた。

「えへ、えへへ」

僅かに口元が緩み、気付いたが恭一は気にしなかった。自然にそうなるならばなればいい。そう感じるから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

二人、無駄に緊張して脱力していた和佐と舞は互いに気付かぬうちに同じような視線で萌を眺めて口元を緩め、同時にため息をついていた。

二十四話「今日、徒然なる一日」（後書き）

七宝殿（居間で興っている事？）

二重に読んだ「京の徒然なる日記」

萌  
……………

真衣 萌さん？

萌 ……………ぽっ

真衣 萌さん？

萌 恥ずかしい、よ

真衣 ……ああ、前回、それに今回とある意味で萌さんの大活躍でしたからね

萌 大活躍、は嬉しいんだけど………こういつのを人に見られるのってやっぱり恥ずかしいよ

真衣 でも、取り敢えずはよかったですね、恭一さんが無事で

萌 ……………うん

真衣 ああ、もう、本当に可愛いですねえ〜（抱きつきー！）

萌 あ、真衣さん……ちょっと、いきなり何を

真衣 と、まあ冗談はさて置きとして……萌さん、取敢えずお  
帰りなさい

萌 あ、はい、ただいまです、それと皆も心配かけて（？）（ごめ  
んね

真衣 それでは、気を取り直して今回の話の説明に行きましょう  
か

萌 うん、そうだね

真衣 では……

萌 ……はい、今回はお兄ちゃんとわたしのらぶらぶなお話です

真衣 ……（開き直り過ぎって言うもの考えものですね）

萌 わたしが風邪を引いちゃって、お兄ちゃんが付きっ切りで看  
病してくれてそれから……

真衣 ……まあ、和佐さんや舞さんもいるんですけどね

萌 お兄ちゃんとわたしの絆を再確認しあうの

真衣 一応、間違っではないですね

萌 (ぽっ)

真衣 いや、そこで頬を染めて黙らないで下さいよ萌さん、絶対に誰か勘違いしますって

萌 ……………ぽっ

真衣 いや、だからそこで茹蛸みたいになられてもわたしが困ってしまうわけで……

萌 ……………あう

ふら～ ……ばたんっ

真衣 ……………あの、萌…さん？ 聞こえ、ますか？

萌 ……………

真衣 あー、これはもう駄目って感じですね

真衣 と、言うことなので進行役もいなくなったので今回はこれでお開きですか

真衣 それではまた次回、二十五話が在れば、逢えることですよ、去らば！……です

萌 (ぽ～) ……いやんいやん、恥かしいよう～

七宝伝～今起こったこと～

……  
呆れる

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7128d/>

---

七宝伝～今起こったこと～

2009年7月1日21時16分発行